

基地内埋蔵文化財調査報告書 7

平成 26・27 年度 基地内遺跡ほか発掘調査事業

— キャンプ瑞慶覧西普天間住宅地区 予備調査 —

宜野湾市文化財調査報告書
第56集

基地内埋蔵文化財調査報告書 7

二〇一九年(平成三十二年)二月

沖縄県 宜野湾市教育委員会

2019年(平成31年)2月
沖縄県 宜野湾市教育委員会

基地内埋蔵文化財調査報告書 7

平成 26・27 年度 基地内遺跡ほか発掘調査事業

— キャンプ瑞慶覧西普天間住宅地区 予備調査 —

2019年(平成31年)2月

沖縄県 宜野湾市教育委員会

序

本報告書は、平成 26 年度から平成 27 年度にかけて宜野湾市教育委員会が実施した西普天間住宅地区内における予備調査の成果報告であります。

西普天間住宅地区は、平成 27 年 3 月に返還されるまでキャンプ瑞慶覧の一部として利用されていた地域であり、当該地区は、字普天間、字安仁屋、字新城、字喜友名の 4 地区に跨る地域となっております。基地接収前は宅地、畑、お墓などがありましたが、そのほとんどが基地建設に伴う造成工事等により消失しました。

今回の予備調査によって、部分的ながら当時の生活の痕跡を示す遺構や戦前米受け継がれてきた湧泉群、グスク時代または先史時代まで遡る遺跡などが確認されております。

特に安仁屋・新城イシジャー流域古墓群と新城・喜友名の斜面緑地は、米軍基地として収用された後も大規模な基地造成を免れ、当時の地形が残されている場所であることが確認されております。これらの歴史的遺産を将来の子ども達に残し、継承していくことが重要であります。

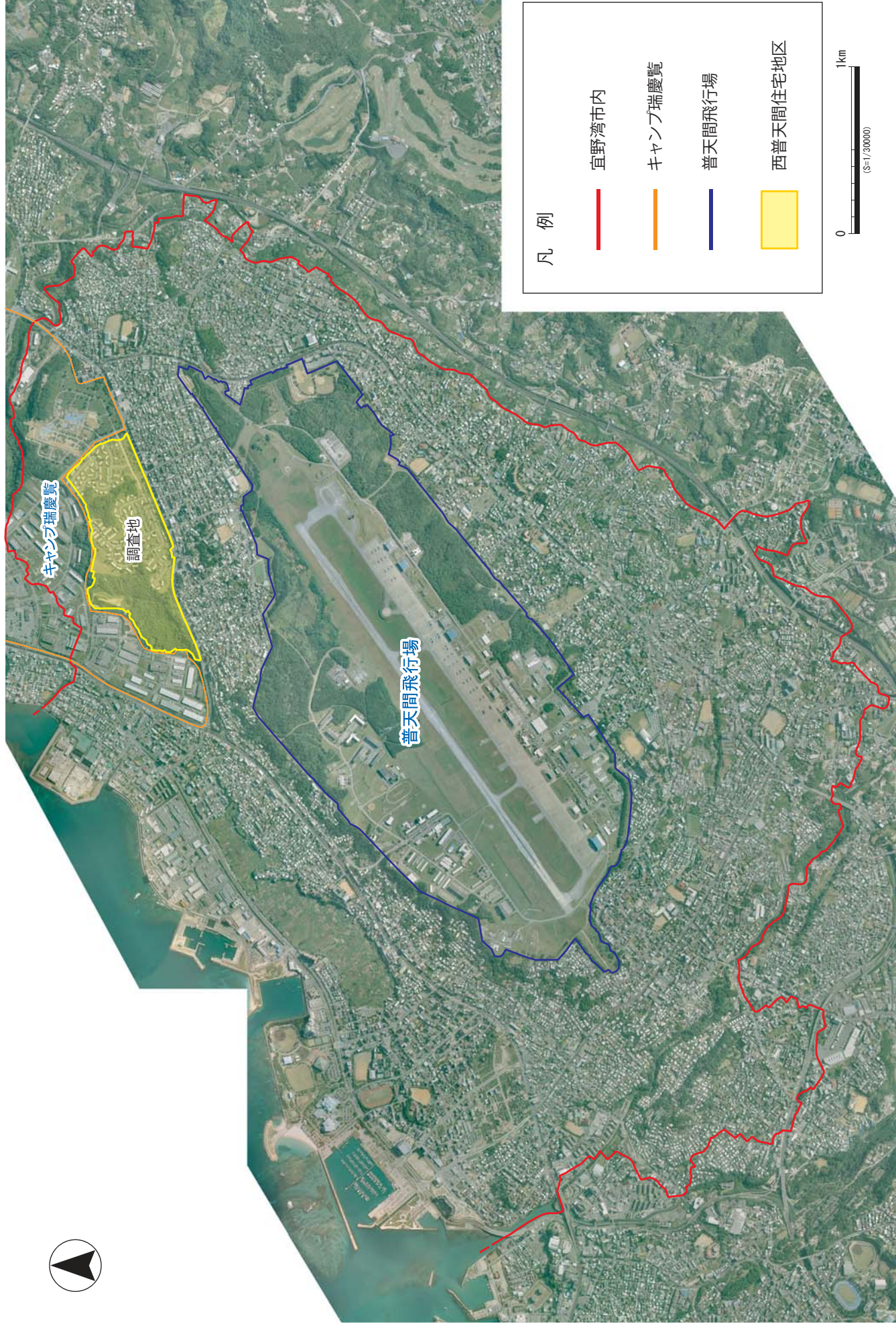
さらに同地区には国の重要文化財として指定されている「喜友名泉」が所在し、現在においても地域の財産として大切に継承されております。

今回の調査成果が、広く市民の歴史的教材ないしは文化財の保護・活用資料として活かされ、歴史学等の学術資料として御利用いただければ幸いに存じます。

末尾になりますが、調査にご協力いただいた宜野湾市軍用地等地主会を始め、沖縄防衛局並びに関係部署の皆様に対しまして厚く御礼申し上げます。また、多大なご指導を賜りました文化庁文化財部、沖縄県教育庁文化財課、沖縄県立埋蔵文化財センター並びに市文化財保護審議会の先生方や、その他関係各位に対しまして、心から感謝申し上げます。

平成 31 (2019) 年 2 月

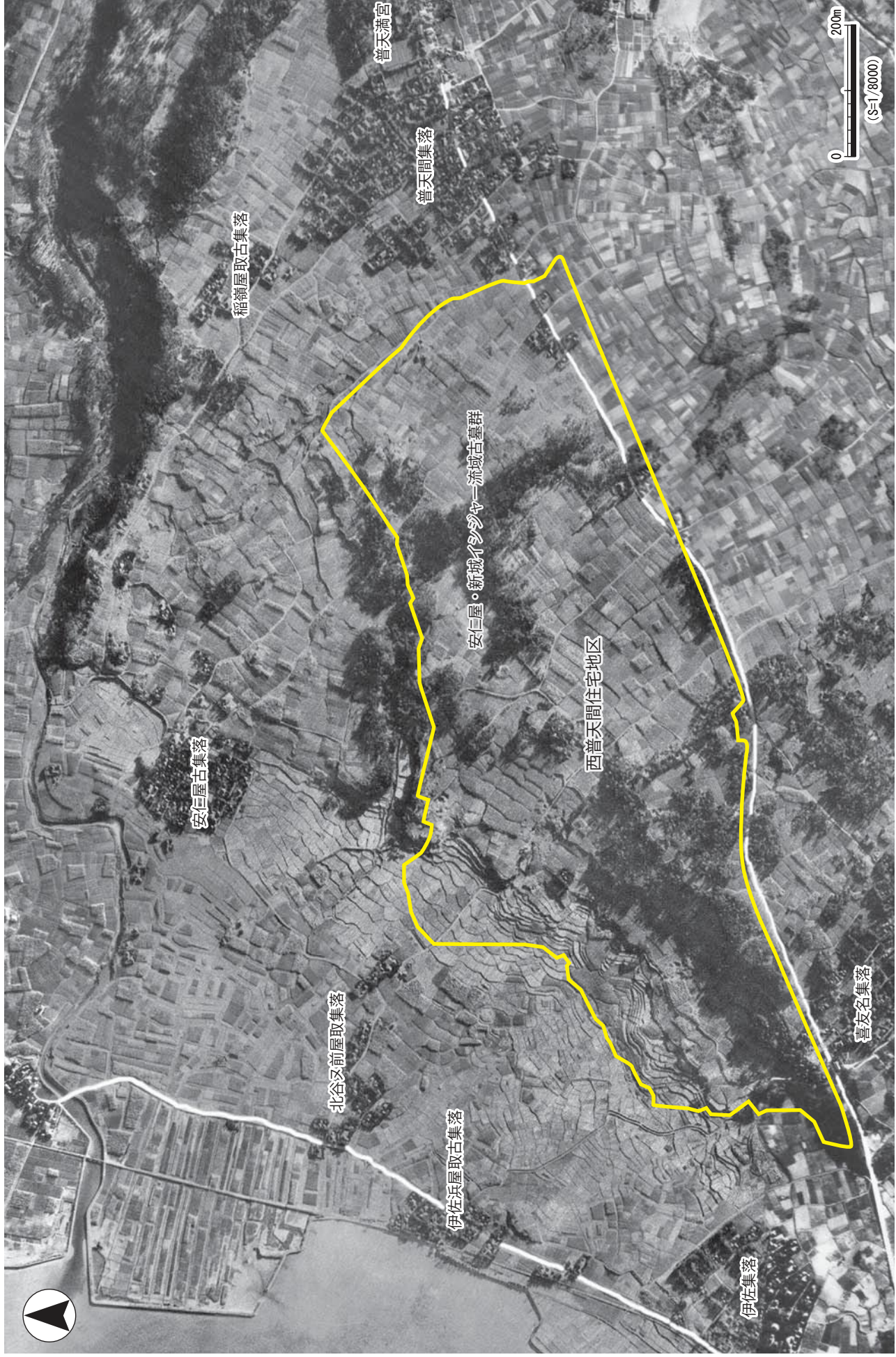
沖縄県 宜野湾市教育委員会
教育長 知 念 春 美



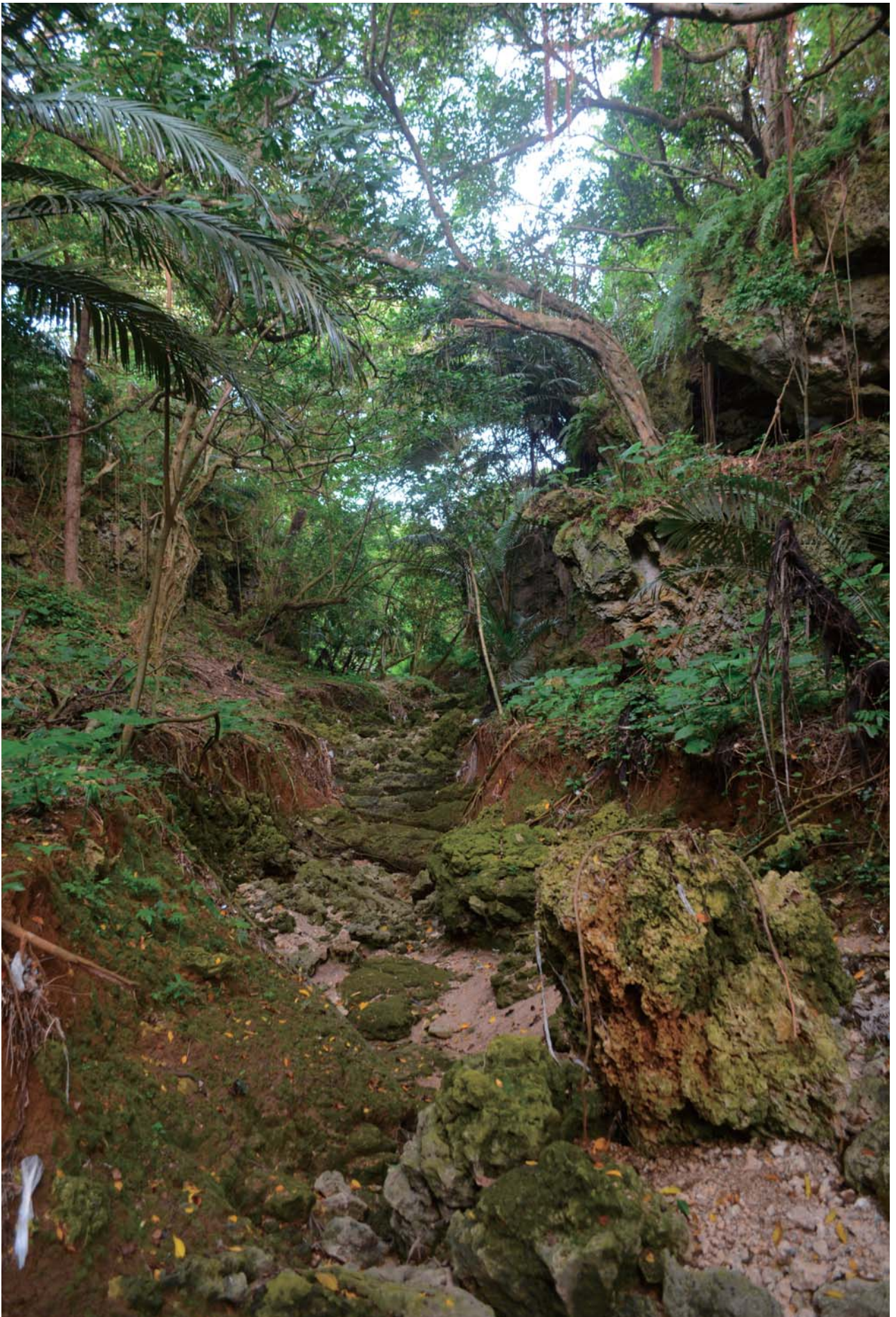
巻頭図版 1 報告書所収調査地位置



巻頭図版 2 西菅天間住宅地区周辺の地区名 ※西菅天間住宅地区は、平成27年3月31日に返還済み



巻頭図版3 昭和20年 西普天間住宅地区周辺



巻頭図版4 イシジャー溪谷地形（中流域）



巻頭図版5 イシジャー分布調査 57号墓周辺清掃



巻頭図版6 イシジャー分布調査 19号墓周辺清掃



卷頭図版7 新城区内分布調査（土手）



卷頭図版8 新城区内分布調査（石垣）



巻頭図版9 ハウジングエリア東側 調査前



巻頭図版10 ハウジングエリア西側 (新城上殿遺跡)



卷頭図版 11 重機掘削



卷頭図版 12 試掘坑清掃



卷頭図版 13 新城上殿遺跡（18-H6- 夕）遺構検出状況



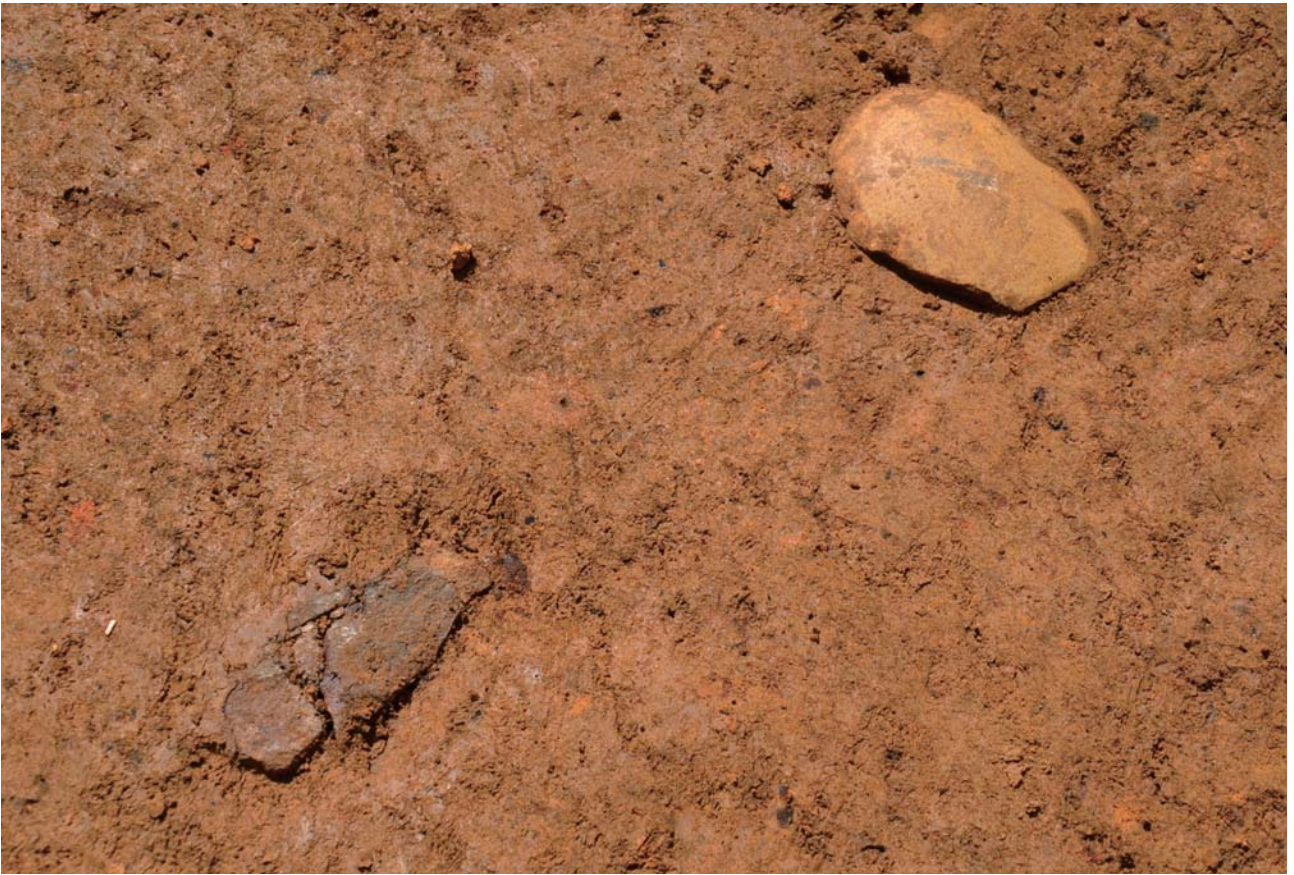
卷頭図版 14 新城上殿遺跡（18-J5- 力）遺構検出状況



卷頭図版 15 喜友名山川原第九遺跡 (25-I5- /) 遺構検出状況



卷頭図版 16 喜友名山川原第十遺跡 (30-B1- /) 遺構検出状況



卷頭図版 17 喜友名山川原第八遺跡 (25-F2-シ) 遺物出土状況



卷頭図版 18 新城大道原第二遺跡 (24-H6-ナ sp.02) 遺構検出状況

例 言

1. 本報告書は、宜野湾市教育委員会が国・県の補助を受けて、平成26・27年度に実施した西普天間住宅地区における予備調査（表面踏査、試掘・確認調査）の成果を収録したものである。
2. 発掘調査並びに本文中における遺跡の基準方位は、国土座標系（旧座標系）第XV座標系の座標北を用い、層位・遺構は海拔高（那覇）を基準とした高さである。
3. 本書に掲載した地図は、基本的に宜野湾市都市計画課発行の都市計画図（1:2,500）を使用しており、他の情報図については、宜野湾市教育委員会が管理・運営しているGISデータを主に使用している。
4. 本書で使用した層名は、農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』に準じた。
5. 本書の執筆は、仲村 毅、杉村千重美、パリノ・サーヴェイ(株) 沖縄支店があたり、執筆分担は以下に記した。なお、本書のデジタル編集は杉村の協力を得て、仲村 毅が行った。

仲村 毅……………第I章・第III章・第IV章・第VI章
杉村千重美……………第II章
パリノ・サーヴェイ(株) 沖縄支店……………第V章
6. 本書に記載した出土遺物の写真撮影・トレースは杉村が行った。
7. 現地調査で得られた実測図・写真・画像デジタルデータ・地形測量図等の各種調査記録類および出土遺物はすべて宜野湾市教育委員会文化課に保管している。

目次

序	
巻頭図版	
例言	
第Ⅰ章 事業概要	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	3
第3節 調査体制	4
第4節 調査区の設定	6
第Ⅱ章 位置と環境	7
第1節 地理的環境	7
第2節 歴史的環境	8
第3節 西普天間住宅地区の文化財について	11
第Ⅲ章 試掘・確認調査の成果	13
第1節 はじめに	13
第2節 新城上殿遺跡	17
第3節 新城大道原第一遺跡	24
第4節 新城大道原第二遺跡	36
第5節 喜友名山川原第八遺跡	40
第6節 喜友名山川原第九遺跡	52
第7節 喜友名山川原第十遺跡	57
第8節 新城下原第二遺跡	60
第9節 普天間石川原第二遺跡	62
第10節 喜友名山川原丘陵古墓群	65
第Ⅳ章 分布調査の成果	78
第1節 はじめに	78
第2節 新城区の調査成果	78
第3節 安仁屋区の調査成果	82
第Ⅴ章 自然科学分析	132
第1節 はじめに	132
第2節 層序と試料	132
第3節 分析方法	134
第4節 結果	137
第5節 考察	145
引用文献	149
第Ⅵ章 総括	154
第1節 はじめに	154
第2節 試掘調査の成果について	154
第3節 分布調査の成果について	156
第4節 調査成果による文化財の取扱協議について	157
第5節 現時点の文化財状況について	157
引用・参考文献	159
報告書抄録	

巻頭図版

巻頭図版 1	報告書所収調査地位置	巻頭図版 11	重機掘削
巻頭図版 2	西普天間住宅地区周辺の地区名	巻頭図版 12	試掘坑清掃
巻頭図版 3	昭和 20 年 西普天間住宅地区周辺	巻頭図版 13	新城上殿遺跡 (18-H6-タ) 遺構検出状況
巻頭図版 4	イシジャー溪谷地形 (中流域)	巻頭図版 14	新城上殿遺跡 (18-J5-カ) 遺構検出状況
巻頭図版 5	イシジャー分布調査 57 号墓周辺清掃	巻頭図版 15	喜友名山川原第九遺跡 (25-I5-ノ) 遺構検出状況
巻頭図版 6	イシジャー分布調査 19 号墓周辺清掃	巻頭図版 16	喜友名山川原第十遺跡 (30-B1-イ) 遺構検出状況
巻頭図版 7	新城区内分布調査 (土手)	巻頭図版 17	喜友名山川原第八遺跡 (25-F2-シ) 遺物出土状況
巻頭図版 8	新城区内分布調査 (石垣)	巻頭図版 18	新城大道原第二遺跡 (24-H6-ナ sp.02) 遺構検出状況
巻頭図版 9	ハウジングエリア東側 調査前		
巻頭図版 10	ハウジングエリア西側 (新城上殿遺跡)		

挿図目次

第 I - 1 図	地区のエリア…………… 2	第 III -21 図	試掘坑平面図 ズケ 18- J 1- コ南 ……26
第 I - 2 図	西普天間住宅地区における区画概念図…… 6	第 III -22 図	土器 (6) ……26
第 II - 1 図	宜野湾市と西普天間の位置…………… 7	第 III -23 図	グスク土器 (7) ズケ 17- J 9- オ ……26
第 II - 2 図	宜野湾市遺跡変遷図…………… 8	第 III -24 図	試掘坑断面図 ズケ 18- J 1- キ・ク (東壁・南壁)……………27
第 II - 3 図	戦前の宜野湾市の様子…………… 9	第 III -25 図	試掘坑平面図 ズケ 18- J 1- キ・ク ……27
第 II - 4 図	西普天間住宅地区の遺跡分布図・ 文化財一覧……………11	第 III -26 図	試掘坑断面図 ズケ 18- J 2- キ・ク (東壁・南壁)……………28
第 III - 1 図	平成 26・27 年度 試掘坑……………15	第 III -27 図	試掘坑平面図 ズケ 18- J 2- キ・ク ……28
第 III - 2 図	試掘箇所……………17	第 III -28 図	土器 (8)、縄文土器 (9・10) ……29
第 III - 3 図	試掘坑断面図 ズケ 18- H 6- タ (北壁・東壁)……………17	第 III -29 図	試掘坑断面図 ズケ 17- J 8- ノ (北壁・東壁)……………30
第 III - 4 図	試掘坑断面図 ズケ 18- H 6- タ (南壁・平面図)……………18	第 III -30 図	試掘坑平面図 ズケ 17- J 8- ノ ……30
第 III - 5 図	石器：石斧 (1) ……18	第 III -31 図	グスク土器? (11) ……30
第 III - 6 図	試掘坑断面図 ズケ 18- I 5- ク (北壁)……………19	第 III -32 図	試掘坑断面図 ズケ 17- J 10- ツ (北壁・東壁)……………31
第 III - 7 図	試掘坑断面図 ズケ 18- I 5- ク (南壁・西壁)……………19	第 III -33 図	試掘坑断面図 ズケ 17- J 10- ナ (北壁・東壁)……………31
第 III - 8 図	グスク土器 (2) ……19	第 III -34 図	試掘坑平面図 ズケ 17- J 10- ナ ……32
第 III - 9 図	試掘坑断面図 ズケ 18- J 5- カ (西壁・北壁・南壁)……………20	第 III -35 図	試掘坑断面図 ズケ 24- A 10- ク (北壁・東壁)……………32
第 III -10 図	試掘坑平面図 ズケ 18- J 5- カ ……20	第 III -36 図	試掘坑平面図 ズケ 24- A 10- ク ……33
第 III -11 図	試掘坑断面図 ズケ 25- A 5- カ (南壁・西壁)……………21	第 III -37 図	試掘坑断面図 ズケ 24- B 10- イ (北壁・東壁)……………33
第 III -12 図	青花：碗 (3)、白磁：碗 (4) …… 21	第 III -38 図	青銅製品：煙管 (12) ……33
第 III -13 図	青磁：碗 (5) …… 22	第 III -39 図	試掘坑平面図 ズケ 24- B 10- イ ……34
第 III -14 図	試掘坑断面図 ズケ 25- A 4- イ (北壁・東壁)……………22	第 III -40 図	試掘坑断面図 ズケ 24- B 9- ク (西壁・南壁)……………34
第 III -15 図	試掘坑断面図 ズケ 25- A 4- イ (南壁・西壁)……………23	第 III -41 図	沖縄産施釉陶器：碗 (13) ……34
第 III -16 図	試掘坑平面図 ズケ 25- A 4- イ ……23	第 III -42 図	沖縄産施釉陶器：壺 (14) ……35
第 III -17 図	試掘箇所 ……24	第 III -43 図	試掘坑平面図 ズケ 24- B 9- ク ……35
第 III -18 図	試掘坑断面図 ズケ 18- J 1- コ (西壁・北壁)……………24	第 III -44 図	試掘箇所 ……36
第 III -19 図	試掘坑平面図 ズケ 18- J 1- コ ……25	第 III -45 図	試掘坑断面図 ズケ 24- H 6- ナ (北壁・東壁)……………36
第 III -20 図	試掘坑断面図 ズケ 18- J 1- コ南 (南壁・西壁)……………25	第 III -46 図	試掘坑平面図 ズケ 24- H 6- ナ ……37
		第 III -47 図	グスク土器 (15) ……37
		第 III -48 図	沖縄産無釉陶器：水甕 (16) ……37

第Ⅲ-49 図	試掘坑断面図 ズケ 24- I 4- ケ (北壁・東壁)……………	38	第Ⅲ-86 図	試掘坑平面図 ズケ 25- J 5- ニ ……	54
第Ⅲ-50 図	沖縄産施釉陶器：壺 (17) ……	38	第Ⅲ-87 図	石器：磨石 (32) ……	54
第Ⅲ-51 図	試掘坑断面図 ズケ 24- I 5- ツ (北壁・東壁)……………	39	第Ⅲ-88 図	試掘坑断面図 ズケ 25- J 6- ケ北 (東壁・南壁)……………	54
第Ⅲ-52 図	沖縄産施釉陶器：急須 (18) ……	39	第Ⅲ-89 図	沖縄産施釉陶器：鍋 (33)、 土器 (34～36) ……	55
第Ⅲ-53 図	試掘箇所 ……	40	第Ⅲ-90 図	試掘坑断面図 ズケ 25- J 6- ケ南 (東壁・南壁)……………	56
第Ⅲ-54 図	試掘坑断面図 ズケ 24- E 10- セ (北壁・東壁)……………	40	第Ⅲ-91 図	沖縄産無釉陶器：播鉢 (37) ズケ 25- J 6- ナ ……	56
第Ⅲ-55 図	試掘坑平面図 ズケ 24- E 10- セ ……	41	第Ⅲ-92 図	試掘箇所 ……	57
第Ⅲ-56 図	試掘坑断面図 ズケ 24- F 9- カ (北壁・東壁)……………	41	第Ⅲ-93 図	試掘坑断面図 ズケ 30- B 1- イ (北壁・東壁)……………	57
第Ⅲ-57 図	試掘坑平面図 ズケ 24- F 9- カ ……	42	第Ⅲ-94 図	試掘坑平面図 ズケ 30- B 1- イ ……	58
第Ⅲ-58 図	試掘坑断面図 ズケ 24- F 10- ウ (北壁・東壁)……………	42	第Ⅲ-95 図	カムイヤキ? (38) ……	58
第Ⅲ-59 図	試掘坑平面図 ズケ 24- F 10- ウ ……	43	第Ⅲ-96 図	試掘坑断面図 ズケ 30- B 1- イ南 (東壁・南壁)……………	58
第Ⅲ-60 図	グスク土器 (19) ……	43	第Ⅲ-97 図	試掘坑平面図 ズケ 30- B 1- イ南 ……	59
第Ⅲ-61 図	試掘坑断面図 ズケ 24- F 10- ナ (北壁・東壁)……………	43	第Ⅲ-98 図	沖縄産施釉陶器：鉢 [ワンブー] (39) ……	59
第Ⅲ-62 図	試掘坑平面図 ズケ 24- F 10- ナ ……	44	第Ⅲ-99 図	沖縄産施釉陶器：鉢 [ワンブー] (40) ……	59
第Ⅲ-63 図	白磁：碗 (20) ……	44	第Ⅲ-100 図	試掘箇所 ……	60
第Ⅲ-64 図	白磁：碗 (21) ズケ 24- E 9- サ ……	44	第Ⅲ-101 図	試掘坑断面図 ズケ 18-G10- カ (東壁・南壁)……………	60
第Ⅲ-65 図	青銅製品：鏢 (22) ズケ 24- D 9- ト ……	44	第Ⅲ-102 図	試掘坑断面図 ズケ 19-H2- ネ (北壁・東壁)……………	61
第Ⅲ-66 図	試掘坑断面図 ズケ 24- G 9- セ (北壁・東壁)……………	45	第Ⅲ-103 図	試掘箇所 ……	62
第Ⅲ-67 図	カムイヤキ (23) ……	45	第Ⅲ-104 図	試掘坑断面図 ズケ 16- F 6- シ (西壁・北壁)……………	62
第Ⅲ-68 図	試掘坑断面図 ズケ 24- G 10- チ (北壁・東壁)……………	46	第Ⅲ-105 図	試掘坑平面図 ズケ 16- F 6- シ ……	63
第Ⅲ-69 図	青花：碗 (24) ……	46	第Ⅲ-106 図	青花：碗 (41) ……	63
第Ⅲ-70 図	試掘坑断面図 ズケ 25- E 1- キ (北壁・東壁)……………	47	第Ⅲ-107 図	試掘坑断面図 ズケ 16- G 6- ウ (北壁・東壁)……………	63
第Ⅲ-71 図	試掘坑平面図 ズケ 25- E 1- キ ……	47	第Ⅲ-108 図	試掘坑断面図 ズケ 16- G 6- ウ (南壁)……………	64
第Ⅲ-72 図	白磁：碗 (25) ……	47	第Ⅲ-109 図	試掘坑平面図 ズケ 16- G 6- ウ ……	64
第Ⅲ-73 図	試掘坑断面図 ズケ 25- F 1- キ (北壁・東壁)……………	48	第Ⅲ-110 図	沖縄産施釉陶器：碗 (42) ……	64
第Ⅲ-74 図	試掘坑平面図 ズケ 25- F 1- キ ……	48	第Ⅲ-111 図	試掘箇所 ……	65
第Ⅲ-75 図	カムイヤキ (26) ……	48	第Ⅲ-112 図	試掘坑断面図 ズケ 25- E 4- ネ (北壁・東壁)……………	65
第Ⅲ-76 図	試掘坑断面図 ズケ 25- F 2- ア (北壁・東壁)……………	49	第Ⅲ-113 図	試掘坑平面図 ズケ 25- E 4- ネ ……	66
第Ⅲ-77 図	試掘坑平面図 ズケ 25- F 2- ア ……	49	第Ⅲ-114 図	本土産磁器：杯 (43) ……	66
第Ⅲ-78 図	試掘坑断面図 ズケ 25- F 2- シ (北壁・東壁)……………	50	第Ⅲ-115 図	試掘坑断面図 ズケ 30- B 8- テ南 (東壁・南立面)……………	67
第Ⅲ-79 図	沖縄産施釉陶器：灰釉碗 (27)、 陶質土器：急須 (28) ……	50	第Ⅲ-116 図	試掘坑平面図 ズケ 30- B 8- テ南 ……	67
第Ⅲ-80 図	石器：磨石 (30) ……	51	第Ⅲ-117 図	沖縄産施釉陶器：瓶 (44) ……	68
第Ⅲ-81 図	試掘箇所 ……	52	第Ⅲ-118 図	試掘坑断面図 ズケ 25- E 3- テ (北壁・東壁)……………	69
第Ⅲ-82 図	試掘坑断面図 ズケ 25- I 5- ノ (西壁・北壁)……………	52	第Ⅲ-119 図	試掘坑平面図 25- E 3- テ ……	69
第Ⅲ-83 図	試掘坑平面図 ズケ 25- I 5- ノ ……	53	第Ⅳ-1 図	豊之泉周辺の詳細測量図 ……	79
第Ⅲ-84 図	沖縄産無釉陶器 (31) ……	53	第Ⅳ-2 図	イシジャー地形測量図 ……	83
第Ⅲ-85 図	試掘坑断面図 ズケ 25- J 5- ニ (南壁・西壁)……………	53	第Ⅴ-1 図	花粉化石群集 ……	141

図版目次

図版Ⅲ - 1	石器：石斧（1）	18	図版Ⅲ -27	石器：磨石（32）	54
図版Ⅲ - 2	グスク土器（2）	19	図版Ⅲ -28	沖縄産施釉陶器：鍋（33）、 土器（34～36）	55
図版Ⅲ - 3	青花：碗（3）、白磁：碗（4）	21	図版Ⅲ -29	沖縄産無釉陶器：搦鉢（37） ズケ 25- J 6- ナ	56
図版Ⅲ - 4	青磁：盤（5）	22	図版Ⅲ -30	カムイヤキ？（38）	58
図版Ⅲ - 5	土器（6）	26	図版Ⅲ -31	沖縄産施釉陶器：鉢〔ワンプー〕（39）	59
図版Ⅲ - 6	グスク土器（7）ズケ 17- J 9- オ	26	図版Ⅲ -32	沖縄産施釉陶器：鉢〔ワンプー〕（40）	59
図版Ⅲ - 7	土器（8）、縄文土器（9・10）	29	図版Ⅲ -33	青花：碗（41）	63
図版Ⅲ - 8	グスク土器？（11）	30	図版Ⅲ -34	沖縄産施釉陶器：碗（42）	64
図版Ⅲ - 9	青銅製品：煙管（12）	33	図版Ⅲ -35	本土産磁器：杯（43）	66
図版Ⅲ -10	沖縄産施釉陶器：碗（13）	34	図版Ⅲ -36	沖縄産施釉陶器：瓶（44）	68
図版Ⅲ -11	沖縄産施釉陶器：壺（14）	35	図版Ⅳ - 1	ハンタモー（北側から）	78
図版Ⅲ -12	グスク土器（15）	37	図版Ⅳ - 2	豊之泉	78
図版Ⅲ -13	沖縄産無釉陶器：水甕（16）	37	図版Ⅳ - 3	遺構記録写真 1	80
図版Ⅲ -14	沖縄産施釉陶器：壺（17）	38	図版Ⅳ - 4	遺構記録写真 2	81
図版Ⅲ -15	沖縄産施釉陶器：急須（18）	39	図版Ⅳ - 5	遺構記録写真 1	85
図版Ⅲ -16	グスク土器（19）	43	図版Ⅳ - 6	遺構記録写真 2	86
図版Ⅲ -17	白磁：碗（20）	44	図版Ⅳ - 7	遺構記録写真 3	87
図版Ⅲ -18	白磁：碗（21）ズケ 24- E 9- サ	44	図版Ⅳ - 8	遺構記録写真 4	88
図版Ⅲ -19	青銅製品：鏝（22）ズケ 24- D 9- ト	44	図版Ⅳ - 9	12号墓 厨子甕（身・蓋）1	129
図版Ⅲ -20	カムイヤキ（23）	45	図版Ⅳ -10	12号墓 厨子甕（身・蓋）2	130
図版Ⅲ -21	青花：碗（24）	46	図版Ⅳ -11	12号墓 厨子甕（身・蓋）3	131
図版Ⅲ -22	白磁：碗（25）	47	図版Ⅴ - 1	花粉化石・シダ類孢子・微粒炭	151
図版Ⅲ -23	カムイヤキ（26）	48	図版Ⅴ - 2	植物珪酸体	152
図版Ⅲ -24	沖縄産施釉陶器：灰釉碗（27）、 陶質土器：急須（28）、黒曜石（29）	50	図版Ⅴ - 3	微細物洗い出し状況写真	153
図版Ⅲ -25	石器：磨石（30）	51			
図版Ⅲ -26	沖縄産無釉陶器（31）	53			

挿表目次

第Ⅲ - 1-1表	平成 26 年度	西普天間試掘成果一覧	70	第Ⅲ - 3表	平成 27 年度	西普天間試掘成果一覧	77
第Ⅲ - 1-2表	平成 26 年度	西普天間試掘成果一覧	71	第Ⅴ - 1表		放射性炭素年代測定結果	138
第Ⅲ - 2-1表	平成 27 年度	西普天間試掘成果一覧	72	第Ⅴ - 2表		暦年較正結果	139
第Ⅲ - 2-2表	平成 27 年度	西普天間試掘成果一覧	73	第Ⅴ - 3表		花粉分析・微粒炭分析結果	140
第Ⅲ - 2-3表	平成 27 年度	西普天間試掘成果一覧	74	第Ⅴ - 4表		植物珪酸体含量	142
第Ⅲ - 2-4表	平成 27 年度	西普天間試掘成果一覧	75	第Ⅴ - 5表		微細物洗い出し結果	143
第Ⅲ - 2-5表	平成 27 年度	西普天間試掘成果一覧	76	第Ⅴ - 6表		土壌理化学分析・粒度分析結果	144

第I章 事業概要

第1節 調査に至る経緯

今回報告する西普天間住宅地区は、平成8年12月に「沖縄に関する特別行動委員会」(SACO)の最終報告において返還が合意されたキャンプ瑞慶覧の一部であり、平成27年3月31日付で本市に返還された。返還に向けた取組みは、平成11年に閣議決定された「普天間飛行場の移設に係る政府方針」の中で「駐留軍用地跡地利用の促進及び円滑化等に関する方針」として当該地区の返還に向けて政府方針が示されたことに始まる。

平成13年12月に開催された第6回「跡地対策準備協議会」における「取り組み分野ごとの課題と対応方針についての取りまとめ」において、文化財関係については、「跡地利用計画を策定する上で有効となる埋蔵文化財の所在状況に係る詳細分布調査に取り組み、これを基に概略の遺構図作成を目指すこと」、詳細分布調査の実施については、「国において、引き続き財政的な支援を行うように取り組むこと」とされた。

平成14年7月の沖縄振興計画では、「駐留軍用地跡地の有効かつ適切な利用は、沖縄の将来の発展にとって、極めて重要な課題であることから、国、県、及び跡地関係市町村の密接な連携の下、駐留軍用地跡地の利用の促進に向けて取り組む。」と定め、キャンプ瑞慶覧の跡地利用についても、「良好な住宅地や生活関連施設、行政サービス施設等の整備を進め、併せて地域商業の活性化を図り、職住近接のまちづくりを進める」と定められた。平成25年4月に日米両政府が共同発表した「沖縄における在日米軍施設・区域に関する統合計画」(以下、「統合計画」)により嘉手名飛行場以南の土地の返還が示され、その中でキャンプ瑞慶覧内の西普天間住宅地区が「速やかに返還する区域」とされた。

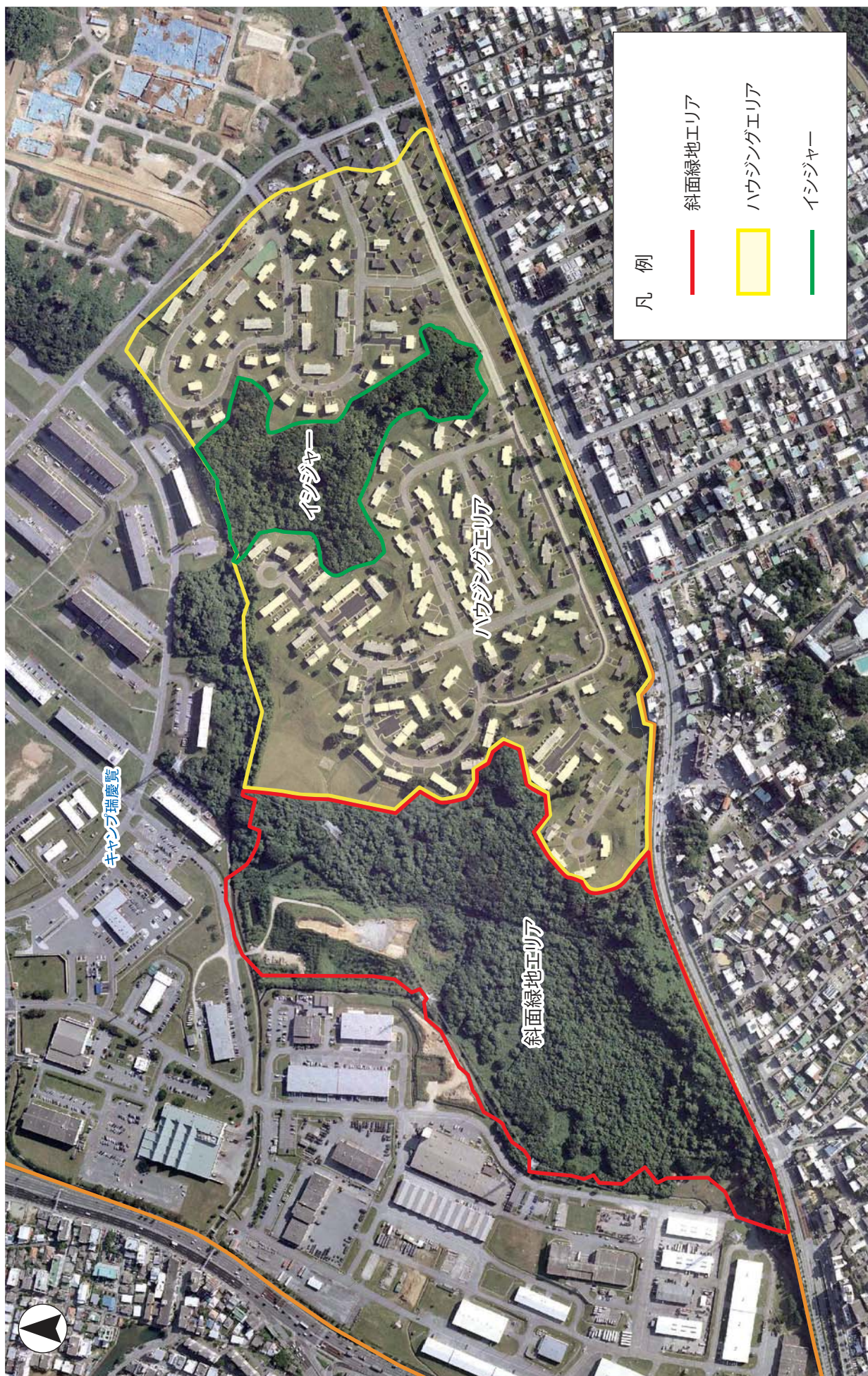
平成25年5月には駐留軍用地内の土地の先行取得制度に関連して特定駐留軍用地の指定を受け、6月には日米合同委員会において返還の合意がなされた。

・返還前の立ち入り申請について

平成25年8月に、返還前に文化財調査ができるように「沖縄県における駐留軍用地跡地の有効かつ適切な利用の推進に関する特別措置法」に基づいて、国(沖縄防衛局)に対し駐留軍用地への立ち入りあっせんの申請書を提出した。同年10月に沖縄防衛局長より宜野湾市長へ文化財調査の許可が通知された。これにより、キャンプ瑞慶覧(西普天間住宅地区)の斜面緑地の一部について表面踏査を実施した。

キャンプ瑞慶覧(西普天間住宅地区)は、概ねハウジングエリア(住宅地)と斜面緑地エリアに大別することができる。ハウジングエリア(住宅地)については、これまで試掘調査が未実施のエリアであり、斜面緑地についても把握されている埋蔵文化財包蔵地は主として1980年代に実施された表面踏査及び一部の試掘調査の成果によるものであった。そのため、遺跡の範囲及び性格等が明確に把握されているわけではなく、今後に予定されている沖縄防衛局による支障除去措置や跡地利用計画に伴う開発工事等に対して文化財の保護調整を円滑に進めるために早急に試掘・確認調査を実施することが求められた。

平成26年4月21日、沖縄防衛局に対して「駐留軍用地についての調査及び測量の実施に関するあっせん申請書」(宜教文第1号-2)を提出し、同年5月に許可された。しかし、これらの申請は、掘削を伴わないものであった。同年6月に日米合同委員会の合意を得て、「本年8月15日以降、掘削を伴う埋蔵文化財調査及び支障除去措置に係る調査等のための返還前の立ち入り」が可能となった。平成26年8月12日、キャンプ瑞慶覧(西普天間住宅地区)の跡地利用に関する協議会が開かれ、同月15日から試掘調査を実施することを報告し調査を開始した。



第I-1図 地区のエリア

第2節 調査の経過

・試掘調査の開始

キャンプ瑞慶覧（西普天間住宅地区）の試掘調査は平成26年8月15日から開始されたが、8月22日までに調査した22箇所のうち、3箇所から異臭・油臭、1箇所からドラム缶らしき異物が検出され、土壌汚染の有無を確認するための分析調査を実施することとなり、試掘調査は一時中断することとなった。沖縄防衛局による土壌分析調査が行われ、同年12月19日に調査結果報告が公表された。この調査報告を受け、翌年2月末に地点を変更して試掘調査再開した。平成26年度に実施した試掘調査箇所は、ハウジングエリアが63箇所、斜面緑地エリアが7箇所、計70箇所の調査を実施している。

・分布調査について

平成26年度に試掘調査と並行して安仁屋・新城区の分布調査（表面踏査）を実施した。特に安仁屋区に所在するインジャーと呼称されるエリアは両谷の崖面に多数の掘込み墓が見られ、地形的にも洞窟の天井部が崩落したとされる断崖渓谷をなし、本市において貴重な地質地形となっている場所であることから、詳細な地形測量を実施した。また、新城区においては、ハンタモーと呼ばれる旧新城集落のアシビナーや戦後に伊佐区住民によって設置された「豊之泉」周辺の分布調査を実施した。

・西普天間住宅地区の返還と県・市の調査分担について

平成26年度には沖縄防衛局によって返還区域に境界柵の設置工事が行われ、平成27年3月31日に宜野湾市へ返還された（以下、「キャンプ瑞慶覧（西普天間住宅地区）」⇒「西普天間住宅地区跡地」とする）。

平成26年11月、西普天間住宅地区跡地の文化財調査について支援を依頼するため、沖縄県教育委員会に対して「キャンプ瑞慶覧（西普天間住宅地区）返還に伴う試掘・確認調査等への支援について（要請）」（宜教文第254号）の文書を提出した。この要請をもとに平成27年4月に沖縄県教育庁文化財課、沖縄県立埋蔵文化財センターと宜野湾市文化課で当該地区の試掘・確認調査の実施について調整を行った。調整の結果、沖縄県教育庁文化財課と沖縄県立埋蔵文化財センターは西普天間住宅地のハウジングエリア西側部分を担当し、宜野湾市文化課はインジャーを挟んで東側を担当することが確認された。

市は平成27年7月から平成28年2月にかけて195箇所の試掘調査を実施し、新城大道原第一遺跡、新城大道原第二遺跡、新城大道原第三遺跡、喜友名山川原第八遺跡、喜友名山川原第九遺跡、喜友名山川原第十遺跡の6遺跡を新たに確認した。県は同年8月3日から調査を開始し、試掘調査94箇所、トレンチ1箇所を調査した。その結果、普天間石川原第二遺跡、安仁屋東原古墓群、普天間旧道跡の3遺跡が新たに確認された。さらに、確認された遺跡の内容を把握するため、4箇所の地点で確認調査を実施している。平成27年度において、ハウジングエリアの試掘調査はほぼすべて終了した。平成28年度も引き続き県に協力を依頼し、残る斜面緑地エリアの試掘調査を行うこととなった。

・赤土流出防止条例に関する届出

平成27年度の試掘調査は、調査の総面積が1,000㎡を越えたため、沖縄県赤土等流出防止条例に基づく届出が必要となり、中部保健所に対して事業行為通知書を提出した（平成27年5月11日付け、宜教文第1-12号）。その後、中部保健所から市教育委員会へ確認済みの通知がなされた（平成27年6月3日付け、中部保第2-27029号）。

【概要】

平成26年度

- ・平成26年8月15日：試掘調査の開始（市実施：試掘70箇所）
- ・平成26年8月～3月：安仁屋区及び新城区の分布調査（約10万㎡）

平成27年度

- ・平成27年3月31日：西普天間住宅地区の返還
- ・平成27年7月～平成28年2月：試掘調査（市：試掘195箇所）

第3節 調査体制

本報告は、平成26年度から平成27年度に実施した旧キャンプ瑞慶覧西普天間住宅地区内の試掘・確認調査の成果を記したものである。本報告における資料整理及び報告書作成に係る整理業務は平成28～30年度にかけて実施した。調査体制は以下のとおりである。

事業主体 沖縄県宜野湾市教育委員会

事業責任者

教育長 玉城勝秀（平成26・27年度）、知念春美（平成28～30年度）

事業総括

教育部長 宮城光徳（平成26年度）、島袋清松（平成27～29年度）、比嘉 透（平成30年度）

教育次長 島袋清松（平成26年度）、伊佐英明（平成27・28年度）、桃原忍子（平成29・30年度）

事業事務

文化課長 與那原 類（平成26・27年度）、比嘉 洋（平成28～30年度）

文化財保護係長 森田直哉（平成26年度）、吉村 純（平成27～29年度）、仲地真俊（平成30年度）

同係主任主事 伊藤 圭（平成27～30年度／※30年度は学芸係）、長濱健起（平成28～30年度）、仲村 毅（平成28～30年度）

同係主事 伊藤 圭（平成26年度）、長濱健起（平成26・27年度）、仲村 毅（平成26・27年度）、来間千明（平成27～29年度）、金城りお（平成29・30年度）

文化財保護指導嘱託員

天久瑞香（平成27・28年度）、伊波晴美（平成26～28年度）、杉村千重美（平成26～28年度）、翁長和佳子（平成27・28）、宮城初枝（平成27年度）、古謝和美（平成26・27年度）、比嘉ムツ子（平成26・27年度）、西銘五月（平成26・27年度）

文化財保護臨時職員（平成26～30年度）

青山直弘、東江明日香、安里真栄、大城武政、奥浜恵子、米須 恵、砂辺恒志、砂辺光義、武部拓磨、我如古みどり、翁長しのぶ、知念和伸、前田和枝、宮城常正、吉田正志、崎濱比カ理、翁長和佳子、伊波晴美、杉村千重美、新垣裕美、上江洲由昇、譜久島宏美

委託業務 平成26年度 発掘調査支援業務委託 (株)アーキジオパシフィック支店
磁気探査業務委託 (有)新開技研
発掘調査支援業務委託② (株)アーキジオパシフィック支店

平成 27 年度	粉塵計管理業務委託	(株)アーキジオパシフィック支店
	自然科学分析業務委託	パリノ・サーヴェイ(株)沖縄支店
	発掘調査支援業務委託	(株)アーキジオパシフィック支店
	磁気探査業務委託	(有)新エンジニアリング
	自然科学分析業務委託	パリノ・サーヴェイ(株)沖縄支店
	試掘調査支援業務委託②	三興コンサルタント(株)
平成 30 年度	磁気探査業務委託②	(株)沖縄探査開発
	自然科学分析業務委託②	パリノ・サーヴェイ(株)沖縄支店
	遺物実測業務委託	(株)島田組宜野湾営業所

調査指導及び調査協力

調査指導及び調査協力者として以下の方々にご指導、ご協力を頂いた。(所属等は当時)

宜野湾市軍用地等地主会

又吉 真一(会長)、佐喜眞 祐輝(喜友名評議員)、呉屋 宏(新城評議員)、仲村 廣(安仁屋評議員)、宮城 正秀(普天間評議員)、當山 武弘(監事)

沖縄防衛局

辻 吉巳(管理部部長)、重政 武輝(管理部返還対策課課長)、阿部 正和(管理部返還対策課課長補佐)、仲間 勝之(管理部返還対策課課長補佐)、大嶺 正之(管理部返還対策課係長)、古謝 哲(管理部返還対策課係員)

文化庁記念物課

浅野 啓介(H26年度調査指導)、森先 一貴(H27年度調査指導)、川畑 純(H28年度調査指導)

沖縄県教育庁文化財課及び沖縄県立埋蔵文化財センター

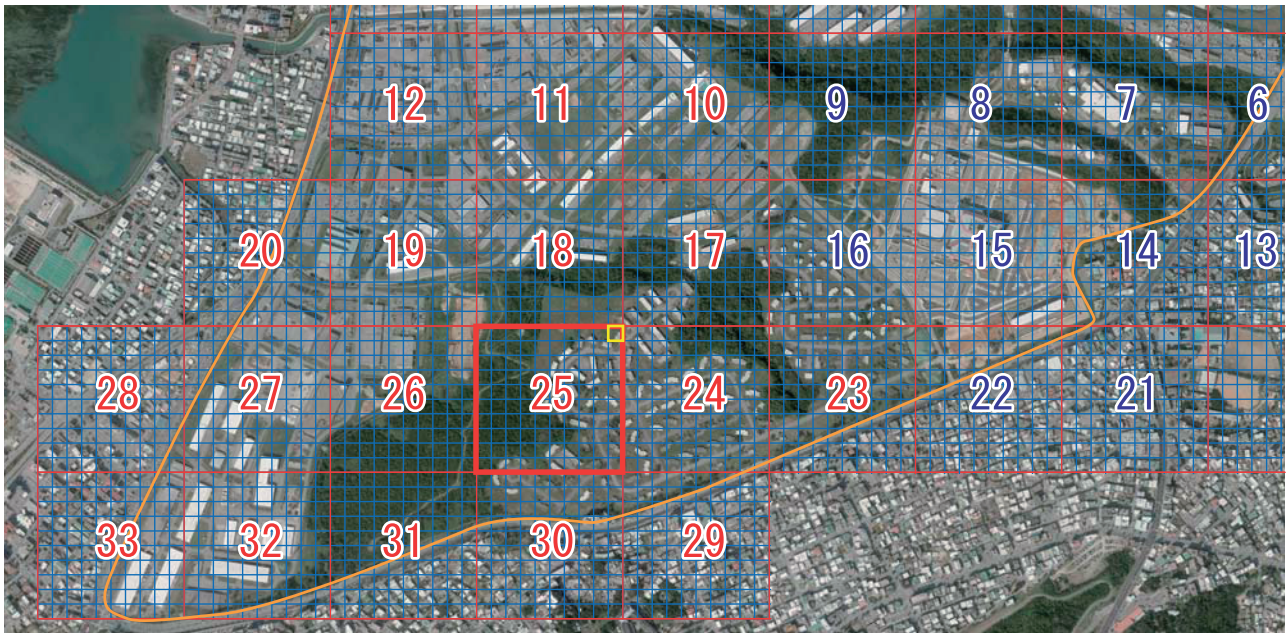
島袋 洋、盛本 勲、金城 亀信、上地 博、中山 晋、田場 直樹、瀬戸 哲也、新垣 力、羽方 誠、知念 隆博、大堀 皓平、宮城 淳一、具志堅清大、南 勇輔

宜野湾市文化財保護審議会(平成26～30年度)

赤嶺 政信(琉球大学教授)、新垣 義夫(普天満宮宮司)、池田 榮史(琉球大学教授)、大城 逸朗(沖縄石の会会長)、恩河 尚(沖縄国際大学非常勤講師)、崎浜 靖(沖縄国際大学准教授)、嵩元 政秀(元沖縄考古学会会長)、比嘉 悦子(沖縄県立芸術大学非常勤講師)、福島 駿介(琉球大学名誉教授)、宮城 邦治(元沖縄国際大学教授)、田名 真之(沖縄国際大学教授)、波平エリ子(沖縄女子短期大学准教授)、宮城 弘樹(沖縄国際大学講師)

第4節 調査区の設定

西普天間住宅地区の試掘調査については、平成13年度から県教育庁と市教育委員会が普天間飛行場内で実施している試掘・確認調査のために設定した調査区割りの基準としている座標（X32,000 Y26,500 日本測地系）を踏襲した。区割りは、普天間飛行場内に位置する基準座標から X・Y 軸をキャンブ瑞慶覧一帯まで 300m 間隔に区切り、これを第 I 区画とし、それを 30m 間隔に区切り 100 分割した第 II 区画を設け、さらにそれを 6m 四方の 25 分割した第 III 区画の 3 段階に区割りしている。試掘坑は 4m 四方（重機での掘削が困難な緑地及び急傾斜地等に関しては手堀となることから 2m 四方とする場合もある）とし、基本的な設定は第 II 区画の区割りを使用して、試掘坑の北辺及び東辺が第 II 区画と重なるように北東の交点を基点とし 30m 間隔としている。ただし、現地で試掘坑を設定する際、計画箇所には障害物等があり設定及び調査に支障が生じると判断される場合には、設定可能な近接箇所に移動させて設定した。また試掘坑の呼称については、キャンブ瑞慶覧での調査を示す、「ズケ」に次いで第 I 区画名称、第 II 区画名称、第 III 区画名称を用いて表示している。（例「ズケ 25-A1-ア」）



←----- 300M ----->										
A10	A9	A8	A7	A6	A5	A4	A3	A2	A1	
B10	B9	B8	B7	B6	B5	B4	B3	B2	B1	
C10	C9	C8	C7	C6	C5	C4	C3	C2	C1	
D10	D9	D8	D7	D6	D5	D4	D3	D2	D1	
E10	E9	E8	E7	E6	E5	E4	E3	E2	E1	
F10	F9	F8	F7	F6	F5	F4	F3	F2	F1	
G10	G9	G8	G7	G6	G5	G4	G3	G2	G1	
H10	H9	H8	H7	H6	H5	H4	H3	H2	H1	
I10	I9	I8	I7	I6	I5	I4	I3	I2	I1	
J10	J9	J8	J7	J6	J5	J4	J3	J2	J1	
(S=1/5000)										

第II区画概念図（30m 間隔 □第I区画）

←----- 30M ----->				
オ	エ	ウ	イ	ア
コ	ケ	ク	キ	カ
ソ	セ	ス	シ	サ
ト	テ	ツ	チ	タ
ノ	ネ	ヌ	ニ	ナ
(S=1/500)				

第III区画概念図（6m 間隔 □第II区画）

例:ズケ25-A1-ア
■ 試掘坑4m四方

第I - 2 図 西普天間住宅地区における区画概念図

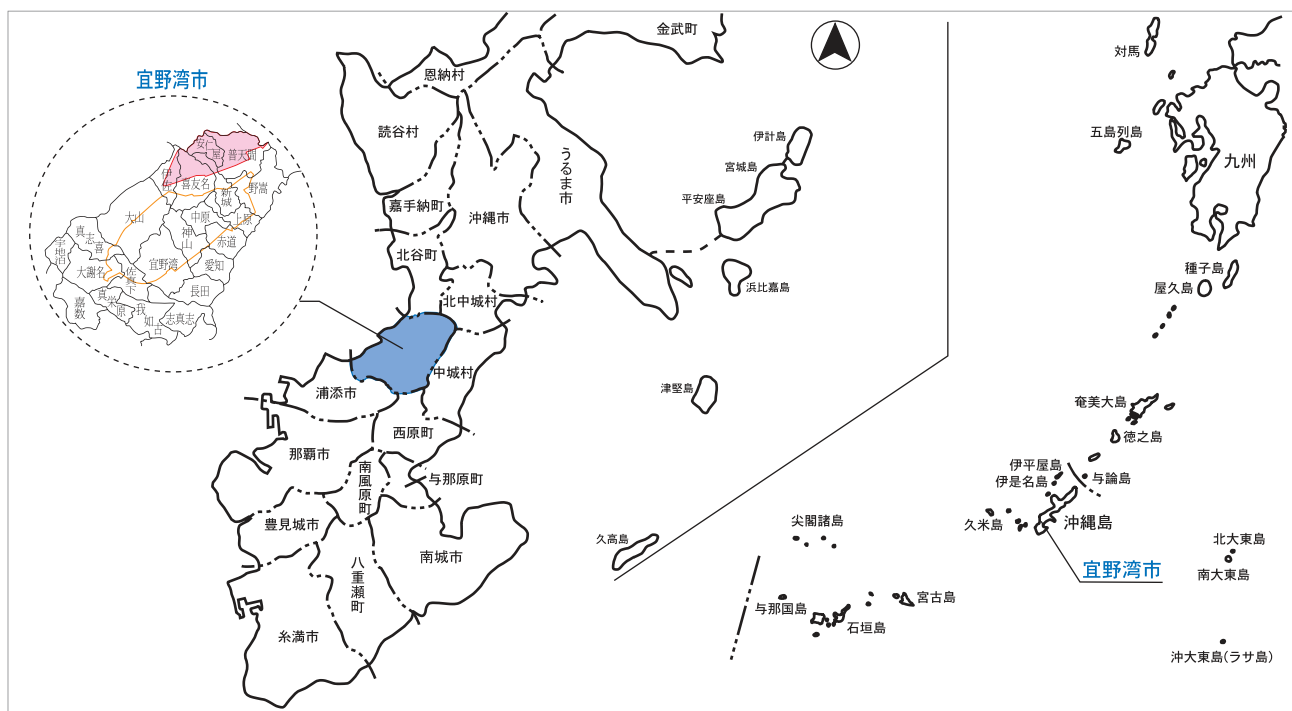
第Ⅱ章 位置と環境

第1節 地理的環境

宜野湾市は、沖縄本島の中部西海岸・東シナ海に面し、県庁所在地の那覇市から約 12.4 km離れた地点にある。北は北谷町、北東は北中城村、東は中城村、東南には西原町、南は浦添市が隣接し、市域の総面積は、約 19.8 km²で、東西方向に約 6.1 km、南北方向に約 5.3 kmのやや長方形で海岸線はおおむね平坦である。市の北側にはキャンプ瑞慶覧、中央には普天間飛行場が占有することから市民の居住地はその周縁部に展開している。本市の面積が約 19.8 km²であり、そのうち普天間飛行場が約 4.8 km²、キャンプ瑞慶覧が約 1.1 km²を占め、市全域の約 29.7%が米軍基地となっている（2017年時点）。また、河川は宇地泊川、浦添市境に牧港川、北谷町境に普天間川がある。気候は亜熱帯性で、年平均気温は 22.4 度と四季を通じて温暖で、春から夏にかけて雨量が多く、夏から秋へかけては熱帯性低気圧の進路となり台風の影響となる。市域には、国道 58 号線、330 号線等のほか、沖縄自動車道北中城 IC・西原 IC へのアクセス道路として、県道宜野湾北中城線や 34 号線などの主要幹線道路が縦横に展開し、中南部と北部地域を結ぶ交通の要所となっている。

本市の地層は、泥岩や砂岩から成る新第三紀島尻層群を基盤する灰色の粘土層を基盤とし、その上に不整合に琉球石灰岩が分布、市域西側海岸沿いの低地には沖積層である砂層が堆積している。内陸部は琉球石灰岩で形成された海岸段丘が発達し、市域東側の丘陵地では島尻層群が風化してできたジャングル土壌が広がり、石灰岩台地上には島尻マーヅと呼ばれる赤色の粘土質の土壌が広く分布している。

地形を見ると、海岸から内陸に向かって雛壇状の海岸段丘から成り、中位段丘と低位段丘とそれぞれ下位面、上位面に区分する 4 つの段丘面を有している。低位段丘下位面（第 1 面）は、比屋良川から宇地泊、真志喜、大山、伊佐に連なる標高 3～30m の海岸低地である。低位上位面は（第 2 面）は、標高 30～40m の石灰岩段丘で、大山、真志喜、宇地泊、伊佐の住宅地となっている。中位段丘下位面（第 3 面）



第Ⅱ - 1 図 宜野湾市と西普天間の位置

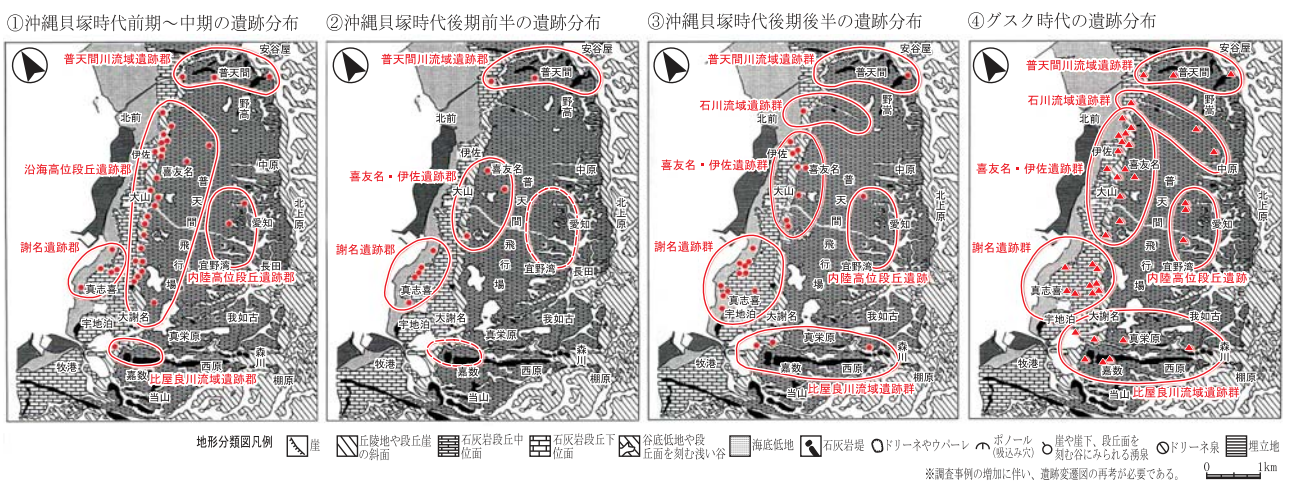
は、キャンプ瑞慶覧から普天間飛行場へと延びる標高 50～90m の石灰岩段丘である。中位段丘上位面(第 4 面)は、標高 90m 以上の高地であり、我如古から野嵩に至る国道 330 号線沿いとなっている。

市の北側に普天間川、南側に比屋良川が流れ、段丘面を横断するように発達している。段丘面の境には、比高の異なる段丘崖があり段丘縁辺に洞穴(吸込口)や琉球石灰岩から浸透した雨水が不透水性の島尻層で地下水となって発達し、石灰岩を侵食して多くの鍾乳洞を形成している。これらの地下水は、段丘崖で、島尻層と琉球石灰岩の不整合面から湧きだし、古来より湧泉として人々に利用されてきた。

西普天間住宅地区跡地に所在する地域は、字普天間、字安仁屋、字新城、字喜友名の 4 つの地区に跨っており、県道 81 号線に面した中位段丘の縁辺部(標高 60m 前後)から、海岸低地(標高 10m 前後)へ至る段丘状の平地及び斜面地となっている。特に喜友名グスクの所在する西側の緑地部分は、急傾斜地となっており、基地建設時からほとんど開発等の影響を受けず、戦前からの地形が良好に保存されている場所である。緑地帯北側の標高 14～16m ラインには、不透水性の島尻層と透水性の琉球石灰岩との境があり、その不整合面からは地下水が湧きだし、多数の湧泉が形成されている。国指定文化財である喜友名泉(チュンナーガー)もこれらの湧泉と同じ標高レベルに位置する湧泉であり、宜野湾市の代表的な遺跡であるとともに、自然地形・地質を象徴する場所と言える。段丘縁辺部には湧水と斜面の地形を利用した棚田地形を残す喜友名古水田がある。また、地区南東から北西側に延びるイシジャーは、「河川溪谷状の地形を示し、一部流水も見られ、他の琉球石灰岩地域では見られない、珍しい地形(註 1)」であり、学術上貴重な地形とされている。特に中流域は両岸が高さ 10～14m 程の琉球石灰岩の切り立った崖となっており、両崖面には、多数の小洞窟やそれらを加工した掘込墓がある。洞窟天井部には鍾乳石やカーテン(鍾乳洞で形成される水滴のつらら)などが確認されている。これらの存在からイシジャーの形成は、「かつて鍾乳洞の天井が崩れてできたドリーネの可能性が示唆され、河床部の岩塊は落盤した天井部の岩盤の可能性がある(註 1)。」イシジャーを除く地区中央から東側一帯は、戦前から近隣集落の田畑として利用されていた場所であるが、基地接收後に米軍の住宅地として造成工事が行われ、緑地側に反して大規模な地形改変がなされている。

第 2 節 歴史的環境

沖縄諸島に人々が住み始めたのは今から 3 万年程前に遡り、旧石器時代と呼称される時代で宜野湾市においても大山洞穴から「大山洞人」と称される 20 歳前後の男性の下顎骨が発見されている。また、



第Ⅱ - 2 図 宜野湾市遺跡変遷図

市町村) から 13 村 (ムラ) を割き、新たに 1 村を設けた計 14 村で「宜野湾間切」として新設された。14 村とは、我如古(がねこ)・宜野湾(ぎのわん)・神山(かみやま)・大山(おおやま)・大謝名(おおじやな)・宇地泊(うちどまり)・喜友名(きゆな)・新城(あらぐすく)・伊佐(いさ)・嘉数(かかず)・野嵩(のだけ)・普天間(ふてんま)・安仁屋(あにや)・真志喜(ましき)で、新たに設置された村(ムラ)が真志喜(ましき)である。また、宜野湾村には間切番所が置かれていた。首里城が琉球の中心だった時代、首里からの連絡は「宿道」と呼ばれる道を通して各地の「間切番所」に伝えられた。また、宜野湾では、村の西側を通して名護につながる道が「西海道」、東側を通る道は「東海道」と呼ばれていた。宜野湾間切嘉数村から普天間村までの間には、尚貞王(1645～1709)の世子・尚純(1660～1706)が植え付けさせたと記録に残る宜野湾並松(ジノーンナンマチ)と呼ばれる松並木があった。1644年から琉球国王が9月に普天満宮に参拝する「普天間参詣」が行われたため、次第にこの時期にお参りする習慣が王府の官人、庶民にも普及していった。そのため郡道(宜野湾並松街道)が整備された。この道は、首里の平良から浦添の経塚・仲間・伊祖・当山・宜野湾の嘉数を経て、普天間に通じていた。また、伊佐で県道から分岐して普天満宮へと至る道が戦前まで整備されており、隣接するキャンプ瑞慶覧内の海軍病院地区では、近年の発掘調査によってその遺構が発見されている。1700年中頃からは首里や那覇の士族層が生活の糧や、職を求めて移り住むようになり、これを屋取(ヤードウイ)と言い、徐々に集落を形成していった。

明治以降の宜野湾は1879(明治12)年の廃藩置県後、普天間に中頭郡役所や、県立農事試験場などの官公庁の施設が置かれた。さらに、中頭郡教育会がたびたび開かれるなど、本島中部の政治・経済・教育の中心地として活気に満ちていた。1922(大正11)年には、那覇駅から嘉手納に沖縄軽便鉄道が敷設され、宜野湾村には大謝名駅・真志喜駅・大山駅の3駅が置かれ、大山駅からは宜野湾村内で収穫されたさとうきびが嘉手納の製糖工場まで運ばれた。旧集落には、さとうきびを運ぶためのトロッコ軌道が大山駅まで通っていた。また、1932(昭和7)年には宜野湾並松が国指定天然記念物に指定された。この頃の並松の行程は約5.8km、松の株数2,944本であったとされている。

第二次世界大戦において本市も壊滅的な戦災を受けたが、野嵩地域は焼失を免れ、周辺地域の民間人の収容所となり、戦後復興の中心地となった。しかし、その一方で戦中から戦後にかけて市域の主要な部分が米軍基地として接収された。その後、普天間を中心に都市化が進展し、1955(昭和30)年に18,469人だった人口も1960(昭和35)年3月では3万人を超え、1962(昭和37)年7月1日に市制が施行され、新生「宜野湾市」が誕生した。

市制施行後もなお、米軍基地が中央部に位置するため、市街地は基地周辺にドーナツ状に発展し、特異な形状を示している。また、市街地化は急激をきわめ、嘉数ハイツ・大謝名団地、上大謝名区の自治会が新設され、宜野湾市は都合23自治会20行政区に編成された。

近年、那覇市の外延的な拡大に伴って市街地化が進展しつつあり、更に沖縄国際大学、琉球大学が立地し、沖縄コンベンションセンターが整備されるなど、県内の高次都市機能の一部を担う重要な地域となりつつある。

【参考】

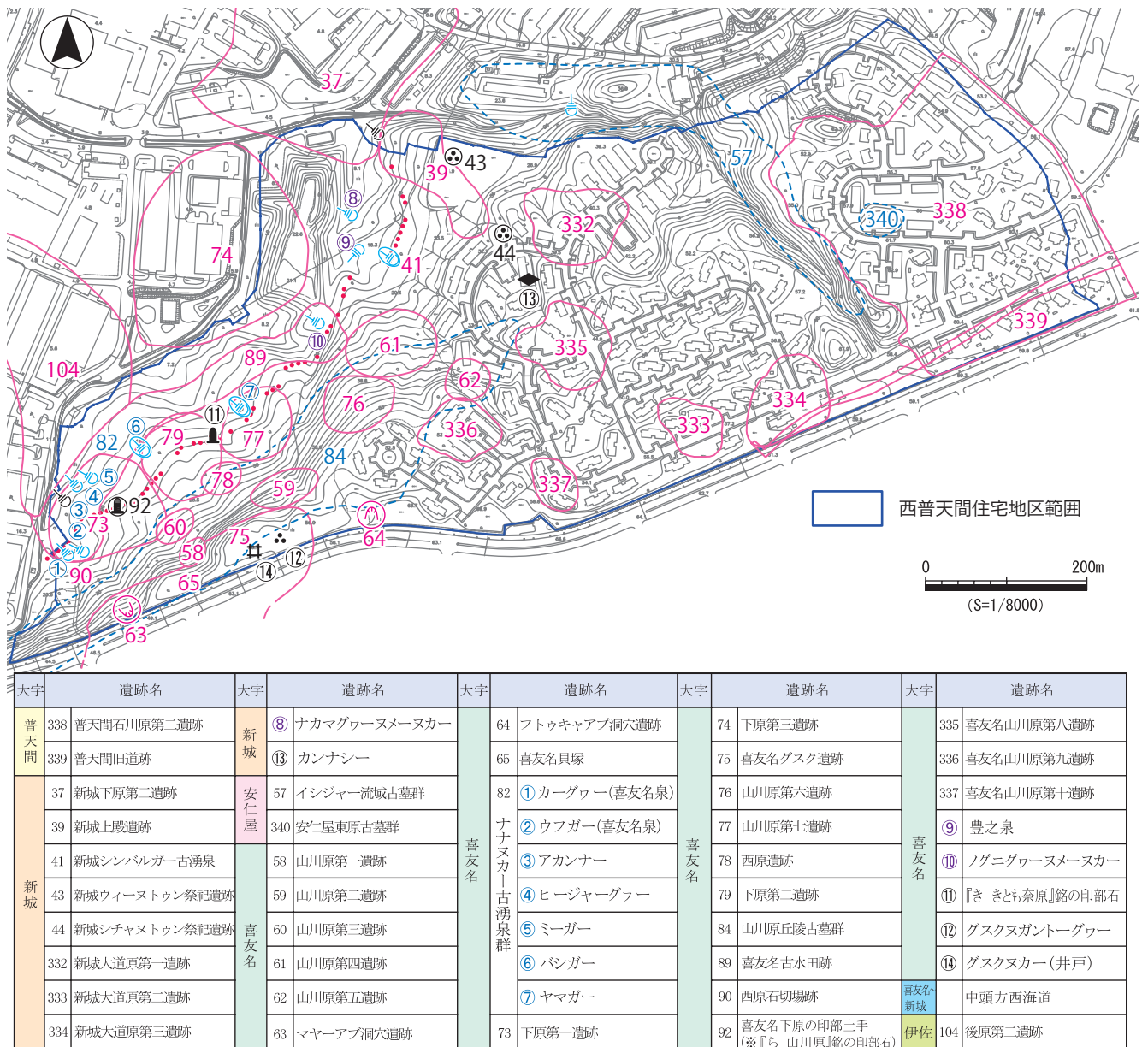
註1 『平成26年度 重要文化財保存整備基本計画更新業務 報告書』宜野湾市教育委員会

註2 『琉球の築土構木 - 土木・技術からみた琉球王国 - 』一般社団法人 沖縄しまたて協会 2016年

第3節 西普天間住宅地区の文化財について

西普天間住宅地区内には、これまでに実施してきた各種文化財調査の結果、平成29年3月現在で、埋蔵文化財が28箇所、古墓群が3箇所、拝所が3箇所、湧泉・井戸12箇所、その他の文化財が4箇所の計50箇所の文化財が確認されている（※口伝・伝承によるものや消失または移設した文化財も含まれる）。

当該地区に所在するほとんどの遺跡は喜友名区にある斜面緑地に分布し、県道81号線沿いの丘陵地には、市で唯一の石積みを巡らした防御形態を持つ喜友名グスクが所在する。喜友名グスクは『琉球国由来記』に「城内西ノヤラズ嶽・喜友名之殿・喜友名火神」とある。戦前はグスクヌガントウグワー(祠)・クラ・火の神など都合5・6箇所の拝所があったと伝えられている。現在は、南側のほとんどが道路工事等によって消失し、辛うじて北側崖沿いに一部石列状の石積みが残っている状況である。また、緑地帯には湧泉が発達し、標高14～16mラインに帯状に点在する。これは、不透水性のクチャ層とそれを覆う琉球石灰岩の不整合面から湧き出るものであり、これらの湧泉より北側に広がる低地一帯は、戦後初め頃まで水田として利用されていた。喜友名区には、喜友名泉（チュンナーガー）である、ウフガー



第II - 4図 西普天間住宅地区の遺跡分布図・文化財一覧

(イキガガー・ウマアシビガー)、カーグワー (イナグガー) の他、ヤマガー、バシガー、ミーガー、ヒージャーガー、アカンナーの計 7 箇所の湧泉があったとされ、「喜友名ナナムカー」と呼称されていたそうである。喜友名泉は節々の拝み、若水、産水などの人生の折り目に利用されたほか、日々の飲料水や農作業に従事した牛馬の水浴び、洗濯等にも使用されていた。ウフガーは布積みを基調とした堅牢な造りで、カーグワーは布積みとあいかた積みが施されている。「喜友名泉は平成 4 年 8 月 10 日文化財保護法の規定に基づき国指定重要文化財として告知された。市内には国・県・市指定の文化財は 25 あり、国指定を受けたのは『喜友名泉』と『大山貝塚』であるが建造物に限れば唯一『喜友名泉』だけである(註 1)」。また、新城区には、新城村の発祥に係るシンバルガー、その水源を利用して伊佐集落の住民が作った豊之泉が所在し、その他、ナカマグワーヌメヌカー、ノグニグワーヌメヌカー等の湧泉が現存している。

斜面緑地に所在する遺跡は、市教育委員会が 1979 年より実施している市内文化財分布調査の一環として行われた基地内調査のうち、キャンプ瑞慶覧を踏査した際に確認されたものがほとんどである。その際、「調査現場の地勢に詳しい部落の関係者に案内してもらい、共同で物件の確認にあたりつつ、物件及びその周辺の由来・伝承について教示して頂いた」。踏査結果の詳細については割愛するが、古墓や遺物散布地などのほか、湧泉、植生など多岐にわたる調査を実施し、県指定天然記念物のクロイウトカゲモドキを確認するなどの報告がなされている(註 2)。

また、1982 年には、斜面緑地内に道路建設工事が予定されたため、工事予定地の試掘調査及び緊急発掘調査が実施され、「喜友名遺跡群」として報告されている。調査対象となった遺跡は、喜友名山川原第五遺跡、喜友名山川原丘陵古墓群、喜友名山川原第六遺跡、喜友名山川原第七遺跡で、総面積約 1,000 m²の調査を実施している。これらの調査成果によって斜面緑地一帯には、沖積低地を取り巻く緩やかな傾斜面(低位段丘)とその後背に急な断崖をなす丘陵(中位段丘)の縁に多くの遺跡が重なりあうように分布していることが判明した。上記報告の中では、これらの遺跡を個別に捉えるのではなく「袋状凹地の低湿地をとり囲む地理的環境の限定されたまとまりのなかのひとつとして捕えた方が地域史の把握の上では有益」であり、「同時代に立地する遺跡は生産における協同作業や婚姻における嫁取りなどで何らかの関係を結ぶものであり、さらに、遺跡の変遷はそれを形成した集団の離合集散や生活文化の変化などを意味する」として一定の地理的環境の中に所在する遺跡について、空間的、時間的な繋がりを捉えながら地域文化を解明しようとする考察がなされている(註 3)。

これ以後、当地区における文化財に関する調査は返還が合意されるまで行われてこなかったが、平成 25 年に一部立入が許可され、平成 26 年度から掘削を伴う試掘調査が許可された。斜面緑地に分布する遺跡については、上記の分布踏査によって一定の遺跡範囲を示していたが、ハウジングエリアについては全くの手つかずであり、大規模な土地造成が行われている現状も踏まえて、遺跡の分布状況を調べるための試掘調査は必須であった。その結果、平成 26 年から平成 27 年までに実施された試掘調査によって、新城大道原第一遺跡、新城大道原第二遺跡、新城大道原第三遺跡、喜友名山川原第八遺跡、喜友名山川原第九遺跡、喜友名山川原第十遺跡、普天間石川原第二遺跡、安仁屋東原古墓群、普天間旧道跡が新規の遺跡として確認された。

【参考】

註 1 『喜友名誌 ちゅんなー』宜野湾市喜友名区自治会 2015 年

註 2 『キャンプ・ズケラン基地の文化財〔I〕』宜野湾市教育委員会 1981 年

註 3 『宜野湾市文化財調査報告書第 5 集 喜友名遺跡群』宜野湾市教育委員会 1984 年

第Ⅲ章 試掘・確認調査の成果

第1節 はじめに

1. はじめに

平成26年度から平成27年度に実施した試掘・確認調査は、主にハウジングエリアを中心に行い、計265箇所の調査を実施した。そのうち35箇所で遺構が確認され、範囲変更（拡張）となった遺跡が2遺跡、新規で発見された遺跡が6遺跡であった。平成27年度に県がおこなった試掘調査によって確認された遺跡と合わせて新たに発見された遺跡は9遺跡となっている。

このエリア一帯は、米軍による住宅建設によって地形が大きく改変されている状況であった。また、地下には住宅に伴う雨水、汚水等の配管が縦横に埋設され、埋蔵文化財への影響は多大なものであると想定された。今回新規で発見された9遺跡は、米軍による土地改変や開発による攪乱などから辛うじて免れたものであり、試掘調査の結果、遺跡の保存状態は良好とはいえ、一部の凹地や地山面に掘り込まれた遺構等が残存しているという状況であった。その中において確認された遺構や遺物は先史時代からグスク時代、近世・近代と多様な時代に跨る複合遺跡の様相を呈し、多くの文化財が空間的、重層的に包蔵されていることを示していた。本章では、市が試掘調査を実施した、新城上殿遺跡、新城大道原第一遺跡、新城大道原第二遺跡、喜友名山川原第八遺跡、喜友名山川原第九遺跡、喜友名山川原第十遺跡、普天間石川原第二遺跡、新城下原第二遺跡、喜友名山川原丘陵古墓群の計9遺跡について報告する。各遺跡の様相を把握しやすいように、試掘調査の成果については遺跡ごとに特徴的な成果が得られた試掘坑を抜き出して報告する。なお、その他の試掘成果については一覧表に記載している（第Ⅲ-1～3表）。

2. 基本層序

今回の調査は、主に石灰岩台地上に立地するハウジングエリアが主体を占める。この一帯はいわゆる中位段丘下位面（標高50～90m）から低位段丘上位面（標高30～40m）に位置することから、基本的な堆積状況としては、普天間飛行場に類似するものと思われる。よって、基本層序についてもこれまでに報告された普天間飛行場内の調査成果を踏襲し、下記のように設定した。ちなみに、台地部における包含層はⅡ層にまとめており、各調査箇所の堆積状況から大きく3層に分類している。また、平成27年度に実施した新城下原第二遺跡は、低地部に所在しており、台地部とは堆積の状況が異なっている。そこで低地部についてはⅡ層についてのみ上記層序とは別に基本層序を設定した。各層序の設定については、試掘調査時に堆積状況の分析を委託したパリノ・サーヴェイ㈱の分析結果を参考にした。

I層:現在の表土および宅地造成など土地改変に伴う堆積土。整地土や盛土、攪乱土から構成され、石灰岩の破碎礫、コンクリート片・アスファルト片・針金・ビニール・ガラス片などが含まれる。現地表面をI a層とし、その下位に認められた基地接収後の造成に伴う整地土をI b1～I c1層、盛土をI d1～I d2層、さらに、下位のI e1～I e2層を造成開始の攪乱土として細分できる。

Ⅱ層（台地部）:遺物包含層及び基地接収以前の旧表土や旧耕作土。炭化物や微細な焼土片などが多く含まれる。土層のしまりが悪く孔隙が多い。島尻マージや島尻層群の泥岩が取り込まれている箇

所もあり、これは耕作の際、土壌改良のため混ぜられた可能性がある。一方、Ⅱ層の堆積が厚いところでは、層内において上下の様相に明瞭な違いが認められる。これらは、堆積に際して時代差または時間差を示すものと思われる。上層はⅡ a、下層はⅡ b、Ⅱ cに細分でき、更にⅡ a層は4枚に細分が可能である。Ⅱ a1～Ⅱ a2層は、その殆どが基地接收後の宅地造成に伴い削平を受ける。また、Ⅱ a3～Ⅱ a4層からはピット等の遺構が確認されている。下層のⅡ b～Ⅱ c層は比較的泥質で、マンガンや有機物等による色調の違いが見られる。

Ⅱ a1～a2層：砂質がやや強く、炭化物や焼土粒が比較的多く混じる。締りやや弱く、細かい礫等が混じる。灰黄褐色～褐色を呈する。

Ⅱ a3～a4層：やや粘土質を呈するシルト層。炭化物や焼土片が混じる。部分的に塊状のマーヅを含む。土色は暗褐色～にぶい黄褐色を呈し、上層より黒味が強い。この層（下面）よりグスク時代相当のピットや土坑などの遺構が多く確認される。市報告（『基地内埋蔵文化財調査報告書』2013年、以下註1）のⅡ層ユニット③④に相当する。

Ⅱ b～c層：にぶい黄褐色を呈する粘質シルト層。上層よりやや明るい。しまりはやや弱く、粘質が強くなる。炭化物や焼土粒を含む。市報告（註1）のⅡ層ユニット⑤に相当する。本エリアであまり見られないが、谷状の地形が想定される箇所を確認されている。

Ⅱ層（低地部）：低地部でのⅡ層は新城下原第二遺跡周辺でのみ確認されており、5枚に細分される。主に耕作土や湿地性の堆積と思われる層で、砂層またはシルト質粘土層である。堆積土中の砂や酸化鉄などの植物痕などから水田の可能性が想定される堆積を示している。調査範囲の西側部分が低湿地の堆積が厚く、東側へ薄い傾向がある。東側は段丘崖直下であり、この地域の基盤である鳥尻層群が浅いためと思われる。

Ⅱ a層：旧表土。黒褐色～暗オリーブ褐色を呈する。

Ⅱ b層：暗灰黄色～オリーブ褐色を呈する砂混じりの粘土質シルト。1cm以下の炭化物が混じり、基地接收直前の水田及び畑作と考えられる耕作土。

Ⅱ c層：砂層（間層）。黄褐色～にぶい黄褐色を呈するシルト質の砂層。ズケ19-H2-ネのみに存在する間層である。

Ⅱ d層：にぶい黄褐色～褐色を呈する砂混りの粘土質シルトである。植物の痕跡と思われる、点状・線状に酸化鉄が確認される。基質には砂が混じることとその構造から、水田の可能性はある。

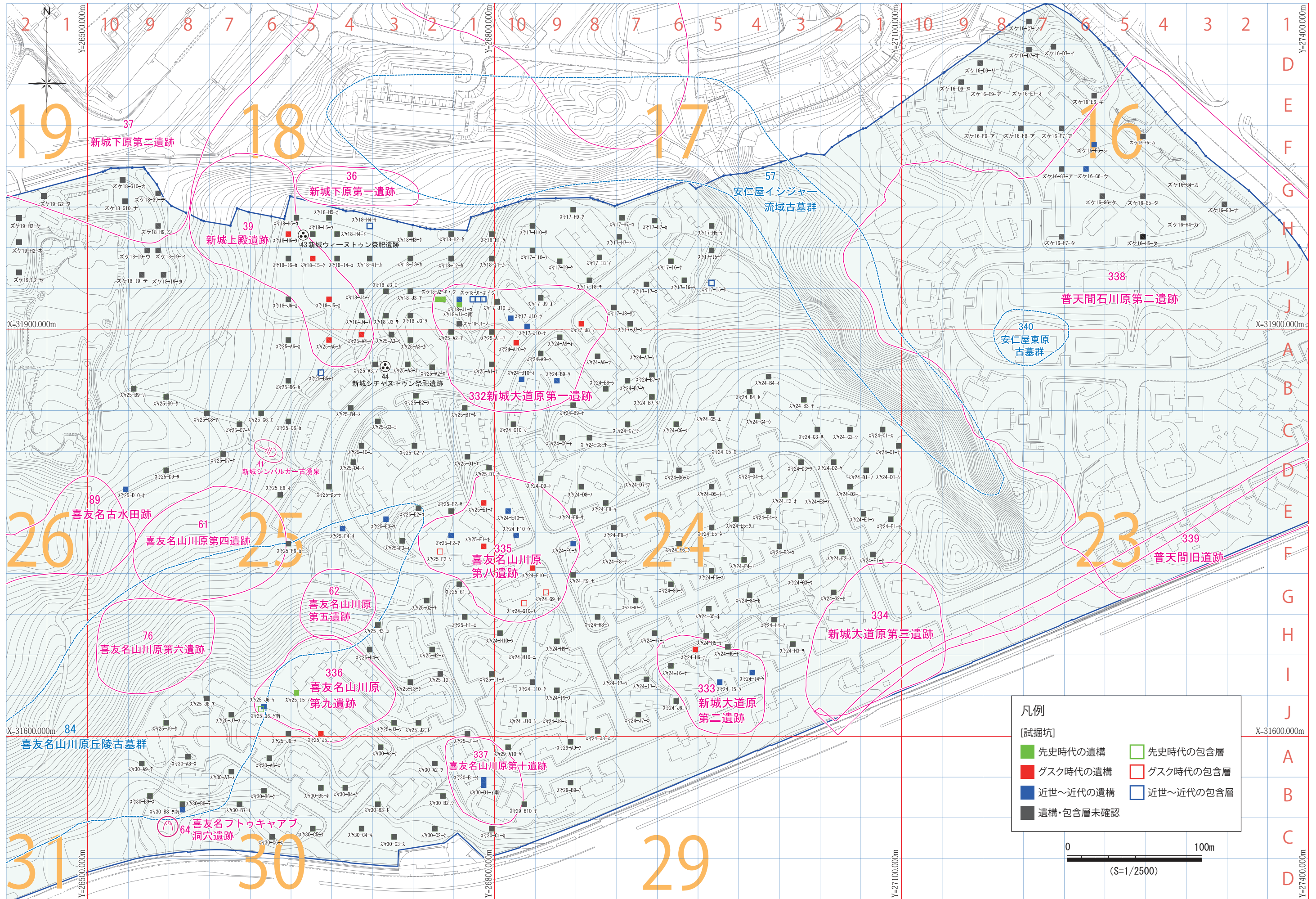
Ⅱ e層：暗灰色～暗オリーブ灰色を呈するシルト質粘土である。シルト質であるが砂は混在しない。水田の可能性は低く、これより下位が低湿地の堆積物（自然層）であると考えられる。

Ⅲ層：マーヅ層。褐色を呈し、塊状をなす砂質シルト。Ⅲ層は下位のⅣ層に比して泥質で、団粒構造の発達も良い。マンガン斑の濃集が見られることも特徴的である。

Ⅳ層：マーヅ層。明黄褐色～褐色を呈し、わずかに上方細粒化をなす塊状の砂質シルト。

Ⅴ層：マーヅ層。明黄褐色～黄褐色を呈する砂質シルト。Ⅴ層は下位のⅥ層に比べ、非常に泥質な粒度組成を示している。Ⅵ層との層界とは、大きな凹凸をなして接していることが多くⅧ層の石灰岩の起伏に由来すると考えられる。これに対し、上位のⅣ層とは、生物擾乱と推定される凹凸が存在しているものの比較的平坦な層界をもって接している。

Ⅵ層：マーヅ層。褐色～橙色を呈し、わずかに上方細粒化をなす塊状の砂質シルト。Ⅵ層は、基本



第Ⅲ-1図 平成26・27年度 試掘坑

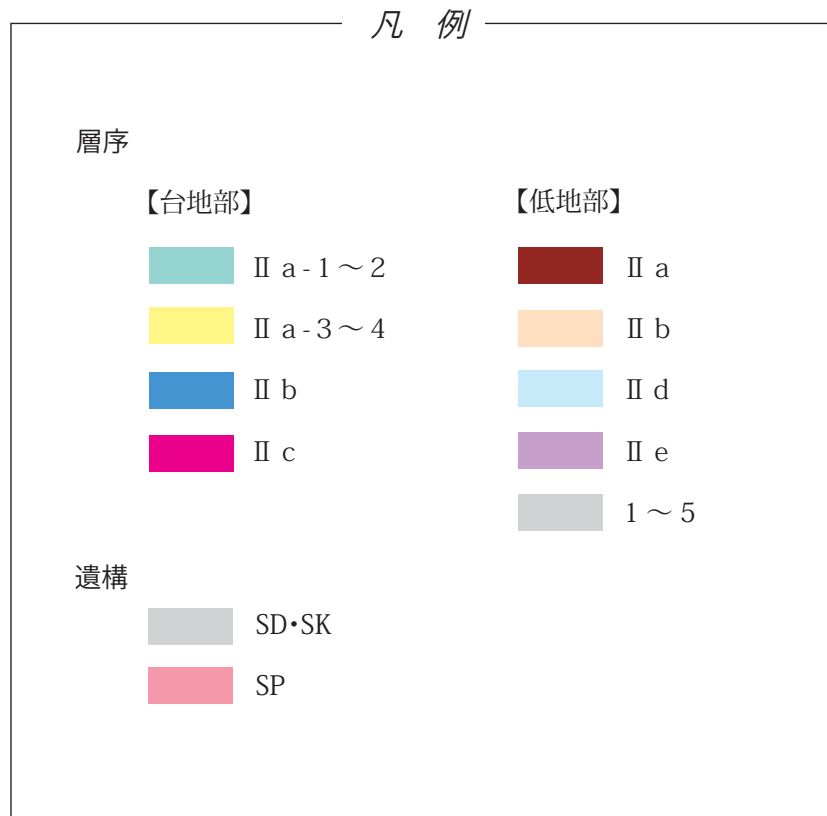
層序内において最も砂質な堆積層である。V・VI層は、下位に存在する基盤岩とこの直上に載るVII層によって層界は大きな起伏を持っている。

VII層：マージ層。暗褐色～明褐色を呈し、塊状をなす砂質粘土質シルト。VII層は、基盤岩の起伏に沿うように堆積しており、その堆積面は著しく起伏に富んでいる。

VIII層：にぶい黄色～淡黄色を呈する琉球層群を構成する石灰岩。

IX層：灰オリーブ色を呈する島尻層群を構成する泥岩の風化層。泥岩風化部は、基盤岩に比べしまりが著しく悪い。また、不規則な塊状や小角片に割れる泥岩特有の風化構造が顕著に観察される。

X層：灰色を呈する島尻層群を構成する塊状泥岩。



【参考】

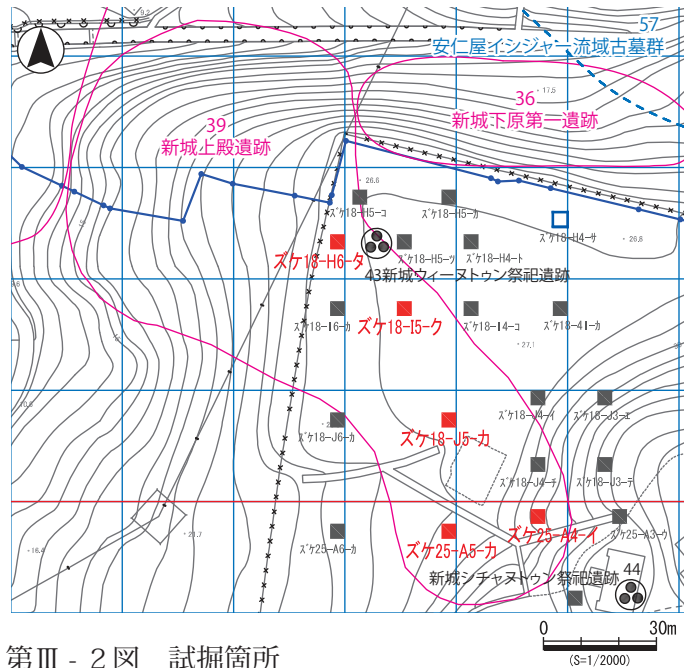
註1 『基地内埋蔵文化財調査報告書6』宜野湾市教育委員会 2013年

第2節 新城上殿遺跡

当遺跡は、宜野湾市の偉人として知られる佐喜真興英氏の著書である『シマの話』の中で「新城の島は何百年か前、西北方十数町余の所から移転したものと信ぜられて居て、現に其処地には御岳、屋敷跡などが残って居る」（註2）と記述されている場所である。現在でも屋敷跡や石切場跡等が保存良く残されており、屋敷跡の南側にはシンバルガー（アラグスクガー）と呼ばれる湧泉が所在する。ちなみに戦前の新城集落は現在の普天間飛行場と市立普天間第二小学校に跨る範囲にあり、「新城古集落遺跡」として周知されている。

平成26年度に実施した試掘調査によって、これまで想定していた遺跡の範囲が南東側に

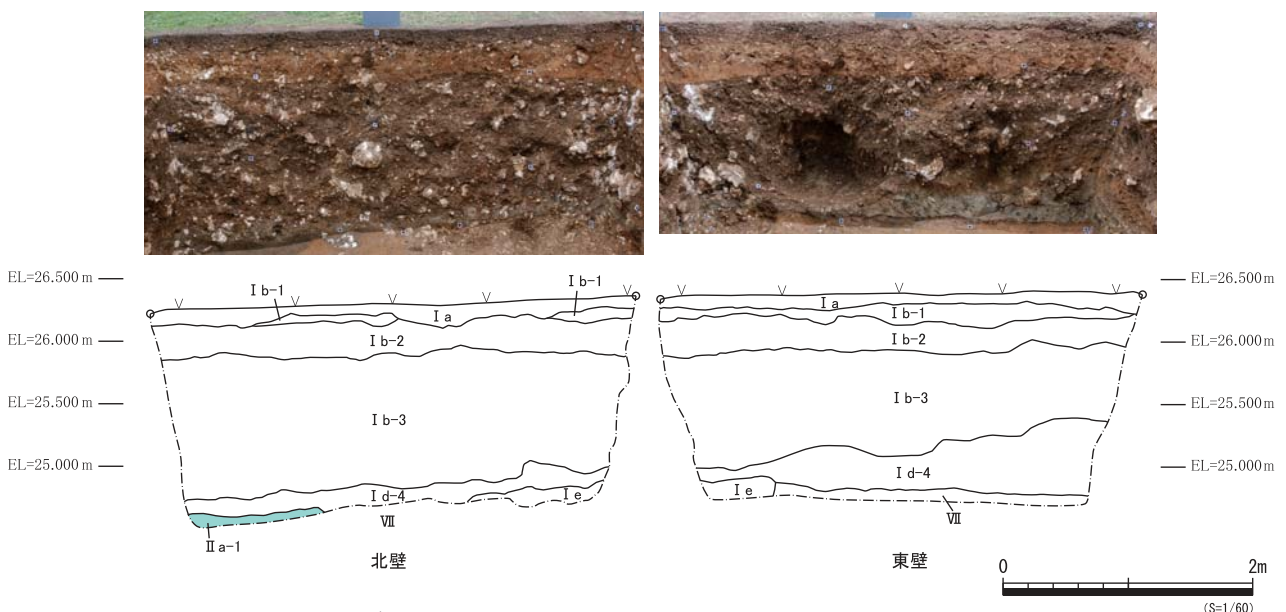
広がることが判明した。この結果を踏まえて、新たに包蔵地の範囲変更届を県に提出して包蔵地の範囲変更を行った。試掘調査では主に柱穴や土坑、溝状遺構などが検出された。遺物は、青磁、白磁、染付、褐釉陶器などグスク時代を代表する遺物が出土しており、検出された遺構もこれらに相当する時期と想定される。以下、遺構が確認された試掘坑について報告する。



第Ⅲ - 2 図 試掘箇所

(1) ズケ18-H6-タ

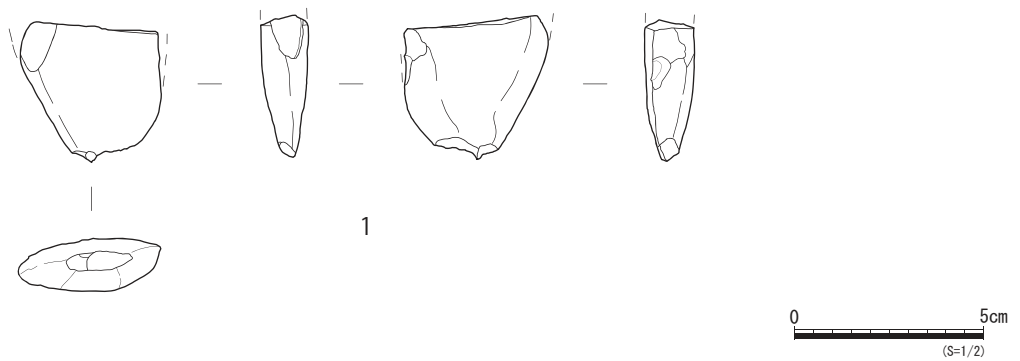
新城に位置する。米軍の造成により地山面まで削平されている。掘削深度は現地表面から約1.5mを測る。地山はマーヅ層で、地山面より複雑に切りあったピットと土坑を検出した。遺物は、グスク土器、青磁、褐釉陶器、本土産磁器などが出土した。これらの遺構は、グスク時代に相当するものと推測される。包含層は残存しておらず、マーヅ層も上部は平坦に削平されている。



第Ⅲ - 3 図 試掘坑断面図 ズケ18-H6-タ（北壁・東壁）



第Ⅲ - 4 図 試掘坑平面断面図 スケ 18- H 6- タ (南壁・平面図)



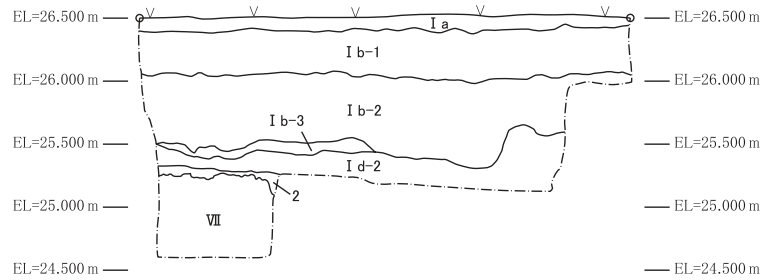
第Ⅲ - 5 図 石器：石斧（1）



図版Ⅲ - 1 石器：石斧（1）

(2) ズケ 18- I 5- ク

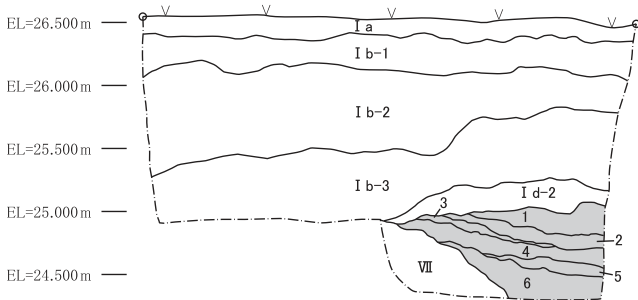
新城下原に位置する。米軍造成により、マージ層まで削平。包含層は残存していないが、一部で土坑、ピットを検出した。土坑及びピットの覆土は、暗褐色から黒褐色を呈し、砂質シルトを主体とする。全体的に炭化物や焼土、マージ粒をまばらに含む。土坑は1～6層に細分でき、1～3層までは、上部整地時に混入した堆積土と推定される。2層からは土器や石器等が出土している。ピットは上記土坑に切られているため、土坑が掘りこまれる前に形成されたものと思われる。これらの遺構は地山であるマージ層を掘り込んで造られている。



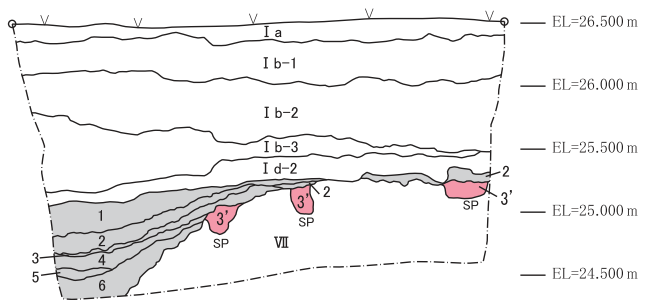
北壁



第Ⅲ - 6 図 試掘坑断面図 ズケ 18- I 5- ク (北壁)



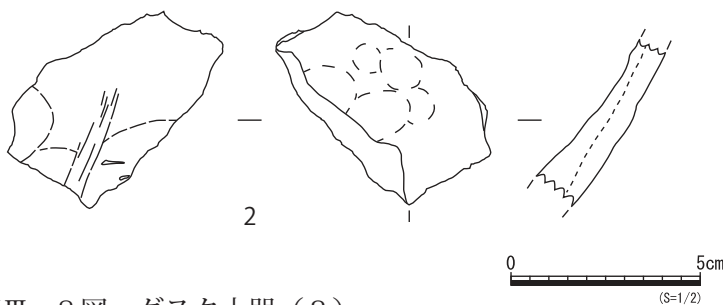
南壁



西壁



第Ⅲ - 7 図 試掘坑断面図 ズケ 18- I 5- ク (南壁・西壁)



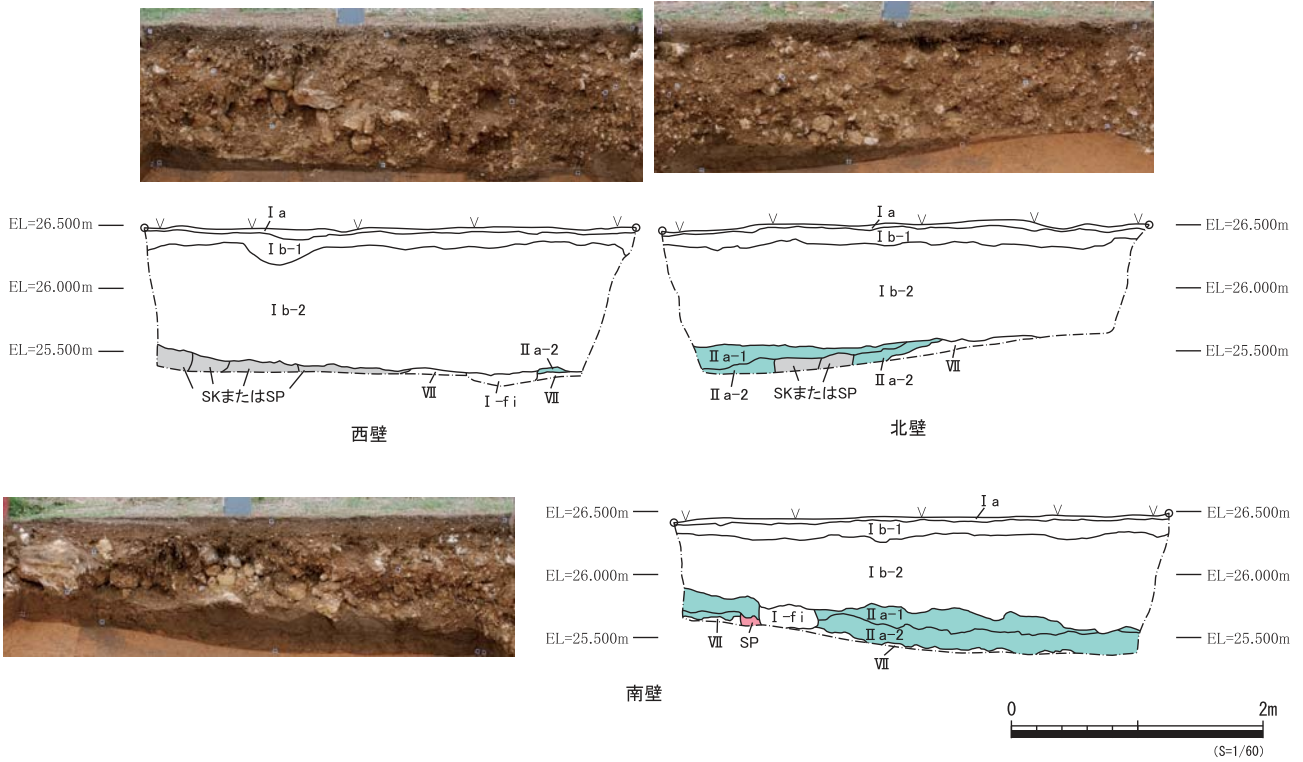
第Ⅲ - 8 図 グスク土器 (2)



図版Ⅲ - 2 グスク土器 (2)

(3) ズケ 18- J 5- カ

新城下原に位置する。現地表面から約 80cm まで米軍の造成による攪乱土が堆積。下層に一部近世～近代相当の耕作土が残存している (II a1、II a2)。下層はマージ層 (VII層?) となり、40 基を超える複雑に切りあったピットと溝状遺構を検出した。これら遺構覆土は、上層の耕作土とは土色、土質とも異なっており、遺構覆土は、黒褐色の砂質シルトで炭化物、焼土を多く含んでいる。遺構覆土等からの遺物の出土はないが、I 層中より褐釉陶器、アカムヌー等の遺物が出土している。



第三 - 9 図 試掘坑断面図 ズケ 18- J 5- カ (西壁・北壁・南壁)

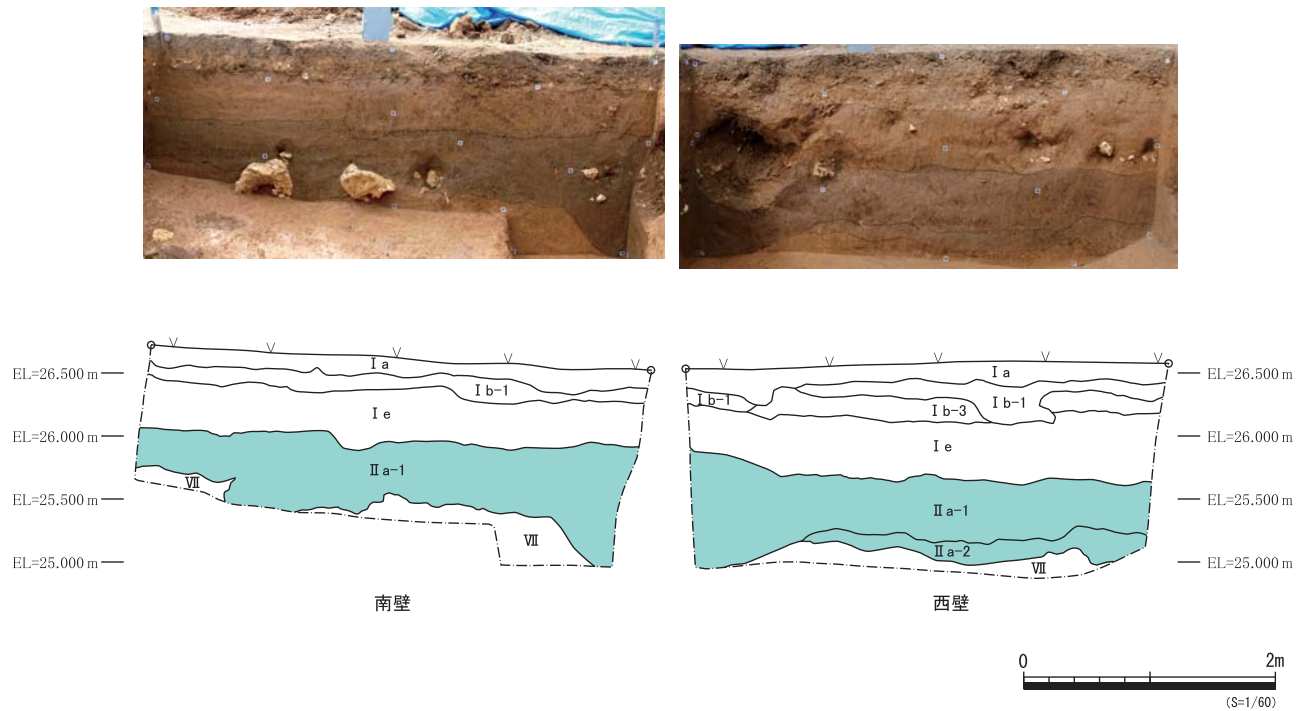


第三 - 10 図 試掘坑平面図 ズケ 18- J 5- カ

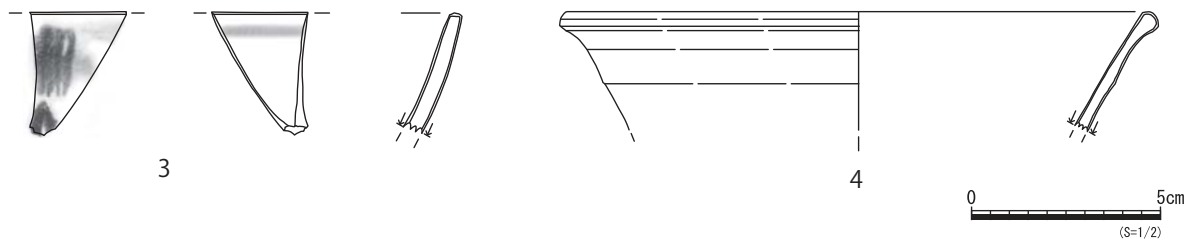
(4) ズケ 25- A 5- カ

新城下原に位置する。現地表面から約 60cm まで米軍の造成による攪乱土が堆積。下層に近世～近代相当の耕作土が比較的良好な状態で残存している。にぶい黄褐色砂質シルトで炭化物、焼土がまばらに混じる。基地接收以前の耕作土で、米軍造成（整地）の影響で上部が削平されている。

南壁側に II a - 1 が充填される溝状遺構？を確認。マーヅ層を掘り込んで形成。近代相当の耕作に伴う溝と想定される。遺物は土器、陶磁器等が出土している。



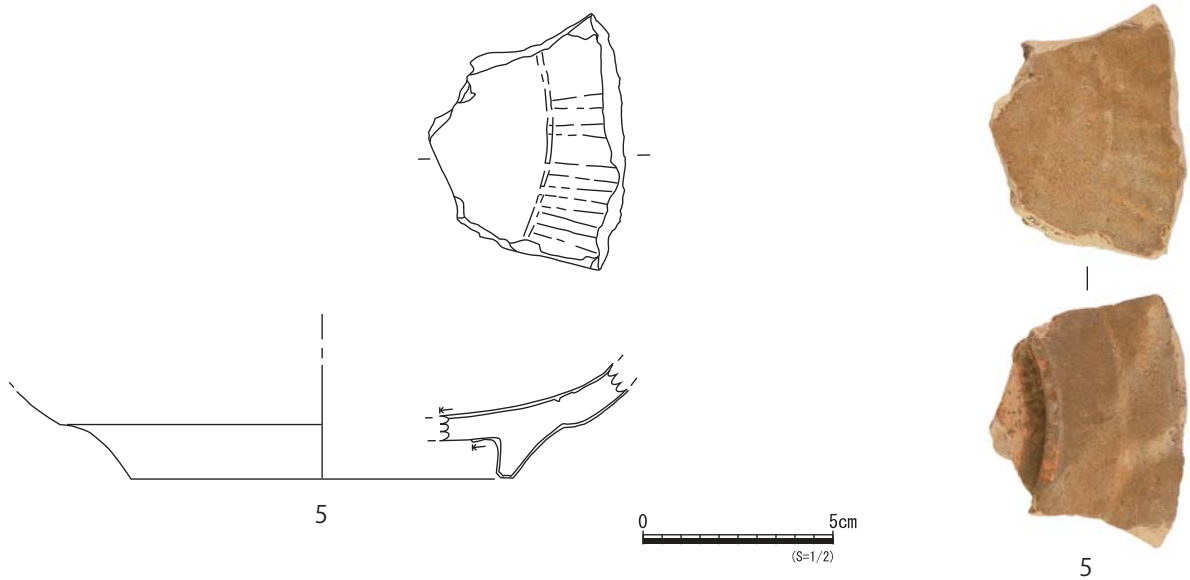
第Ⅲ -11 図 試掘坑断面図 ズケ 25- A 5- カ (南壁・西壁)



第Ⅲ -12 図 青花：碗（3）、白磁：碗（4）



図版Ⅲ - 3 青花：碗（3）、白磁：碗（4）

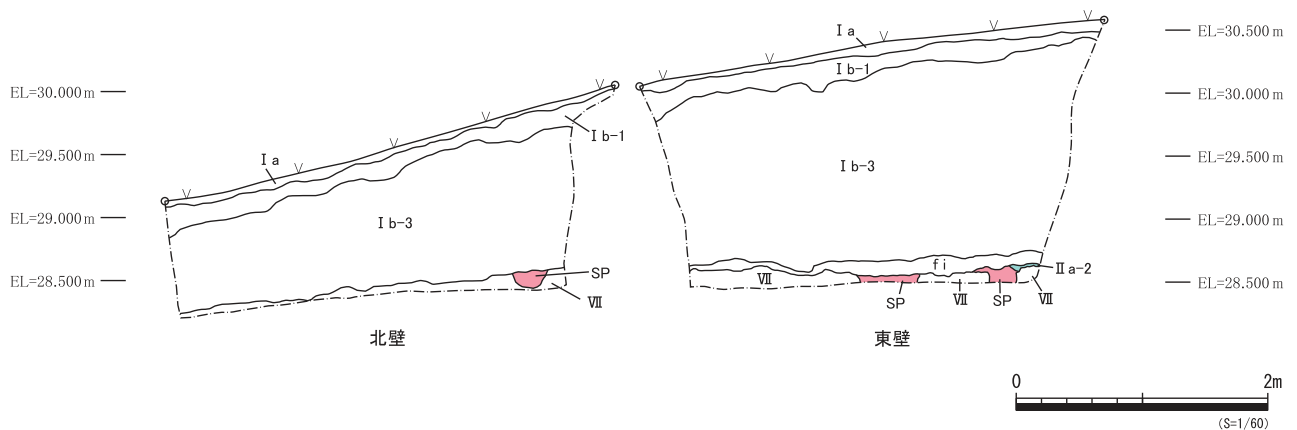


第Ⅲ -13 図 青磁：盤（5）

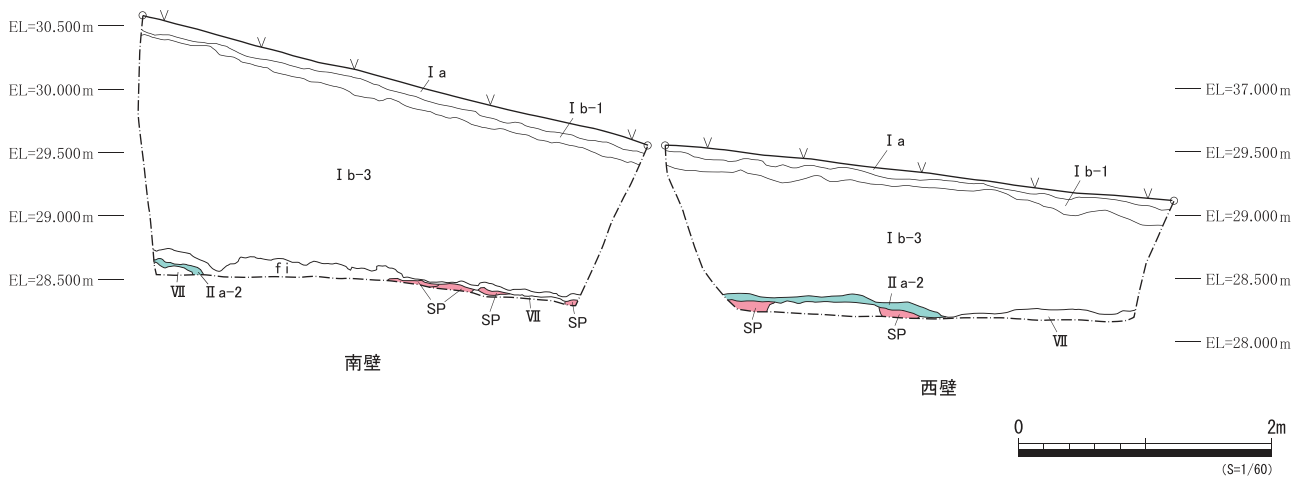
図版Ⅲ - 4 青磁：盤（5）

(5) ズケ 25- A 4- イ

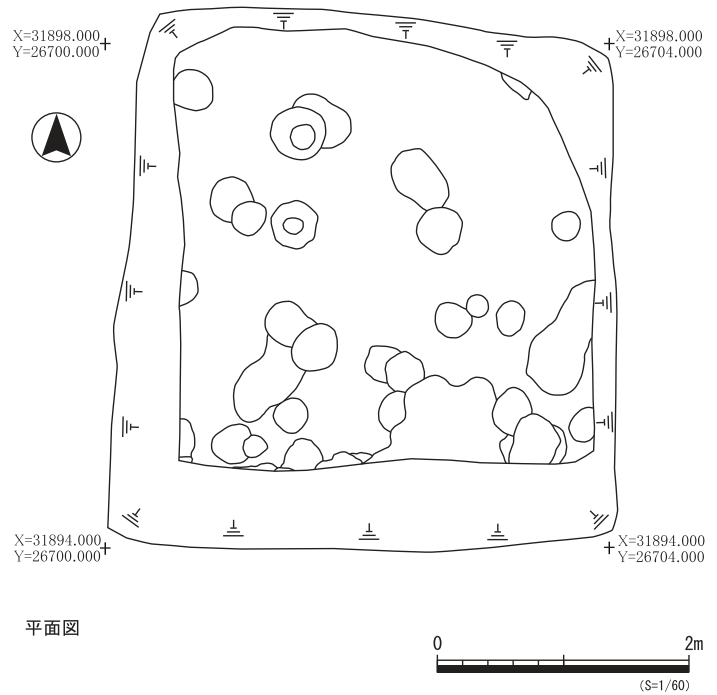
新城下原に位置する。現地表面から約 100cm まで米軍の造成による攪乱土が堆積。一部マーヅ層を削平している。マーヅ層上面で複数の遺構を検出した。遺物は I 層から沖縄産施釉陶器が出土している。包含層等は米軍に削平され残存していないが、遺構の検出状況や覆土はグスク時代の相当するものと思われる。



第Ⅲ -14 図 試掘坑断面図 ズケ 25- A 4- イ（北壁・東壁）



第Ⅲ-15 図 試掘坑断面図 ズケ 25- A 4- イ (南壁・西壁)



平面図

第Ⅲ-16 図 試掘坑平面図 ズケ 25- A 4- イ

第3節 新城大道原第一遺跡

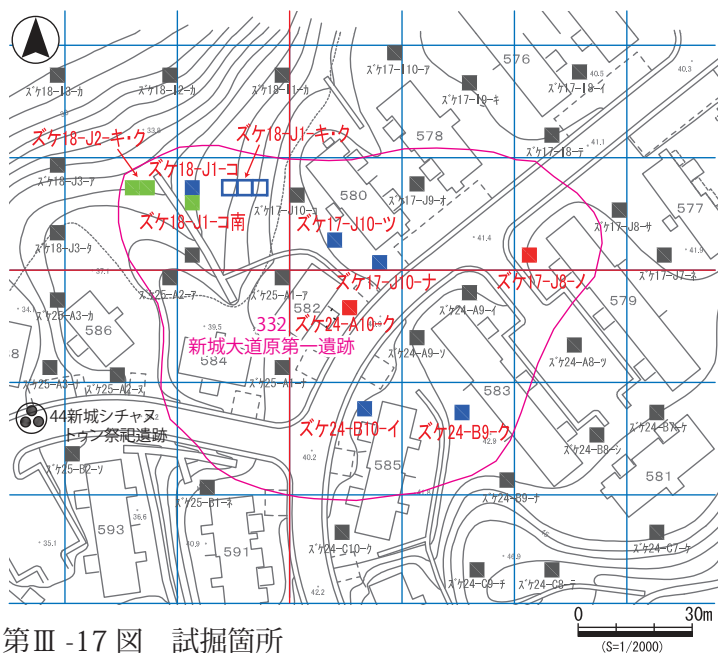
大字新城小字大道原に所在する。平成27年度に実施した試掘調査によって新規で発見された遺跡である。平成26年度に時期不明の遺構（ピット）を検出したが、詳細が不明であったため、平成27年度に南側に隣接して4m四方の試掘坑を設定し、さらに東西方向についての広がり把握するために試掘坑を連結してトレンチ状に設定した。その結果、先史時代に相当する溝やグスク時代相当の土坑等を検出した。また、南側の平坦地ではグスクから近世、近代相当の遺構も確認された。

遺跡は道路を挟んで南側まで広がると想定されたが、試掘の結果、米住宅建設の際

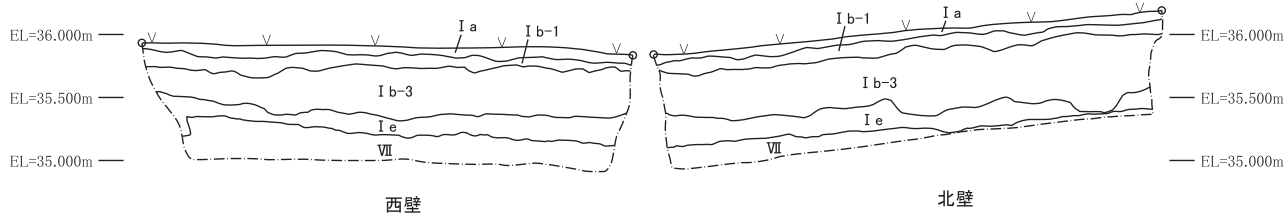
に南側の旧地形は削平されていることが判明した。一帯は戦前の航空写真では畑地として利用されていたことが分かっているが、戦前の耕作土が残存するのは遺跡の北西側のみであり、さらに古い時代の遺構が良好に残存していると期待される。遺物は、青磁、白磁、染付、褐釉陶器などグスク時代相当の遺物が出土しており、検出された遺構もこれらに相当する時期と想定される。

(1) ズケ 18- J 1- コ

平成26年度に実施した調査箇所。米軍の造成により地山面まで削平。掘削深度は現地表面から約0.8mでマージ層を確認した。マージ層上面においてピットを検出している。遺物は出土しておらず、時期は不明であった。包含層は残存しておらず、マージ層も上部は平坦に削平されている。



第Ⅲ-17 図 試掘箇所



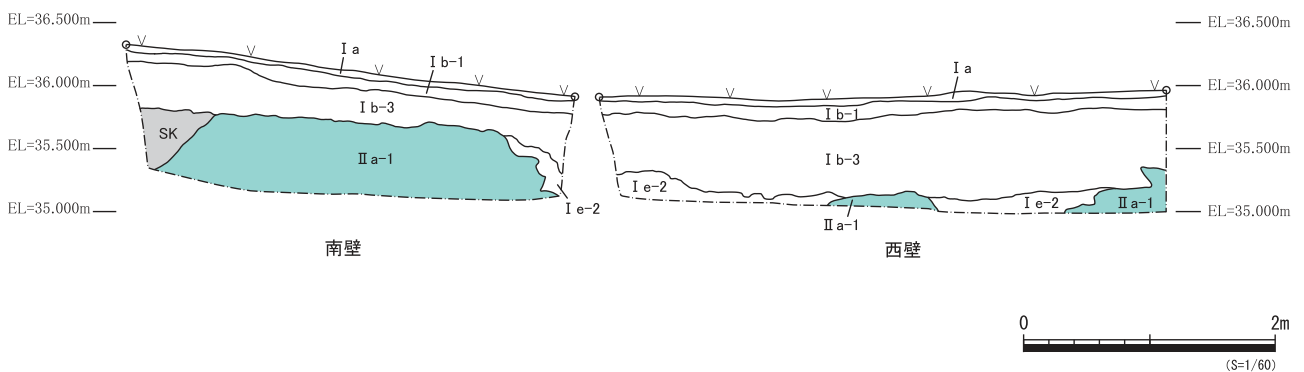
第Ⅲ-18 図 試掘坑断面図 ズケ 18- J 1- コ (西壁・北壁)



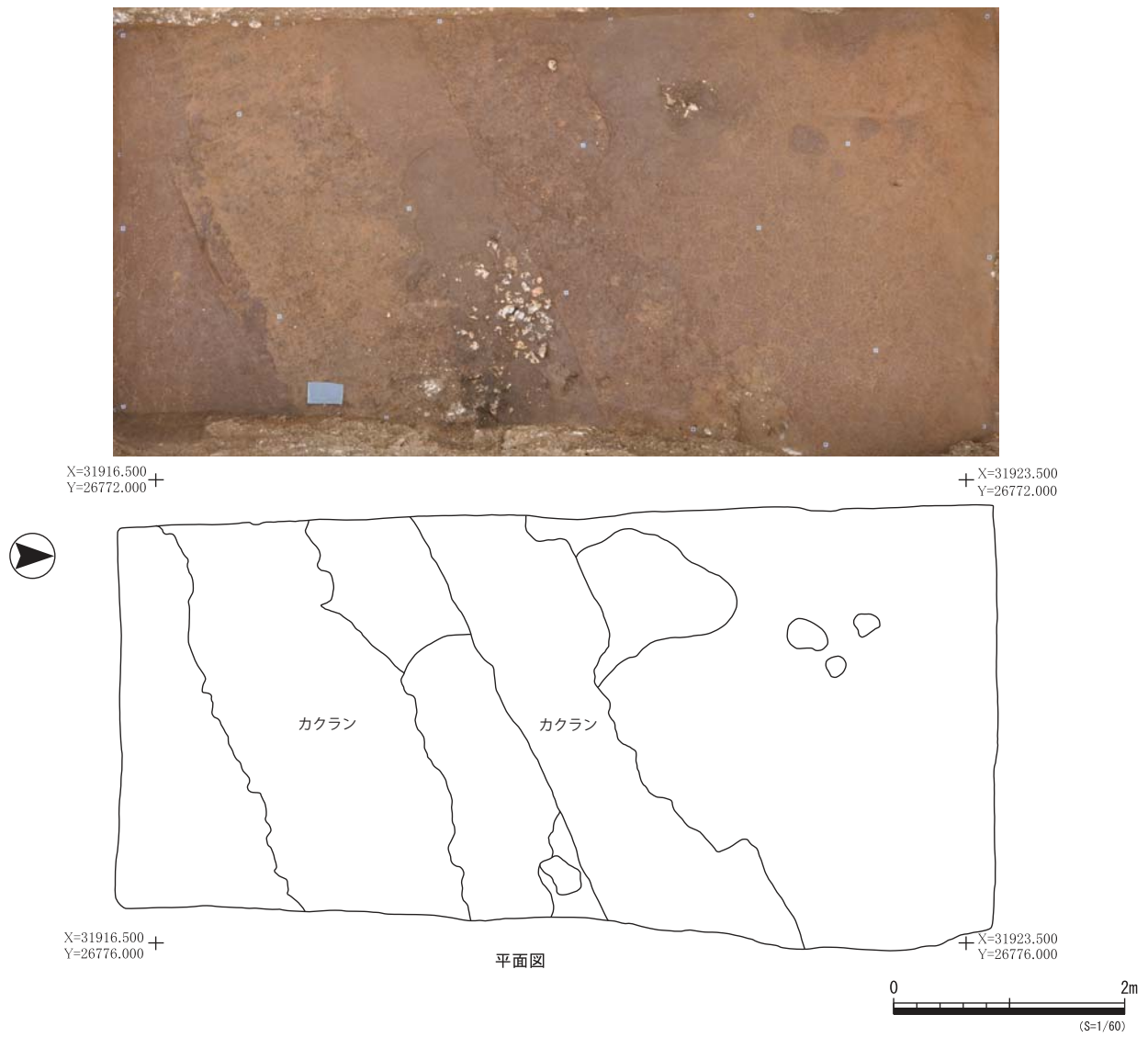
第Ⅲ -19 図 試掘坑平面図 ズケ 18- J 1 - コ

(2) ズケ 18- J 1 - コ南

米軍造成により、現地表面から約 0.5 m まで造成土が堆積。比較的造成の影響が少なく、Ⅱ層が良好に残存している。南側の一部で土坑を検出した。平面では、大きく攪乱の溝が走るが一部で土器片を含む包含層が残存している。平成 26 年度に北側を試掘しているが、包含層はそこまで広がらないため、遺跡の北限と推測される。



第Ⅲ -20 図 試掘坑断面図 ズケ 18- J 1 - コ南 (南壁・西壁)

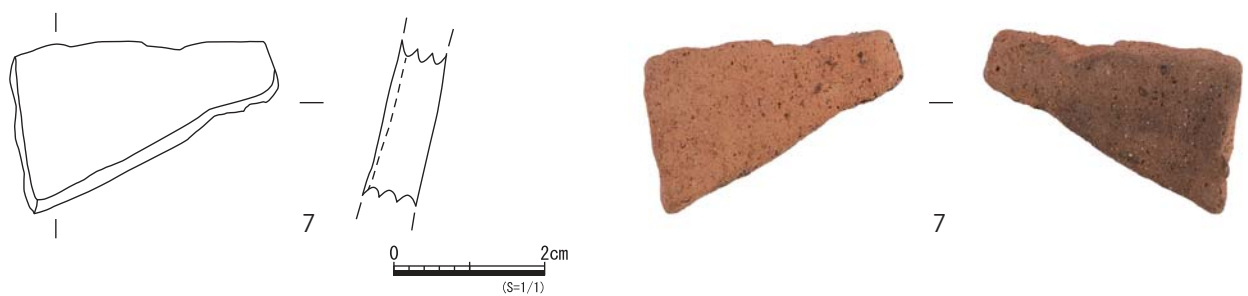


第Ⅲ -21 図 試掘坑平面図 ズケ 18- J 1- コ南



第Ⅲ -22 図 土器 (6)

図版Ⅲ - 5 土器 (6)

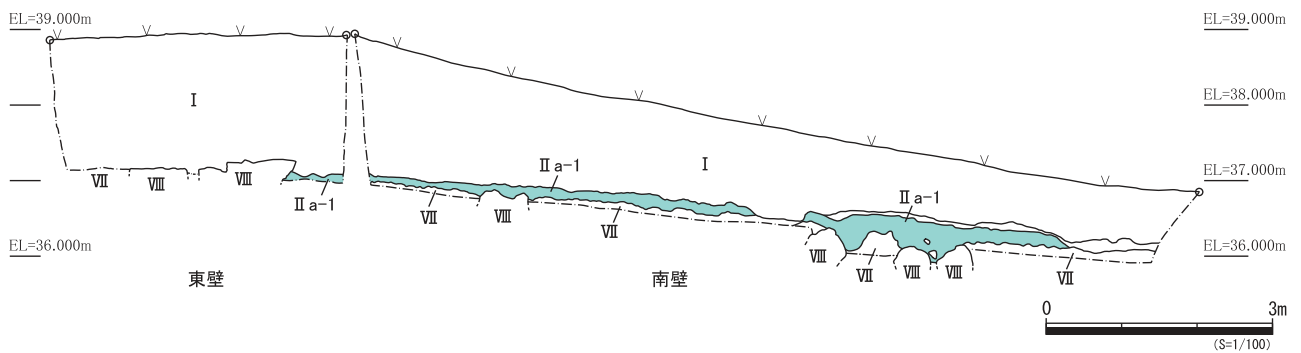


第Ⅲ -23 図 グスク土器 (7) ズケ 17- J 9- オ

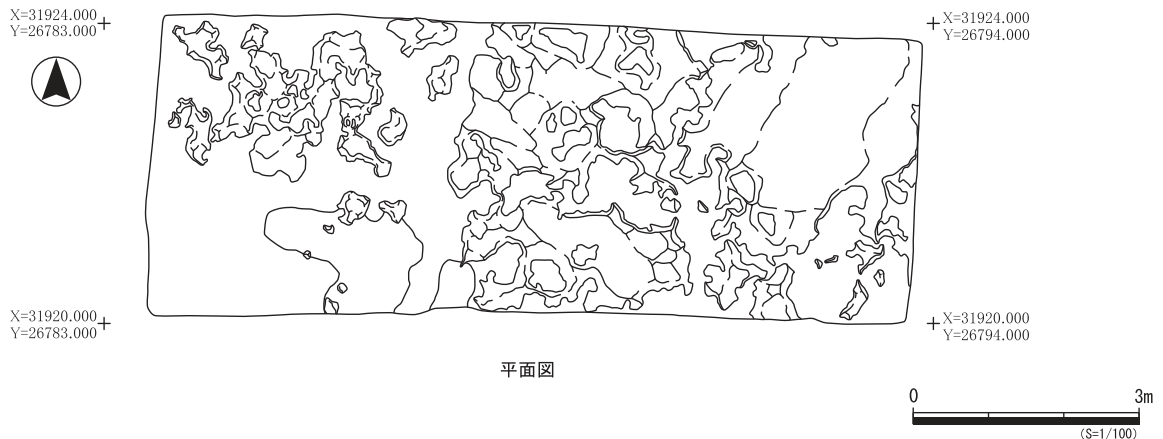
図版Ⅲ - 6 グスク土器 (7) ズケ 17- J 9- オ

(3) ズケ 18- J 1-キ・ク

試掘坑 J1- コで確認された包含層の広がり方を把握するために東側に 3 箇所分 (4m×12m) を連結して設定した試掘坑。一部近世～近代相当の耕作土と思われる堆積が確認されたが、グスク時代以前の遺構は検出されなかった。地形的に高くなっており、一部で岩盤が確認された。堆積のほとんどが米軍造成による盛土であった。



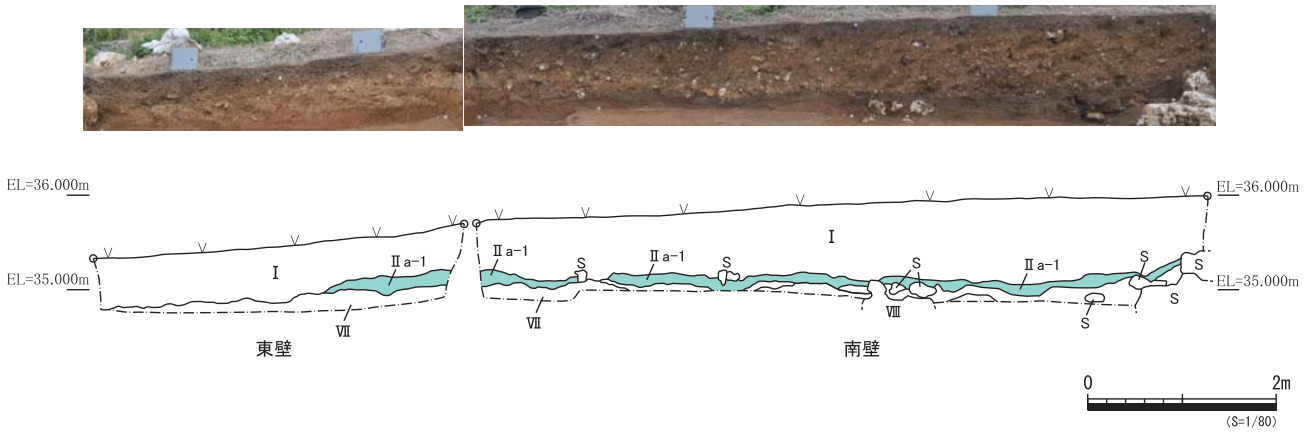
第Ⅲ -24 図 試掘坑断面図 ズケ 18- J 1-キ・ク (東壁・南壁)



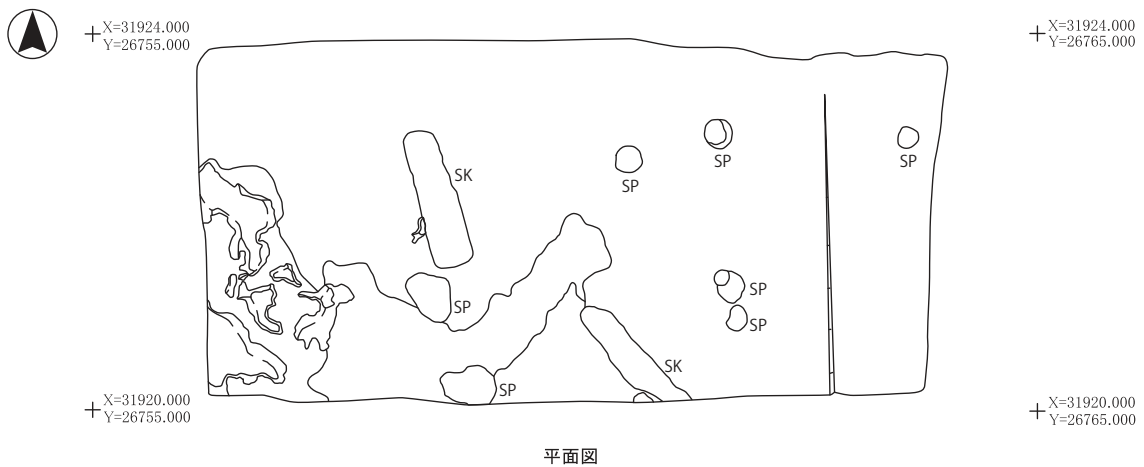
第Ⅲ -25 図 試掘坑平面図 ズケ 18- J 1-キ・ク

(4) ズケ 18- J 2- キ・ク

試掘坑 J1- コで確認された包含層の西側への広がりを探るために設定した試掘坑。2 箇所分 (4m × 8m) で設定。複数のピットと土器が確認された。検出されたピットを一部半裁したところ、柱穴と判断された。覆土中より土器が出土している。

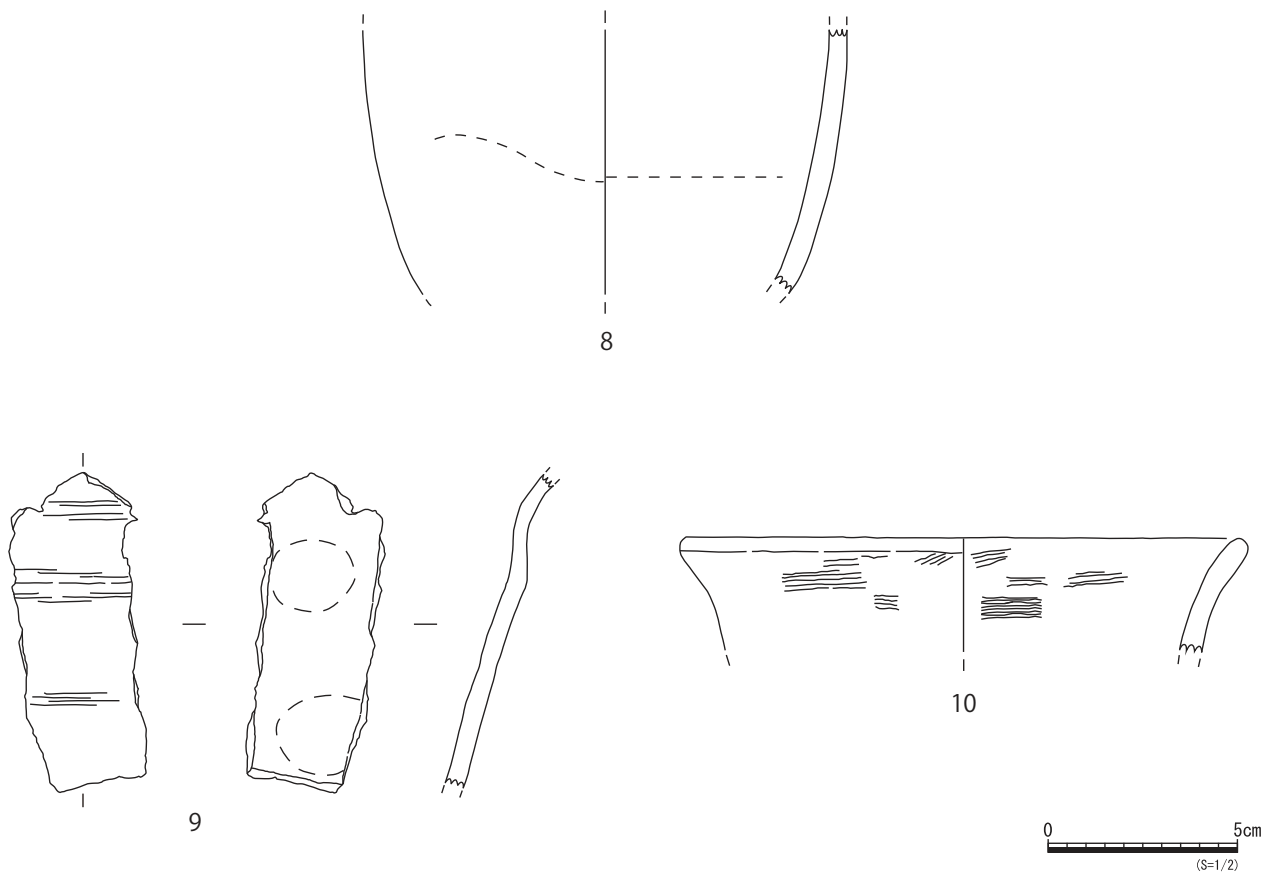


第Ⅲ -26 図 試掘坑断面図 ズケ 18- J 2- キ・ク (東壁・南壁)

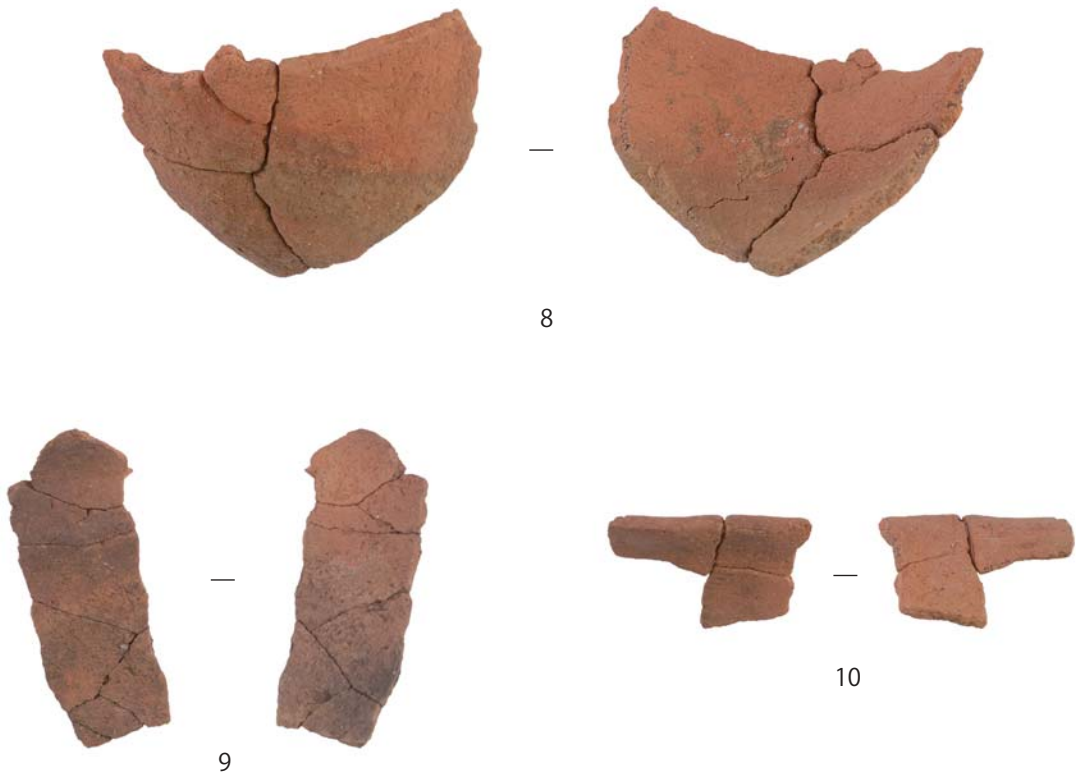


平面図

第Ⅲ -27 図 試掘坑平面図 ズケ 18- J 2- キ・ク



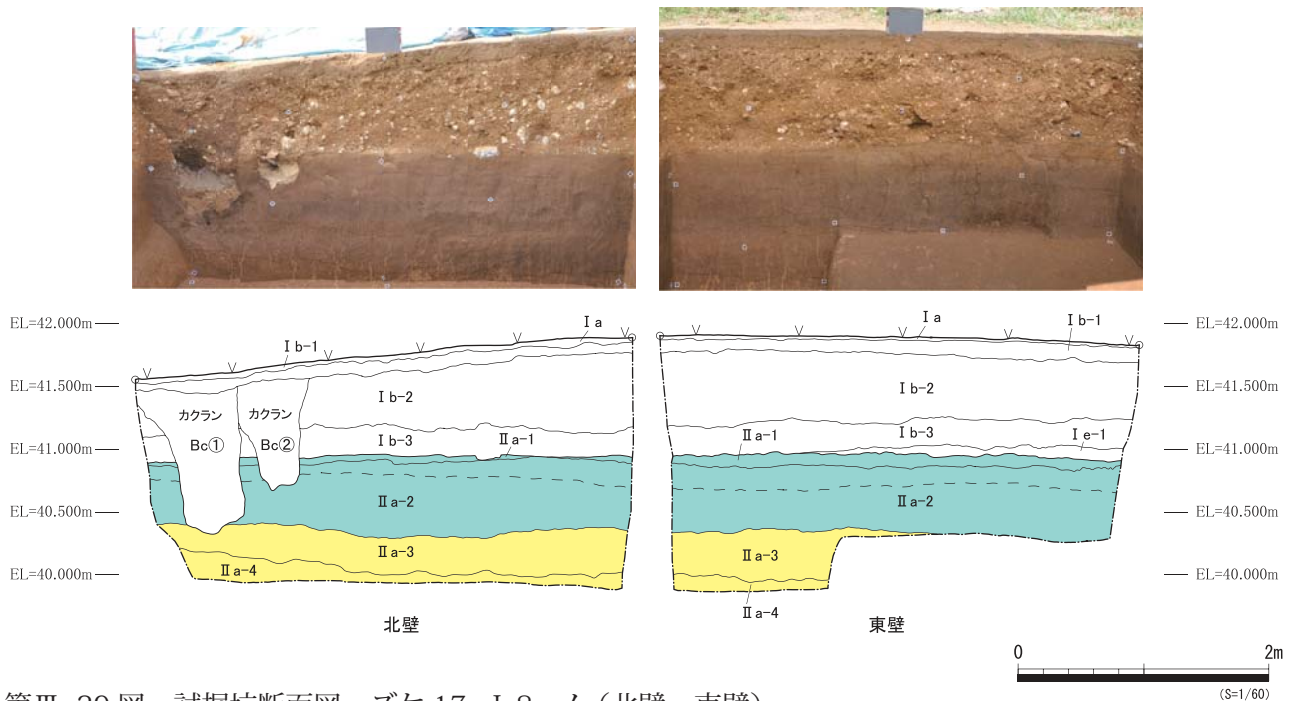
第Ⅲ-28 図 土器（8）、縄文土器（9・10）



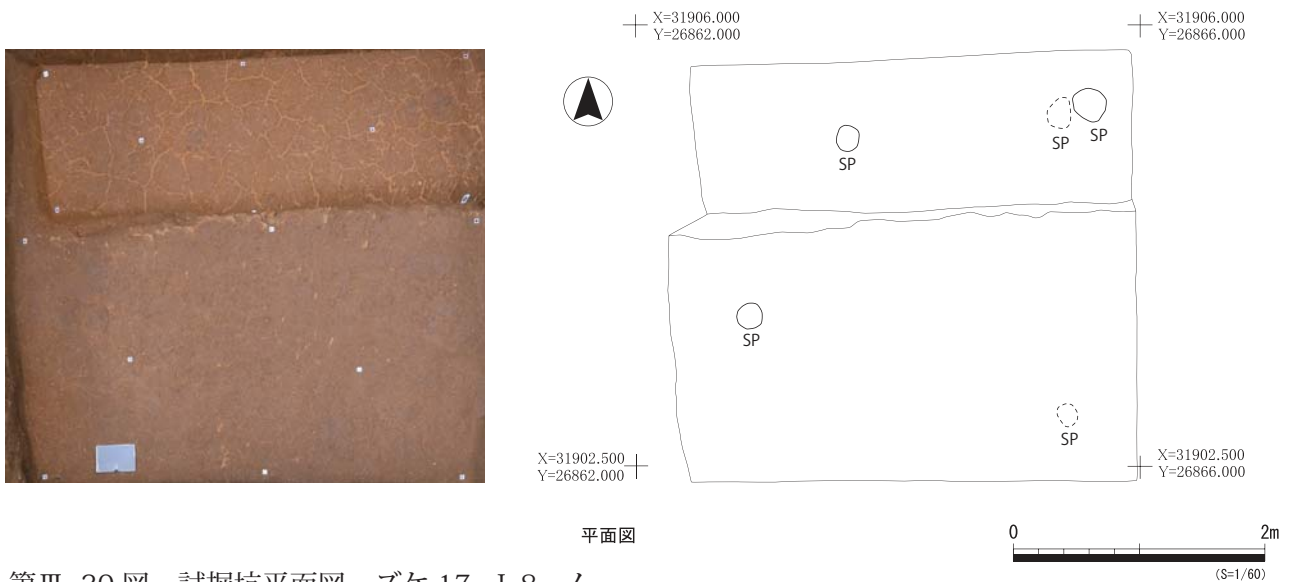
図版Ⅲ-7 土器（8）、縄文土器（9・10）

(5) ズケ 17- J 8- ノ

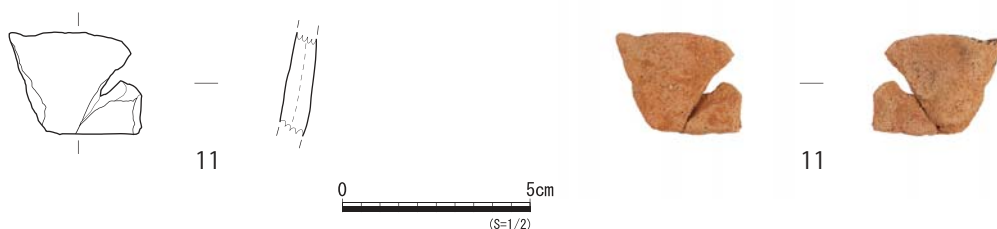
米軍造成土が現地表面から約 1.0m 堆積。掘削深度約 2.0m。Ⅱ層は a1 ～ a4 層まで堆積。Ⅱ a4 層上面でピットを検出。下層確認のため試掘坑北側を段掘し、Ⅱ a4 層面においてもピットを検出した。検出されたピットは計 5 基であり、直径は約 20cm で円形を呈している。これらのピットは断面で確認していないため、詳細は不明。表面観察よりグスク時代相当かと推測される。



第Ⅲ -29 図 試掘坑断面図 ズケ 17- J 8- ノ (北壁・東壁)



第Ⅲ -30 図 試掘坑平面図 ズケ 17- J 8- ノ

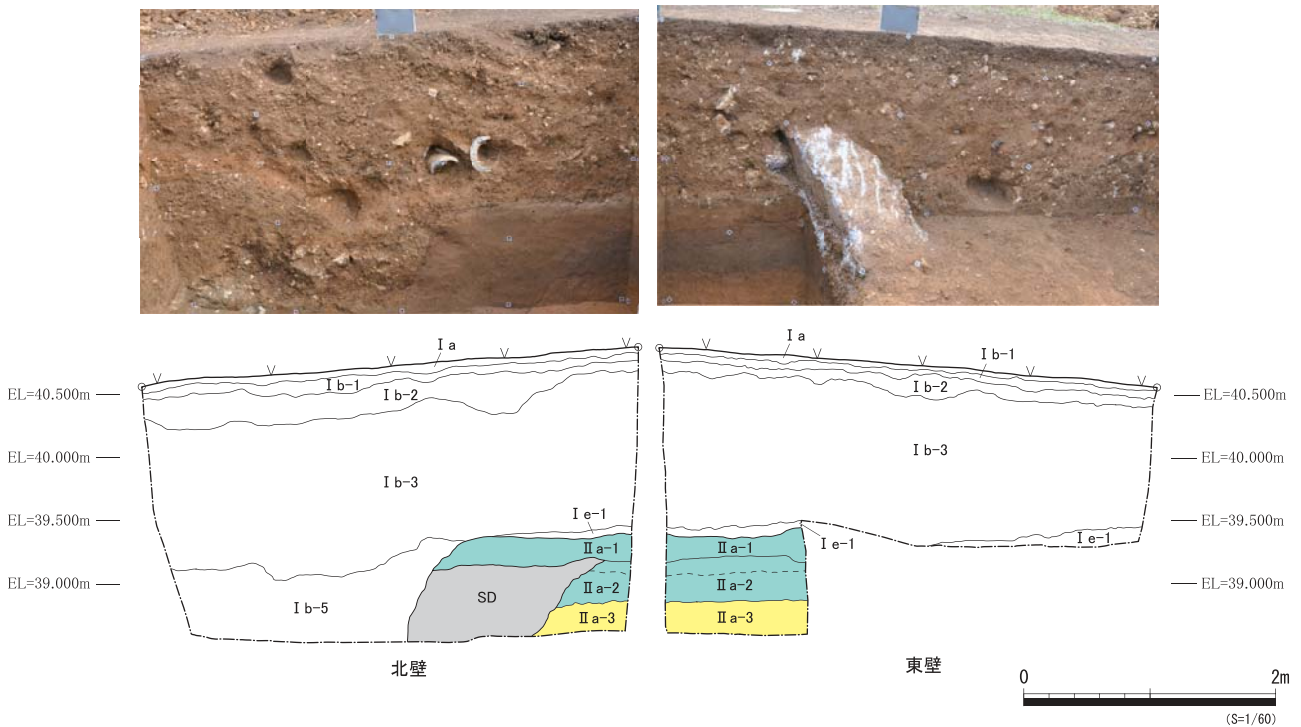


第Ⅲ -31 図 グスク土器? (11)

図版Ⅲ - 8 グスク土器? (11)

(6) ズケ 17- J 10- ツ

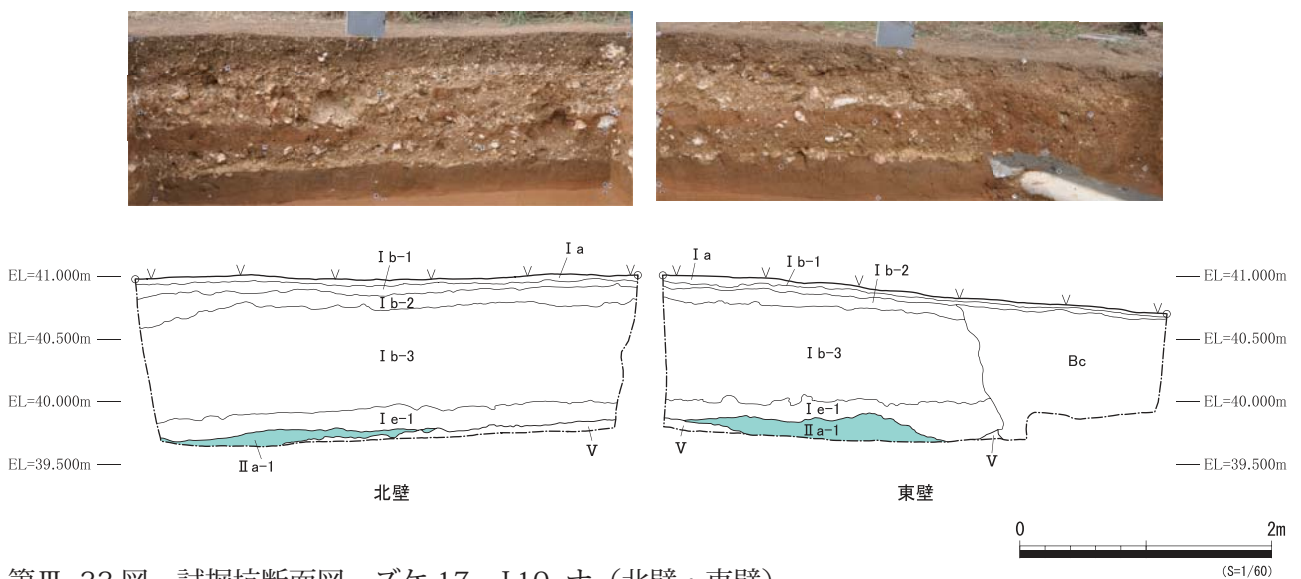
米軍により現地表面から約 1.5m まで造成土が堆積。また、部分的に埋設管設置に伴う攪乱も確認された。Ⅱ層は a1 ～ a3 層まで堆積。北壁においてⅡ a2 と a3 を切る溝状遺構を検出した。この溝は近世～近代相当の遺構と思われる。



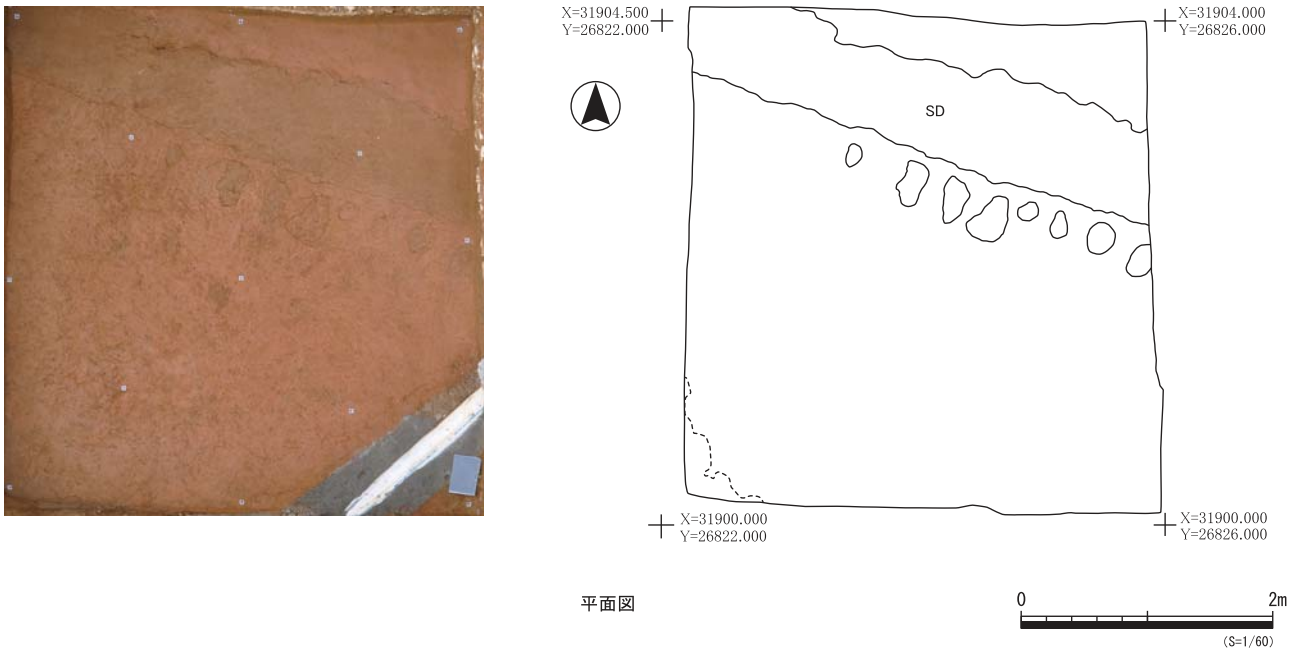
第Ⅲ -32 図 試掘坑断面図 ズケ 17- J10- ツ (北壁・東壁)

(7) ズケ 17- J 10- ナ

米軍造成により、現地表面から約 1.7 m まで造成土が堆積。下部は一部近代耕作の残りと思われるⅡ a -1 層が見られるが、造成土下はマージ層であり、マージ層も上部は平坦に削平されている。南側では配管を確認した。マージ層上面において溝状遺構とこれに並列するピットを検出した。これらの遺構は、近世～近代相当の耕作に伴う溝と思われる。



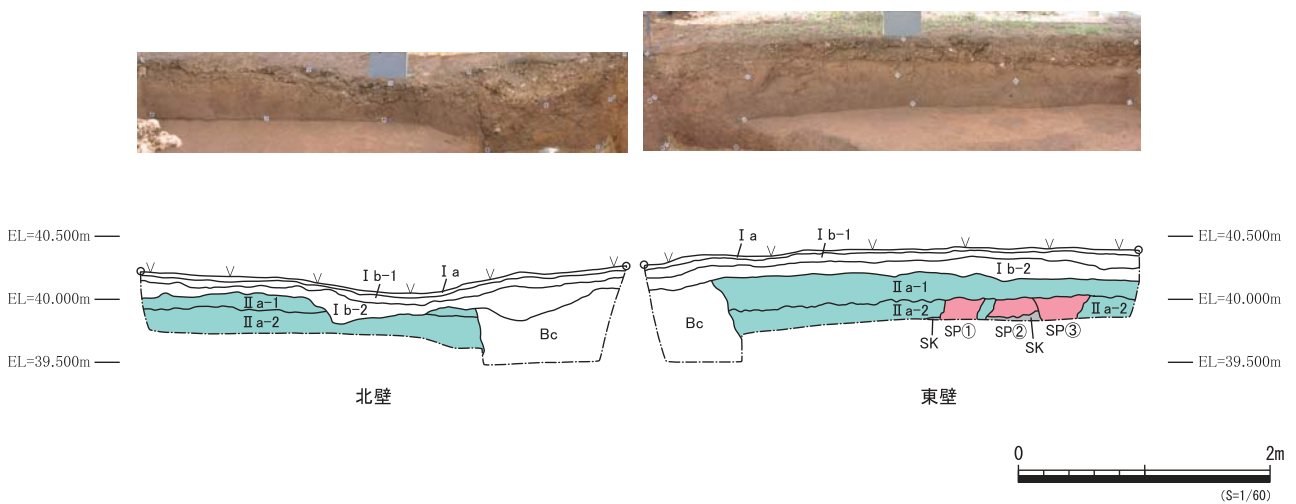
第Ⅲ -33 図 試掘坑断面図 ズケ 17- J10- ナ (北壁・東壁)



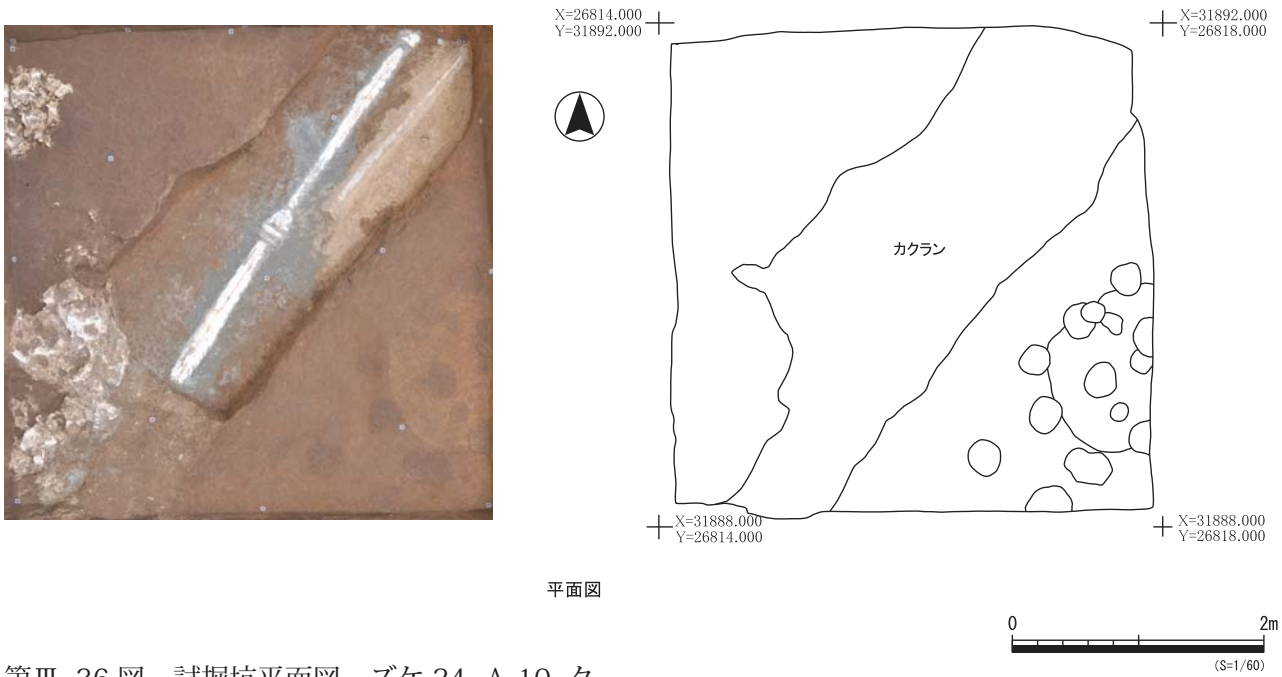
第Ⅲ -34 図 試掘坑平面図 ズケ 17- J 10- ナ

(8) ズケ 24- A 10- ク

米軍の造成土の堆積は浅がⅡ層上面は削平されている。また、調査区の中央は配管に伴う造成で攪乱されていた。調査区南側で現地表面から約 0.5 m より土坑とピットを検出した。ピットは規則的に配置されているように思われ、植栽痕の可能性が考えられる。一部東側で岩盤が露出しており、埋設管設置による攪乱が見られる。壁面において現地表面から 0.7m 程でマージ層が確認できた。



第Ⅲ -35 図 試掘坑断面図 ズケ 24- A 10- ク (北壁・東壁)

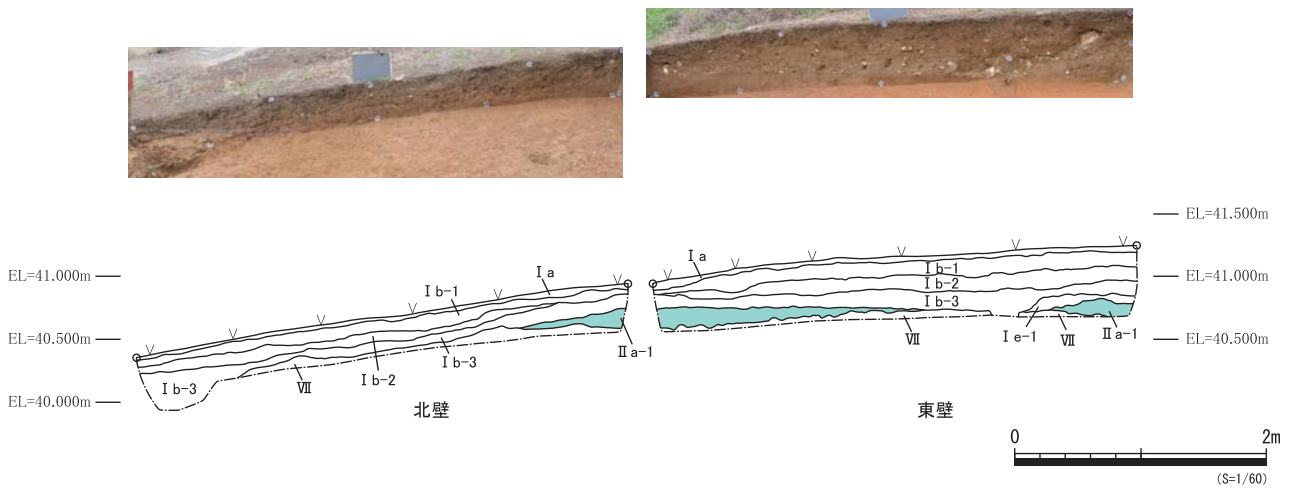


平面図

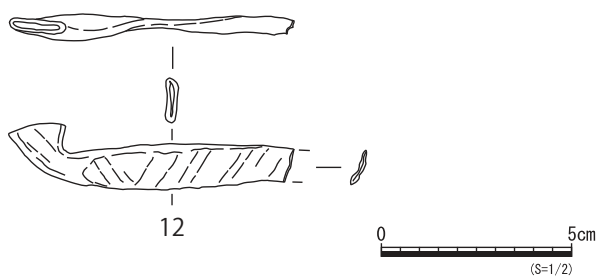
第Ⅲ-36 図 試掘坑平面図 ズケ 24- A 10- ク

(9) ズケ 24- B 10- イ

米軍造成土の堆積は薄いが、マージ層を削平して堆積している。掘削深度は約 0.5m で、マージ層上面で複数のピットを検出した。ピットは覆土より近世～近代相当と推測される。



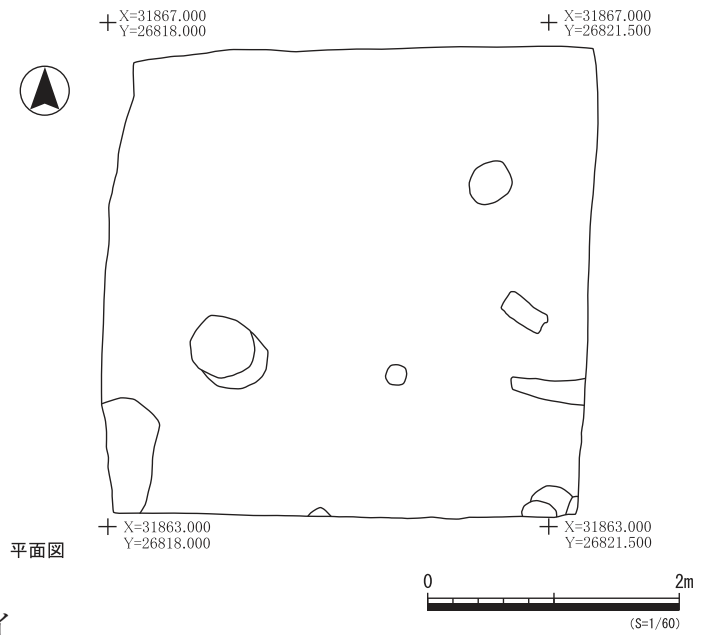
第Ⅲ-37 図 試掘坑断面図 ズケ 24- B 10- イ (北壁・東壁)



第Ⅲ-38 図 青銅製品：煙管 (12)



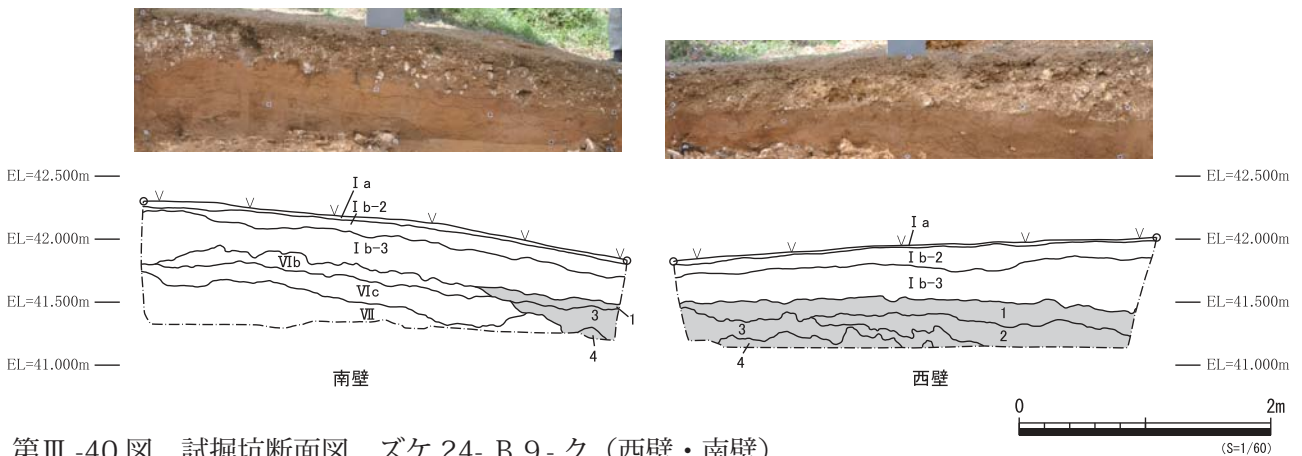
図版Ⅲ-9 青銅製品：煙管 (12)



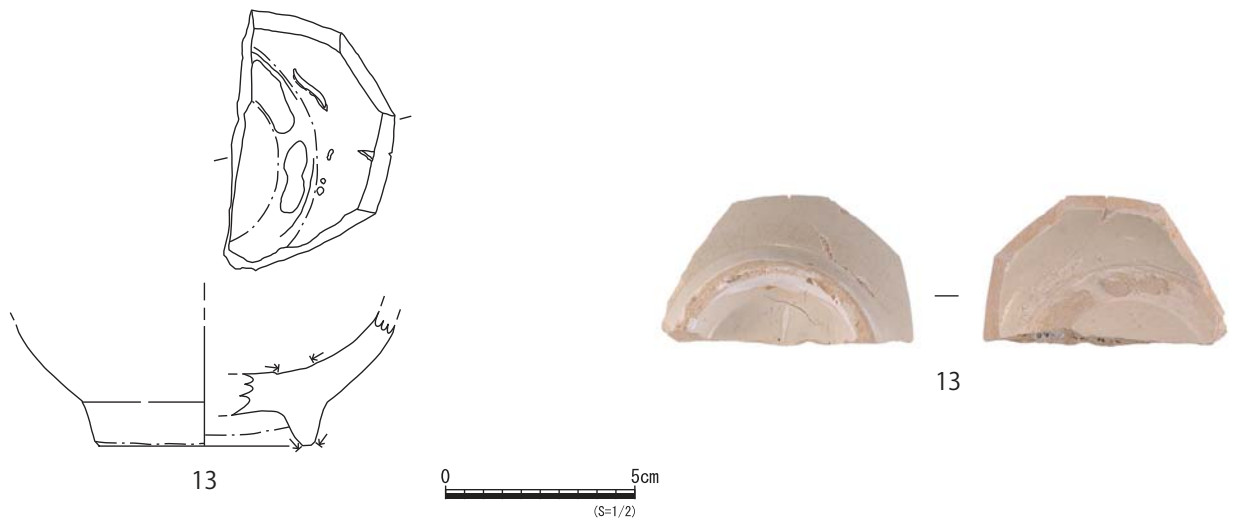
第Ⅲ -39 図 試掘坑平面図 ズケ 24- B 10- イ

(10) ズケ 24- B 9- ク

米軍造成土が現地表面から約 0.5m 堆積、下部はⅡ層が残存する。南西側はマージ層を掘り込んで溝状遺構が形成？されている。この溝状遺構の下部より礫込溝を検出。



第Ⅲ -40 図 試掘坑断面図 ズケ 24- B 9- ク (西壁・南壁)



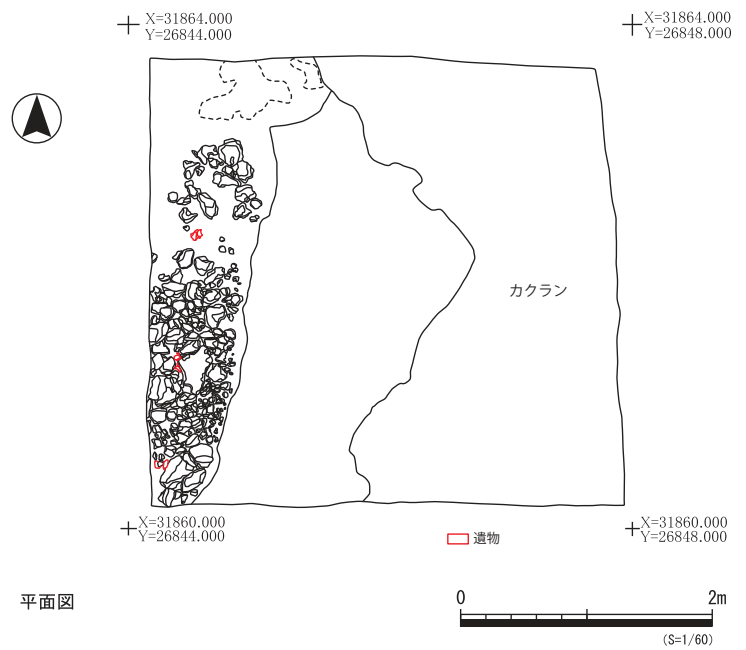
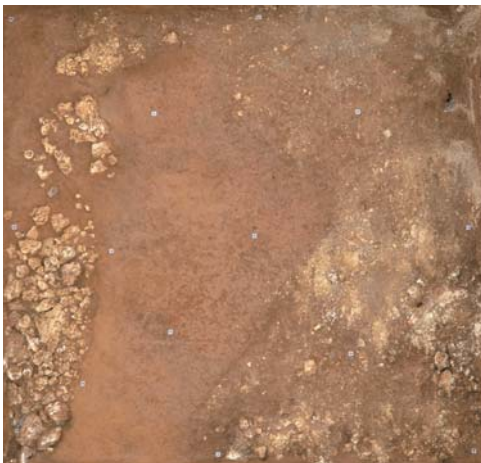
第Ⅲ -41 図 沖縄産施釉陶器：碗 (13)

図版Ⅲ -10 沖縄産施釉陶器：碗 (13)



第Ⅲ-42 図 沖縄産施釉陶器：壺（14）

図版Ⅲ-11 沖縄産施釉陶器：壺（14）

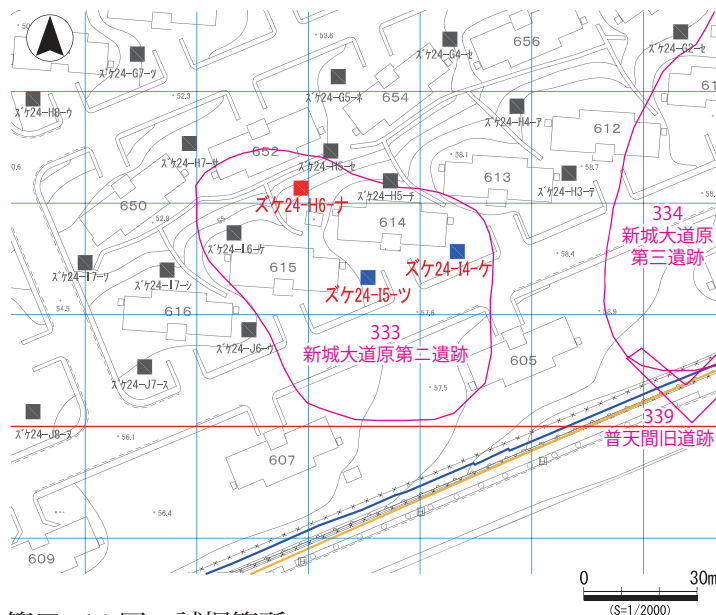


平面図

第Ⅲ-43 図 試掘坑平面図 ズケ 24- B 9-ク

第4節 新城大道原第二遺跡

字新城小字大道原に所在する。平成27年度に実施した試掘調査によって新規で発見された遺跡である。遺跡は県道81号線から30mほど北側に位置する場所にあり、地区内道路を挟んで北側を市が、南側を県が試掘調査を実施した。遺跡範囲については、県市の試掘結果を総合して設定した。主体は近世～近代相当の遺構、遺物が出土しているが、北端で黒褐色土を覆土とするピットが1基検出されたことからグスク時代まで遡ると想定される。ただし、同時代の包含層は確認されなかったことから、近世～近代頃の耕作、基地接収時の造成等によって攪乱されたものと推察される。ちなみに遺跡北側では現地表面直下において岩盤が検出され、その岩盤自体削平されていることが確認された。

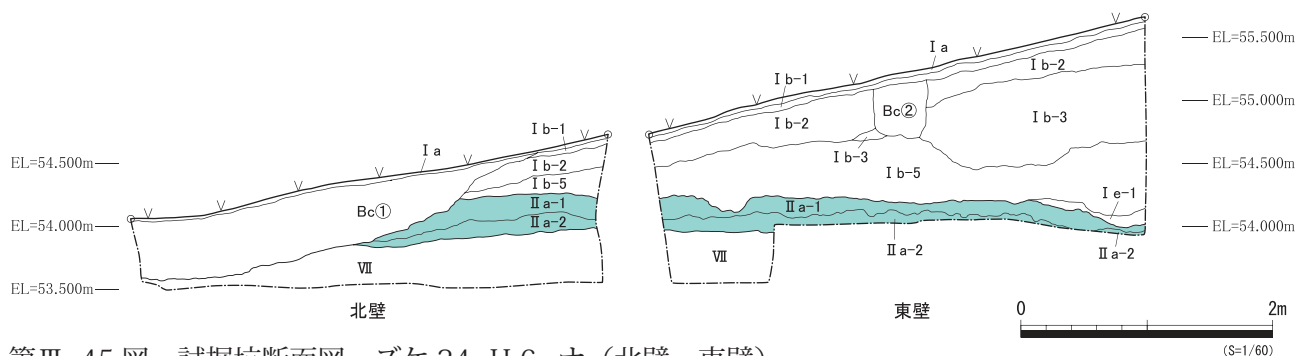


第III-44図 試掘箇所

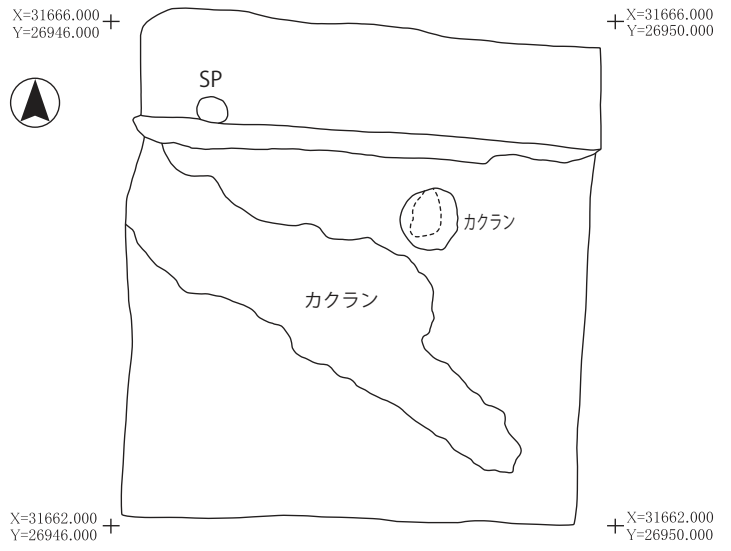
以下、遺構が確認された各試掘坑について詳述する。

(1) ズケ24-H6-ナ

現地形は、南東から北西方向へ傾斜している。米軍の造成も東側から西側へ切土され、北東部分はマーヅ層まで削平される。南側はII層上部が平坦に削平されていることから、造成する際、一定の高さで面を造りながら平坦に削り、その後に盛土して段状の地形を造ったと推察される。II層は耕作土（近代相当？）が一部残存し、直下はマーヅ層となる。II層面においてピット、溝状遺構をそれぞれ1基検出。遺物は沖縄産無釉陶器が出土している。マーヅ層上面においてピットを1基検出。直径は約20cmで円形となる。覆土は表面観察において暗褐色粘質シルトを呈し、土器細片が出土した。



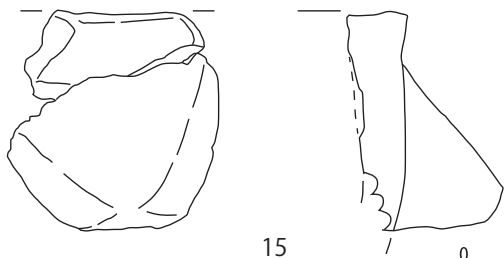
第III-45図 試掘坑断面図 ズケ24-H6-ナ（北壁・東壁）



平面図



第Ⅲ-46 図 試掘坑平面図 ズケ 24- H 6- ナ



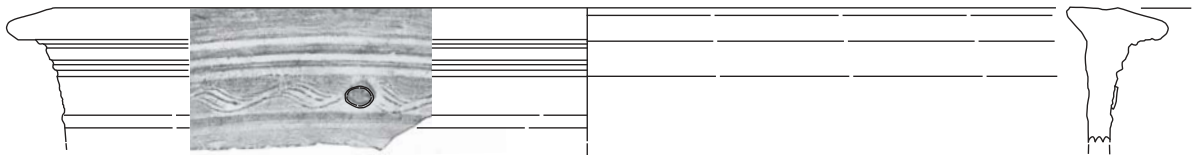
15



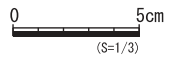
15

第Ⅲ-47 図 グスク土器 (15)

図版Ⅲ-12 グスク土器 (15)



16



第Ⅲ-48 図 沖縄産無釉陶器：水甕 (16)



1



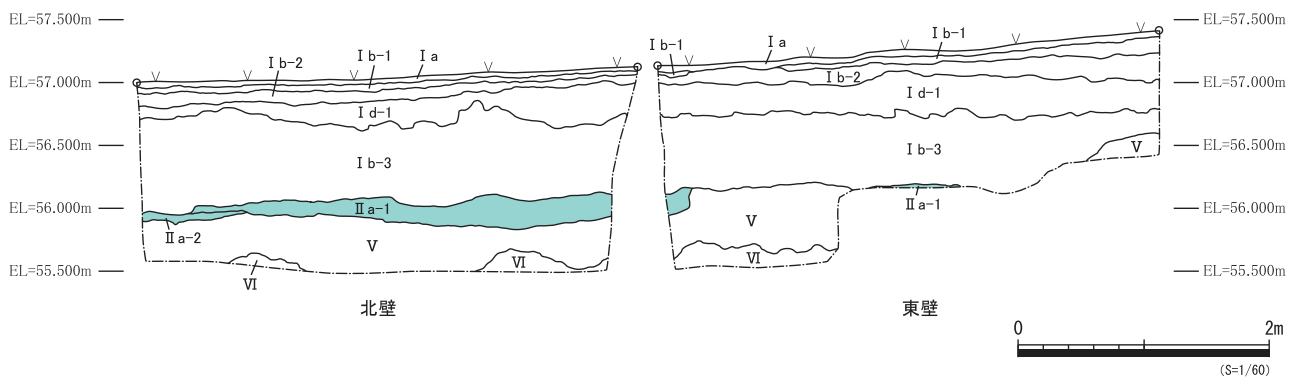
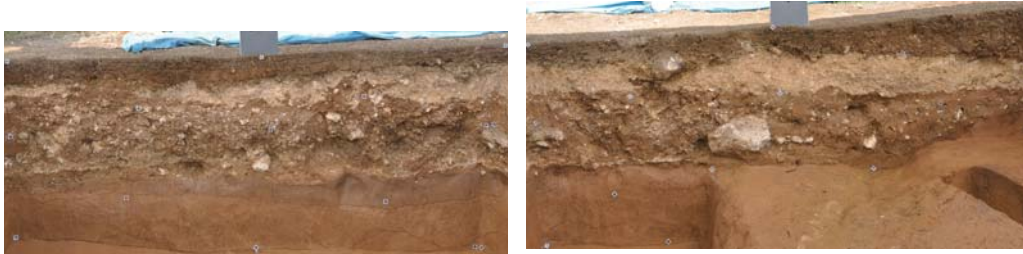
16



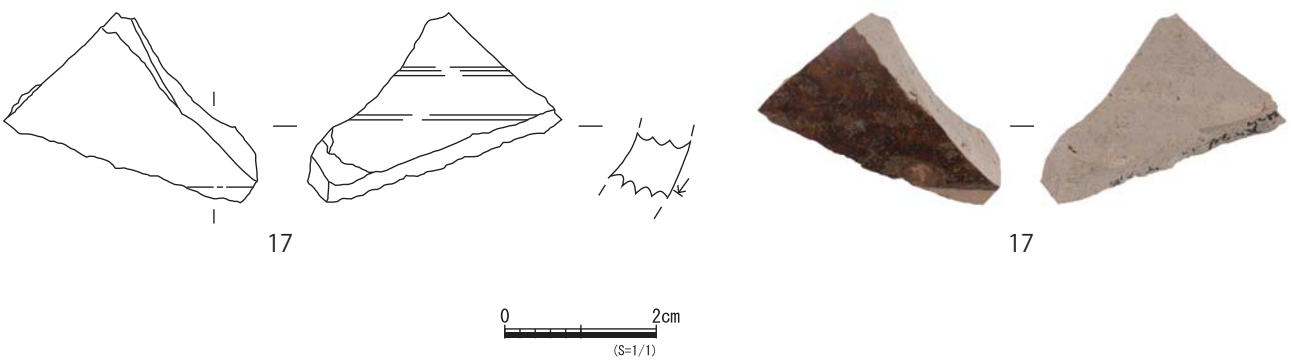
図版Ⅲ-13 沖縄産無釉陶器：水甕 (16)

(2) ズケ 24- I 4- ケ

米軍造成土は現地表面から 1.0m まで堆積。II 層が一部残存するが、マーヅ層上面も削平される。下層確認のため、北側にトレンチを設定し約 2.0m まで掘削した。マーヅ層上面において近代相当のピットと杭痕を検出した。



第Ⅲ -49 図 試掘坑断面図 ズケ 24- I 4- ケ (北壁・東壁)

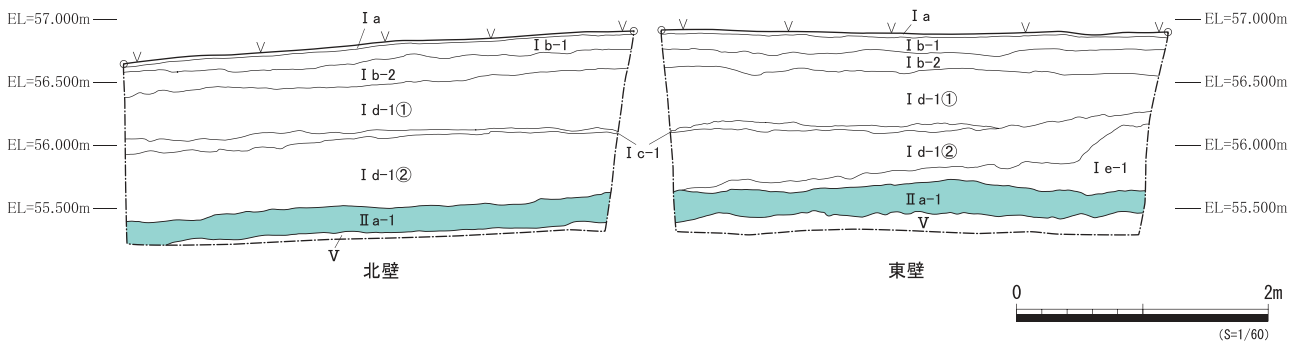


第Ⅲ -50 図 沖縄産施釉陶器：壺 (17)

図版Ⅲ -14 沖縄産施釉陶器：壺 (17)

(3) ズケ 24- I 5- ツ

現地表面から約 1.5m まで米軍の造成土が堆積。直下に II a1 層が堆積。上面は平坦で削平されていると思われる。下層にマーヅ層が堆積するが、II 層との境は比較的平坦であるが、微弱的な凹凸が見られる。耕作による影響と考えられる。マーヅ層の上面において近世～近代頃と思われるピットが 4 基検出された。遺物は沖縄産施釉陶器が出土している。



第Ⅲ -51 図 試掘坑断面図 ズケ 24- I 5- ツ (北壁・東壁)



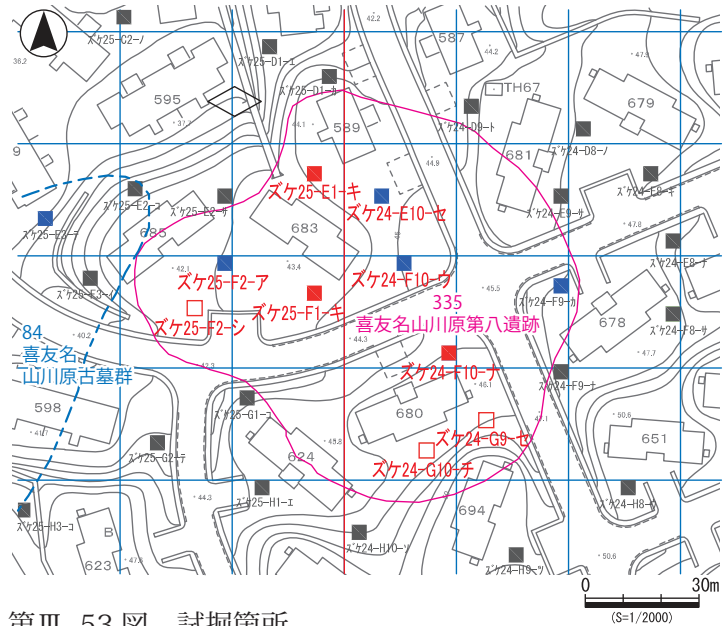
第Ⅲ -52 図 沖縄産施釉陶器：急須 (18)

図版Ⅲ -15 沖縄産施釉陶器：急須 (18)

第5節 喜友名山川原第八遺跡

喜友名地区の小字山川原に所在する。平成27年度に実施した試掘調査によって新規で発見された遺跡である。遺跡は県道81号線から200mほど北側に位置する。遺跡の現況地形は、北東側が急傾斜しており、中心部は概ね平坦で緩やかに南側へ高くなっている。当遺跡の西側にはヤファレーグーフと呼称される小高い石灰岩丘陵があり、喜友名山川原第五遺跡、喜友名山川原古墓群が所在する。

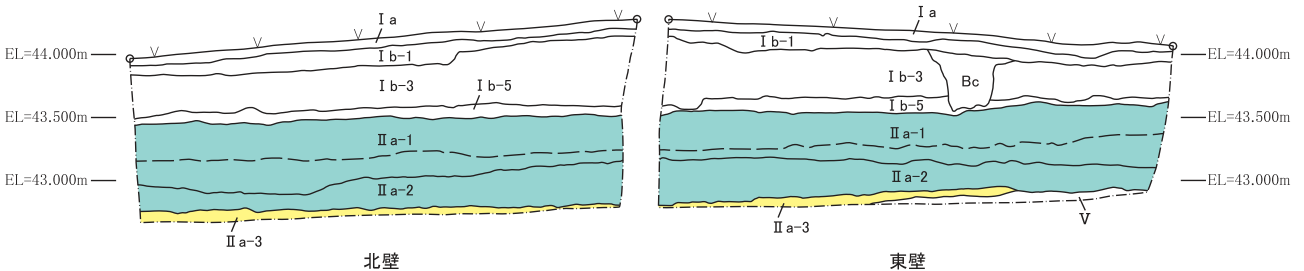
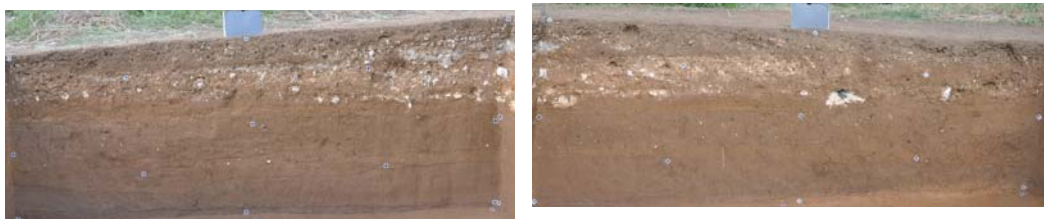
試掘調査の結果、遺跡南東から北西にかけて谷状地形（迫地）が延びていることが判明した。遺構はこの迫地の周辺で多く確認されている。戦前、米軍によって撮影された航空写真（1945年1月～3月撮影）では、遺跡地一帯は畑地となっており、表面上凹地の地形は見られない。おそらく、この谷状の地形があった時期は、近世以前に相当すると思われ、試掘坑断面を観察する限り、グスク時代まで遡る可能性が高い。近世期の後半から近代にかけて耕作地を確保するための何らかの造成が行われたと推測される。



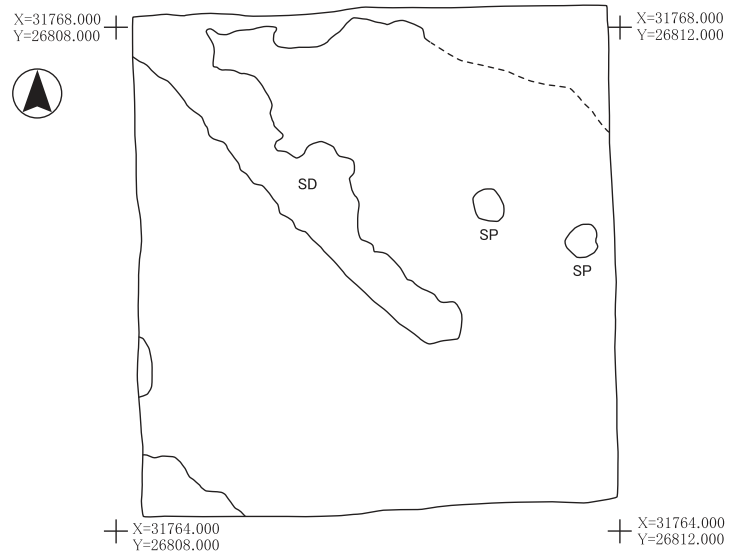
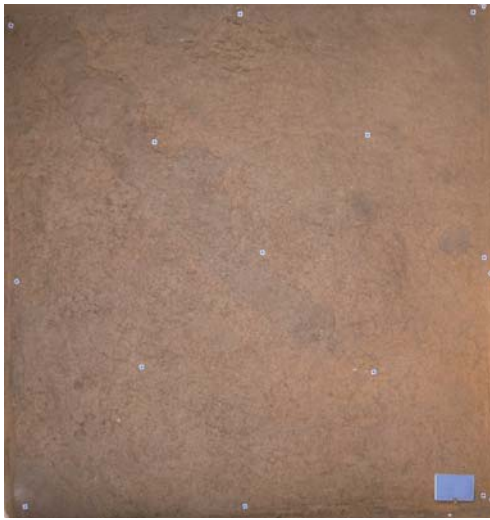
第Ⅲ-53図 試掘箇所

(1) ズケ24-E10-セ

現地表面から約0.5mまで米軍造成土が堆積している。比較的Ⅱ層が良好に残存し、Ⅱa1～a3層に分層される。約1.0～1.5m掘り下げたところマージ層を検出し、上面にて溝状遺構、ピットが確認された。Ⅱa3層は地山直上に薄く残存しており、おそらく、上位層であるⅡa1、a2層の耕作によって攪拌された可能性が高い。遺物は、陶質土器、沖縄産無釉陶器が出土している。



第Ⅲ-54図 試掘坑断面図 ズケ24-E10-セ（北壁・東壁）



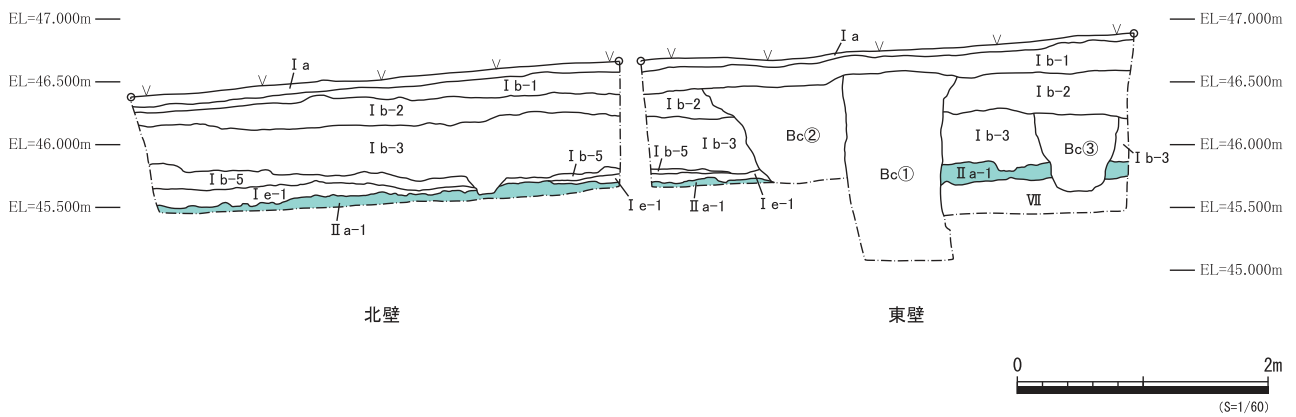
平面図



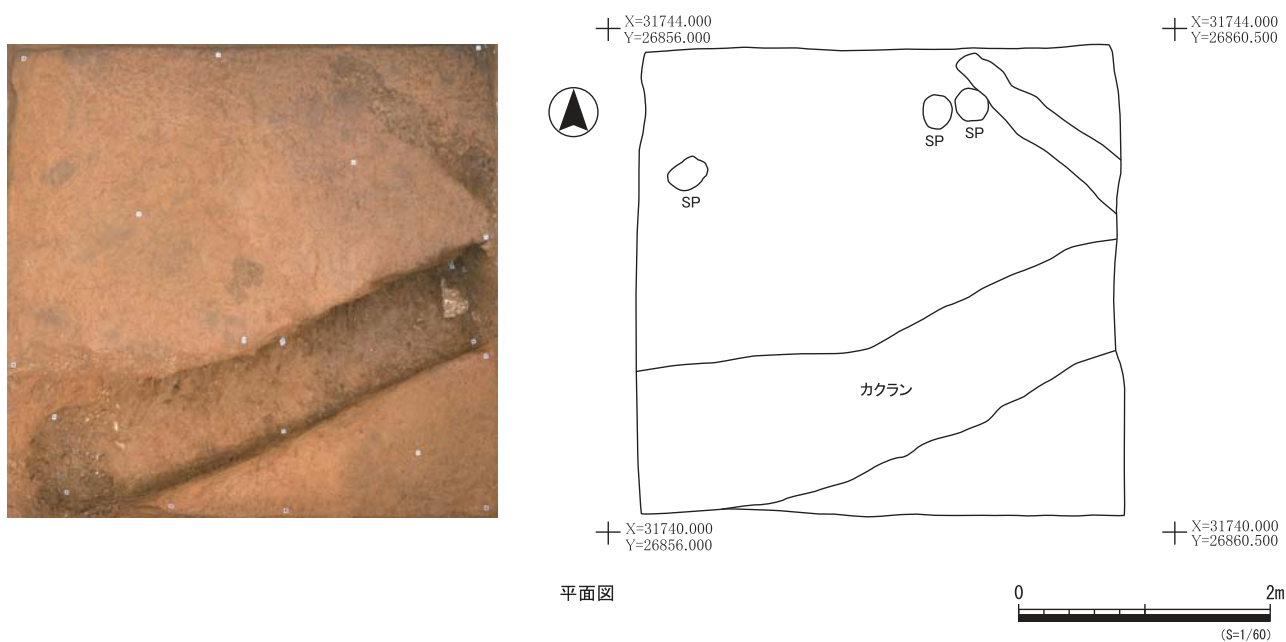
第Ⅲ -55 図 試掘坑平面図 ズケ 24- E 10-セ

(2) ズケ 24- F 9-カ

現地表面から約 1.5m まで米軍造成土が堆積。直下に薄くⅡ a1 層が見られる。下はマーヅ層で東から西方向に攪乱溝が走る。マーヅ層上面でピット 3 基を検出。覆土より、近世～近代相当と推測される。遺物は出土していない。



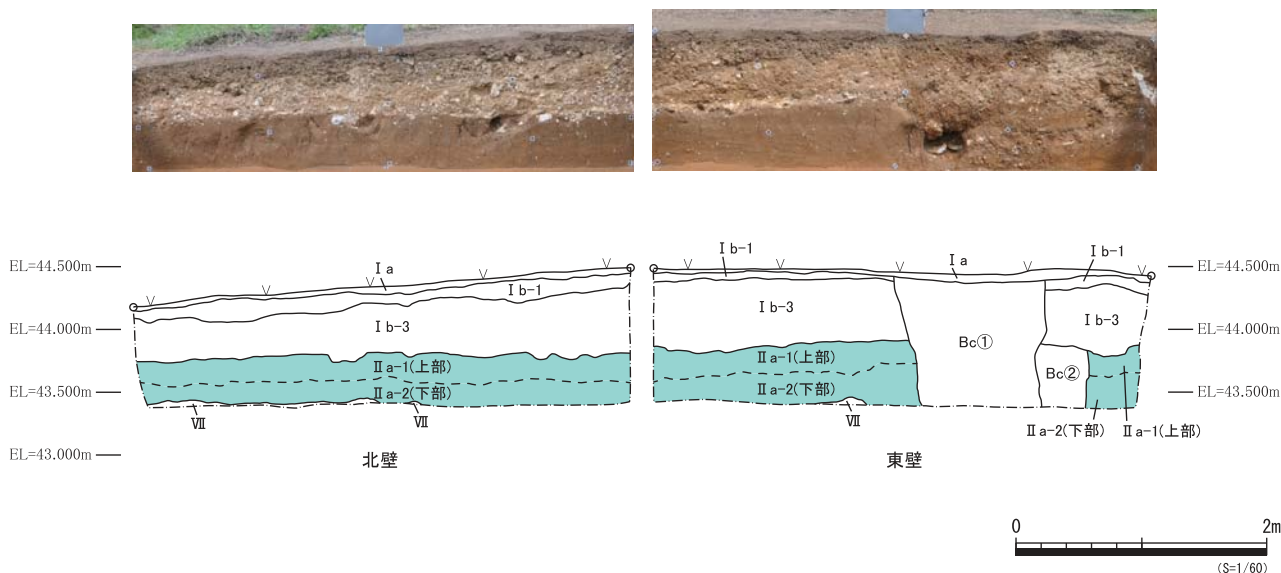
第Ⅲ -56 図 試掘坑断面図 ズケ 24- F 9-カ (北壁・東壁)



第Ⅲ -57 図 試掘坑平面図 ズケ 24- F 9- カ

(3) ズケ 24- F 10- ウ

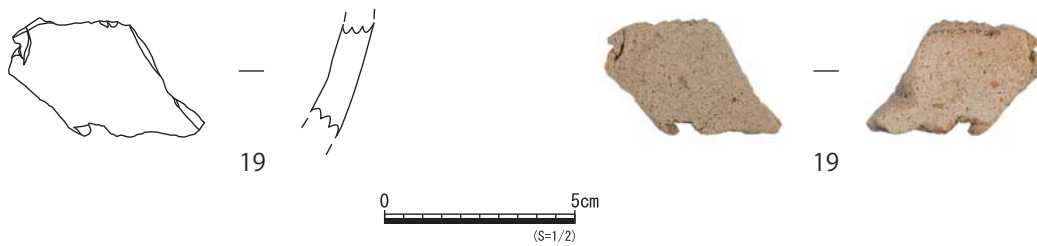
掘削深度約 1.1m で、現地表面から約 0.8m でマージ層を確認した。マージ層上面では、ピット、土坑を検出。表土は米軍造成土で、厚さ 0.4m ほどであり、直下には近世～近代の耕作土と思われるⅡ a 層が堆積している。遺物は、沖縄産無釉陶器、本土産磁器である。マージ層で検出したピットを半裁したところ、土器片が出土。グスク時代相当と推測される。



第Ⅲ -58 図 試掘坑断面図 ズケ 24- F 10- ウ (北壁・東壁)



第Ⅲ -59 図 試掘坑平面図 ズケ 24- F 10- ウ

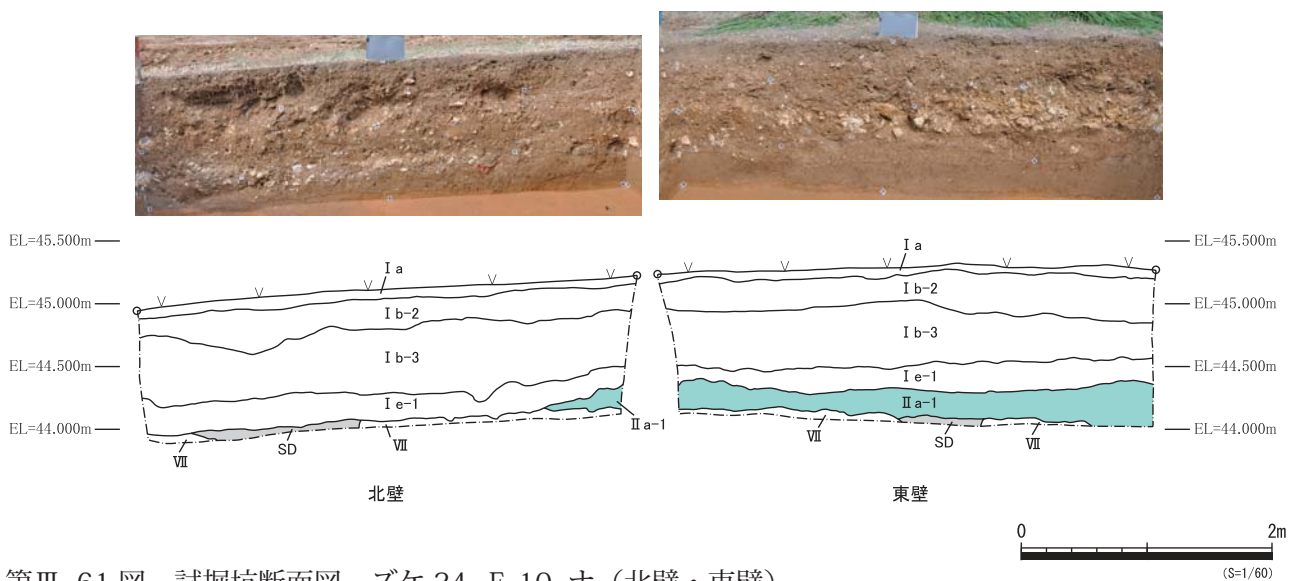


第Ⅲ -60 図 グスク土器：(19)

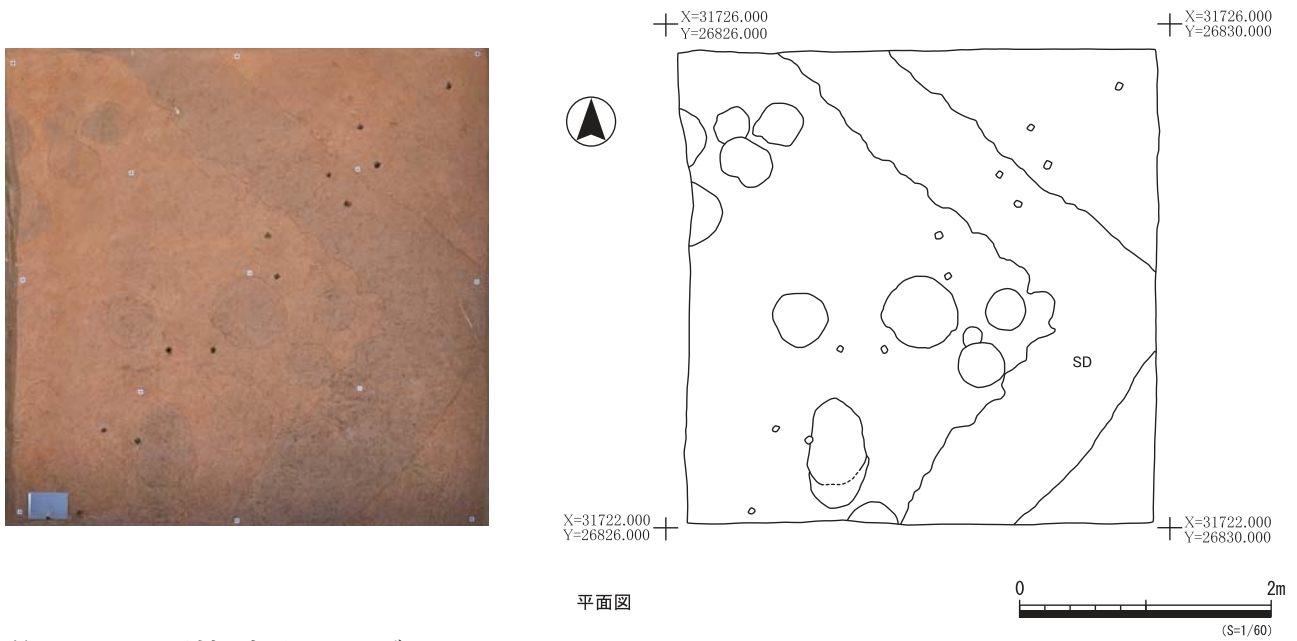
図版Ⅲ -16 グスク土器：(19)

(4) ズケ 24- F 10- ナ

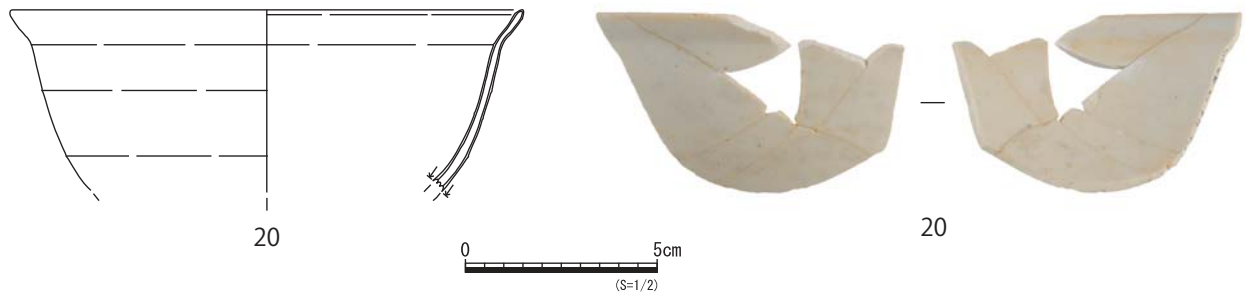
掘削深度約 1.3m、3 枚に細分。最下層はマージ層で、上面よりピットと溝状遺構を検出した。遺物は土器、白磁、本土産磁器などである。先述した F10- ウと同時期の遺構と推測される。



第Ⅲ -61 図 試掘坑断面図 ズケ 24- F 10- ナ (北壁・東壁)

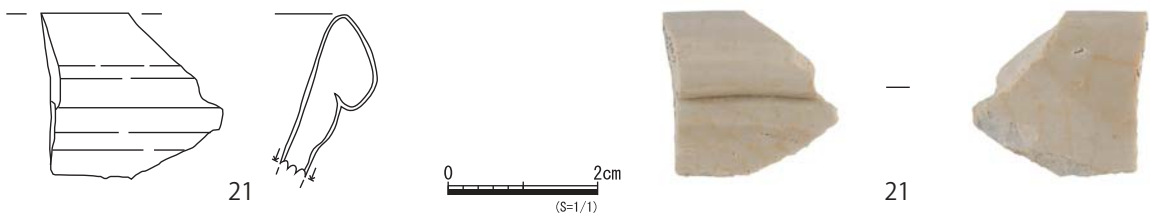


第Ⅲ-62 図 試掘坑平面図 ズケ 24- F 10- ナ



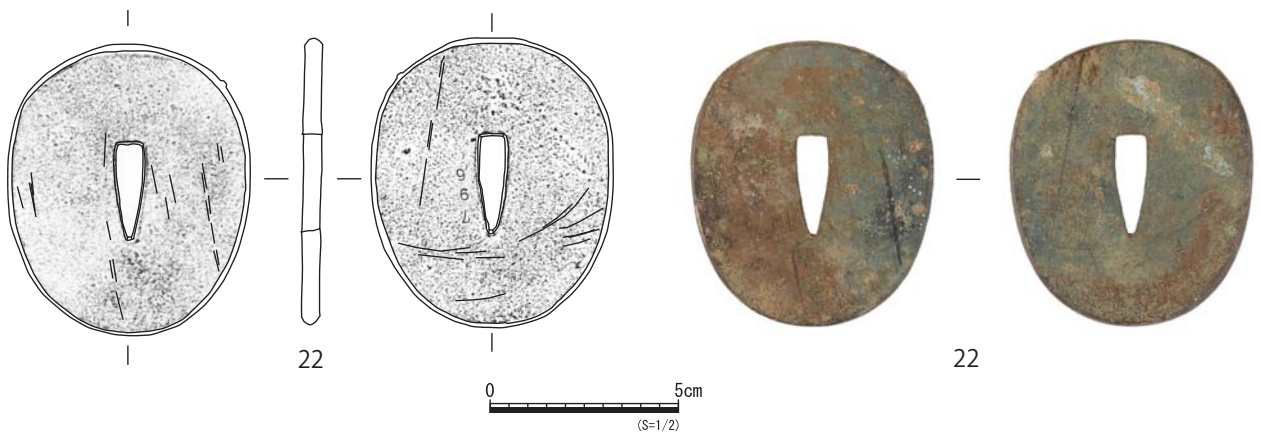
第Ⅲ-63 図 白磁：碗 (20)

図版Ⅲ-17 白磁：碗 (20)



第Ⅲ-64 図 白磁：碗 (21) ズケ 24- E 9- サ

図版Ⅲ-18 白磁：碗 (21) ズケ 24- E 9- サ

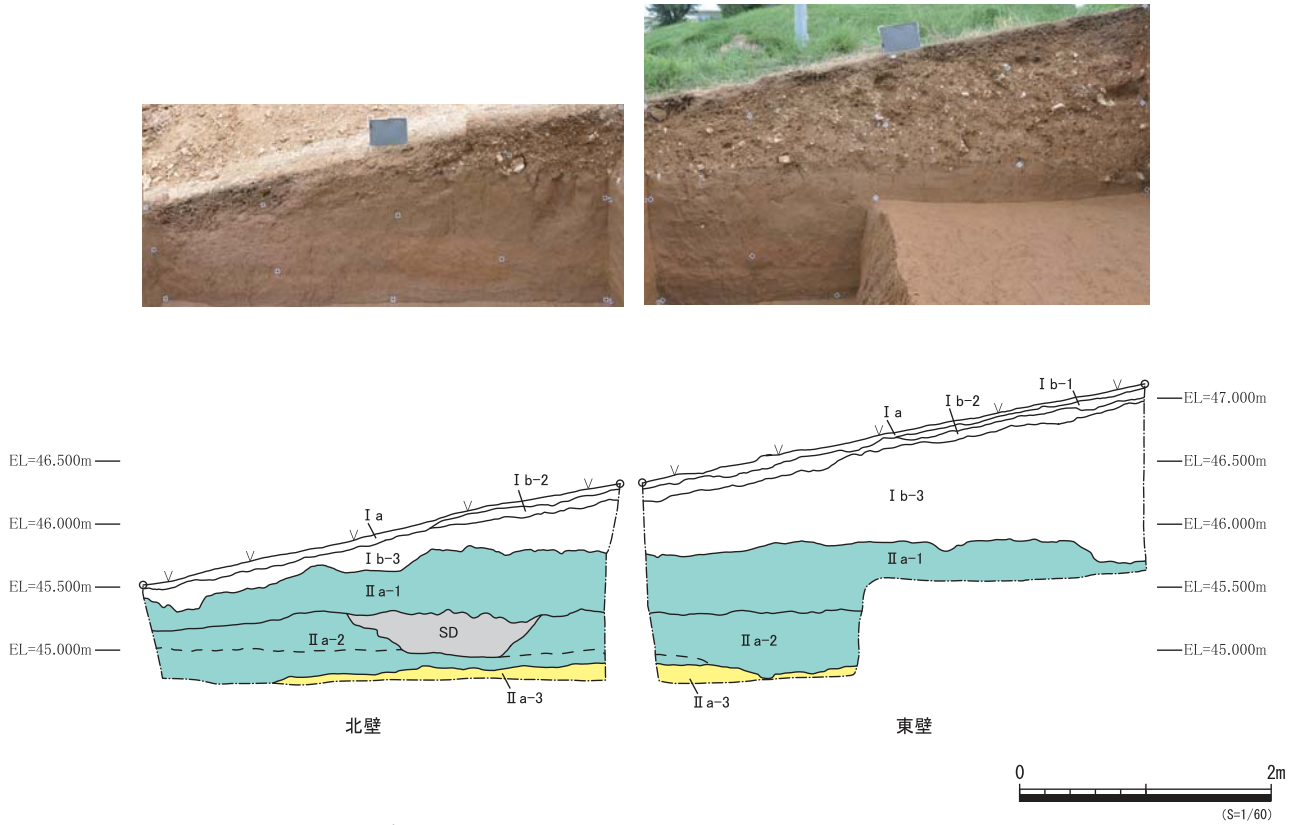


第Ⅲ-65 図 青銅製品：鏝 (22) ズケ 24- D 9- ト

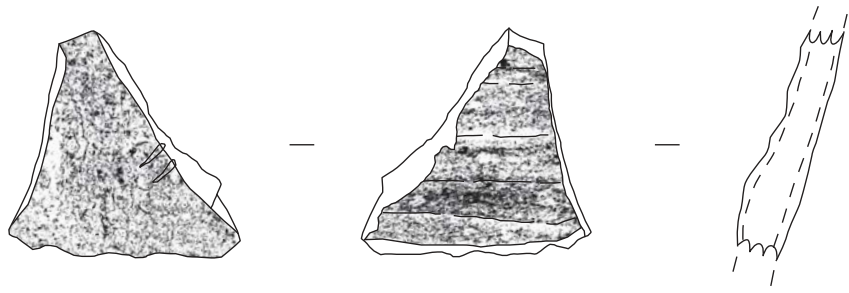
図版Ⅲ-19 青銅製品：鏝 (22) ズケ 24- D 9- ト

(5) ズケ 24- G 9-セ

掘削深度約 1.8m。現地表面から約 0.6m まで米軍造成土が堆積。下層は II a 層が堆積、3 枚に細分可能。マージ層及び岩盤は確認できていない。遺物は土器、カムイヤキ、沖縄産施釉陶器、無釉陶器などが出土している。

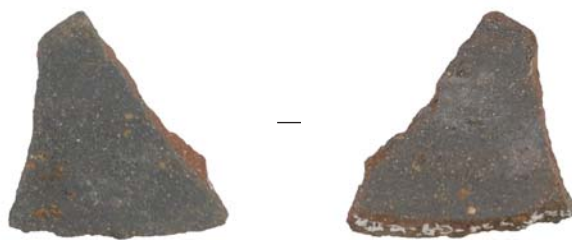


第Ⅲ-66 図 試掘坑断面図 ズケ 24- G 9-セ (北壁・東壁)



23

第Ⅲ-67 図 カムイヤキ (23)

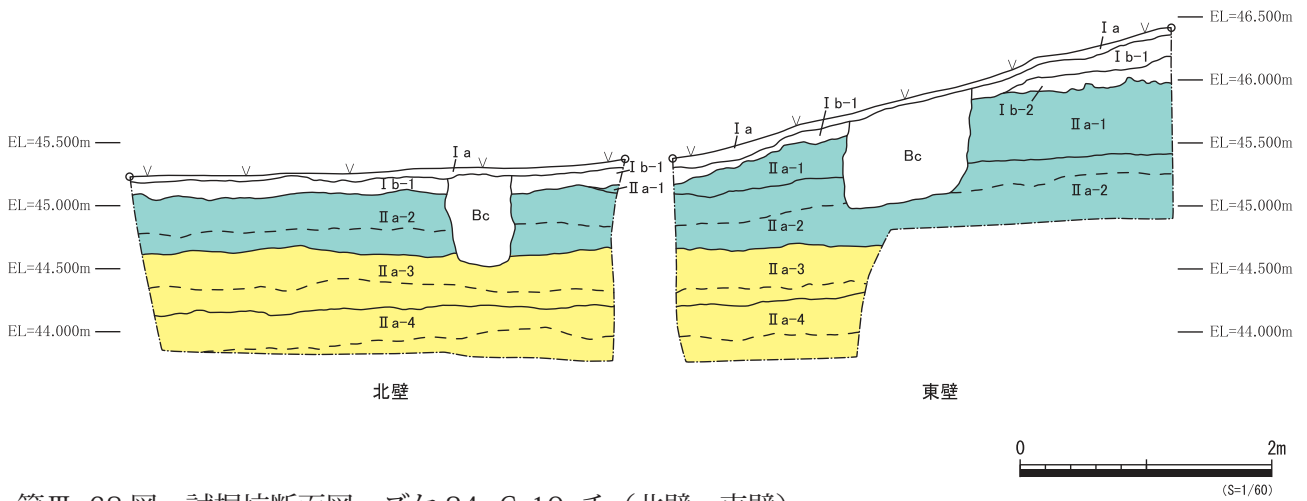


23

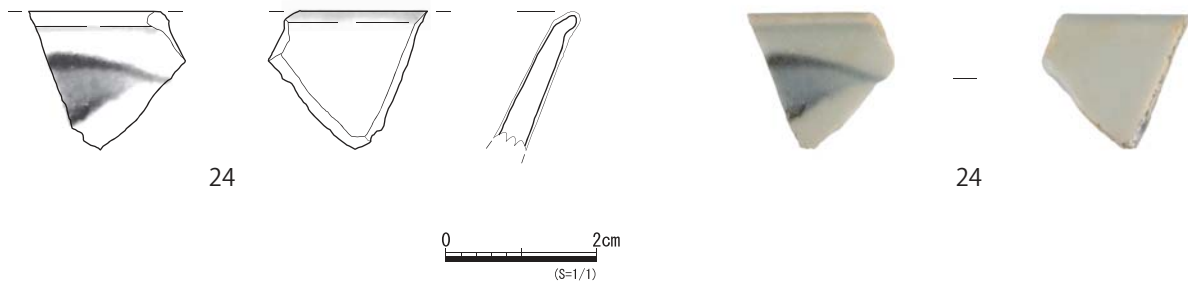
図版Ⅲ-20 カムイヤキ (23)

(6) ズケ 24- G 10- チ

掘削深度約 1.9m で下層はⅡ層が堆積する。マージ層及び岩盤が未確認。最下層はⅡ a-4 層となるが、土器の小片が出土している。グスク時代包含層か。



第Ⅲ -68 図 試掘坑断面図 ズケ 24- G 10- チ (北壁・東壁)

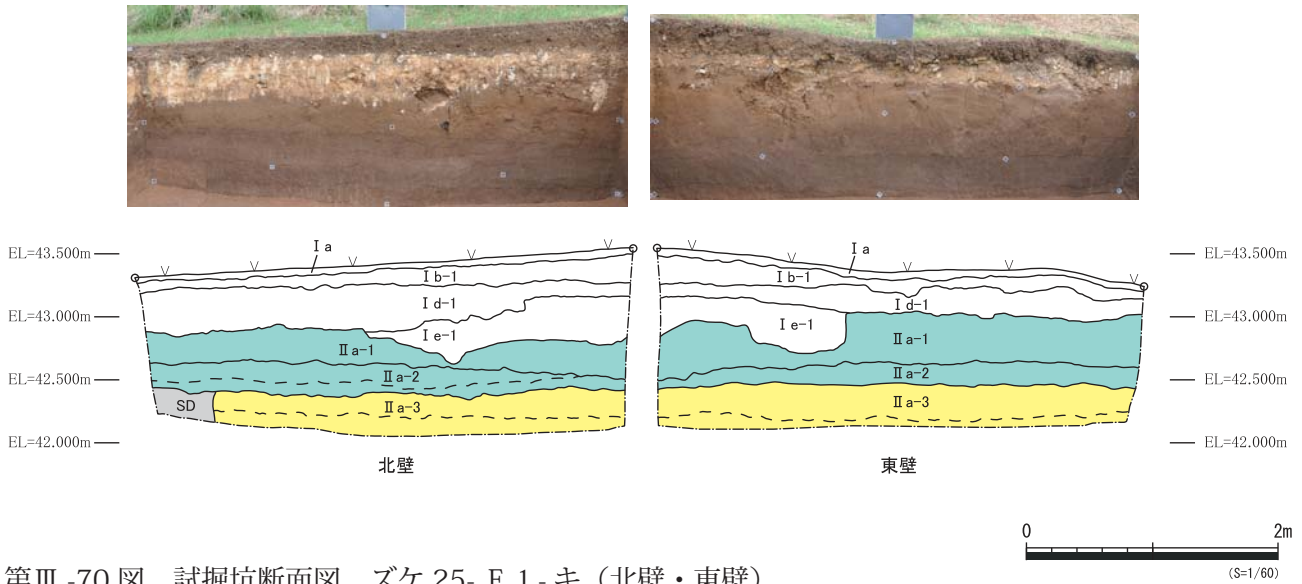


第Ⅲ -69 図 青花：碗 (24)

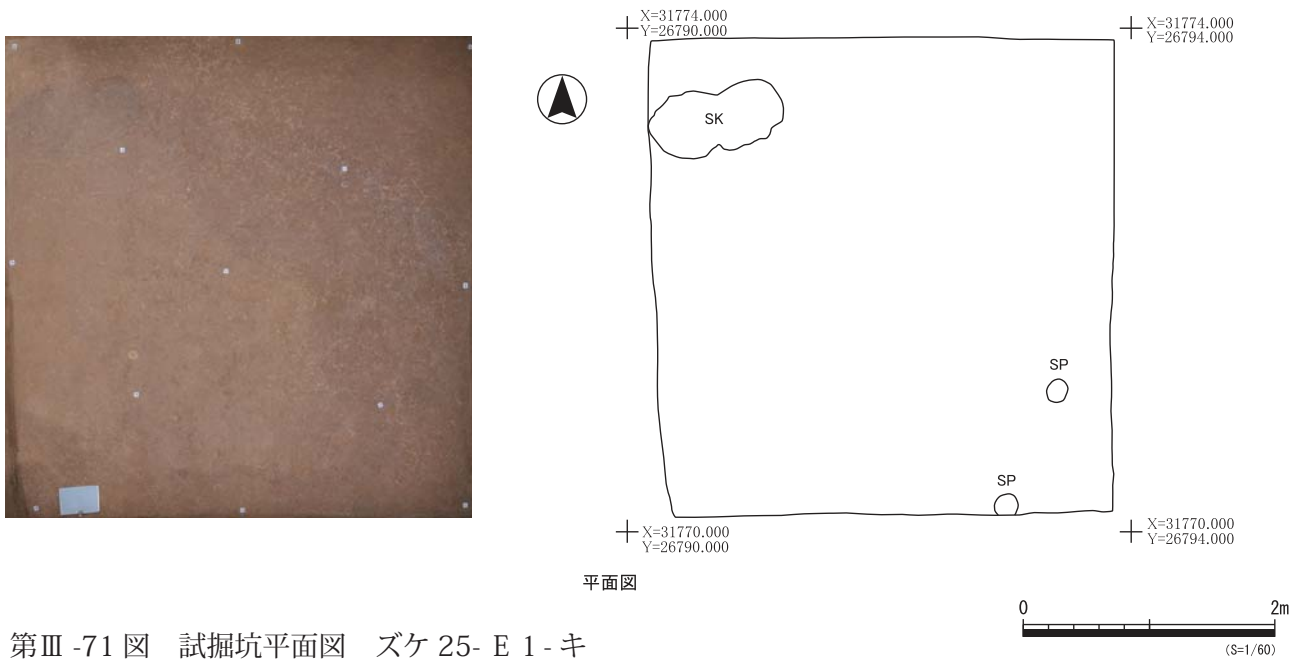
図版Ⅲ -21 青花：碗 (24)

(7) ズケ 25- E 1-キ

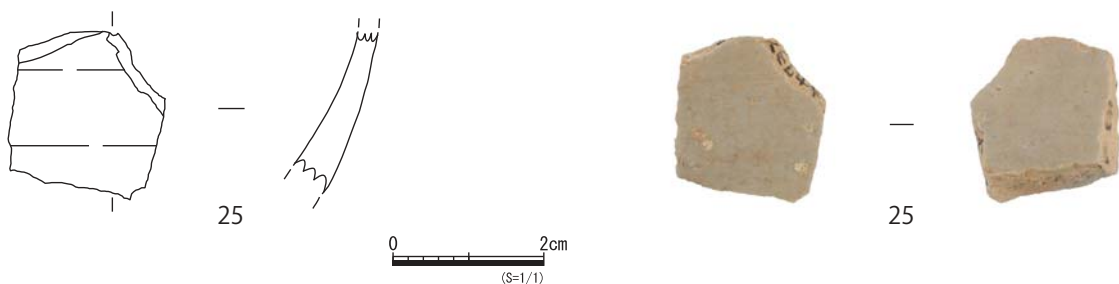
掘削深度約 1.4m。下層に堆積するⅡ層は a1 ～ a4 の 4 枚に細分可能。マージ層及び岩盤は確認できていない。Ⅱ a4 層上面にてピット及び土坑を検出。グスク時代相当の遺構と思われる。遺物は土器の小片や白磁が出土している。



第Ⅲ -70 図 試掘坑断面図 ズケ 25- E 1-キ (北壁・東壁)



第Ⅲ -71 図 試掘坑平面図 ズケ 25- E 1-キ

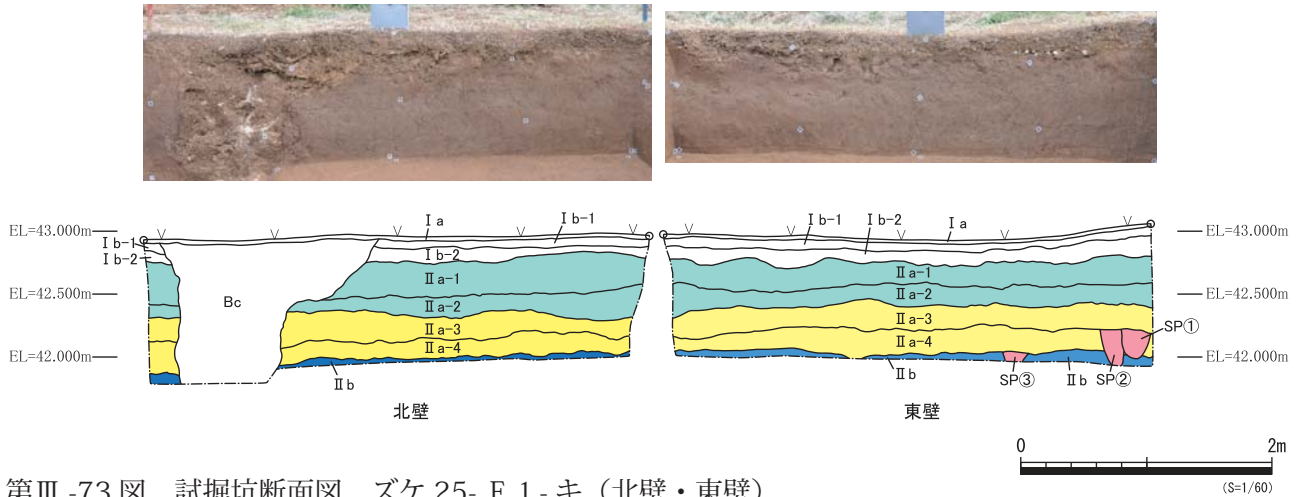


第Ⅲ -72 図 白磁：碗 (25)

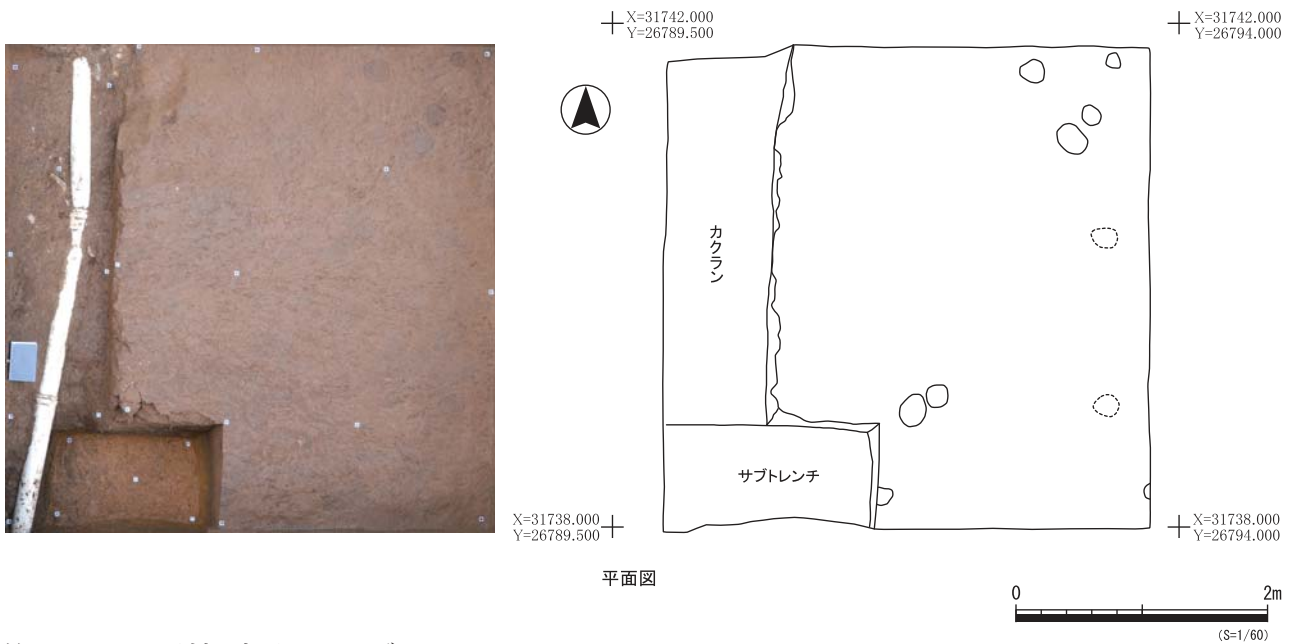
図版Ⅲ -22 白磁：碗 (25)

(8) ズケ 25- F 1 - キ

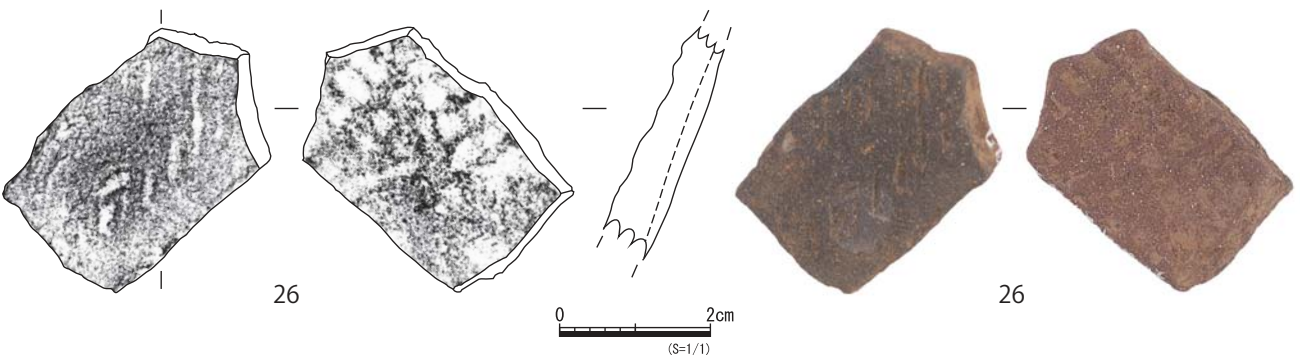
掘削深度約 1.2m。サブトレンチによる下層確認を含めると約 2.2m となる。現地表面から深さ約 1.6m でマージ層を確認。表土以下はⅡ a 層が 1m ほど堆積し、Ⅱ a1 ~ a4 の 4 枚に細分可能。また、Ⅱ a4 層上面にてピットを検出した。直下にはⅡ b 層が堆積する。遺物はカムイヤキや沖縄産無釉陶器などが出土している。



第Ⅲ -73 図 試掘坑断面図 ズケ 25- F 1 - キ (北壁・東壁)



第Ⅲ -74 図 試掘坑平面図 ズケ 25- F 1 - キ

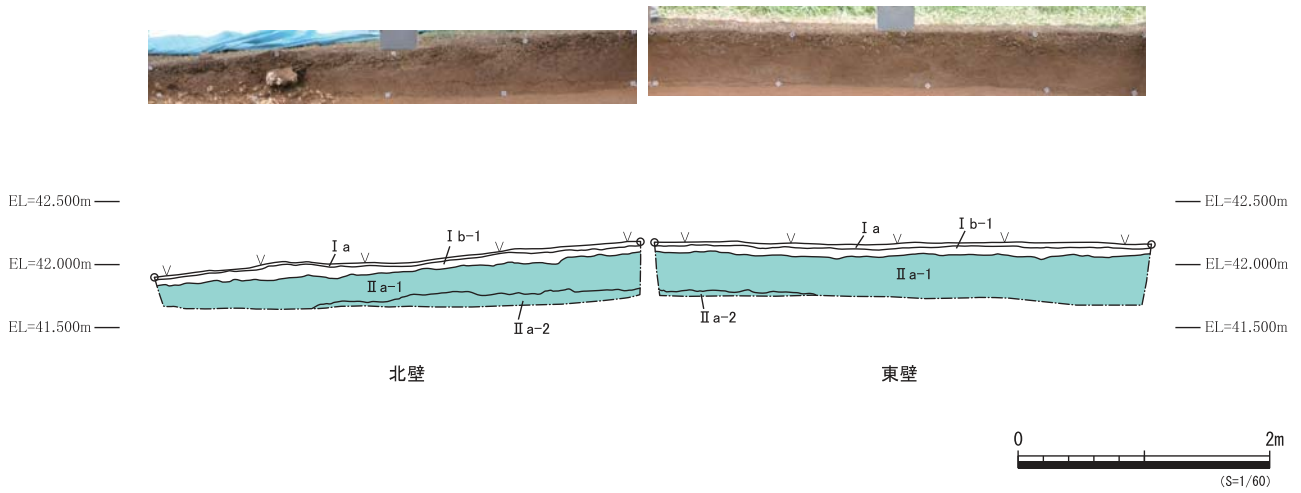


第Ⅲ -75 図 カムイヤキ (26)

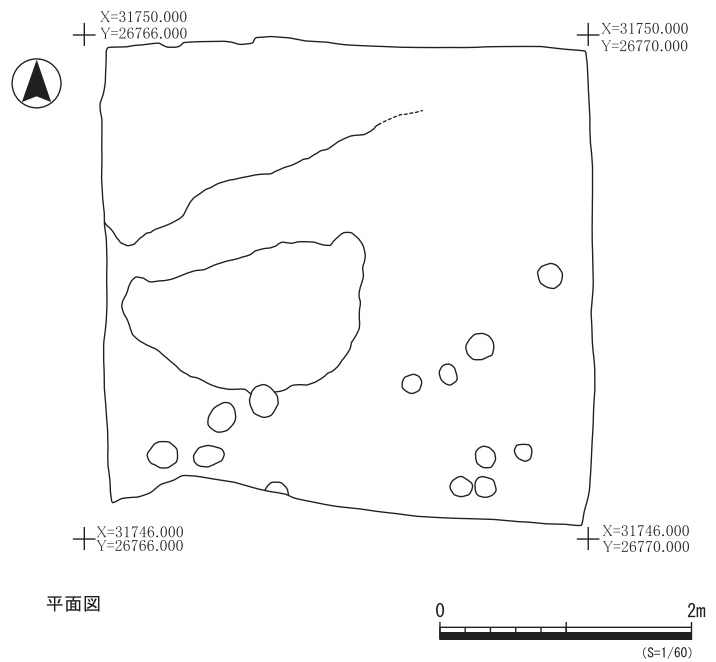
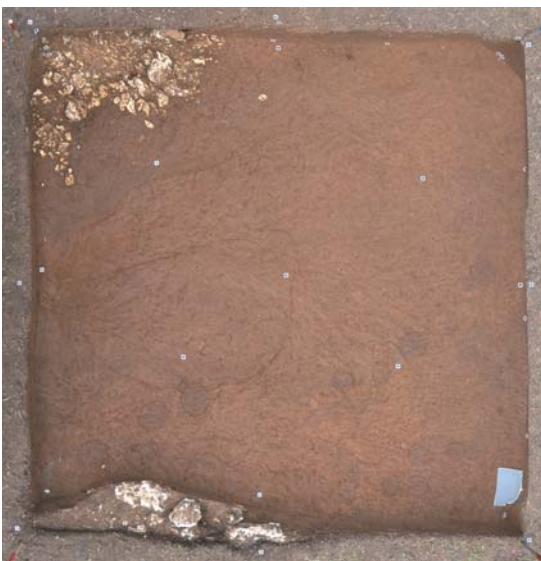
図版Ⅲ -23 カムイヤキ (26)

(9) ズケ 25- F 2- ア

掘削深度約 0.5m。Ⅱ a2 層上面にてピットや溝を検出した。これらは遺構覆土などから近世～近代相当の遺構と推測される。



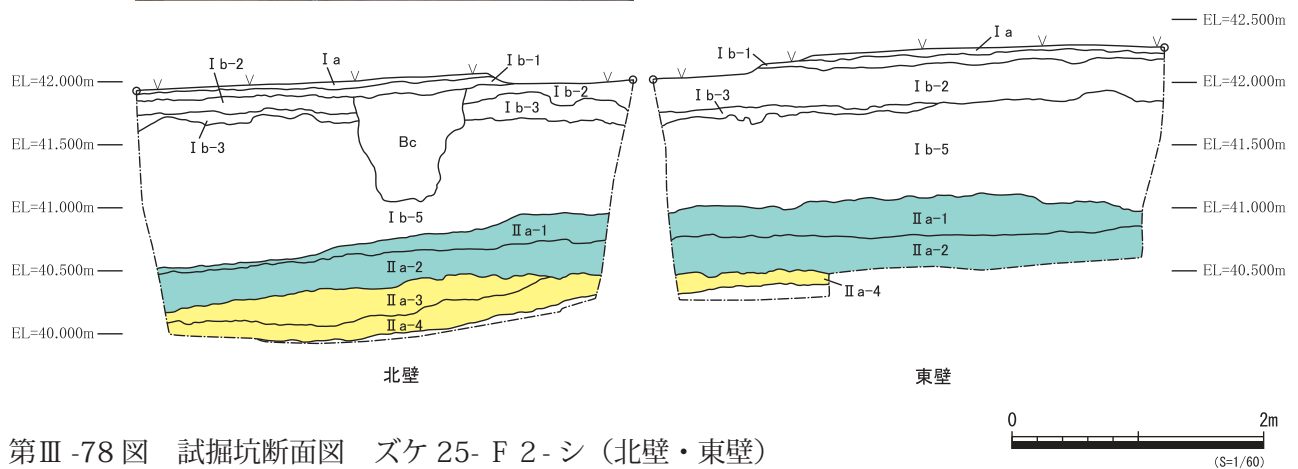
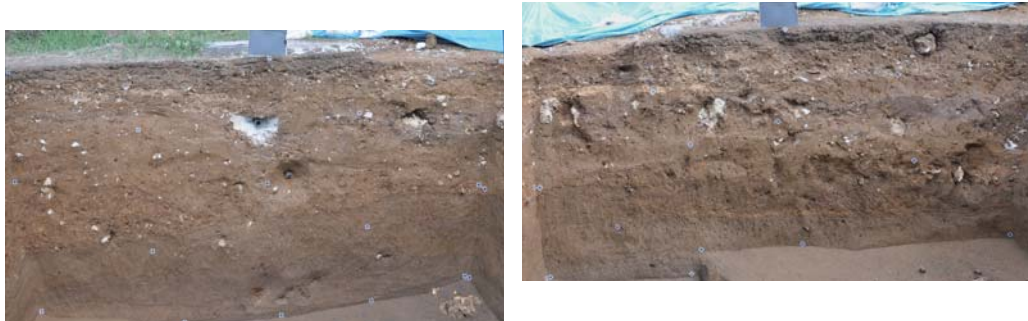
第Ⅲ -76 図 試掘坑断面図 ズケ 25- F 2- ア (北壁・東壁)



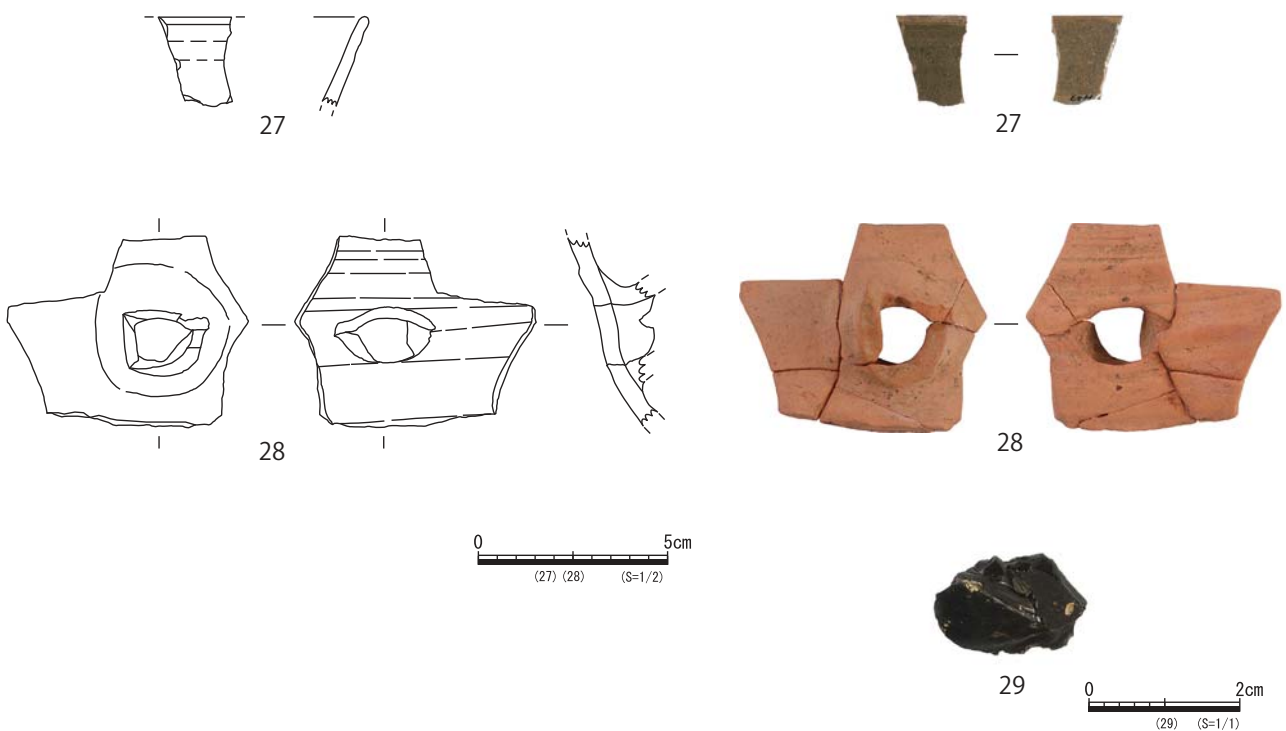
第Ⅲ -77 図 試掘坑平面図 ズケ 25- F 2- ア

(10) ズケ 25- F 2- シ

掘削深度約 2.0m、造成土が約 1.5 m 堆積し、下層はⅡ層堆積する。マージ層や岩盤は確認できていない。Ⅱ a 3 層とⅡ a 4 層は土質が黒褐色粘質シルトを呈し、部分的に赤色粒子が混じるなど、特徴的な堆積を示している。類似の堆積として「野嵩タマタ原遺跡」があり、迫地の堆積と想定される。遺物は黒曜石片が出土している。

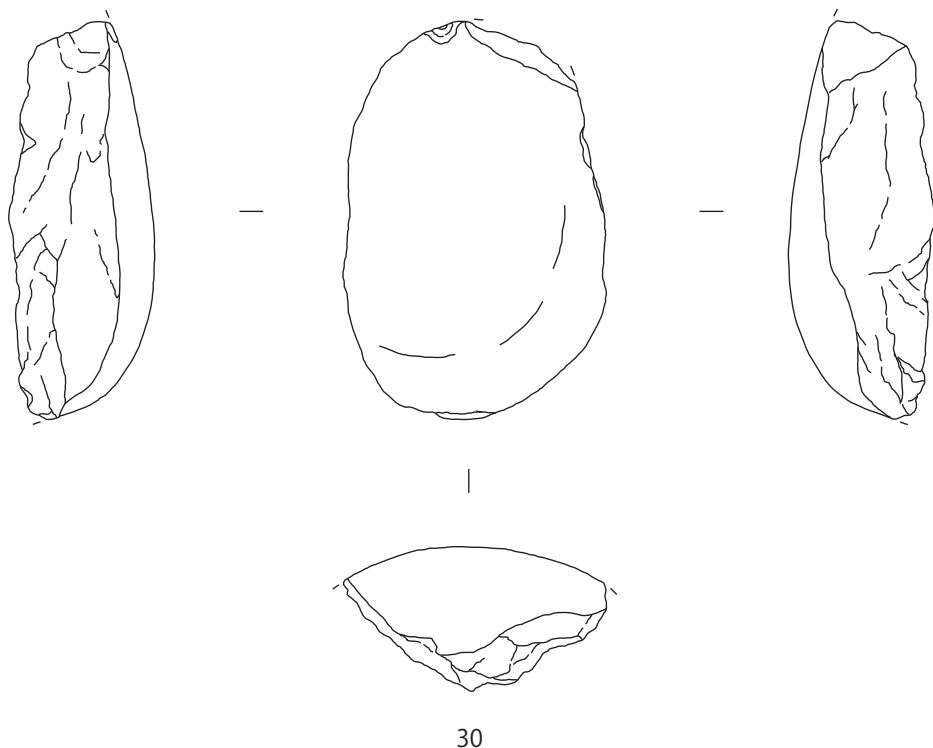


第Ⅲ-78 図 試掘坑断面図 ズケ 25- F 2- シ (北壁・東壁)



第Ⅲ-79 図 沖縄産施釉陶器：灰釉碗 (27)、
陶質土器：急須 (28)

図版Ⅲ-24 沖縄産施釉陶器：灰釉碗 (27)、
陶質土器：急須 (28)、黒曜石 (29)



30



第Ⅲ-80 図 石器：磨石（30）



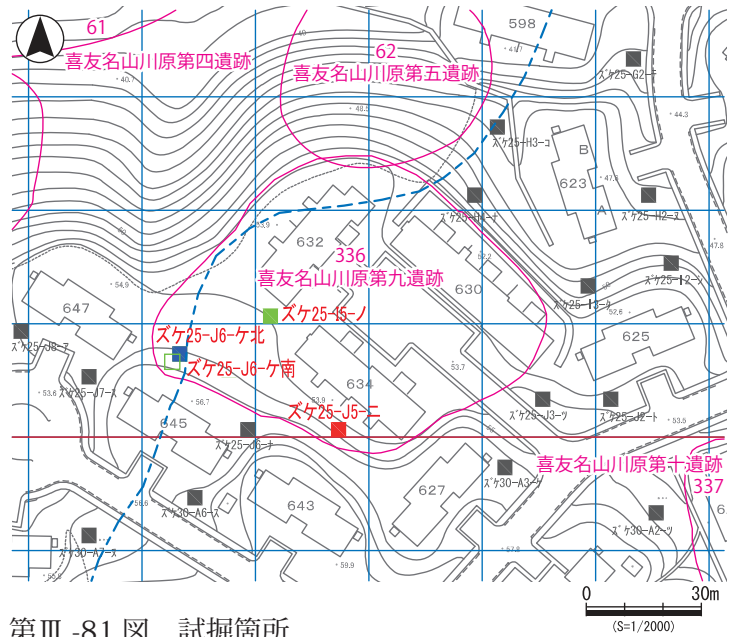
30

図版Ⅲ-25 石器：磨石（30）

第6節 喜友名山川原第九遺跡

喜友名地区の小字山川原に所在する。平成27年度に実施した試掘調査によって新規で発見された遺跡である。当遺跡北側の崖面には喜友名山川原第五遺跡、喜友名山川原古墓群が所在する。

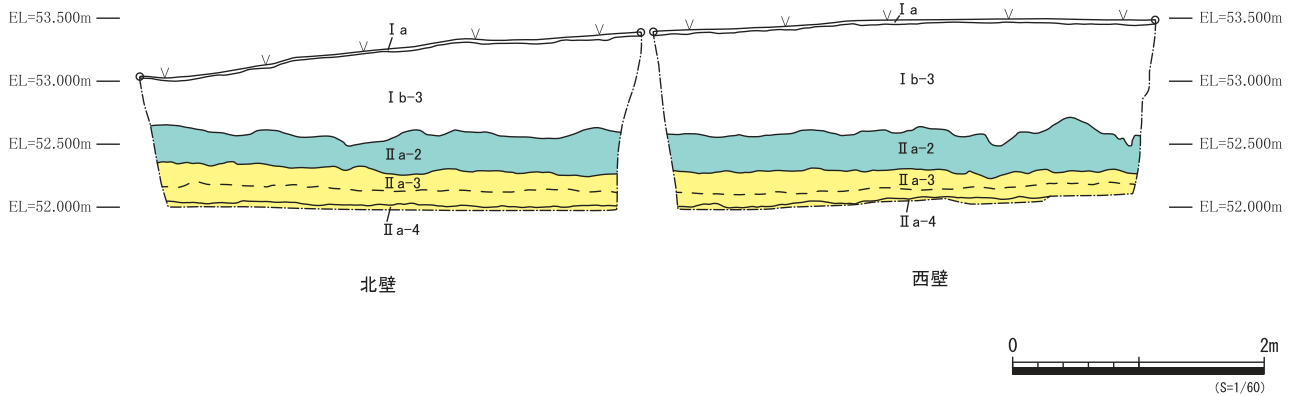
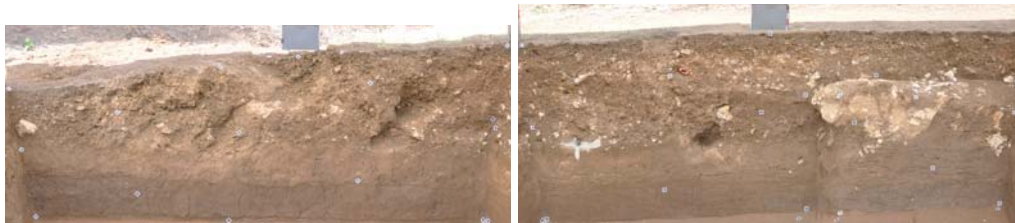
試掘坑は建物を避けて配置したため、南西側での実施となった。想定される遺跡の範囲としては、試掘坑を設定できなかった西側に大きく広げている。戦前の航空写真(S20年)を見ると遺跡の中心から東側は小高い丘になっており、恐らく北側の丘陵が舌状に伸びていたと推測され、戦後米軍の造成により岩盤もろとも削平されたと思われる。



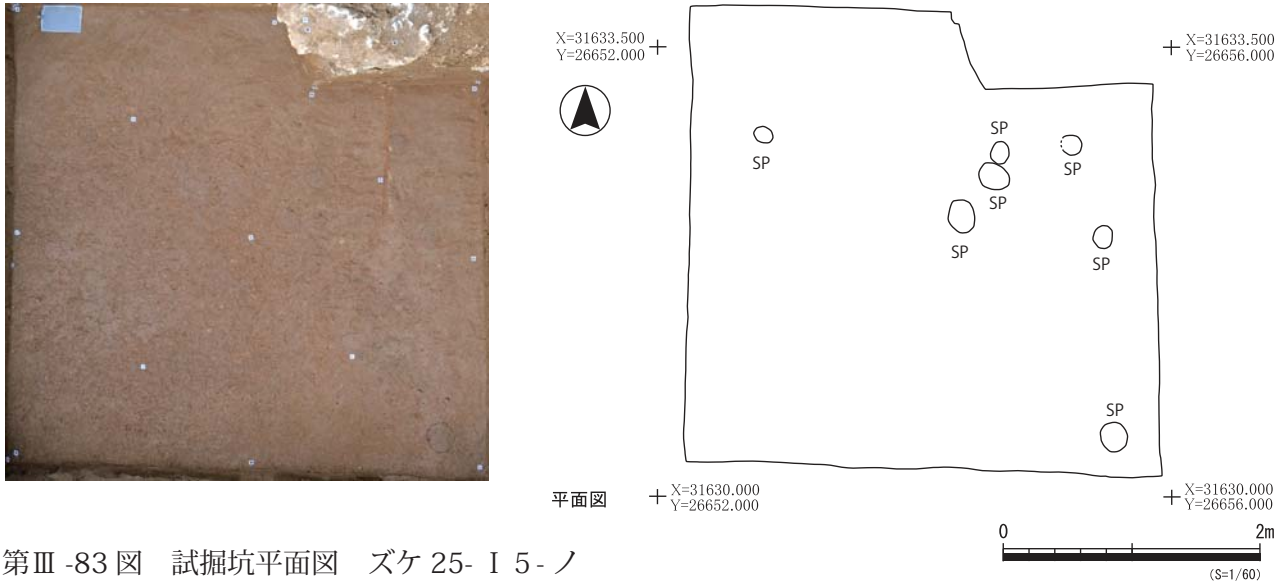
第Ⅲ-81 図 試掘箇所

(1) ズケ25-I5-ノ

掘削深度約1.4mで、表層を含め4枚に細分。最下層においてピットを7基検出した。また、細片ではあるが土器が出土している。マージ層は確認されていない。現地表面から50～90cmほど造成土が堆積し、遺構面である最下層はグスク時代またはそれ以前まで遡ると推測される。



第Ⅲ-82 図 試掘坑断面図 ズケ25-I5-ノ (西壁・北壁)



第Ⅲ-83 図 試掘坑平面図 ズケ 25- I 5- ノ

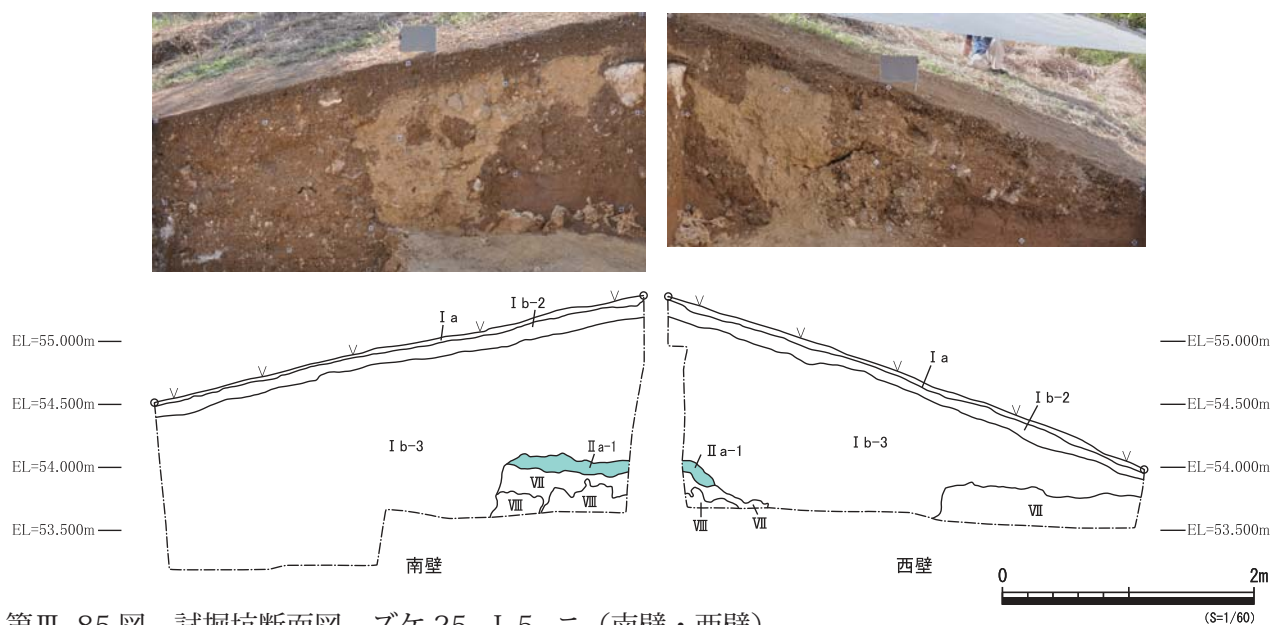


第Ⅲ-84 図 沖縄産無釉陶器：(31)

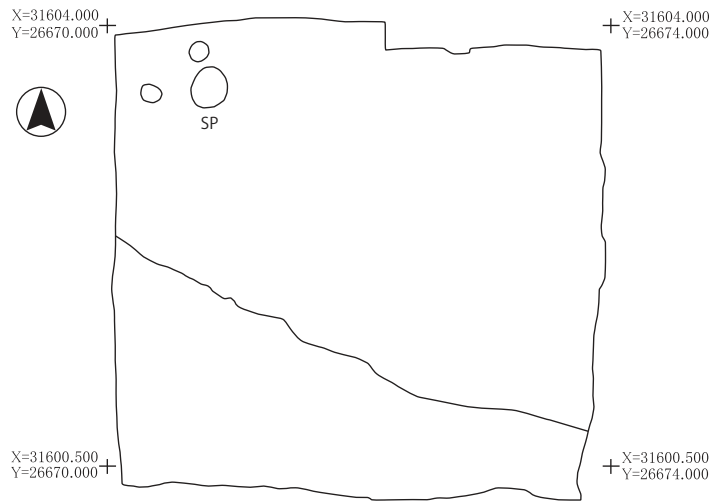
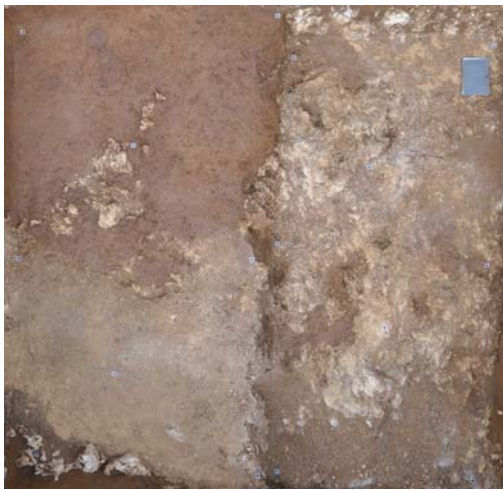
図版Ⅲ-26 沖縄産無釉陶器：(31)

(2) ズケ 25- J 5- 二

掘削深度約 1.6m、堆積層は 4 枚に細分した。下層の 2 枚は、マージ層と岩盤である。マージ層上面は削平されているが、平面でピットを 1 基検出した。上層は戦後の造成土となっている。遺物は攪乱土中より青花の細片が 1 点と石器（破片）が 1 点得られている。

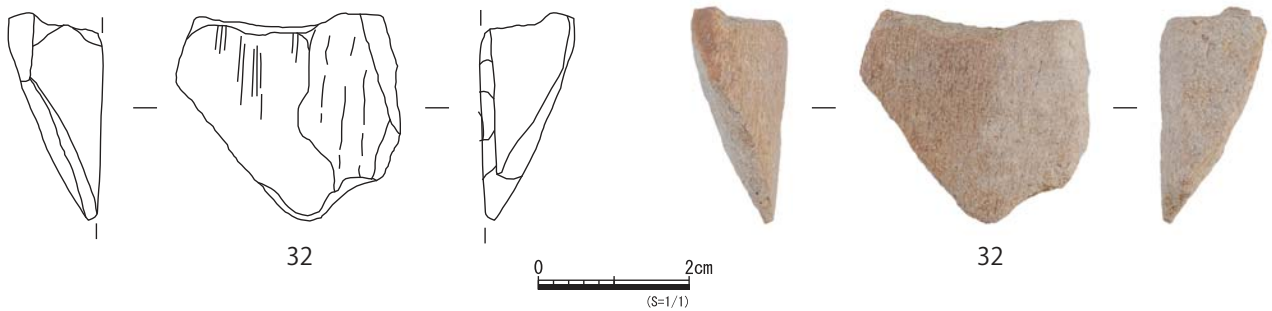


第Ⅲ-85 図 試掘坑断面図 ズケ 25- J 5- 二 (南壁・西壁)



第Ⅲ-86 図 試掘坑平面図 ズケ 25- J 5- ニ

平面図

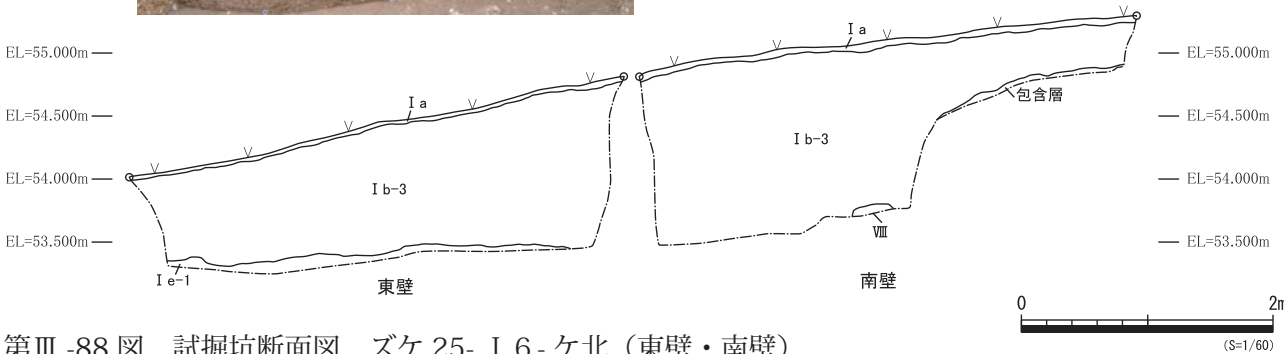


第Ⅲ-87 図 石器：磨石 (32)

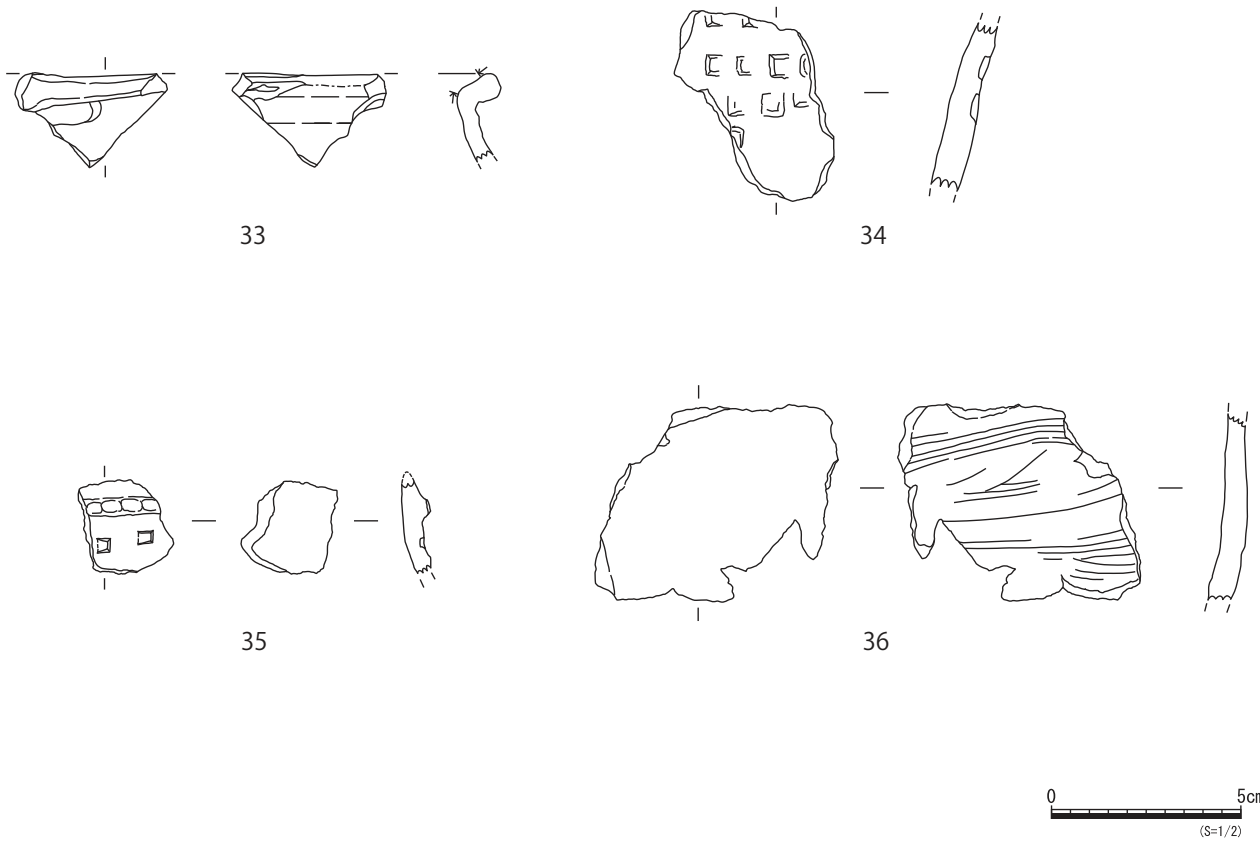
図版Ⅲ-27 石器：磨石 (32)

(3) ズケ 25- J 6- ケ北

掘削深度約 1.5m、3 枚に細分。最下層は石灰岩岩盤でその岩盤に張り付くように薄く黒褐色の包含層が堆積していた。この層は細かな土器片を含む先史相当の包含層と推測された。北側は岩盤が大きく削平され、切り石が一つ確認された。想定するに古墓の一部が残存したのかと思われるが、面影はない。



第Ⅲ-88 図 試掘坑断面図 ズケ 25- J 6- ケ北 (東壁・南壁)



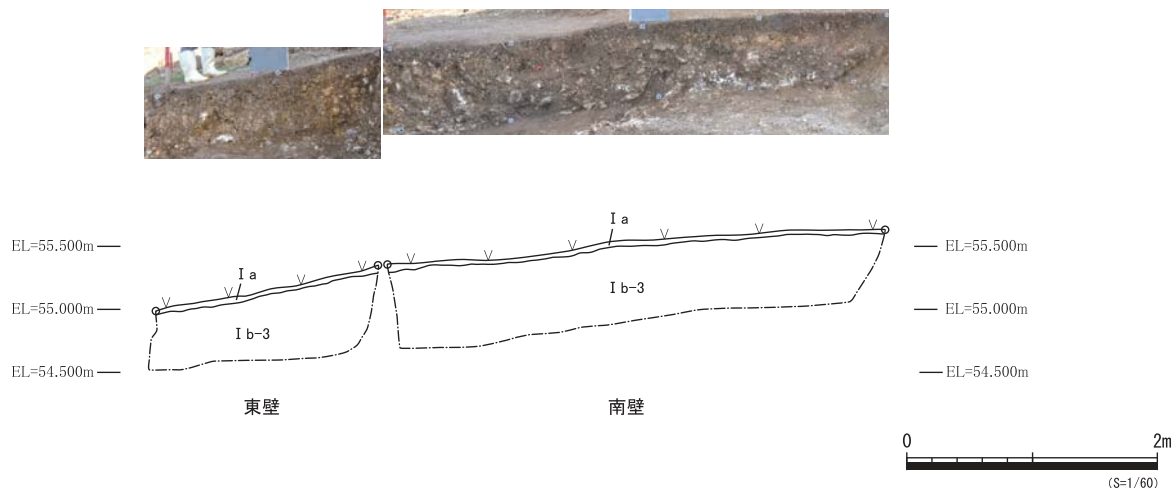
第Ⅲ-89 図 沖縄産施釉陶器：鍋（33）、土器（34～36）



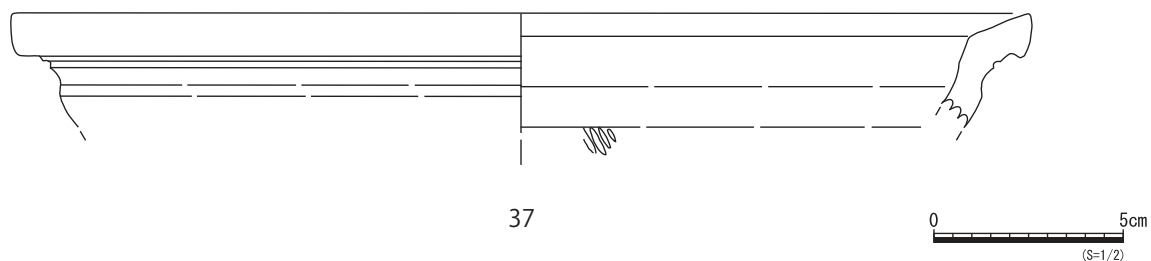
図版Ⅲ-28 沖縄産施釉陶器：鍋（33）、土器（34～36）

(4) ズケ 25- J 6- ケ南

掘削深度約 0.6m。J6- ケ北の包含層の広がりを確認するために設定。遺構はなく、薄く岩盤に沿って黒褐色土が堆積している。南側は大きく削れており、広がりを確認できなかった。また、西側についても現地形が削平された状態であり、岩盤が露出していることから広がりはないものと想定される。



第Ⅲ -90 図 試掘坑断面図 ズケ 25- J 6- ケ南 (東壁・南壁)



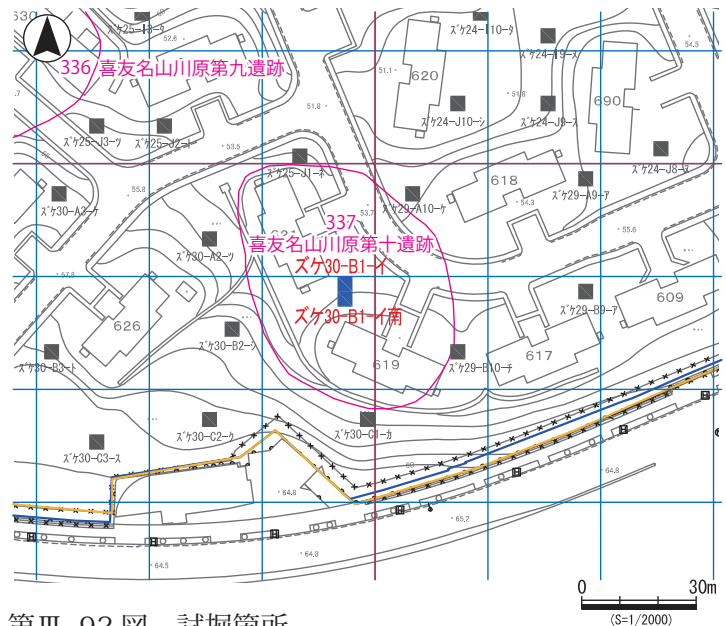
第Ⅲ -91 図 沖縄産無釉陶器：播鉢 (37) ズケ 25- J 6- ナ



図版Ⅲ -29 沖縄産無釉陶器：播鉢 (37) ズケ 25- J 6- ナ

第7節 喜友名山川原第十遺跡

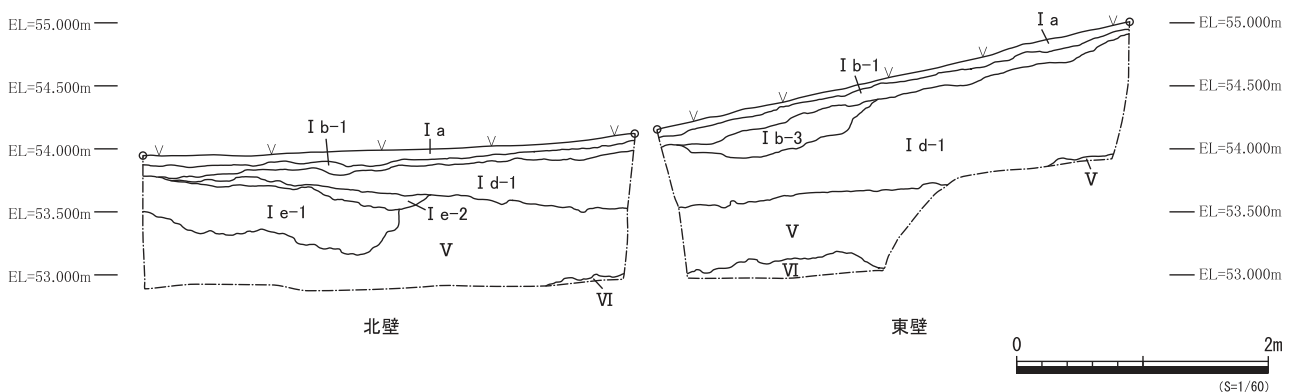
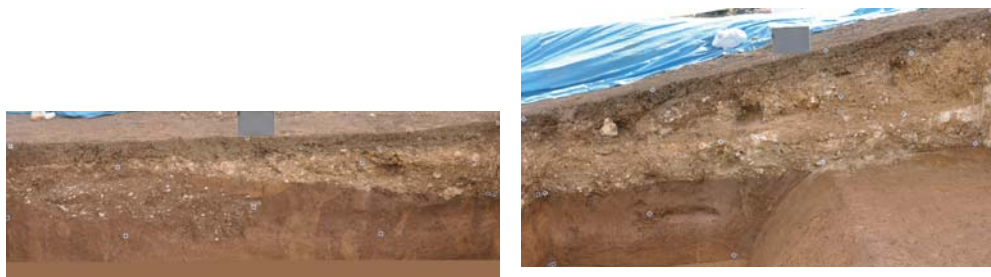
喜友名地区小字山川原に所在する。平成27年度に実施した試掘調査によって新規で発見された遺跡である。遺跡は県道81号線から30mほど北側に位置する場所にあり、試掘調査の結果、数段の切石による石積みとマーヅ層を掘り込んで形成された暗渠と思われる遺構を検出した。周囲に設定した試掘坑では岩盤が削平されている状況が確認された。特に南側の県道81号線とは高低差が8m以上あり、米軍による大規模な地形改変で旧地形は消失しているものと推測される。



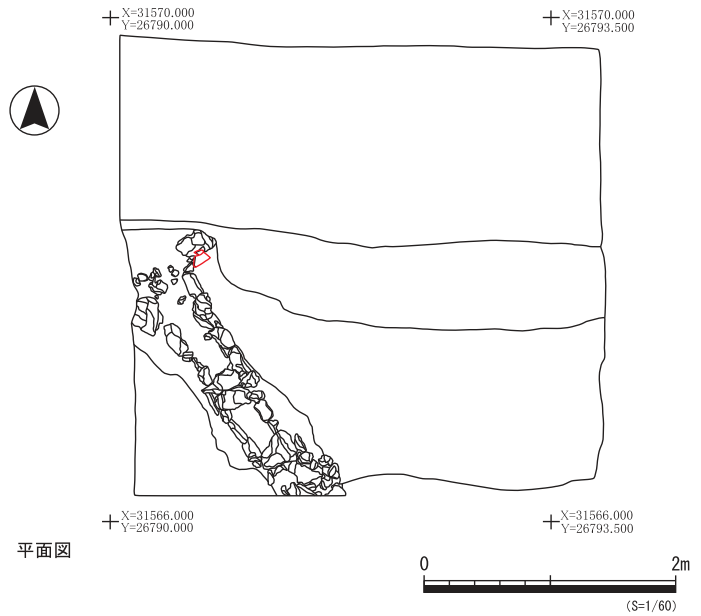
第Ⅲ-92図 試掘箇所

(1) ズケ30-B1-イ

掘削深度約1.6m、3枚に細分。I層は表土層で、2枚目以下はマーヅ層である。現地表面から40cmほどでマーヅ層を確認。このマーヅ層を掘り込む形で作られた石組遺構が検出された。この石組遺構は幅40cmを呈し、掘り込んだマーヅ層の両側に平たい石を立てて並べ、一部で蓋状に配置された石も確認された。これらの形状から暗渠と想定されたが、内部には土砂が堆積し、完全に埋没している状況であった。蓋石も全面にあるわけではなく、詳細については不明であった。広がりを確認するため、南側に隣接して同規模の試掘坑を設定した。



第Ⅲ-93図 試掘坑断面図 ズケ30-B1-イ (北壁・東壁)



第Ⅲ -94 図 試掘坑平面図 ズケ 30- B 1 - イ

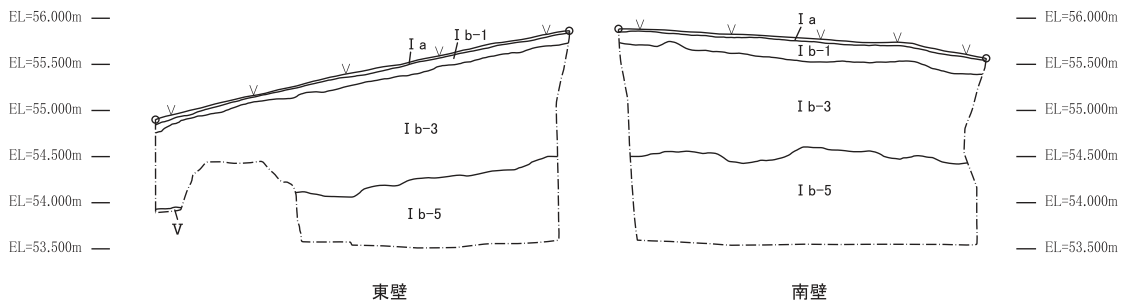


第Ⅲ -95 図 カムィヤキ? (38)

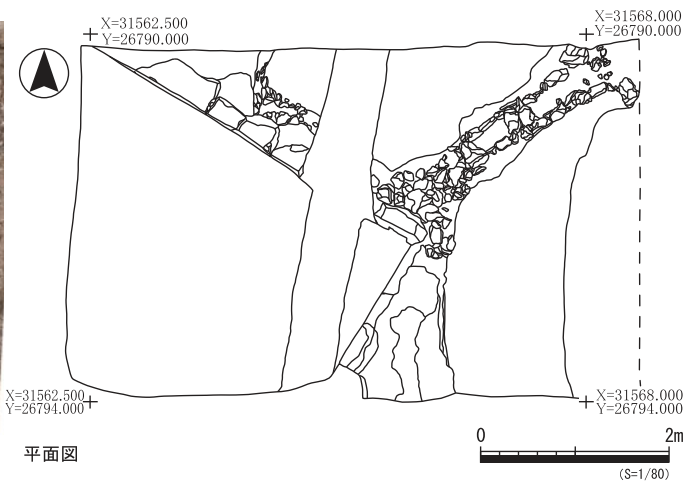
図版Ⅲ -30 カムィヤキ? (38)

(2) ズケ 30- B 1 - イ南

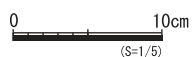
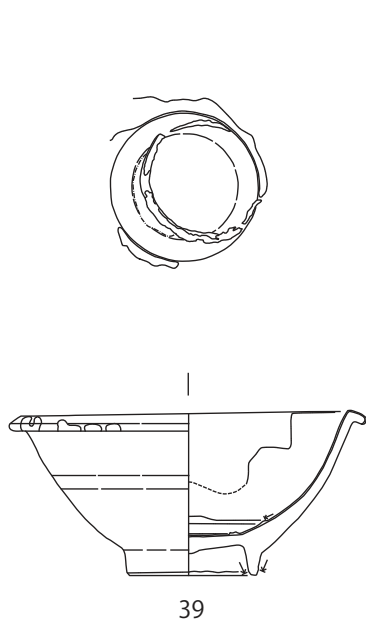
上述した暗渠に繋がる石積を確認。石積はL字状に配置され、暗渠は石積の角に接続している。試掘坑の外側に石積が広がっているが、全体は不明。マージ層を掘り込んで石を配置しており、内側向きに面を持つ。覆土は攪乱土が厚く堆積。出土遺物から近代相当と推定される。調査時点で想定していた構造物としては、石積表面にモルタルが塗布されていたことから、畑等に利用する為の貯水槽かと思われた。



第Ⅲ -96 図 試掘坑断面図 ズケ 30- B 1 - イ南 (東壁・南壁)

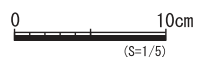
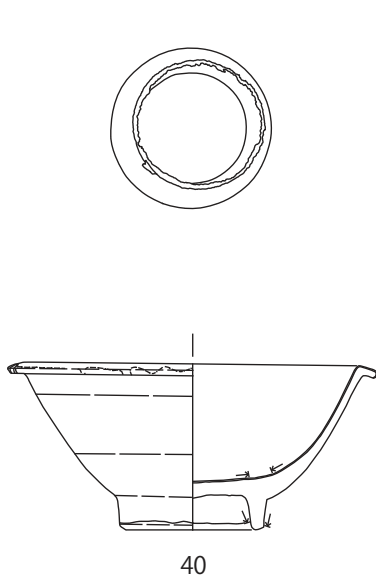


第Ⅲ-97 図 試掘坑平面図 ズケ 30- B 1 - イ南



第Ⅲ-98 図 沖縄産施釉陶器:鉢〔ワンプー〕(39)

図版Ⅲ-31 沖縄産施釉陶器:鉢〔ワンプー〕(39)

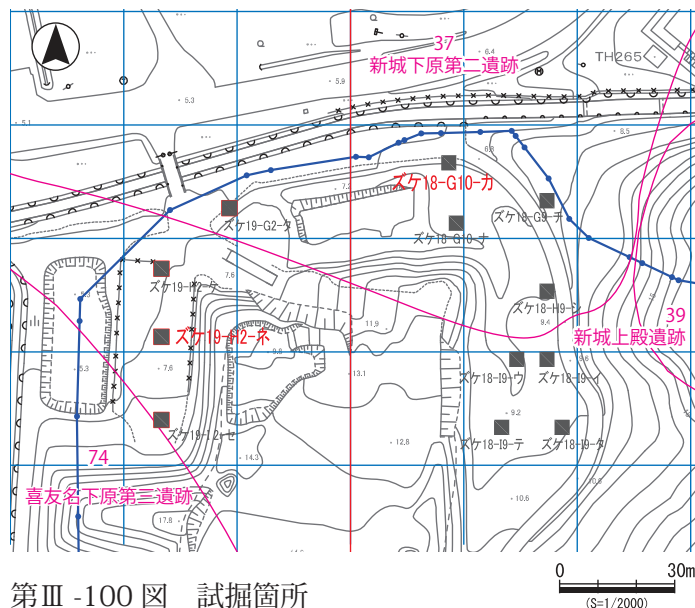


第Ⅲ-99 図 沖縄産施釉陶器:鉢〔ワンプー〕(40)

図版Ⅲ-32 沖縄産施釉陶器:鉢〔ワンプー〕(40)

第8節 新城下原第二遺跡

新城下原第二遺跡の試掘調査は平成27年度に実施した。調査区一帯は、東側から流れる湧水の影響で地盤が軟らかくなっており、掘削による水の湧き出しが懸念された。調査を開始したところ、懸念されたとおり、地表下約1mレベルにおいて壁面から水が染み出して試掘坑内は常に水が溜まるという状態であった。幸いに水は常時染み出しているものの、湧き出すほどではなかったことから、試掘坑の片側を重機によって深掘りし、水の影響を最小限に抑えながら調査を続行した。結果として遺構等は確認されなかったが、水量豊富な一帯は、戦前まで水田として利用された場所であり、沖縄県教育委



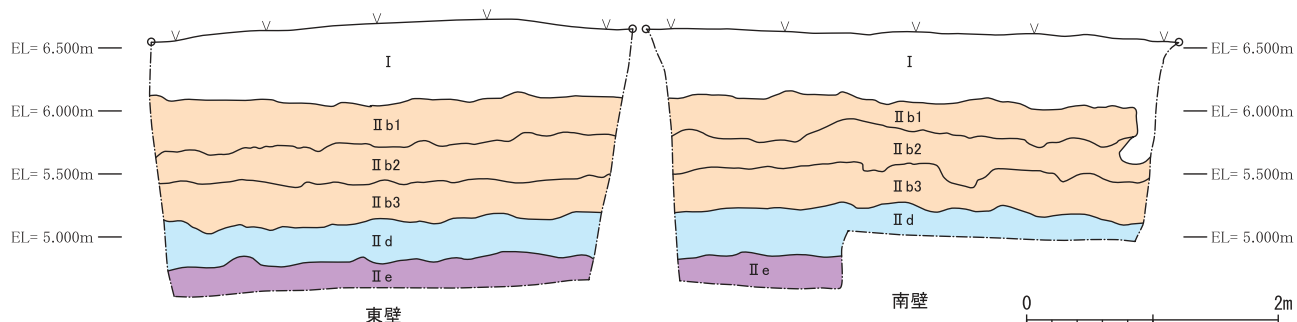
第三-100 図 試掘箇所

員会が平成11年度から平成16年度にかけて近接地で実施した同遺跡の発掘調査では、グスク時代の水田跡や貝塚時代後期の貝集積遺構、貝塚早期の爪形文土器など多数の文化財が確認されている（註1）。

本遺跡の包蔵地の範囲は、一部が当該地区の北端まで広がっていることが想定されているが、遺跡の本体は過年度の調査成果及び周辺地形から察するに、イシジャーから流れる河川（現排水路）の北側、現在のキャンプ瑞慶覧内にいまだ地下に埋もれた状態で残存するものと思われる。グスク時代相当に比定される水田等もこの河川を利用（灌漑）していたものと思われる（註2）。

(1) ズケ18-G10-カ

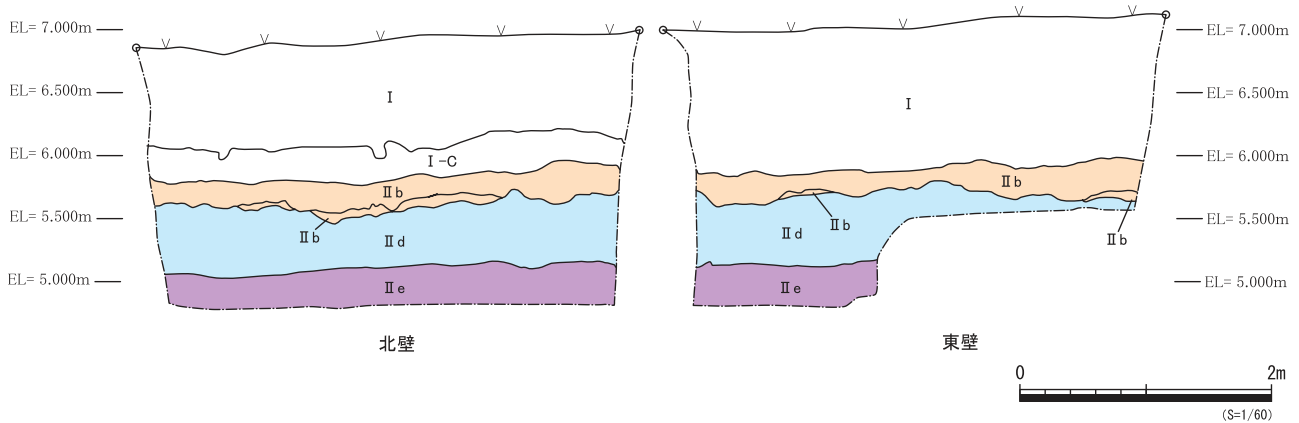
掘削深度約2.0m、II層は5枚に細分。各層厚は薄く、20ないし30cm程度であり、水平堆積を呈している。上層は近世または近代相当の水田層と考えられる。最下層は砂の混じりが少ないことや炭化物、焼土が確認できないことから自然堆積層と思われるが、整地層（人為的な堆積）の可能性も考えられる。



第三-101 図 試掘坑断面図 ズケ18-G10-カ（東壁・南壁）

(2) ズケ 19-H2-ネ

掘削深度約2 m (4 m)。Ⅱ層は6枚に細分。Ⅱ a～b層は近世から近代相当の水田層と思われ、Ⅱ d層はグスク時代相当の水田層が想定される。直上にⅡ c層(間層)の砂質シルトが堆積する。本試掘坑では、記録後に重機によって下層確認をおこない、表層より4 m下部において木片が確認された。過年度に県が実施した調査では、これと類似する木材出土層が確認されており、その下位から爪形文土器等が出土している。



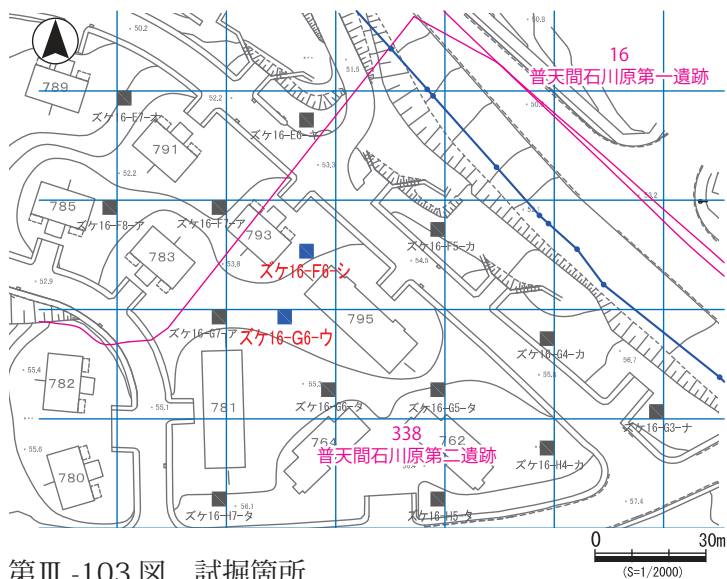
第Ⅲ -102 図 試掘坑断面図 ズケ 19-H2-ネ (北壁・東壁)

註1：沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第35集 『新城下原第二遺跡—キャンプ瑞慶覧内整備工場建設に係る緊急発掘調査報告—』沖縄県立埋蔵文化財センター 平成18(2006)年3月

註2：宜野湾市文化財保護資料第62集 『=瑞慶覧地区文化財保護マスタープラン策定調査事業=瑞慶覧地区再現検討調査業務報告書』沖縄県宜野湾市教育委員会 平成17(2005)年3月

第9節 普天間石川原第二遺跡

普天間石川原第二遺跡の試掘調査は平成26年度に実施した。試掘調査を実施する前は、米軍の住宅地区として利用されていた場所であり、これまで文化財調査が実施されていない未調査区域であった。第I章に記載したように平成25年度に当該地区の返還が決まり、跡地利用計画の策定を見据えて早期に文化財の有無を把握する必要性が生じ、返還前から試掘調査が実施できるように沖縄防衛局をはじめ関係部局と調整し、平成26年8月に米軍より掘削を含む文化財調査の許可を受けて調査を開始した。

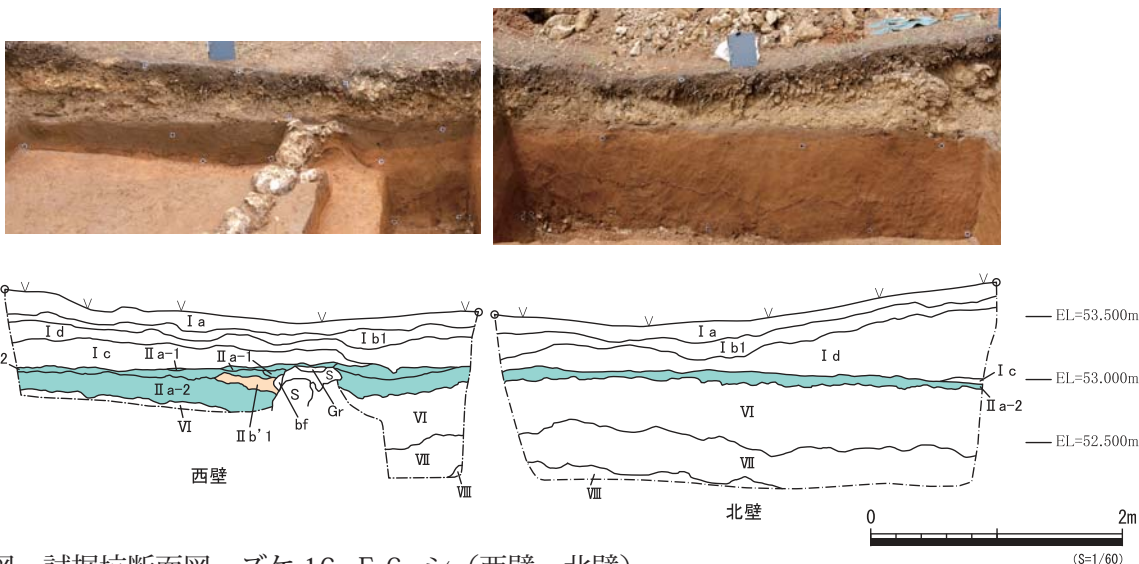


第III -103 図 試掘箇所

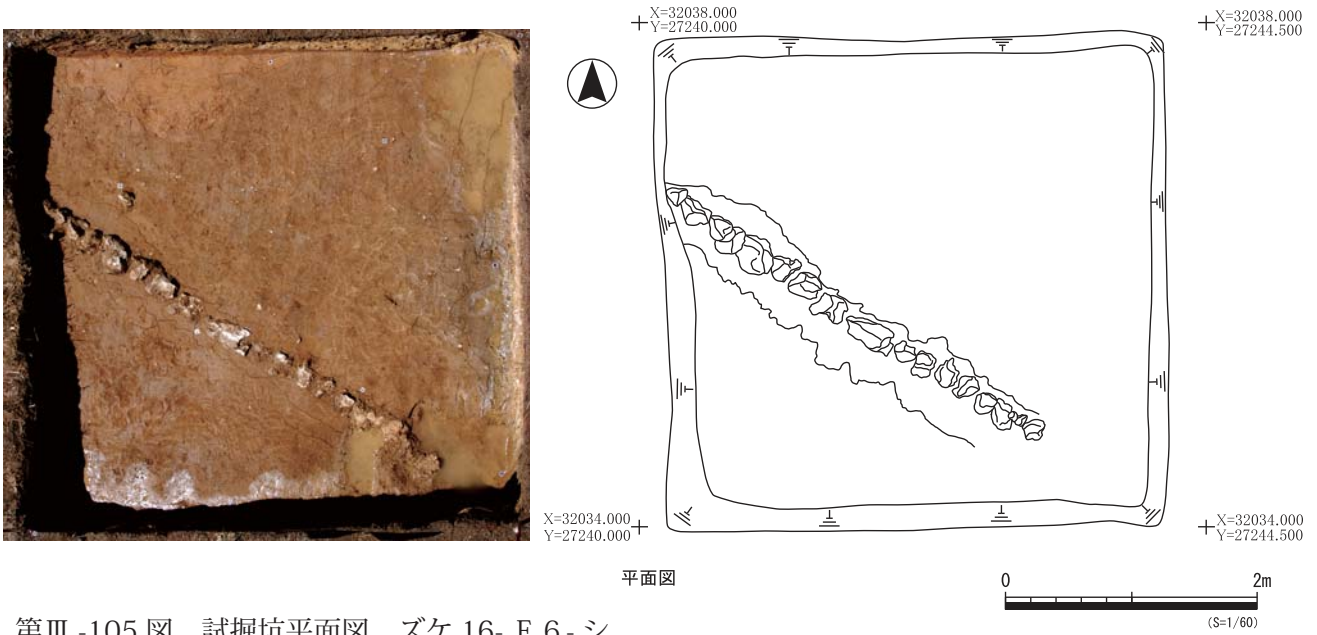
調査は8月15日から開始されたが、試掘調査中に油臭や油分が確認され、8月22日にズケ16-H5-タよりドラム缶が検出された。これにより、土壌汚染の調査を必要とされたことから調査を一時中断することとなった。この間、都合22箇所の試掘調査を実施している。その後、沖縄防衛局により土壌分析調査が実施され、同年12月の調査報告では即人体に影響を及ぼす汚染は確認されなかった。この調査結果を受けて、市教育委員会では関係部署と協議調整を図り、平成27年2月に調査を再開した。調査地は当初予定地からイシジャーを挟んで西側のベースボールコート一帯（新城上殿遺跡近傍）に再配点しておこなった。その後、平成27年度に当市より依頼を受けた県立埋蔵文化財センターによって試掘調査が行われ、広範囲に遺跡が残存している状況が把握された。

(1) ズケ16-F6-シ

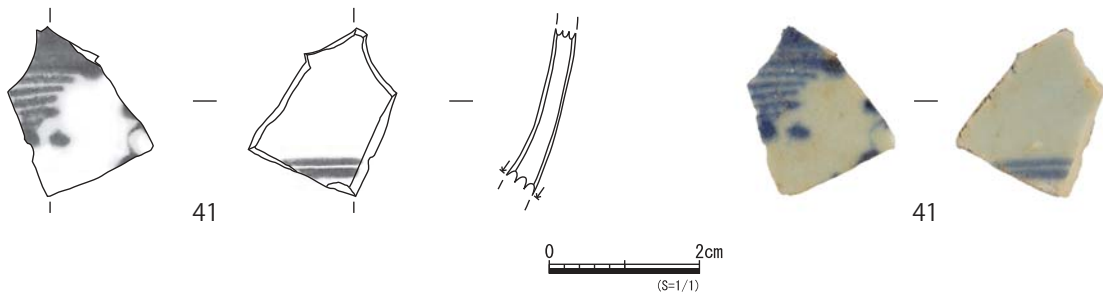
平成26年度調査にて実施。現地表面から約1.5mで石灰岩岩盤を検出。米軍造成層とマージ層の間に近代相当の耕作土（II層）が堆積。上部は米軍により削平され、層厚は10cm以下である。南東-北西方向に石列（20cm前後の未加工の石灰岩礫を並べたもの）を配置しており、耕作に関連した遺構と思われる。



第III -104 図 試掘坑断面図 ズケ16-F6-シ（西壁・北壁）



第Ⅲ-105 図 試掘坑平面図 ズケ 16- F 6- シ

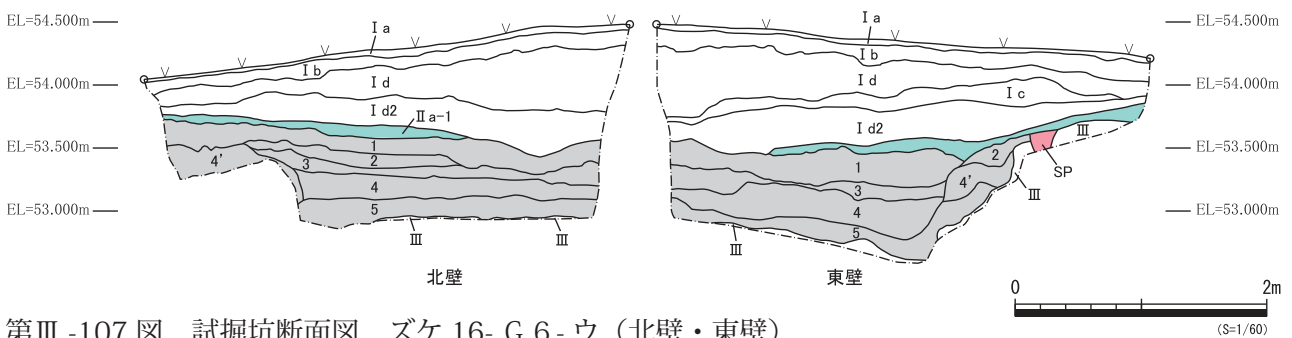


第Ⅲ-106 図 青花：碗（41）

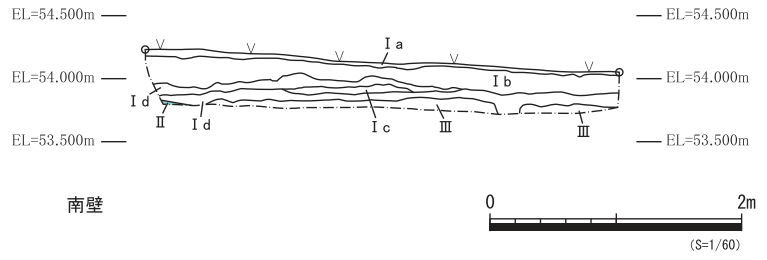
図版Ⅲ-33 青花：碗（41）

(2) ズケ 16- G 6- ウ

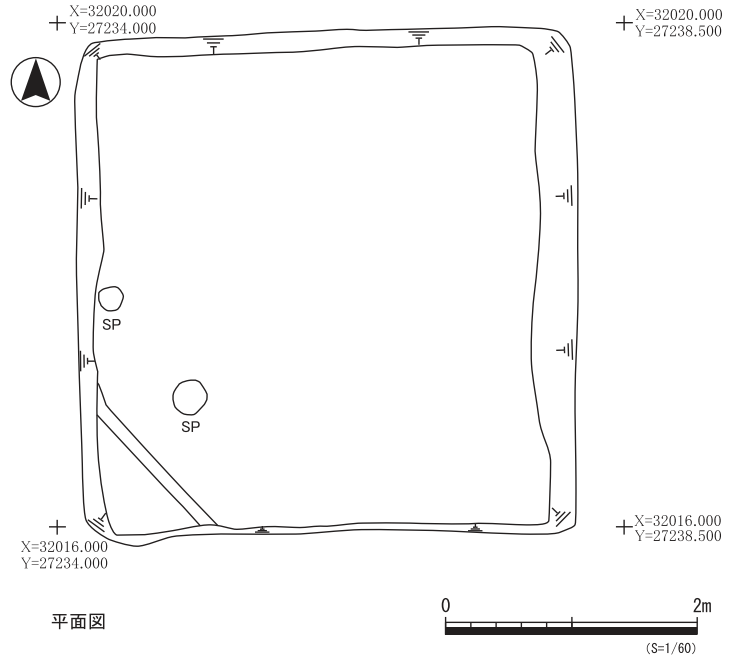
平成 26 年度調査にて実施。北東側に性格不明の落ち込みや南東側に複数のピットを確認。出土遺物から近世・近代相当の遺構を思われる。落ち込みについては調査区が矮小であったため全形は不明であり、溝の可能性も考えられる。溝であれば北西-南東方向に軸を持つと思われる。



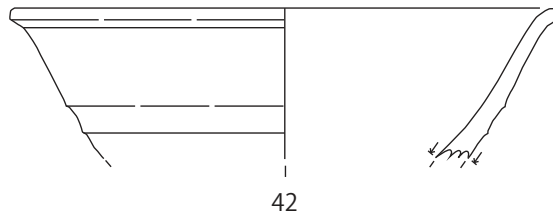
第Ⅲ-107 図 試掘坑断面図 ズケ 16- G 6- ウ（北壁・東壁）



第Ⅲ -108 図 試掘坑断面図 ズケ 16- G 6- ウ (南壁)



第Ⅲ -109 図 試掘坑平面図 ズケ 16- G 6- ウ



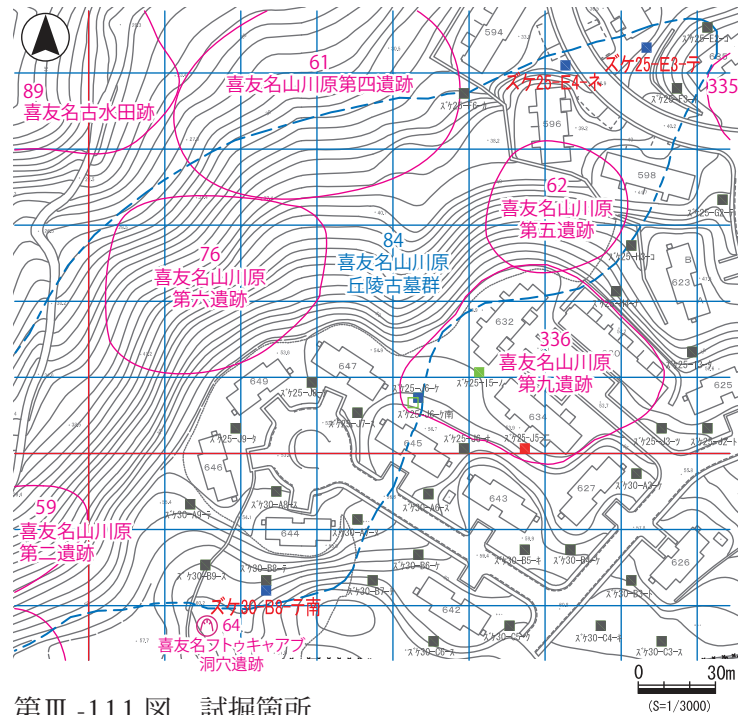
第Ⅲ -110 図 沖縄産施釉陶器：碗（42）



図版Ⅲ -34 沖縄産施釉陶器：碗（42）

第10節 喜友名山川原丘陵古墓群

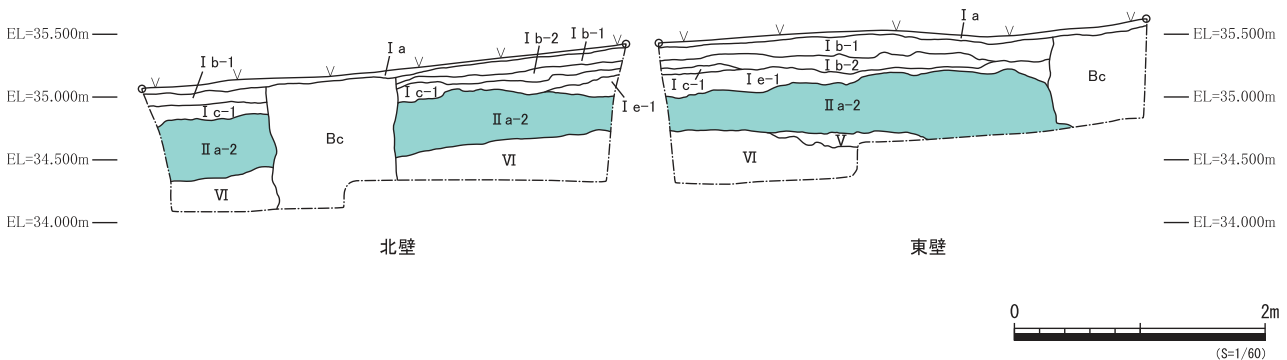
喜友名山川原丘陵古墓群は、当該地区ハウジングエリアの西側、標高 50~60m の急峻な斜面ないし断崖に形成される遺跡である。1983 年から 1984 年にかけて市教育委員会による緊急発掘調査が行われ、喜友名山川原第五遺跡と重なる部分（ヤファレーグーフと呼ばれる海拔約 56m の丘陵）において 25 基の掘込墓が確認されている。また、同調査によって近隣地より 6 基の古墓も確認され、計 31 基が確認されている（註1）。平成 27 年度に実施した試掘調査において、近接するハウジングエリア内より米軍の造成工事によって埋没したと思われる古墓が確認されたことから、当該古墓の範囲が南側に広がる事が判明した。なお、今回調査で新たに発見された古墓は、内部に蔵骨器などはなく、既に改葬されたものと思われる。



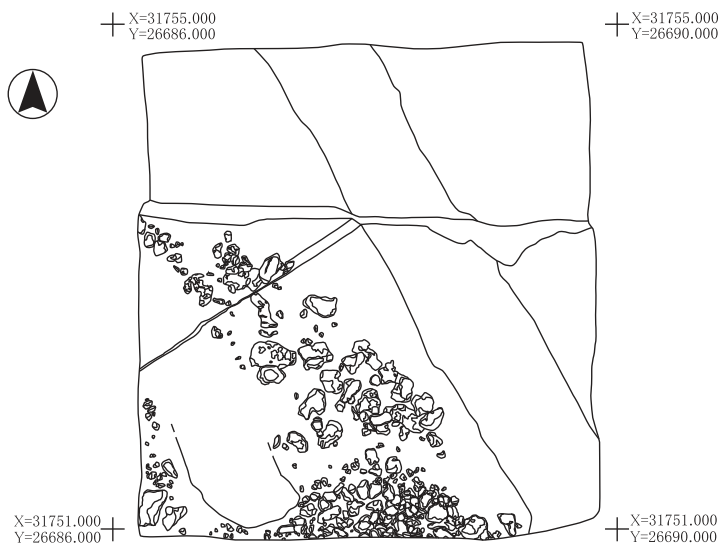
第Ⅲ -111 図 試掘箇所

(1) ズケ 25- E 4- ネ

地表面から約 50 cm レベルで地山を確認。米軍造成層との間に近世～近代相当の耕作層が堆積し、集石遺構を検出。北西－南東方向に向かって傾斜地形を横断するように石を配置。東側の立ち上がりは明瞭だが、西側はなだらかに下がる。石の大きさは 10 ～ 20 cm 大で様々。畑の区画あるいは土留めの可能性が考えられる。遺物は本土産磁器が出土している。



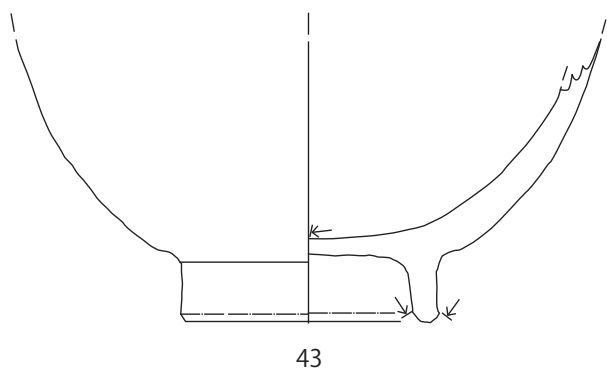
第Ⅲ -112 図 試掘坑断面図 ズケ 25- E 4- ネ (北壁・東壁)



平面図



第Ⅲ -113 図 試掘坑平面図 ズケ 25- E 4- ネ

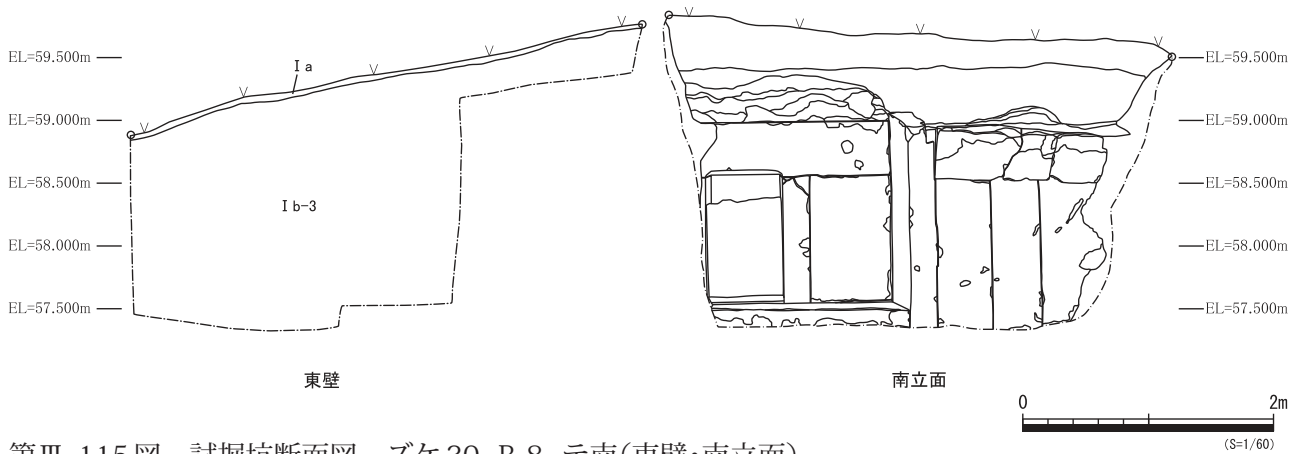


第Ⅲ -114 図 本土産磁器：杯（43）

図版Ⅲ -35 本土産磁器：杯（43）

(2) ズケ30-B8-テ南

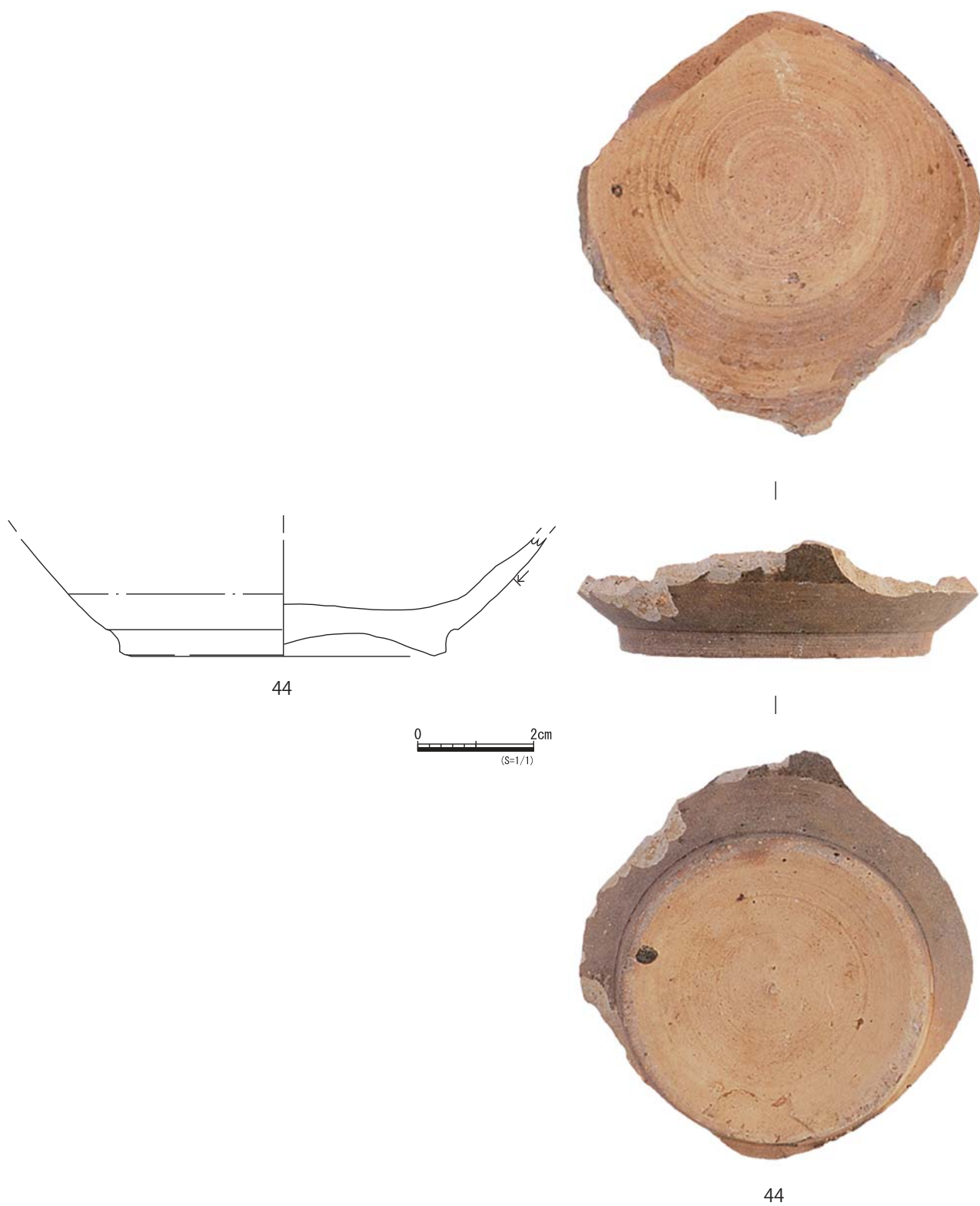
完全に埋没していたところ、平成27年度の試掘調査で発見された。天井部は削平され、内部には土砂が堆積する。石灰岩を掘り込んで形成されており、正面は切石を組み合わせて形成される。上部が削平されているため、本来の形態は不明。墓口は東側を向く。



第Ⅲ-115図 試掘坑断面図 ズケ30-B8-テ南(東壁・南立面)



第Ⅲ-116図 試掘坑平面図 ズケ30-B8-テ南

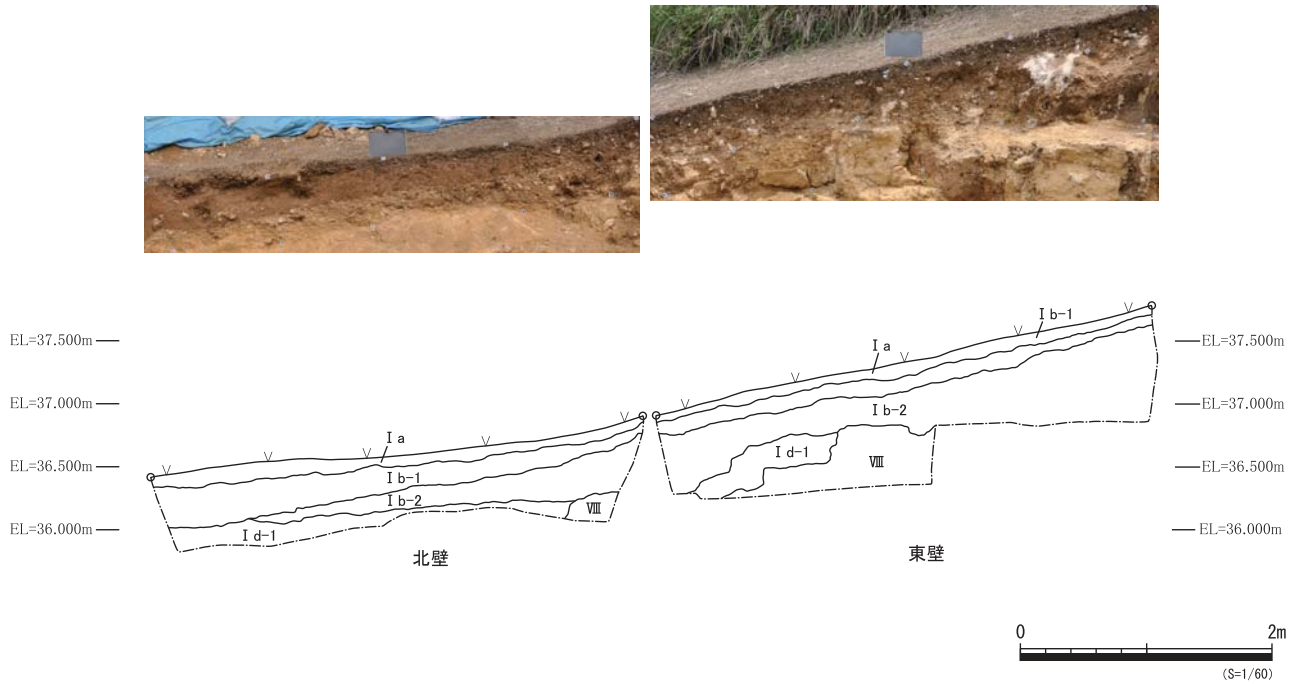


第Ⅲ -117 図 沖縄産施釉陶器：瓶（44）

図版Ⅲ -36 沖縄産施釉陶器：瓶（44）

(3) ズケ 25- E 3- テ

完全埋没。天井部含め、全体的に上部は削平されている。内部には土砂が堆積。蔵骨器等は確認できないことから、すでに改葬済みと思われる。北東側の丘陵を背に墓口は南西側を向いている。



第Ⅲ -118 図 試掘坑断面図 ズケ 25- E 3- テ (北壁・東壁)



第Ⅲ -119 図 試掘坑平面図 25- E 3- テ

註1：宜野湾市文化財調査報告書第5集 『喜友名遺跡群』 宜野湾市教育委員会 1984年

第Ⅲ - 1 - 1 表 平成 26 年度 西普天間試掘成果一覧

No.	グリット名	規格 (m)	座標			調査 壁面	遺跡名	層位 (m)	掘削 深度 (m)	岩盤	備考1	報告
			X	Y	標高 (m)							
1	ス'ケ16-G3-ナ	4×4	31990.000	27340.000	56.400	東・南	普天間石川原第二遺跡	I層: (0~1.5) Ⅷ層: 岩盤(0.9)	1.5	○	岩盤が削平され、上層に造成土が堆積	
2	ス'ケ16-G4-カ	4×4	32010.000	27310.000	55.700	東・南	普天間石川原第二遺跡	I層: (0~0.9) Ⅷ層: 岩盤(0.7)	1.3	○	岩盤が削平され、上層に造成土が堆積	
3	ス'ケ16-H4-カ	4×4	31984.000	27310.000	57.000	北・東	普天間石川原第二遺跡	I層: (0~0.4) Ⅷ層: 岩盤(0.5)	0.6	○	岩盤が削平され、上層に造成土が堆積	
4	ス'ケ16-F5-カ	4×4	32044.000	27280.000	54.000	北・東	普天間石川原第二遺跡				油分・油臭確認	
5	ス'ケ16-G5-タ	4×4	31996.000	27280.000	56.000	東・南	普天間石川原第二遺跡				油分・油臭確認	
6	ス'ケ16-H5-タ	4×4	31996.000	27280.000	57.000	東・南	普天間石川原第二遺跡				ドラム缶等	
7	ス'ケ16-E6-キ	4×4	32074.000	27240.000	52.500	北・西		I層: Ⅵ層: Ⅶ層: Ⅷ層: 岩盤	1.8	○		
8	ス'ケ16-F6-シ	4×4	32038.000	27240.000	53.500	北・西	普天間石川原第二遺跡	I層: (0~0.5) Ⅱ層: (0.4~0.7) Ⅵ層: (0.5~1.0) Ⅶ層: (0.9~1.2) Ⅷ層: 岩盤(1.1)	1.5	○	近代耕作土及び石列遺構を検出	○
9	ス'ケ16-G6-ウ	4×4	32016.000	27238.000	54.500	東・南	普天間石川原第二遺跡	I層: (0~0.8) Ⅱ層: (0.9~1.5) Ⅲ層: (0.3)	1.7	○	ピット2基。近世~近代相当	○
10	ス'ケ16-G6-タ	4×4	31996.000	27250.000	55.300	東・南	普天間石川原第二遺跡				油分・油臭確認	
11	ス'ケ16-C7-ソ	4×4	32128.000	27196.000	46.600	北・東		I層: Ⅵ層: Ⅶ層: Ⅷ層: 岩盤	2.5	○		
12	ス'ケ16-D7-イ	4×4	32110.000	27214.000	50.100	北・東		I層: (0~3.0)	3.0	○		
13	ス'ケ16-D7-オ	4×4	32108.000	27196.000	48.600	北・東		I層: (0~1.9) Ⅷ層: 岩盤(1.6)	1.9	○	岩盤削平	
14	ス'ケ16-E7-オ	4×4	32080.000	27193.000	51.100	北・東		I層: (0~0.8) Ⅷ層: 岩盤(0.7)	1.5	○	岩盤削平	
15	ス'ケ16-F7-ア	4×4	32050.000	27220.000	53.300	北・東		I層: (0~0.4) Ⅶ層: (0.3~0.4) Ⅷ層: 岩盤(0.3)	0.5	○	マーヅ層及び岩盤削平	
16	ス'ケ16-G7-ア	4×4	32020.000	27220.000	55.000	東・南	普天間石川原第二遺跡	I層: (0~0.7) Ⅴ層: (0.9~1.4) Ⅵ層: (1.3~2.0) Ⅶ層: (1.6~2.2)	2.2	×	マーヅ層削平	
17	ス'ケ16-H7-タ	4×4	31970.000	27220.000	55.800	北・東	普天間石川原第二遺跡	I層: (0~1.0) Ⅵ層: (0.9~)	1.1	×	マーヅ層削平	
18	ス'ケ16-F8-ア	4×4	32050.000	27190.000	52.800	北・東		I層: (0~0.4) Ⅷ層: 岩盤(0.3)	0.5	○	岩盤削平	
19	ス'ケ16-D9-サ	4×4	32098.000	27160.000	49.300	北・東		I層: (0~1.0) Ⅱ層: (0.4~0.5)	1.0	○	岩盤削平	
20	ス'ケ16-D9-ヌ	4×4	32084.000	27142.000	50.100	北・西		I層: (0~0.4) Ⅷ層: 岩盤(0.4)	0.5	○	岩盤削平	
21	ス'ケ16-E9-ア	4×4	32080.000	27160.000	49.800	北・東		I層: (0~1.3) Ⅷ層: 岩盤(0.8)	1.3	○	岩盤削平	
22	ス'ケ16-F9-ア	4×4	32050.000	27160.000	52.900	北・東		I層: (0~0.4) Ⅷ層: 岩盤(0.4)		○		
23	ス'ケ17-H7-コ	4×4	31984.000	26896.000	39.500	北・東		I層: (0~3.2)	3.2	×		
24	ス'ケ17-H9-ア	4×4	31990.000	26860.000	39.800	東・南		I層: (0~0.9) Ⅷ層: 岩盤(0.6)	1.2	○	岩盤削平	
25	ス'ケ17-H10-サ	4×4	31978.000	26826.000	40.600	北・西		I層: (0~0.3) Ⅶ層: (0.3)	0.4	○	岩盤削平	
26	ス'ケ17-H10-ア	4×4	31960.000	26830.000	41.100	北・西		I層: (0~1.4) Ⅷ層: 岩盤(0.9)	1.4	○	岩盤削平	
27	ス'ケ17-J10-コ	4×4	31922.000	26804.000	40.400	北・東	新城大道原第一遺跡	I層: (0~1.5)	1.5	×		
28	ス'ケ18-H1-タ	4×4	31972.000	26800.000	35.000	北・東		I層: (0~0.8)	0.8	×		
29	ス'ケ18-I1-カ	4×4	31954.000	26800.000	37.500	北・東		I層: (0~2.3) Ⅱ層: (2.3~)	2.4	×		
30	ス'ケ18-J1-コ	4×4	31924.000	26772.000	35.900	北・西	新城大道原第一遺跡	I層: (0~0.8) Ⅶ層: (0.8~)	0.9	×	ピット2基、時期不明	○
31	ス'ケ18-H2-タ	4×4	31972.000	26770.000	27.800	北・東		I層: (0~0.4) Ⅱ層: (0.2~0.6) Ⅶ層: (0.3~0.6) Ⅷ層: 岩盤(0.6)	0.6	○	マーヅ層削平	
32	ス'ケ18-I2-カ	4×4	31950.000	26770.000	29.700	東・南		I層: (0~1.0) Ⅷ層: 岩盤(1.0)	1.3	○	岩盤削平	
33	ス'ケ18-H3-タ	4×4	31972.000	26740.000	26.700	北・東		I層: (0~0.1) Ⅷ層: 岩盤(0.1~)	0.2	○	岩盤削平	
34	ス'ケ18-I3-カ	4×4	31954.000	26736.000	27.000	北・西		I層: (0~0.9) Ⅶ層: (0.9~1.0) Ⅷ層: 岩盤(0.9)	1.0	○	マーヅ層削平	
35	ス'ケ18-J3-ア	4×4	31930.000	26740.000	32.700	北・東		I層: (0~0.9) Ⅷ層: 岩盤(0.9)	1.5	○	岩盤削平	
36	ス'ケ18-J3-エ	4×4	31930.000	26722.000	30.800	北・東		I層: (0~1.1) Ⅷ層: 岩盤(0.2)	1.1	○	岩盤削平	
37	ス'ケ18-J3-タ	4×4	31912.000	26740.000	36.200	北・東		I層: (0~0.3) Ⅷ層: 岩盤(0.2)	0.4	○	岩盤削平	
38	ス'ケ18-J3-テ	4×4	31912.000	26718.000	33.600	北・西		I層: (0~0.2) Ⅷ層: 岩盤(0.2)	0.2	○	岩盤削平	

第Ⅲ-1-2表 平成26年度 西普天間試掘成果一覧

No.	グリット名	規格 (m)	座標			調査 壁面	遺跡名	層位(m)	掘削 深度 (m)	岩盤	備考1	報告
			X	Y	標高 (m)							
39	スヶ18-H4-サ	4×4	31978.000	26706.000	26.400	北・西	I層:(0~0.8) IIa層:(0.7~1.1) VII層:(1.0~1.5) VIII層:岩盤(1.4)	1.5	○	II層(近代耕作土)が残存		
40	スヶ18-H4-ト	4×4	31972.000	26686.000	26.500	北・東	I層:(0~0.5) VII層:(0.3~0.4) VIII層:岩盤(0.4)	0.8	○	マージ層削平		
41	スヶ18-I4-カ	4×4	31954.000	26710.000	26.400	北・東	I層:(0~0.3) VIII層:岩盤(0.2)	0.3	○	岩盤削平		
42	スヶ18-I4-コ	4×4	31954.000	26686.000	26.400	北・東	I層:(0~1.3) VIII層:岩盤(0~1.0)	1.3	○	岩盤削平		
43	スヶ18-J4-イ	4×4	31930.000	26704.000	26.700	北・東	I層:(0~0.5) VIII層:岩盤(0.5)	0.8	○	岩盤削平		
44	スヶ18-J4-チ	4×4	31912.000	26704.000	29.000	北・東	新城上殿遺跡 I層:(0~1.0) VIII層:岩盤(1.0)	1.7	○	岩盤削平		
45	スヶ18-H5-カ	4×4	31984.000	26680.000	26.400	北・東	I層:(0~0.5) VII層:(0.5~0.7) VIII層:岩盤(0.5)	0.8	○	マージ層削平		
46	スヶ18-H5-コ	4×4	31984.000	26656.000	26.400	北・東	I層:(0~0.7) VII層:(0.5~1.0) VIII層:岩盤(1.0)	1.7	○	マージ層削平		
47	スヶ18-H5-ツ	4×4	31972.000	26668.000	26.500	北・東	I層:(0~0.6) VIII層:岩盤(0.6)	0.7	○	岩盤削平		
48	スヶ18-I5-ク	4×4	31950.000	26664.000	26.500	西・南	新城上殿遺跡 I層:(0~1.2) 遺構覆土 VII層:(1.2~)	2.0	×	マージ層削平。グスク時代相当の遺構あり	○	
49	スヶ18-J5-カ	4×4	31924.000	26676.000	26.500	北・西	新城上殿遺跡 I層:(0~0.9) II層:(0.9~1.1) VII層:(0.9~)	1.1	×	ピット多数検出、グスク時代相当	○	
50	スヶ18-H6-タ	4×4	31972.000	26650.000	26.400	北・東	新城上殿遺跡 I層:(0~1.6) II層:(1.6~1.7) VII層:(1.7~)	1.7	×	ピット、土坑、グスク時代相当	○	
51	スヶ18-I6-カ	4×4	31954.000	26650.000	26.300	北・東	新城上殿遺跡 I層:(0~3.0)	3.0	×			
52	スヶ18-J6-カ	4×4	31924.000	26650.000	26.400	北・東	I層:(0~1.6)	1.6	○			
53	スヶ25-A1-ア	4×4	31900.000	26800.000	40.100	北・東	I層:(0~1.4)	1.4	×			
54	スヶ25-A2-ア	4×4	31900.000	26770.000	39.100	北・東	I層:(0~0.6) VIII層:岩盤(0.6)	0.6	○	岩盤削平		
55	スヶ25-A3-ウ	4×4	31898.000	26722.000	33.800	北・西	I層:(0~1.0) VIII層:岩盤(1.0)	1.2	○	岩盤削平		
56	スヶ25-A3-カ	4×4	31894.000	26740.000	36.500	北・東	I層:(0~0.3) VIII層:岩盤(0.3)	0.5	○	岩盤削平		
57	スヶ25-A4-イ	4×4	31898.000	26704.000	30.100	北・東	新城上殿遺跡 I層:(0~1.8) 遺構? VII層:(1.8~)	1.9	×	マージ層削平	○	
58	スヶ25-A5-カ	4×4	31890.000	26676.000	26.500	西・南	新城上殿遺跡 I層:(0~0.9) II a-1層:(0.9~1.4) II a-2層:(1.4~1.6) VII層:(1.5~)	1.7	○	溝または土坑(南壁面につて確認)	○	
59	スヶ25-B5-イ	4×4	31870.000	26674.000	27.900	北・東	I層:(0~1.1) II a-1層:(0.8~0.9) II a-2層:(0.9~1.1) VI層:(1.2~)	1.3	×			
60	スヶ25-A6-カ	4×4	31894.000	26650.000	24.600	北・東	I層:(0~0.9) VII層:(0.9~)	1.1	×			
61	スヶ25-B6-カ	4×4	31864.000	26650.000	24.900	北・東	I層:(0~0.2) VII層:(0.2~0.5) VIII層:岩盤(0.5)	0.6	○	マージ層削平		
62	スヶ25-C6-エ	4×4	31840.000	26629.000	24.900	北・東	I層:(0~0.3) VIII層:岩盤(0.3)	0.3	○	岩盤削平		
63	スヶ25-C6-カ	4×4	31834.000	26650.000	28.500	北・東	I層:(0~1.4) VI層:(1.3~)	1.5	×	マージ層削平		
64	スヶ25-C7-キ	4×4	31828.000	26610.000	23.300	西・南	I層:(0~1.4) VIII層:岩盤(1.4)	1.5	○	岩盤削平		
65	スヶ25-D7-エ	4×4	31810.000	26602.000	20.800	西・南	I層:(0~1.5)	1.5	×			
66	スヶ25-C8-ア	4×4	31840.000	26590.000	20.800	北・西	I層:(0~1.5)	1.5	×			
67	スヶ25-B9-ソ	4×4	31858.000	26536.000	17.500	北・東	I層:(0~0.1) VIII層:岩盤(0.1)	0.1	○	岩盤削平		
68	スヶ25-B9-タ	4×4	31852.000	26560.000	18.600	北・東	I層:(0~0.7) VII層:(0.1~0.6) VIII層:岩盤(0.5)	1.0	○	マージ層削平		
69	スヶ25-D9-サ	4×4	31798.000	26560.000	20.700	西・南	I層:(0~1.5)	1.5	×			
70	スヶ25-D10-ナ	4×4	31780.000	26526.000	20.300	西・南	喜友名古水田跡近接地 I層:(0~0.1) VI層:(0~0.4) VII層:(0.1~0.7)	0.7	×	ピット基、近世~近代相当		

※座標値は調査壁面の交点杭を記載

第Ⅲ-2-1表 平成27年度 西普天間試掘成果一覧

No.	グリット名	規格 (m)	座標			調査 壁面	遺跡名	層位(m)	掘削 深度 (m)	岩盤	備考1	報告
			X	Y	標高 (m)							
1	ズケ17-H5-セ	4×4	31978.000	26962.000	40.584	北・西	I層:(0~1.5)	1.5	×			
2	ズケ17-H7-カ	4×4	31982.000	26920.000	39.348	北・東	I層:(0~1.5) Ⅷ層:岩盤(1.5)	1.5	○			
3	ズケ17-H7-ト	4×4	31970.000	26894.000	39.663	北・東	I層:(0~1.5)	1.5	×			
4	ズケ17-I5-エ	4×4	31960.000	26962.000	37.818	北・東	I層:(0~1.4)	1.5	×			
5	ズケ17-I5-ネ	4×4	31936.000	26962.000	37.617	北・東	I層:(0~0.2) Ⅱ層:(0.2~0.6) Ⅵ層:(0.4~1.5) Ⅶ層:(1.0~1.5)	1.5	×			
6	ズケ17-I6-ケ	4×4	31952.000	26932.000	40.677	北・東	I層:(0~1.5)	1.5	×			
7	ズケ17-I6-チ	4×4	31938.000	26942.000	40.466	北・西	I層:(0~1.5)	1.5	×			
8	ズケ17-I7-ニ	4×4	31935.000	26914.000	41.153	南・西	I層:(0~0.8) Ⅱ層:(0.3~0.4) Ⅶ層:(0.4~1.4) Ⅷ層:岩盤(1.4)	1.4	○			
9	ズケ17-I8-イ	4×4	31956.000	26884.000	39.884	北・東	I層:(0~0.8) Ⅱ層:(0.8~1.0) Ⅶ層:(1.0~1.5)	1.5	×			
10	ズケ17-I8-テ	4×4	31938.000	26872.000	47.500	北・東	I層:(0~1.0) Ⅶ層:(1.0~1.5)	1.0	×	米埋設管		
11	ズケ17-I9-キ	4×4	31952.000	26850.000	40.227	北・東	I層:(0~0.4) Ⅷ層:岩盤(0.4)	0.4	○			
12	ズケ17-J7-ネ	4×4	31906.000	26902.000	41.329	北・西	I層:(0~1.5) Ⅷ層:岩盤(0.7)	1.5	○			
13	ズケ17-J8-サ	4×4	31918.000	26890.000	40.949	北・東	I層:(0~0.6) Ⅱ層:(0.6~0.7) Ⅶ層:(0.6~1.3) Ⅷ層:岩盤(1.3)	1.3	○			
14	ズケ17-J8-ノ	4×4	31906.000	26866.000	41.894	北・東	新城大道原第一遺跡 I層:(0~1.0) Ⅱ層:(1.0~1.5) Ⅶ層	2.0	×	グスク時代相当?のピット。 先史~グスク包含層	○	
15	ズケ17-J9-オ	4×4	31925.000	26836.000	41.314	北・東	新城大道原第一遺跡 I層:(0~1.4) Ⅷ層:岩盤(1.4~)	1.5	○	洞穴?岩盤に空隙あり。内部 の堆積土より土器出土。	○	
16	ズケ17-J10-ツ	4×4	31910.000	26814.000	40.877	北・東	新城大道原第一遺跡 I層:(0~1.4) Ⅱa-1:(1.4~1.6) Ⅱa-2:(1.6~1.7) Ⅱa-3:(1.7~2.0) Ⅴ層:(2.0~2.3)	2.3	×	米埋設管	○	
17	ズケ17-J10-ナ	4×4	31904.000	26826.000	40.997	北・東	新城大道原第一遺跡 I層:(0~1.3) Ⅱa-1:(1.0~1.3) Ⅴ層:(1.2~1.3)	1.3	×	近世・近代相当のピット、溝を 検出。	○	
18	ズケ18-J1-コ南	4×4	31920.000	26776.000	36.371	西・南	新城大道原第一遺跡 I層:(0~0.5) Ⅱ層:(0.5~1.0) Ⅵ層:(0.4~1.0)	1.2	×	グスク時代相当の土坑、ピット 検出。	○	
19	ズケ24-A7-シ	4×4	31886.000	26912.000	42.273	北・東	I層:(0~0.5) Ⅱ層:(0.3~0.5) Ⅶ層:(0.2~0.8)	0.8	×			
20	ズケ24-A8-ツ	4×4	31882.000	26878.000	41.804	北・東	I層:(0~0.5) Ⅶ層:(0.5~0.9) Ⅷ層:岩盤(0.5~)	1.2	○			
21	ズケ24-A9-イ	4×4	31896.000	26850.000	41.540	北・東	新城大道原第一遺跡 I層:(0~0.8) Ⅶ層:(0.5~)	0.8	×	米埋設管	○	
22	ズケ24-A9-ソ	4×4	31884.000	26836.000	41.760	北・東	新城大道原第一遺跡 I層:(0~1.2) Ⅱ層:(0.6~1.0) Ⅶ層:(0.7~1.5) Ⅷ層:岩盤(1.4~)	1.5	○			
23	ズケ24-A10-ク	4×4	31892.000	26818.000	40.292	北・東	新城大道原第一遺跡 I層:(0~0.2) Ⅱa-1:(0.2~0.3) Ⅱa-2:(0.3~0.5)	0.8	×	米埋設管 グスク時代相当のピット○基 グスク?包含層	○	
24	ズケ24-B3-チ	4×4	31850.000	27030.000	55.097	北・東	I層:(0~0.5) Ⅶ層:(0.3~0.4) Ⅷ層:岩盤(0.5~)	0.5	○			
25	ズケ24-B4-イ	4×4	31867.000	27004.000	54.832	北・東	I層:(0~0.8) Ⅷ層:岩盤(0.8~)	0.8	○			
26	ズケ24-B4-セ	4×4	31856.000	26990.000	54.116	北・東	I層:(0~1.2) Ⅷ層:(0.5~)	1.2	○	米埋設管		
27	ズケ24-B7-ア	4×4	31868.000	26918.000	42.676	北・東	I層:(0~0.3) Ⅷ層:岩盤(0.4)	0.4	○			
28	ズケ24-B7-ケ	4×4	31864.000	26900.000	42.723	北・東	I層:(0~1.0) Ⅷ層:岩盤(0.6~)	1.0	○			
29	ズケ24-B7-タ	4×4	31852.000	26918.000	42.763	西・南	I層:(0~1.5) Ⅷ層:岩盤(1.5~)	1.5	○	米埋設管(-1.0m)		
30	ズケ24-B8-シ	4×4	31858.000	26884.000	42.464	北・東	I層:(0~0.6) Ⅷ層:岩盤(0.3~)	0.6	○			
31	ズケ24-B9-ク	4×4	31864.000	26848.000	42.324	西・南	新城大道原第一遺跡 I層:(0~0.5) Ⅱ-1層:(0.4~0.5) Ⅱ-2層:(0.5~0.9) Ⅱ-3層:(0.5~0.8) Ⅵ層:(0.4~0.7) Ⅶ層:(0.6~0.8) Ⅷ層:岩盤(0.9~)	0.9	○	近世・近代の石込遺構1基 西側は米造成により消失。	○	
32	ズケ24-B9-ナ	4×4	31846.000	26860.000	42.641	西・南	I層:(0~0.2) Ⅵ層:(0.2~1.0) Ⅶ層:(0.3~1.0) Ⅷ層:岩盤(0.6~)	1.0	○			
33	ズケ24-B10-イ	4×4	31865.000	26822.000	40.948	北・東	新城大道原第一遺跡 I層:(0~0.4) Ⅶ層:(0.4~)	0.5	×	近世・近代相当のピット1基 地山面削平。	○	
34	ズケ24-C1-ス	4×4	31828.000	27088.000	56.414	北・東	I層:(0~1.4) Ⅶ層:(0.8~1.4) Ⅷ層:岩盤(1.4~)	1.4	○			

第Ⅲ - 2 - 2 表 平成 27 年度 西普天間試掘成果一覧

No.	グリット名	規格 (m)	座標			調査 壁面	遺跡名	層位 (m)	掘削 深度 (m)	岩盤	備考1	報告
			X	Y	標高 (m)							
35	ズケ24-C1-ナ	4×4	31816.000	27100.000	57.462	南・西	I層: (0~1.5) Ⅷ層: 岩盤 (1.5~)	1.5	○			
36	ズケ24-C2-シ	4×4	31828.000	27064.000	55.600	北・東	I層: (0~0.3) Ⅶ層: (0.2~0.3) Ⅷ層: 岩盤 (0.3~)	0.3	○			
37	ズケ24-C3-サ	4×4	31828.000	27040.000	55.471	北・東	I層: (0~0.5) Ⅷ層: 岩盤 (0.5~)	0.5	○			
38	ズケ24-C4-ウ	4×4	31838.000	26996.000	53.957	北・東	I層: (0~0.4) Ⅵ層: (0.2~0.8) Ⅶ層: (0.4~0.9) Ⅷ層: 岩盤 (0.9~)	0.9	○			
39	ズケ24-C5-エ	4×4	31840.000	26962.000	53.000	北・東	I層: (0~0.2) Ⅵ・Ⅶ層: (0.2~1.0)	1.0	○			
40	ズケ24-C5-ヌ	4×4	31816.000	26968.000	52.667	北・東	I層: (0~0.8) Ⅵ層: (0.2~0.8) Ⅶ層: (0.3~0.8) Ⅷ層: 岩盤 (0.8~)	0.8	○	米埋設管		
41	ズケ24-C6-ク	4×4	31832.000	26936.000	51.226	北・東	I層: (0~0.2) Ⅷ層: 岩盤 (0.2~)	0.2	○			
42	ズケ24-C7-ケ	4×4	31832.000	26900.000	42.877	北・東	I層: (0~0.2) Ⅷ層: 岩盤 (0.2~)	0.8	○			
43	ズケ24-C8-テ	4×4	31822.000	26872.000	46.985	北・東	I層: (0~1.3) Ⅶ層: (1.3~1.5) Ⅷ層: 岩盤 (1.5~)	1.5	○			
44	ズケ24-C9-チ	4×4	31822.000	26852.000	46.704	南・西	I層: (0~1.5) Ⅷ層: 岩盤 (1.5~)	1.5	○			
45	ズケ24-C10-ク	4×4	31832.000	26816.000	41.381	北・東	I層: (0~0.4) Ⅷ層: 岩盤 (0.4~)	0.4	○			
46	ズケ24-D1-シ	4×4	31798.000	27094.000	57.149	北・東	I層: (0~0.3) Ⅴ~Ⅶ層: (0.3~1.5)	1.5	×			
47	ズケ24-D1-ソ	4×4	31798.000	27076.000	56.025	北・東	I層: (0~0.8) Ⅶ層: (0.7~1.0) Ⅷ層: 岩盤 (1.0~)	1.0	○			
48	ズケ24-D2-ケ	4×4	31804.000	27052.000	55.110	北・東	I層: (0~0.7) Ⅵ・Ⅶ層: (0.2~1.0) Ⅷ層: 岩盤 (1.0~)	1.0	○			
49	ズケ24-D2-ニ	4×4	31786.000	27064.000	56.426	北・東	I層: (0~0.3) Ⅴ層: (0.2~0.6) Ⅵ層: (0.5~1.4) Ⅶ層: (1.0~1.5) Ⅷ層: 岩盤 (1.5~)	1.5	○	米埋設管		
50	ズケ24-D3-ク	4×4	31804.000	27028.000	55.357	北・東	I層: (0~1.2) Ⅵ・Ⅶ層: (0.5~1.7) Ⅷ層: 岩盤 (1.7~)	1.7	○			
51	ズケ24-D4-セ	4×4	31798.000	26992.000	54.025	北・東	I層: (0~0.6) Ⅶ層: (0.2~0.8)	0.8	○	半裁後に樹痕と判断。		
52	ズケ24-D5-ネ	4×4	31786.000	26962.000	52.533	南・東	I層: (0~0.7) Ⅶ層: (0.3~1.1)	1.1	×			
53	ズケ24-D6-ス	4×4	31798.000	26938.000	51.584	北・東	I層: (0~0.5) Ⅵ層: (0.5~0.9)	0.9	×			
54	ズケ24-D7-ツ	4×4	31792.000	26908.000	50.092	北・東	I層: (0~1.5) Ⅶ層: (0.9~1.5)	1.5	×			
55	ズケ24-D8-ノ	4×4	31786.000	26866.000	47.340	北・東	I層: (0~1.3) Ⅷ層: 岩盤 (1.3~)	1.3	○			
56	ズケ24-D9-ト	4×4	31792.000	26836.000	45.663	北・東	I層: (0~1.5)	1.5	×			
57	ズケ24-E1-ソ	4×4	31766.000	27074.000	57.563	北・西	I層: (0~0.7) Ⅵ・Ⅶ層: (0.2~0.9) Ⅷ層: 岩盤 (0.9~)	0.9	○			
58	ズケ24-E1-チ	4×4	31762.000	27094.000	57.682	北・東	I層: (0~0.8) Ⅵ・Ⅶ層: (0.2~0.7) Ⅷ層: 岩盤 (0.8~)	0.8	○			
59	ズケ24-E3-ア	4×4	31776.000	27040.000	56.120	北・東	I層: (0~0.5) Ⅵ層: (0.4~1.3) Ⅶ層: (0.6~1.3) Ⅷ層: 岩盤 (1.3~)	1.3	○			
60	ズケ24-E3-オ	4×4	31780.000	27016.000	54.760	北・東	I層: (0~0.4) Ⅴ層: (0.2~1.2) Ⅵ層: (0.4~1.5) Ⅷ層: 岩盤 (1.5~)	1.5	○			
61	ズケ24-E4-シ	4×4	31768.000	27004.000	54.753	北・東	I層: (0~0.4) Ⅵ層: (0.4~0.5) Ⅷ層: 岩盤 (0.5~)	0.5	○			
62	ズケ24-E5-タ	4×4	31762.000	26980.000	53.918	北・東	I層: (0~0.9) Ⅵ層: (0.4~1.5) Ⅷ層: 岩盤 (1.5~)	1.5	○			
63	ズケ24-E5-ネ	4×4	31756.000	26962.000	51.852	北・東	I層: (0~0.9) Ⅷ層: 岩盤 (0.9~)	1.2	○			
64	ズケ24-E8-キ	4×4	31774.000	26884.000	47.738	北・東	I層: (0~0.9) Ⅶ層: (0.9~1.5)	1.5	○	米埋設管		
65	ズケ24-E8-ナ	4×4	31756.000	26890.000	48.480	北・東	I層: (0~1.5)	1.5	×			
66	ズケ24-E9-サ	4×4	31768.000	26860.000	46.857	北・東	I層: (0~1.3) Ⅷ層: 岩盤 (1.3~)	1.3	○	撈乱土中より白磁出土。		
67	ズケ24-E10-セ	4×4	31768.000	26812.000	44.288	北・東	喜友名山川原第八遺跡 I層: (0~0.7) Ⅱa-1: (0.5~0.9) Ⅱa-2: (0.7~1.1) Ⅱa-3: (1.0~1.1) Ⅱa-4: (1.2~1.5) Ⅴ層: (1.2~1.5)	1.5	×	グスク時代相当のピット、土坑を検出。	○	

第Ⅲ - 2 - 3表 平成27年度 西普天間試掘成果一覧

No.	グリット名	規格 (m)	座標			調査 壁面	遺跡名	層位(m)	掘削 深度 (m)	岩盤	備考1	報告
			X	Y	標高 (m)							
68	ズケ24-F1-セ	4×4	31736.000	27081.000	58.722	北・東	I層:(0~0.2) Ⅷ層:岩盤(0.2~)	0.2	○			
69	ズケ24-F2-ス	4×4	31738.000	27058.000	57.510	北・東	I層:(0~0.9) Ⅷ層:岩盤(0.9~)	1.0	○	米埋設管		
70	ズケ24-F3-コ	4×4	31742.000	27012.000	55.218	北・東	I層:(0~0.7) Ⅵ・Ⅶ層(0.3~0.8) Ⅷ層:岩盤(0.8~)	0.9	○			
71	ズケ24-F4-ト	4×4	31732.000	26986.000	53.971	北・東	I層:(0~1.1) Ⅵ・Ⅶ層(0.2~0.9) Ⅷ層:岩盤(0.9~)	1.6	○	米埋設管		
72	ズケ24-F5-ネ	4×4	31724.000	26962.000	52.699	北・西	I層:(0~0~0.4) Ⅴ~Ⅶ層(0.2~1.4) Ⅷ層:岩盤(1.0~)	1.4	○	米埋設管		
73	ズケ24-F6-ク	4×4	31744.000	26938.000	50.671	北・東	I層:(0~1.5)	1.5	×			
74	ズケ24-F8-サ	4×4	31736.000	26890.000	47.257	北・東	I層:(0~1.5)	1.5	×			
75	ズケ24-F9-カ	4×4	31744.000	26860.000	46.675	北・東	喜友名山川原第八遺跡 I層:(0~1.0) Ⅱ層:(0.9~1.1) Ⅶ層:(1.1~1.5)	1.5	×	グスク時代相当のピット	○	
76	ズケ24-F9-ナ	4×4	31721.000	26860.000	-	-	メモ写真のみ	1.0	×	配管・鉄板あり※壁に続いている。		
77	ズケ24-F10-ウ	4×4	31750.000	26818.000	44.479	北・東	喜友名山川原第八遺跡 I層:(0~0.7) Ⅱa-1:(0.4~1.1) Ⅱa-3:(0.6~1.1) Ⅶ層:(0.8~1.1)	1.1	×	グスク時代相当のピット、土坑。地山面にて検出。	○	
78	ズケ24-F10-ナ	4×4	31726.000	26830.000	45.239	北・東	喜友名山川原第八遺跡 I層:(0~1.0) Ⅱ層:(0.9~1.3) Ⅶ層:(1.0~1.3)	1.3	×	グスク時代相当のピット、溝。地山面にて検出。	○	
79	ズケ24-G2-セ	4×4	31708.000	27052.000	57.639	北・東	I層:(0~0.4) Ⅵ層:(0.3~1.0)	1.0	×			
80	ズケ24-G3-ウ	4×4	31712.000	27028.000	56.796	北・東	I層:(0~1.0) Ⅴ~Ⅶ層:(0.3~1.5)	1.5	×			
81	ズケ24-G4-セ	4×4	31706.000	26990.000	55.332	北・東	I層:(0~0.6) Ⅵ・Ⅶ層(0.5~1.5)	1.5	×			
82	ズケ24-G5-ネ	4×4	31696.000	26960.000	54.058	北・東	I層:(0~0.5) Ⅶ層:(0.2~0.6) Ⅷ層:岩盤(0.2~)	0.6	○	米埋設管		
83	ズケ24-G6-ケ	4×4	31714.000	26932.000	52.079	北・東	I層:(0~1.5)	1.5	×	米埋設管		
84	ズケ24-G7-ツ	4×4	31702.000	26906.000	50.755	北・東	I層:(0~1.2) Ⅶ層:(0.8~1.2) Ⅷ層:岩盤(1.2~)	1.5	○			
85	ズケ24-G9-セ	4×4	31708.000	26840.000	46.340	北・東	喜友名山川原第八遺跡 I層:(0~0.6) Ⅱa-1:(0.2~1.4) Ⅱa-2:(0.4~1.7) Ⅱa-3:(0.7~)	1.8	×	グスク時代相当の包含層。	○	
86	ズケ24-G10-チ	4×4	31700.000	26824.000	45.363	北・東	喜友名山川原第八遺跡 I層:(0~0.4) Ⅱa-1:(0.2~1.0) Ⅱa-2:(0.2~1.0) Ⅱa-3:(0.6~1.4) Ⅱa-4:(1.1~1.9)	1.9	×	グスク時代相当の包含層。	○	
87	ズケ24-H3-テ	4×4	31670.000	27022.000	57.965	北・東	I層:(0~1.3) Ⅶ層:(1.0~1.5)	1.5	×			
88	ズケ24-H4-ア	4×4	31688.000	27008.000	57.421	北・東	I層:(0~1.5)	1.5	×			
89	ズケ24-H5-セ	4×4	31676.000	26958.000	53.467	北・東	I層:(0~0.8) Ⅷ層:岩盤(0.3~)	0.8	○			
90	ズケ24-H5-チ	4×4	31668.000	26974.000	56.519	北・東	新城大道原第二遺跡 I層:(0~1.5)	1.5	×		○	
91	ズケ24-H6-ナ	4×4	31666.000	26950.000	54.746	北・東	新城大道原第二遺跡 I層:(0~0.5) Ⅱa-1:(0.3~0.6) Ⅱa-2:(0.5~0.8) Ⅶ層:(0.5~)	1.8	×	グスク~近世相当のピット、溝。(検出面はⅡa-1と地山面の2枚)	○	
92	ズケ24-H7-サ	4×4	31678.000	26920.000	52.784	北・東	I層:(0~1.5)	1.5	×			
93	ズケ24-H8-ウ	4×4	31690.000	26878.000	50.373	北・東	I層:(0~1.5)	1.5	×			
94	ズケ24-H9-ツ	4×4	31672.000	26848.000	49.763	北・東	I層:(0~1.7)	1.7	×			
95	ズケ24-H10-ソ	4×4	31678.000	26806.000	46.245	北・東	I層:(0~0.5) Ⅶ層:(0.2~1.1) Ⅷ層:岩盤(0.3~)	1.1	○			
96	ズケ24-H10-ニ	4×4	31666.000	26824.000	49.230	北・東	I層:(0~1.8) Ⅵ・Ⅶ層:(1.6~1.8)	1.8	×			
97	ズケ24-I4-ケ	4×4	31649.000	26992.000	57.138	北・東	新城大道原第二遺跡 I層:(0~1.0) Ⅱa-1:(1.0~1.2) Ⅴ層:(0.8~1.5) Ⅵ層:(1.4~1.6)	1.6	×	ピット2基検出。半裁により1基は遺構と断定(近代か)	○	
98	ズケ24-I5-ツ	4×4	31642.000	26968.000	56.917	北・東	新城大道原第二遺跡 I層:(0~1.3) Ⅱa-1:(1.2~1.5) Ⅶ層:(1.5~1.6)	1.6	×	近世・近代相当のピット4基	○	
99	ズケ24-I6-ケ	4×4	31654.000	26932.000	55.614	北・東	新城大道原第二遺跡 I層:(0~1.9)	1.9	×		○	
100	ズケ24-I7-シ	4×4	31644.000	26914.000	54.669	北・東	I層:(0~1.5)	1.5	×			
101	ズケ24-I7-ソ	4×4	31646.000	26892.000	52.501	北・東	I層:(0~1.1)	1.1	×	米埋設管		
102	ズケ24-I9-ヌ	4×4	31636.000	26848.000	51.794	北・東	I層:(0~1.3) Ⅶ層:(0.6~1.6)	1.6	×			
103	ズケ24-I10-タ	4×4	31642.000	26830.000	50.529	北・東	I層:(0~1.6) Ⅶ層:(0.8~1.8)	1.8	×	米埋設管		
104	ズケ24-J6-ウ	4×4	31628.000	26936.000	55.497	北・東	I層:(0~1.8) Ⅶ層:(1.6~1.8)	1.8	×			
105	ズケ24-J7-ス	4×4	31618.000	26908.000	55.304	北・東	I層:(0~1.7)	1.5	×	米埋設管		
106	ズケ24-J8-ヌ	4×4	31606.000	26878.000	54.650	北・東	I層:(0~0.8) Ⅴ層:(0.6~1.2) Ⅵ層:(0.7~1.6) Ⅶ層:(1.3~1.6) Ⅷ層:岩盤(1.5~)	1.6	○	米埋設管		

第Ⅲ-2-4表 平成27年度 西普天間試掘成果一覧

No.	グリット名	規格 (m)	座標			調査 壁面	遺跡名	層位(m)	掘削 深度 (m)	岩盤	備考1	報告
			X	Y	標高 (m)							
107	ズケ24-J9-ス	4×4	31618.000	26848.000	52.700	北・東	I層:(0~1.5) VI・VII層:(0.5~1.5) VIII層:岩盤(0.9~)	1.5	○			
108	ズケ24-J10-シ	4×4	31618.000	26824.000	50.891	北・東	I層:(0~0.2) VIII層:岩盤(0.2~)	0.9	○			
109	ズケ25-A1-ナ	4×4	31876.000	26800.000	40.062	北・東	新城大道原第一遺跡 I層:(0~1.7) VII層:(0.9~1.5)	1.7	×			
110	ズケ25-A2-ヌ	4×4	31874.000	26756.000	36.652	北・東	I層:(0~1.3) V層:(0.5~1.5) VIII層:岩盤(0.5~)	1.5	○			
111	ズケ25-A3-ナ	4×4	31876.000	26738.000	35.709	北・東	I層:(0~1.5)	1.5	×			
112	ズケ25-A3-ノ	4×4	31876.000	26714.000	33.040	北・東	I層:(0~1.5)	1.6	×	米埋設管		
113	ズケ25-B1-ネ	4×4	31844.000	26778.000	39.742	北・東	I層:(0~1.8) V層:(0.8~1.8)	1.8	×			
114	ズケ25-B2-ソ	4×4	31853.000	26744.000	35.603	北・東	I層:(0~1.2) V層:(0.4~1.3)	1.3	×			
115	ズケ25-B4-ヌ	4×4	31844.000	26696.000	31.961	北・西	I層:(0~1.3) VI層:(1.3~1.5)	1.5	×	米埋設管		
116	ズケ25-C2-ノ	4×4	31816.000	26743.000	35.891	北・東	I層:(0~0.8) VIII層:岩盤(0.4~)	1.1	○	米埋設管		
117	ズケ25-C3-コ	4×4	31834.000	26716.000	34.700	北・東	I層:(0~1.5) VIII層:岩盤(1.5~)	1.5	○	米埋設管		
118	ズケ25-C4-ニ	4×4	31816.000	26704.000	35.261	北・東	I層:(0~1.6) VII層:(0.5~1.3) VIII層:岩盤(1.0~)	1.6	○			
119	ズケ25-D1-エ	4×4	31808.000	26782.000	41.119	北・東	I層:(0~1.7)	1.7	×			
120	ズケ25-D1-カ	4×4	31800.000	26798.000	43.376	北・東	I層:(0~1.5)	1.5	×			
121	ズケ25-D4-ク	4×4	31804.000	26698.000	34.967	北・東	I層:(0~1.2) VIII層:岩盤(0.9~)	1.4	○			
122	ズケ25-D5-ナ	4×4	31786.000	26680.000	33.024	北・東	I層:(0~1.7)	1.7	×	米埋設管		
123	ズケ25-E1-キ	4×4	31774.000	26794.000	43.558	北・東	喜友名山川原第八遺跡 I層:(0~0.8) II a-1:(0.3~0.7) II a-2:(0.7~1.0) II a-3:(0.9~1.4) II a-4:(1.0~1.4)	1.4	×	グスク~近世相当のピット、土坑を検出。	○	
124	ズケ25-E2-コ	4×4	31777.000	26746.000	40.727	北・東	喜友名山川原丘陵古墓群 I層:(0~1.2)	1.2	×			
125	ズケ25-E2-サ	4×4	31768.000	26770.000	42.062	北・東	I層:(0~1.3) VIII層:(0.9~)	1.3	○			
126	ズケ25-E3-テ	4×4	31762.000	26722.000	36.922	北・東	喜友名山川原丘陵古墓群 I層:(0~0.7) VIII層:(0.7~)	2.1	○	近世・近代相当の古墓。天井削平。	○	
127	ズケ25-E4-ネ	4×4	31755.000	26690.000	35.434	北・東	喜友名山川原丘陵古墓群 I層:(0~0.4) II a-1:(0.3~0.8) V・VI層:(0.7~1.2)	1.2	×	米埋設管 近世・近代相当の溝。	○	
128	ズケ25-E6-イ	4×4	31780.000	26644.000	31.029	北・東	I層:(0~1.8)	1.8	×			
129	ズケ25-F1-キ	4×4	31742.000	26794.000	42.959	北・東	喜友名山川原第八遺跡 I層:(0~0.5) II a1~2:(0.2~0.6) II a3~4:(0.5~0.9) II b:(0.8~1.0) サブトレ(1.0~2.2)	1.2 (2.2)	×	米埋設管 先史?~グスク相当のピット ()内は南側サブトレ	○	
130	ズケ25-F2-ア	4×4	31750.000	26770.000	42.194	北・東	喜友名山川原第八遺跡 I層:(0~0.2) II a:1~2(0.1~0.5)	0.5	×	近世・近代相当の遺構。下層に古い時期の層がある可能性あり	○	
131	ズケ25-F2-シ	4×4	31738.000	26762.000	42.033	北・東	喜友名山川原第八遺跡 I層:(0~1.5) II a-1:(1.0~1.3) II a-2:(1.3~1.5) II a-3:(1.3~1.8) II a-4:(1.5~2.0)	2.0	×		○	
132	ズケ25-F3-イ	4×4	31746.000	26734.000	41.355	北・東	喜友名山川原丘陵古墓群 I層:(0~1.5)	1.5	×			
133	ズケ25-F6-カ	4×4	31744.000	26650.000	33.205	北・東	喜友名山川原丘陵古墓群 I層:(0~1.0) II a-1:(0.9~1.0) II a-2:(1.0~1.3) VII層:(1.0~1.5) VIII層:岩盤(1.5~)	1.6	○			
134	ズケ25-G1-コ	4×4	31714.000	26776.000	43.469	北・東	I層:(0~1.4) VIII層:岩盤(1.4~)	2.0	○			
135	ズケ25-G2-テ	4×4	31702.000	26752.000	42.615	北・西	I層:(0~0.5) VIII層:岩盤(0.2~1.3)	1.3	○			
136	ズケ25-H1-エ	4×4	31690.000	26780.000	45.115	北・東	I層:(0~0.4) VIII層:岩盤(0.3~)	1.3	○			
137	ズケ25-H2-ヌ	4×4	31666.000	26756.000	45.853	北・東	I層:(0~0.3) VIII層:岩盤(0.1~)	0.3	○			
138	ズケ25-H3-コ	4×4	31684.000	26716.000	46.468	北・東	I層:(0~1.5)	1.5	×			
139	ズケ25-H4-ナ	4×4	31666.000	26710.000	49.042	北・東	I層:(0~1.6)	1.6	×			
140	ズケ25-I1-サ	4×4	31648.000	26800.000	49.018	北・東	I層:(0~0.3) V層:(0.2~0.9) VI層:(0.3~1.1) VII層:(0.4~1.1)	1.1	○			
141	ズケ25-I2-シ	4×4	31648.000	26762.000	48.931	北・東	I層:(0~0.3) VII層:(0.1~1.0)	1.0	×			
142	ズケ25-I3-タ	4×4	31642.000	26740.000	48.621	東・南	I層:(0~1.2) V層:(0.1~2.0) VI層:(0.6~2.0)	1.5 (2.0)	×	()内は岩盤確認のために掘削した深度。		
143	ズケ25-I5-ノ	4×4	31634.000	26656.000	53.391	北・西	喜友名山川原第九遺跡 I層:(0~0.9) II a-2:(0.5~1.2) II a-3:(0.7~1.1) II a-4:(1.0~1.4)	1.4	×	縄文時代相当?のピット7基	○	

第Ⅲ - 2 - 5 表 平成 27 年度 西普天間試掘成果一覧

No.	グリット名	規格 (m)	座標			調査 壁面	遺跡名	層位 (m)	掘削 深度 (m)	岩盤	備考1	報告
			X	Y	標高 (m)							
144	ズケ25-J1-ネ	4×4	31604.000	26782.000	52.393	北・東		I層:(0~1.4) VII層:(0.9~1.5)	1.5	×		
145	ズケ25-J2-ト	4×4	31612.000	26746.000	52.409	北・東		I層:(0~1.5)	1.5	×		
146	ズケ25-J3-ツ	4×4	31612.000	26728.000	53.637	北・東		I層:(0~1.7)	1.7	×		
147	ズケ25-J5-ニ	4×4	31604.000	26674.000	54.523	北・西	喜友名山川原第九遺跡	I層:(0~0.3) II a-1:(0.2~0.4) VII層:(0.4~1.6) VIII層:岩盤(1.6~)	1.6	○	グスク時代相当?のピット	○
148	ズケ25-J6-ケ北	4×4	31624.000	26632.000	54.045	東・南	喜友名山川原第九遺跡	I層:(0~1.5) II a:(0.4~0.7) VIII層:岩盤(0.4~)	1.5	○	古墓の一部と縄文時代相当の包含層を検出。	○
149	ズケ25-J6-ケ南	4×4	31622.000	2630.000	55.367	東・南	喜友名山川原第九遺跡	I層:(0~0.7) II層:(0.6~0.7) VIII層:岩盤(0.7~)	0.6	○	縄文時代相当の包含層あり。	○
150	ズケ25-J6-ナ	4×4	31604.000	26650.000	55.693	北・東		I層:(0~0.7) VII層:(0.4~0.8) VIII層:岩盤(0.4~)	1.6	○		
151	ズケ25-J7-ス	4×4	31618.000	26608.000	54.357	北・東		I層:(0~0.9) VIII層:岩盤(0.7~)	0.9	○		
152	ズケ25-J8-ア	4×4	31630.000	26590.000	54.071	北・東		I層:(0~1.0)	1.0	×		
153	ズケ25-J9-タ	4×4	31612.000	26560.000	52.835	北・東		I層:(0~1.6) VIII層:岩盤(0.9~)	1.6	○		
154	ズケ29-A9-ア	4×4	31598.000	26858.000	54.220	北・東		I層:(0~0.3) VII層:(0.3~0.5)	0.5	×		
155	ズケ29-A10-ケ	4×4	31594.000	26812.000	53.010	北・東		I層:(0~0.4) VII層:(0.4~1.0) VIII層:岩盤(0.5~)	1.1	○	米埋設管	
156	ズケ29-B9-ア	4×4	31568.000	26858.000	55.327	北・東		I層:(0~0.9) VII層:(0.2~0.8) VIII層:岩盤(0.4~)	0.9	○		
157	ズケ29-B10-チ	4×4	31552.000	26824.000	55.037	北・東		I層:(0~1.2) VIII層:岩盤(0.5~)	1.2	○		
158	ズケ30-A2-ツ	4×4	31582.000	26758.000	54.373	北・東		I層:(0~1.6)	1.6	×		
159	ズケ30-A3-ケ	4×4	31594.000	26718.000	55.563	北・東		I層:(0~0.5) VII層:(0.1~0.7) VIII層:岩盤(0.4~)	1.1	○		
160	ズケ30-A6-ス	4×4	31586.000	26636.000	56.627	北・東		I層:(0~0.6) VIII層:岩盤(0.2~)	0.6	○		
161	ズケ30-A7-ヌ	4×4	31576.000	26608.000	55.690	西・南	喜友名山川原丘陵古墓群	I層:(0~0.9) VIII層:岩盤(0.3~)	0.9	○		
162	ズケ30-A8-ス	4×4	31587.000	26576.000	53.620	北・東	喜友名山川原丘陵古墓群	I層:(0~0.6) VIII層:岩盤(0.4~)	0.7	○		
163	ズケ30-A9-テ	4×4	31582.000	26542.000	53.984	北・西	喜友名山川原丘陵古墓群	I層:(0~0.5) VIII層:岩盤(0.7~)	0.5	○		
164	ズケ30-B1-イ北	4×4	31570.000	26794.000	54.156	北・東	喜友名山川原第十遺跡	I層:(0~1.1) V層:(0.4~1.5) VI層:(1.1~1.5)	1.6	×	近世・近代相当の遺構	○
165	ズケ30-B1-イ南	4×4	31566.000	26794.000	54.926	東・南	喜友名山川原第十遺跡	I層:(0~2.3) VII層:(0.4~2.1)	2.3	×	暗渠に繋がる石積み。米埋設管により破壊。	○
166	ズケ30-B2-シ	4×4	31558.000	26764.000	57.029	北・東		I層:(0~1.4) VIII層:岩盤(1.0~)	1.4	○		
167	ズケ30-B3-ト	4×4	31552.000	26716.000	57.916	北・西		I層:(0~1.2) VIII層:岩盤(0.2~)	1.2	○	米埋設管	
168	ズケ30-B4-ケ	4×4	31564.000	26692.000	58.762	西・南		I層:(0~0.7) VII層:(0.4~0.8) VIII層:岩盤(0.4~)	1.0	○		
169	ズケ30-B5-キ	4×4	31564.000	26674.000	59.079	北・東		I層:(0~1.0) VIII層:岩盤(0.9~)	1.0	○	米埋設管	
170	ズケ30-B6-ケ	4×4	31562.000	26632.000	58.277	北・西		I層:(0~1.0) VII層:(0.8~1.6) VIII層:岩盤(1.0~)	1.7	○		
171	ズケ30-B7-チ	4×4	31552.000	26614.000	60.937	北・東		I層:(0~0.4) VIII層:岩盤(0.1~)	0.4	○		
172	ズケ30-B8-テ北	4×4	31552.000	26572.000	58.023	北・東	喜友名山川原丘陵古墓群	I層:(0~1.5) VIII層:岩盤(0.9~)	1.6	○	米埋設管	
173	ズケ30-B8-テ南	4×4	31548.000	26572.000	58.910	東	喜友名山川原丘陵古墓群	I層:(0~0.2) 岩盤(古墓)	2.0	○	古墓検出。天井部は削平。内部土砂埋没。	○
174	ズケ30-B9-ス	4×4	31558.000	26548.000	57.897	北・東	喜友名山川原丘陵古墓群	I層:(0~1.4) VIII層:岩盤(0.7~)	1.9	○		
175	ズケ30-C1-カ	4×4	31534.000	26800.000	56.313	北・東		I層:(0~1.2) VIII層:岩盤(0.3~)	1.6	○		
176	ズケ30-C2-ク	4×4	31534.000	26758.000	58.773	北・西		I層:(0~1.4) VIII層:岩盤(0.4~)	0.4	○		
177	ズケ30-C3-ス	4×4	31528.000	26728.000	60.587	北・東		I層:(0~0.5) VIII層:岩盤(0.1~)	0.5	○		
178	ズケ30-C4-キ	4×4	31534.000	26704.000	60.603	北・西		I層:(0~0.8) VIII層:岩盤(0.5~)	0.8	○		
179	ズケ30-C5-ク	4×4	31534.000	26668.000	60.531	北・東		I層:(0~0.6) VIII層:岩盤(0.1~)	0.9	○	米埋設管	
180	ズケ30-C6-ス	4×4	31528.000	26638.000	60.907	東・南		I層:(0~0.5) VII層:(0.3~0.8) VIII層:(0.1~0.8)	0.8	○		

※座標値は調査壁面の交点杭を記載

第Ⅲ - 3 表 平成 27 年度 西普天間試掘成果一覧

No.	グリット名	規格 (m)	座標			調査 壁面	遺跡名	層位 (m)	掘削 深度 (m)	岩盤	備考 1	報告
			X	Y	標高 (m)							
1	スヶ18-J1-キ・ク	4×12	31920.104	26793.961	39.048	東・南	新城大道原第一遺跡	I層:(0~1.9) II層:(0.8~2.0) VI層:(1.0~2.0) VII層:岩盤(1.5~)	2.0	○	マージ層削平。上層に近世 ~近代耕作土層堆積。 4×4m試掘坑3カ所分。	○
2	スヶ18-J2-キ・ク	4×8	31920.060	26763.995	35.853	東・南	新城大道原第一遺跡	I層:(0~1.1) II層:(0.7~1.1) VI層:(0.6~1.1) VII層:岩盤()	1.1	○	ピット8基、溝3条検出。調査 区東側で岩盤検出。遺構は マージ面にて検出。 4×4m試掘坑2カ所分。	○
3	スヶ18-J1-ノ	4×4	31902.023	26775.939	38.128	東・南	新城大道原第一遺跡	I層:(0~0.9) II層:(0.4~0.9) VII層:岩盤(0.4~)	0.9	○		
4	スヶ18-G9-チ	4×4	32001.959	26554.014	8.143	北・東	新城下原第二遺跡	I層:(0~2.0) II d層:(1.7~2.0)	2.0			
5	スヶ18-H9-シ	4×4	31974.070	26554.146	8.717	東・南	新城下原第二遺跡	I層:(0~0.6) II b層:(0.4~1.2) II d層:(1.1~1.9) II e層:(1.9~2.0)	2.0			
6	スヶ18-I9-イ	4×4	31959.893	26554.299	9.411	北・東	—	I層:(0~0.6) II層:(0.6~1.8)	1.8			
7	スヶ18-I9-ウ	4×4	31942.012	26558.106	9.966	北・東	—	I層:(0~0.4) II層:(0.4~2.0)	2.0			
8	スヶ18-I9-タ	4×4	31959.877	26546.415	8.215	北・東	—	I層:(0~0.5) II層:(0.5~1.1)	1.1			
9	スヶ18-I9-テ	4×4	31942.022	26542.036	8.859	北・東	—	I層:(0~0.5) II層:(0.5~0.9)	0.9			
10	スヶ18-G10-カ	4×4	32008.008	26527.946	6.720	東・南	新城下原第二遺跡	I層:(0~0.7) II b層:(0.5~1.5) II d層:(1.4~1.8) II e層:(1.8~2.1)	2.1			○
11	スヶ18-G10-ナ	4×4	31991.932	26530.014	7.248	東・南	新城下原第二遺跡	I層:(0~1.1) II a層:(1.1~1.4) II b層:(1.0~1.45) II d層:(1.6~2.0) II e層:(2.0~)	2.0			○
12	スヶ18-G2-タ	4×4	31999.944	26465.143	6.196	北・西	新城下原第二遺跡	I層:(0~1.5) II b層:(1.0~2.0)	2.0			
13	スヶ19-H2-ケ	4×4	31984.026	26451.961	6.997	北・東	—	I層:(0~1.8) II b層:(1.2~2.0) II d層:(1.25~2.0)	2.0			
14	スヶ19-H2-ネ	4×4	31965.952	26452.023	7.028	北・東	—	I層:(0~2.2) II a層:(0.8~0.95) II b層:(0.85~1.35) II c層:(1.25~1.4) II d層:(1.25~1.9) II e層:(1.8~2.2)	2.2			
15	スヶ19-I2-セ	4×4	31943.975	26451.792	8.322	北・東	—	I層:(0~2.2)	2.2			

※座標値は調査壁面の交点杭を記載

第IV章 分布調査の成果

第1節 はじめに

平成26年度に実施した分布調査は、斜面緑地に位置する新城区と安仁屋区に所在する溪谷地形のインジャーエリアであり、総面積約10万㎡の分布調査を実施した。調査の方法としては、幹回り5cm以上の木や稀少植物などを除いて下草を伐採し、目視にて文化財の有無を確認した。また、25cmコンターにて詳細な地形測量を行い、微弱な地形や段、切土盛土による改変状況など戦前の土地活用についての検討も行った。調査の成果としては、各湧泉のほか、古墓、石切場、石積み、水路跡、洞穴、溝状遺構などが確認されている。調査成果については地区ごとに下記に記述する。

第2節 新城区の調査成果

平成26年度に実施した分布調査によってハンタモーと呼ばれる平場や里道、石切場のほか、屋敷囲いと想定される造成地形などが確認された。「ハンタモー」は、戦前に新城の若者たちが毛遊びする広場であったといわれている。

石切場跡は、近接して2ヶ所で確認された。一帯は新城上殿遺跡の範囲となっており、普天間基地内にある新城古集落の前には、この周辺に元集落があったという伝承がある。石切場の使用（利用）時期については不明であるが、喜友名泉の西側にある石切場が明治以降（喜友名泉にある香炉記載の年代より）と想定されることから、新城の石切場も同時期と推測される。

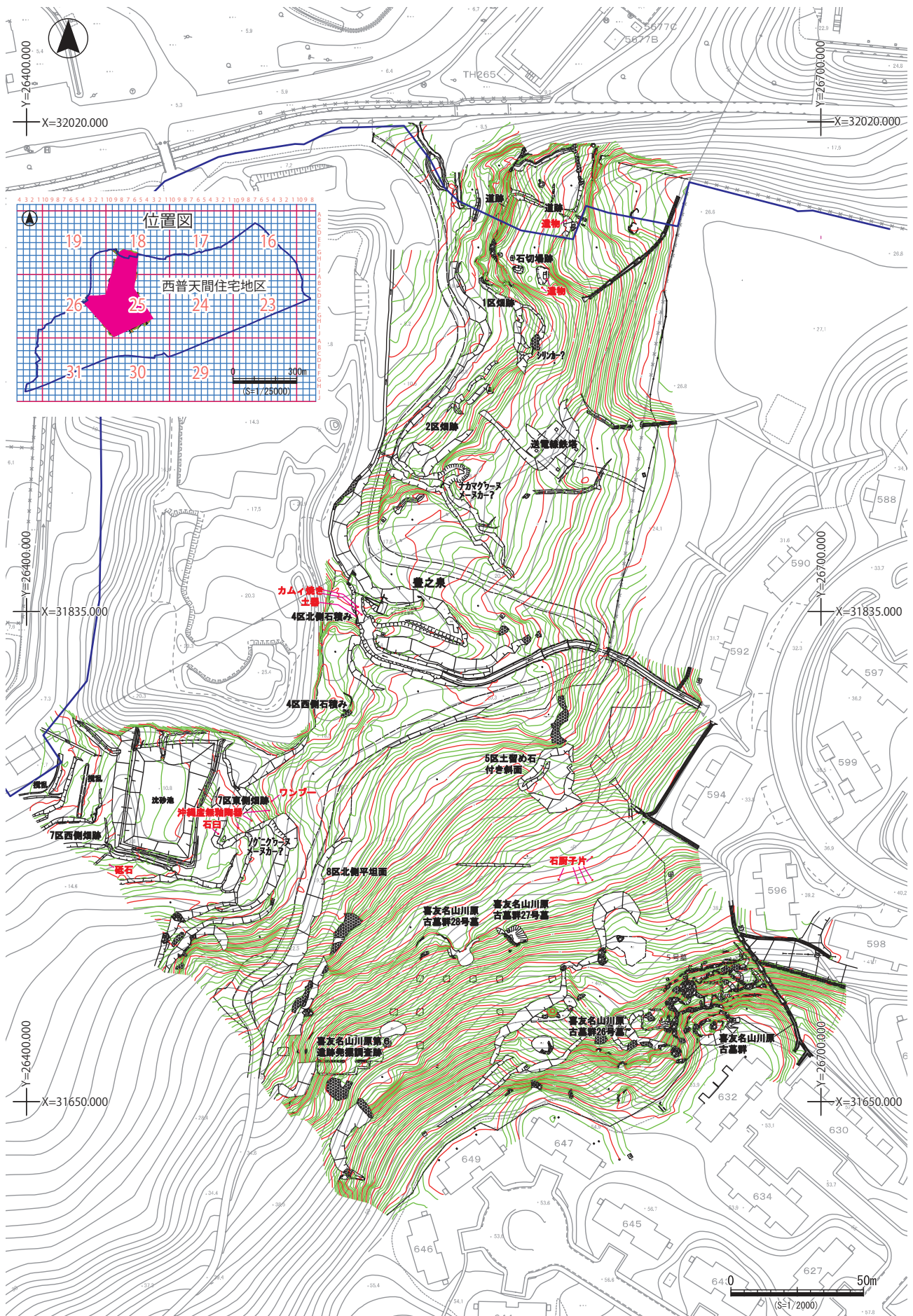
新城には、前述した集落に係わるものとしてシンバルガー（またはアラグスクガー）という湧泉が戦前まであったという。残念ながら今回の分布調査においてはその場所を特定することは出来なかった。おそらく、米軍による盛土造成などによって埋没したものと想定される。今後さらなら追加調査を行う必要がある。ちなみに、シンバルガーの「シンバル」とは、^(シチャバル)一帯の小字名である下原のことで、聞き取り調査に際して古老より、「新城集落の人はシンバルガーと呼び、他集落の人はアラグスクガーと呼称した」^(ユタカノイズミ)そうである。また、戦後に設置されたものとして「豊之泉」がある。もともとは米軍によってシンバルガーの流水を利用したコンクリート製の揚水場が設置され、その後使用されなくなったものを利用して伊佐区住民が1959年に「豊之泉」を設置したという（註1）。



図版IV-1 ハンタモー（北側から）



図版IV-2 豊之泉



第IV - 1 図 豊之泉周辺の詳細測量図



新城上殿遺跡 平坦面



新城上殿遺跡 平坦面



新城上殿遺跡 道跡



新城上殿遺跡 平坦面



新城上殿遺跡 石積



新城上殿遺跡 石切場跡周辺



新城上殿遺跡 石切場跡



新城上殿遺跡 石切場跡



新城の畑跡



土留め石付き斜面



ノグニグワーヌメヌカー



ヤファレーグーフの古墓



ナカマグワーヌメヌカー



豊之泉



シンバルガーがあったと思われる場所



コンクリート製集水タンクと管路

第3節 安仁屋区の調査成果

安仁屋区に所在するイシジャーは、西普天間住宅地区のハウジングエリアを東西に分断するように県道 81 号線から北西方向に伸びる河川渓谷状の地形を有する緑地部分である。上流、中流、下流に大別でき、後述する地形的変化が見受けられるほか、周辺にはガジュマル・ハマイヌビワ等の植物や県指定の天然記念物であるクロイワトカゲモドキが生息し、貴重な自然資源を有している。また、渓谷岸壁には多数の古墓や洞穴があり、安仁屋・新城イシジャー流域古墓群として遺跡周知している。

1. 自然環境について

宜野湾市では、平成 25 年度に跡地利用計画策定に向けた自然環境情報の提供・共有化を目的として自然環境調査を実施している。イシジャーの特徴的な地形について詳細な報告がなされているので、下記にその報告の抜粋を記載する（註 2）。

「本島中南部や宮古島など多孔質で透水性の高い琉球石灰岩が広く分布する地帯では、河川は形成されず、雨水は蒸発あるいは地下浸透して地下水を形成するということが認識されている。イシジャーは、河川渓谷状の地形を示し、一部流水も見られ、他の琉球石灰岩地域では見られない、珍しい地形といえる。どのようにこのような地形が形成されたのか、成因の研究を含め、学術上も貴重な地形と考えられる。（中略）上流部は、2 面張りの間知ブロック護岸で改修されており、暗渠から道路排水などが流入している。この排水は白濁し、異臭もあることから、上方集落からの生活排水の流入も示唆される。両岸は標高 78m を頂きとした琉球石灰岩の丘があり、谷底は標高 50m 程度であり、イシジャー上流部では琉球石灰岩の厚さが最大（30m 以上）となる。

中流域は自然の溪流状で、常時は浸透して流水は見られない部分もある（枯れ川）。中流域の特徴的な状況として図 3-1-2-4 断面スケッチを示す。断面に示すように、両岸が高さ 10～14m の琉球石灰岩の切り立った崖となり、谷間状の断面は概ね 15m の幅がある。また、高さの違う 2 段の小洞窟があり、その洞窟の天井部には鍾乳石やカーテンが観察された。洞窟は古墓や御嶽として祭られたものとみられるが、内部は人為的に攪乱された痕跡が認められた。いわゆる河床部は赤褐色粘土が堆積しており、数 10cm の石灰岩の岩塊が覆っている。なおイシジャーの形成は、洞窟天井の鍾乳石の存在から、かつての鍾乳洞の天井が崩れてできたドリーネの可能性が示唆され、河床部の岩塊は落盤した天井部の岩盤の可能性がある。

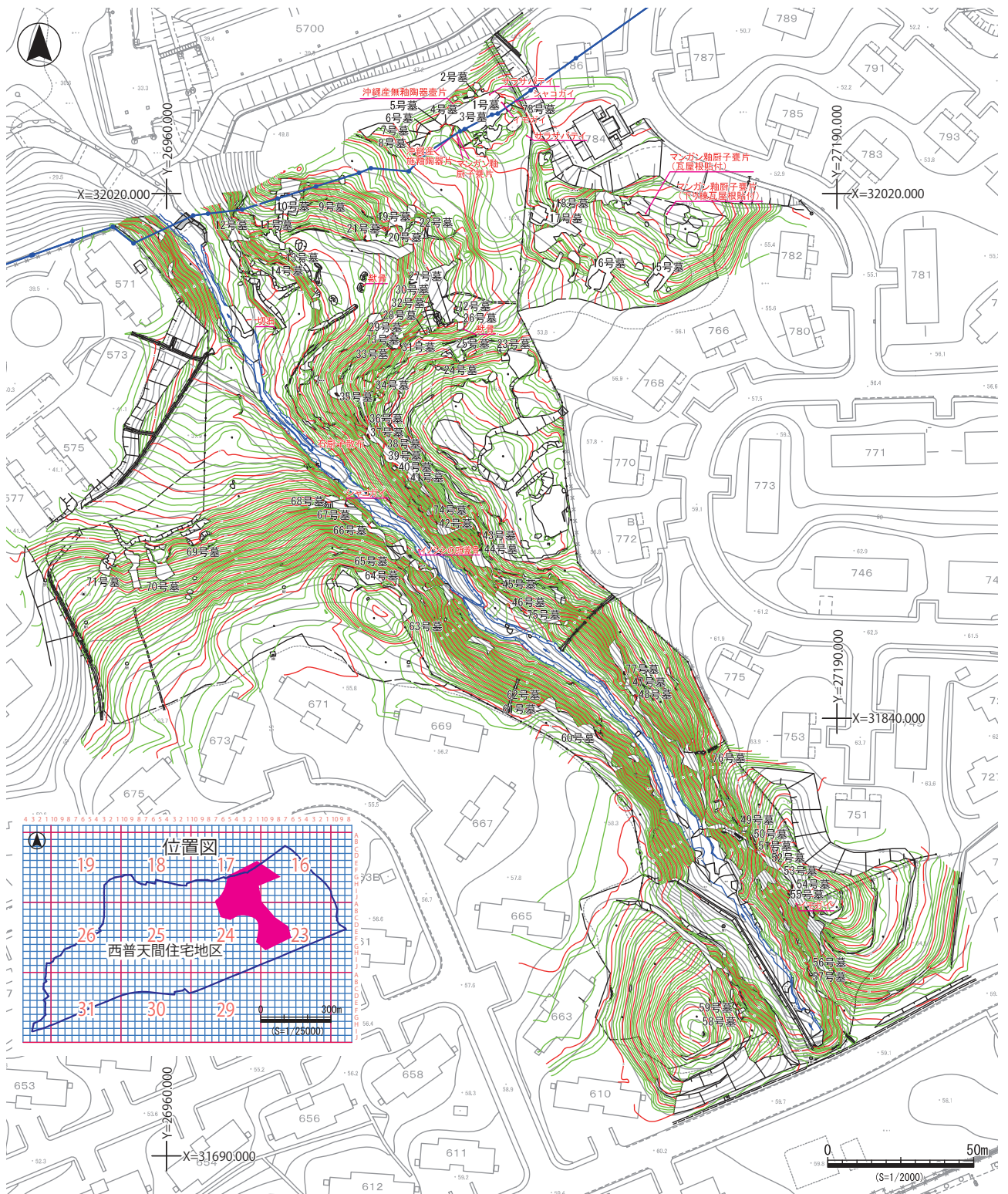
下流域では、勾配が緩くなり、谷の延長が南東方向へ向きを変える。この付近ではいわゆる河床部に布団かごが約 80m に渡り敷設されている。布団かごのため、流水は見られないが、一般に、急流部で浸食防止のため敷設することが多いため、洪水時に、浸食による自然護岸の浸食や氾濫が起こっていたことが示唆される。敷地外になるが、その下流域は三面張りのコンクリート護岸となり、河床部は滑りやすいが、緩やかに流れる透明な流水が見られ、両岸の植生と合わせて清流のような景観が楽しめる。目視調査の結果、イシジャーの一带は植生が生い茂り、特殊な地形が残存することが確認されたので、今後の保全・活用を考える上で、測量や地質調査を行い、詳細な地質構造や地形的な特徴を把握する必要がある。また、古墓や御嶽の状況把握、遺跡調査などについても今後必要と考えられる。」

2. 調査の目的

調査の目的は、イシジャーの地形を詳細に把握し、各古墓の位置や基数、保存状況等を確認すること

であった。これまでは、古墓の分布状況を把握することができる図面等はなく、保護調整のための基礎的な資料がなかった。しかし、平成27年3月に西普天間住宅地区が返還され、その後に予定される跡地利用計画や各開発工事等との調整資料として文化財の状況を把握する必要性が生じたため、今回の分布調査を行うこととなった。

調査の方法としては、幹回り5cm以上の樹木や貴重植物を残しつつ下草を伐採し、微地形を把握するために25cmコンター（等高線）での詳細測量を行うとともに、古墓やその他石積等の遺構の目視



第IV - 2図 イシジャー地形測量図

観察を実施した。位置座標については試掘坑座標と同様に、日本測地系（旧座標）を使用し、各古墓の情報については、個別に観察シートを作成している。

3. 成果概要

今回の調査により、78基の古墓が確認された（第IV-2図イシジャーの地形測量図参照）。墓の種類としては、石灰岩岩盤を掘り込んで形成した掘込墓が58基（袖墓含む）、次いで平葺墓が8基、岩陰墓が7基、亀甲墓4基、不明1基が確認されている。古墓の多くは、すでに改葬済みで空墓となっており、開口された墓口から墓室内部を覗いても蔵骨器や遺骨は確認できなかった。一部、イシジャー流域古墓群の北側フェンス側に位置する第12号墓（掘込墓）は、墓口は空いているものの、墓室内には8基の蔵骨器（ボージャ）が並び、未改葬であることが確認された。その他、墓口が閉じているものや墓口側に埋没して詳細不明な墓が9基あり、内部に蔵骨器等が残存する可能性がある。

古墓群の分布状況としては、石灰岩堤がより発達している東側の丘陵沿いに多く分布しており、掘込墓などの小規模なものは、イシジャーの溪谷地形である崖面を背にして立地し、概ね地形に沿った配置となっている。亀甲墓や平葺墓など大型の墓については、流域から外れた北東端や南西側のやや地形的に開けた地点において立地している。墓の向き（方位）は特に規則性は見出せず、構築する場所の地形（崖の形状など）に合わせた造りとなっており、掘込墓だけでなく大型の亀込墓などにも同様の傾向が見られる。

古墓群として利用された時期は、蔵骨器が確認できた12号墓を参考にすると、「乾隆拾四年（1749年）」まで遡ると思われる。戦後、基地建設のために強制的に接収されながらも比較的自由に出入りできたというが、それも1950年代に墓立ち退き命令があり、その多くが改葬されたのであろう。

平成27年7月に、当該地区のゾーニングについて庁議決定がなされ、イシジャーエリアについては公園（緑地）として保存されることとなった。その理由としては、中部圏においては珍しい石灰岩堤や溪谷地形の他、県指定天然記念物を含む貴重な動植物が生息していることなどが挙げられている。文化財側からも、これらの地形を含めて多くの古墓が所在することやさらに古い時代の遺跡が存在する可能性などもあり、現状保存を要望していたところである。結果として残されることとなったこのエリアについては、今後どのような形で活用することができるかが課題となっている。今回の調査成果について、当該地区の跡地利用計画や公園整備計画を進める市開発部局等に対して情報提供を行い、文化財保護の視点から遺跡の整備・活用方法を提案していくことが求められる。また、今回の調査箇所は本来の遺跡（周知の埋蔵文化財包蔵地）の一部であり、当該遺跡は北側部分が地区外（キャンプ瑞慶覧）に続いている。引き続き、表面踏査等の分布調査を実施する必要がある。

注1：『平成19年度：キャンプ瑞慶覧地区 重要文化財保存整備実施計画作成業務 報告書』
宜野湾市教育委員会 2008年

注2：『平成26年度：西普天間住宅地区 重要文化財保存整備基本計画更新業務 報告書』
宜野湾市教育委員会 2015年



1～8号墓周辺 石積周辺遺跡



1～8号墓周辺 サラサバティ



1～8号墓周辺 サラサバティ



1～8号墓周辺 イモガイ



2号墓西隣 石積



2号墓西隣 石積



15号墓北隣 厨子竈 (遠景)



15号墓北隣 厨子竈



16号墓北東隣 厨子甕 (遠景)



16号墓北東隣 厨子甕



23号墓南隣 平坦面



23号墓南隣 平坦面



35号墓北西隣 洞穴



35号墓北西隣 洞穴 (内部)



37号墓西隣 石厨子散布 (遠景)



37号墓西隣 石厨子散布



55号墓南東隣 イモガイ (遠景)



55号墓南東隣 イモガイ



55号墓南東隣 古墓? (遠景)



55号墓南東隣 古墓?



55号墓南東隣 古墓? 周辺



55号墓南東隣 サザエ



60号墓南東隣 岩陰



60号墓南東隣 岩陰



64号墓北東隣 イノシシ頭蓋骨 (遠景)



64号墓北東隣 イノシシ頭蓋骨



イシジャー右岸下流 平坦面上段



イシジャー右岸下流 平坦面上段



イシジャー右岸下流 平坦面中段



イシジャー右岸下流 平坦面中段



イシジャー右岸下流 平坦面下段



イシジャー右岸下流 コンクリート片

イシジャー流域古墓群 個別観察シート

1号墓	形 式	掘込墓	方向	MN-202
調査年月日	2014.10.07	大字	安仁屋	
位 置	座標 旧	測定法	T S	
	X = 32053.1570m		Y = 27075.0215m	H = 53.0450m
外 観	石 材 等	石灰岩盤・切石積・モルタル仕上げ		
	墓 庭	可能性有り	幅	—cm 奥行 —cm
	眉 の 形	—	眉のはね	—
	屋根平面形	自然のまま		
墓 室 内	墓 口	開	奥行 22cm	幅 124cm 高 50cm
	平 面 形 状	不明	奥行 160cm以上	幅 約130cm 高 70cm以上
	棚	不明	奥 一段	左 一段 右 一段
	イ ケ	不明	一箇所	
	蔵 骨 器	無	状 況	—
墓 室 外	備 考	前面と墓口は土砂でかなり埋没する。墓室は土砂に混じりコンクリートブロックやビール瓶が散乱する。墓室の壁面に2箇所の窪みを認められるが、墓口は狭く内部に入れないため詳細は不明である。		



2号墓	形 式	掘込墓	方向	MN-170
調査年月日	2014.10.07・08	大字	安仁屋	
位 置	座標 旧	測定法	T S	
	X = 32053.0220m		Y = 27066.4405m	H = 52.6850m
外 観	石 材 等	石灰岩盤・野面積		
	墓 庭	可能性有り	幅	—cm 奥行 —cm
	眉 の 形	—	眉のはね	—
	屋根平面形	自然のまま		
墓 室 内	墓 口	開	奥行 50cm	幅 158cm 高 73cm
	平 面 形 状	隅丸方形	奥行 288cm	幅 235cm 高 161cm
	棚	有	奥 1段	左 一段 右 一段
	イ ケ	無	一箇所	
	蔵 骨 器	有	状 況	散乱
	人 骨	有	状 況	散乱
墓 室 外	備 考	墓室内より墓口に高さ約80cmの野面積を確認することができるが、外面は完全に埋没している。内部の壁面は丁寧に掘られ、棚も岩盤から削り出される。床面には蔵骨器のほか、消火器・ベニヤ板・ハケ・銃弾等が散乱する。		



第IV章 分布調査の成果

3号墓	形式	掘込墓	方向	MN-14					
調査年月日	2014.10.07		大字	安仁屋					
位置	座標	旧	測定法	T S					
	X = 32043.4195m			Y = 27057.2690m					H = 52.6315m
外観	石材等	石灰岩盤・切石積・モルタル仕上げ							
	墓庭	可能性有り	幅	—cm	奥行	—cm			
	眉の形	—	眉のはね	—					
	屋根平面形	崩落しているため不明							
墓室内	墓口	開	奥行	32cm	幅	67cm	高	47cm	
	平面形状	半円形							
	柵	不明	奥行	100cm	幅	130cm	高	50cm	
	イ	不明	奥	—段	左	—段	右	—段	
	ケ	不明	—箇所						
墓室外	蔵骨器考	無	状況	—					
	備	墓室の右壁と天井は大きく崩落、墓室内はかなり土砂が堆積する。墓口前方は平坦であることから、墓庭が埋没している可能性も考えられる。							



4号墓	形式	掘込墓	方向	MN-0					
調査年月日	2014.10.07		大字	安仁屋					
位置	座標	旧	測定法	T S					
	X = 32043.8835m			Y = 27055.8275m					H = 52.8090m
外観	石材等	石灰岩盤・野面積							
	墓庭	可能性有り	幅	—cm	奥行	—cm			
	眉の形	—	眉のはね	—					
	屋根平面形	自然のまま							
墓室内	墓口	開	奥行	10cm	幅	34cm	高	5cm	
	平面形状	半円形とみられる							
	柵	不明	奥行	57cm	幅	82cm	高	26cm	
	イ	不明	奥	—段	左	—段	右	—段	
	ケ	不明	—箇所						
墓室外	蔵骨器考	無	状況	—					
	備	3号墓と5号墓間のわずかな隙間に築かれた古墓である。墓口は土砂でほぼ埋没、墓室内も土砂がかなり堆積している。墓室壁面は丁寧に掘り込まれる。墓口には石積の一部とみられる数個の拳大以上の石灰岩礫を確認できる。墓口前方は3号墓と同様に平坦ではあるが、あまり幅がないため墓庭は無い可能性も残される。							



5号墓	形式	掘込墓	方向	MN-324
調査年月日	2014.10.07		大字	安仁屋
位置	座標旧	測定法	T S	
	X = 32043.1485m		Y = 27054.4910m	H = 52.6855m
外観	石材等	石灰岩盤	幅	—cm
	墓庭	可能性有り	奥行	—cm
	眉の形	—	眉のはね	—
	屋根平面形	自然のまま平坦		
墓室内	墓口	開 奥行	22cm	幅
	平面形状	隅丸方形	99cm	高
		奥行	110cm	幅
		奥	—	高
	棚	無	一段	左
	イ	無	—	一段
	ケ	無	—	右
	蔵	無	—	一段
	骨	無	—	一段
墓室外	備	無	—	一段
	考	無	—	一段
	考	無	—	一段

墓口は大きく開き、墓室内に土砂はあまり堆積していないように見える。壁面は丁寧に掘り込まれる。墓口前方はかなり土砂が堆積して平坦であるため、墓庭が埋没している可能性も考えられる。



6号墓	形式	掘込墓・野面積	方向	MN-228
調査年月日	2014.10.07		大字	安仁屋
位置	座標旧	測定法	T S	
	X = 32041.0855m		Y = 27050.3235m	H = 52.6510m
外観	石材等	石灰岩盤	幅	—cm
	墓庭	可能性有り	奥行	—cm
	眉の形	—	眉のはね	—
	屋根平面形	自然のまま平坦		
墓室内	墓口	開 奥行	33cm	幅
	平面形状	半円形とみられる	57cm	高
		奥行	52cm	幅
		奥	—	高
	棚	不明	一段	左
	イ	不明	—	一段
	ケ	不明	—	右
	蔵	不明	—	一段
	骨	不明	—	一段
墓室外	備	無	—	一段
	考	無	—	一段
	考	無	—	一段

墓口と墓室内はほとんど土砂で埋没する。墓口の左側には石灰岩小礫のまとまりが有る。墓口前方は平坦であるため、墓庭が埋没している可能性も考えられる。



第IV章 分布調査の成果

7号墓	形式	掘込墓	方向	MN-294			
調査年月日	2014.10.07		大字	安仁屋			
位置	座標	旧測定法	T S				
	X = 32040.4040m		Y = 27049.6025m	H = 52.7500m			
外観	石材等	石灰岩盤・野面積					
	墓庭	可能性有り	幅	—cm	奥行	—cm	
	眉の形	—	眉のはね	—			
	屋根平面形	自然のまま平坦					
墓室内	墓口	開	奥行	36cm	幅	57cm	高 20cm
	平面形状	半円形					
	棚	奥行	43cm	幅	69cm	高	22cm
	イ	不明	奥	一段	左	一段	右 一段
	ケ	不明	—箇所				
墓室外	蔵骨器考	無	状況	—			
	備	墓口と墓室内はほとんど土砂で埋没する。墓口の右側には6号墓との仕切りになる石灰岩小礫の纏まりが有る。墓口には数個の石灰岩礫を確認できる。墓口前方は平坦であるため、墓庭が埋没している可能性も考えられる。					



8号墓	形式	掘込墓	方向	MN-290			
調査年月日	2014.10.07		大字	安仁屋			
位置	座標	旧測定法	T S				
	X = 32039.4325m		Y = 27049.1130m	H = 52.6990m			
外観	石材等	石灰岩盤					
	墓庭	可能性有り	幅	—cm	奥行	—cm	
	眉の形	—	眉のはね	—			
	屋根平面形	自然のまま平坦					
墓室内	墓口	開	奥行	30cm	幅	52cm	高 28cm
	平面形状	楕円形					
	棚	奥行	60cm	幅	94cm	高	29cm
	イ	不明	奥	一段	左	一段	右 一段
	ケ	不明	—箇所				
墓室外	蔵骨器考	無	状況	—			
	備	墓口と墓室内はかなり土砂で埋没する。墓口前方は平坦であるため、墓庭が埋没している可能性も考えられる。					



9号墓	形式	掘込墓	方向	MN-348
調査年月日	2014.10.08	大字	安仁屋	
位置	座標	旧測定法	T S	
	X = 32017.5530m		Y = 27012.9755m	H = 43.7485m
外観	石材等	石灰岩盤・野面積		
	墓庭	可能性有り	幅	—cm 奥行 —cm
	眉の形	—	眉のはね	—
	屋根平面形	自然のまま平坦		
墓室内	墓口	開	奥行	24cm 幅 37cm 高 27cm
	平面形状	不定形		
	棚	無	奥行	95cm 幅 91cm 高 24cm
	イケ	無	奥	一段 左 一段 右 一段
	天井	無	無	—箇所
	断面形	不定形	自然岩の可能性有り	
墓室外	蔵骨器	無	状況	—
	備考	墓口と墓室内はかなり土砂で埋没する。墓口前面には野面積の一部とみられる石灰岩礫を数個確認できる。墓口前方は広い空間が有るため、墓庭が埋没している可能性も考えられる。		



10号墓	形式	平葺墓	方向	MN-12
調査年月日	2014.10.08	大字	安仁屋	
位置	座標	旧測定法	T S	
	X = 32019.8640m		Y = 27001.9430m	H = 42.2150m
外観	石材等	石灰岩盤・野面積・切石積・漆喰仕上げ		
	墓庭	有	幅	551cm 奥行 608cm
	眉の形	直線	眉のはね	—
	屋根平面形	方形		
墓室内	墓口	開	奥行	100cm 幅 61cm 高 86cm
	平面形状	隅丸方形		
	棚	有	奥行	305cm 幅 328cm 高 111cm
	イケ	無	奥	2段 左 1段 右 1段
	蔵骨器	有	状況	散乱 マンガン釉蓋・身片・ツノ付身片
	人骨	有	状況	散乱 四肢骨の一部とみられる1点のみ
墓室外	備考	今回の調査では最大級の古墓。墓口は切石、墓室内は石灰岩盤を掘り込む。シルヒランは厚さ約0.11mの切石にて構築する。左袖垣の大部分は岩盤を利用、右袖垣は石灰岩礫を積み上げる。墓門の外には長さ約10m・幅約1.6mの墓道が続く。墓庭前方の右側には2段の石積有り、上段は長さ約8.5m・高さ約0.27m、下段は約長さ13.8m・高さ約0.45mを測る。		



第IV章 分布調査の成果

11号墓	形式	掘込墓	方向	MN-16
調査年月日	2014.10.03		大字	安仁屋
位置	座標	旧測定法	T S	
	X = 32008.8965m		Y = 26991.0120m	H = 41.6235m
外観	石材等	石灰岩盤・野面積		
	墓庭	無	幅	—cm 奥行 —cm
	眉の形	—	眉のはね	—
	屋根平面形	自然のまま		
墓室内	墓口	開 奥行	23cm	幅 88cm 高 60cm
	平面形状	不定形		
	棚	奥行	106cm	幅 150cm 高 59cm
	イケ	無 奥	一段	左 一段 右 一段
墓室外	蔵骨器考	有 一箇所	状況	散乱 ボージャー蓋・身・サンゴ製石厨子身
				墓口前面には人頭大以上の石灰岩礫による野面積を確認できる。墓室の内外に石灰岩礫が散乱することから、本来は墓口を塞ぐように積み上げられていたとみられる。



12号墓	形式	掘込墓	方向	MN-28
調査年月日	2014.10.03		大字	安仁屋
位置	座標	旧測定法	T S	
	X = 32011.7260m		Y = 26983.5365m	H = 40.0505m
外観	石材等	石灰岩盤・切石積		
	墓庭	無	幅	—cm 奥行 —cm
	眉の形	—	眉のはね	—
	屋根平面形	自然のまま		
墓室内	墓口	開 奥行	42cm	幅 58cm 高 102cm
	平面形状	隅丸方形		
	棚	奥行	310cm	幅 222cm 高 124cm
	イケ	有 奥	1段	左 1段 右 1段
墓室外	蔵骨器考	有 一箇所	状況	整然 ボージャー身8基・蓋7基
				今回の調査では残存状態が最も良好な古墓。墓口前面はやや土砂で埋没している。外面の右側は岩盤、左側は粗めに加工した石灰岩切石を積む。棚は切石や岩盤を削り出して構築する。ボージャー身8基には銘書無し。蓋7基中5基に銘書有り。



13号墓	形式	掘込墓	方向	MN-24					
調査年月日	2014.10.08		大字	安仁屋					
位置	座標	旧測定法	T S						
	X = 31997.9340m			Y = 26999.8220m				H = 37.6115m	
外観	石材等	石灰岩盤・野面積							
	墓庭	無	幅	—cm	奥行	—cm			
	眉の形	—	眉のはね	—					
	屋根平面形	自然のまま							
墓室内	墓口	開	奥行	30cm	幅	66cm	高	58cm	
	平面形状	半円形							
	棚	無	奥行	88cm	幅	143cm	高	42cm	
	イケ	無	奥	一段	左	一段	右	一段	
	天井断面形	曲線							
墓室外	蔵骨器	無	状況	—					
	備考	墓室内の天井の一部は崩落して床面に土砂が堆積する。墓口前面は拳大から人頭大の石灰岩礫を雑に積む。墓室の壁面は丁寧に削り出されている。							



14号墓	形式	岩陰墓	方向	MN-4					
調査年月日	2014.10.03		大字	安仁屋					
位置	座標	旧測定法	T S						
	X = 31995.9695m			Y = 26997.0180m				H = 35.8340m	
外観	石材等	石灰岩盤・野面積							
	墓庭	無	幅	—cm	奥行	—cm			
	眉の形	—	眉のはね	—					
	屋根平面形	自然のまま平坦							
墓室内	墓口	開	奥行	19cm	幅	90cm	高	30cm	
	平面形状	不定形							
	棚	無	奥行	60cm	幅	11cm	高	32cm	
	イケ	無	奥	一段	左	一段	右	一段	
	蔵骨器	無	状況	—					
墓室外	その他遺物	有	状況	散乱	沖縄産無釉陶器片1点・本土産磁器片1点(屋根)				
	備考	石灰岩盤の隙間にて石灰岩礫の雑な積み上げを確認できることから、古墓として記録する。							



第IV章 分布調査の成果

15号墓	形式	平葺墓	方向	MN-70					
調査年月日	2014.10.10		大字	安仁屋					
位置	座標	旧測定法	T S						
	X = 31992.0470m		Y = 27129.6785m					H = 56.2965m	
外観	石材等	石灰岩盤・野面積・切石積・漆喰仕上げ							
	墓庭	有	幅	368cm	奥行	590cm			
	眉の形	直線	眉のはね						
	屋根平面形	方形	台形ぎみ						
墓室内	墓口	開	奥行	76cm	幅	64cm	高	85cm	
	平面形状	方形	奥行	253cm	幅	133cm	高	164cm	
	棚	有	奥	3段	左	1段	右	1段	
	イケ	無	一箇所						
墓室外	蔵骨器	無							
	備考	袖石と前面は切石積、左右の袖垣は石灰岩盤を利用する。袖石付近の崩落は著しい。屋根の縁石は粗加工の石灰岩礫を並べる。墓室内の壁は墓口側の約半分は切石積、残りは石灰岩盤で造られる。天井は全体の約2/3を岩盤から削り出す。墓庭や周囲にはゴミが多数散乱する。							



16号墓	形式	亀甲墓	方向	MN-26					
調査年月日	2014.10.10		大字	安仁屋					
位置	座標	旧測定法	T S						
	X = 31993.2115m		Y = 27109.4640m					H = 54.0755m	
外観	石材等	石灰岩盤・野面積・切石積・漆喰仕上げ							
	墓庭	有	幅	600cm	奥行	685cm			
	眉の形	おそらく曲線	眉のはね						
	屋根平面形	円形							
墓室内	墓口	開	奥行	73cm	幅	62cm	高	71cm	
	平面形状	方形	奥行	450cm	幅	279cm	高	161cm	
	棚	有	奥	5段	左	1段	右	1段	
	イケ	無	一箇所						
	天井断面形	曲線							
墓室外	蔵骨器	有	状況	散乱	マンガン釉蓋片・身片・ツノ付片(床全体)				
	備考	左袖垣は野面積、右袖垣は切石と野面積からなる。ウライジョーと左右のワラビヌティーは石灰岩切石が並べられ、残存状態はかなり良好である。ボージは石葺きとみられる。カガンとマユは欠損、袖石の崩落は著しい。墓室内の壁と天井は墓口側の約半分は大型の切石積、残りは石灰岩盤で造られる。							



17号墓	形式	亀甲墓	方向	MN-110				
調査年月日	2014.10.10		大字	安仁屋				
位置	座標	旧測定法	T S					
	X = 32011.8910m		Y = 27090.5360m				H = 52.4735m	
外観	石材等	石灰岩盤・切石積						
	墓庭	有	幅	562cm	奥行	513cm		
	眉の形	曲線	眉のはね		はねる			
	屋根平面形	楕円形						
墓室内	墓口	開	奥行	71cm	幅	65cm	高	108cm
	平面形状	方形	奥行	240cm	幅	214cm	高	108cm
	棚	有	奥	2段	左	1段	右	1段
	イケ	無	一箇所					
	天井断面形	曲線	緩やか					
墓室外	蔵骨器考	有	状況	散乱	ツノ付身片(シルヒラン)			
	備	右袖石と左右の袖垣は岩盤と石灰岩礫を用いる。墓口と左袖石は岩盤から削り出される。ウライジョーの右側は粗加工の石灰岩を並べ、左側は岩盤を削って形造る。墓門の切石は残存するが、前垣はほとんど欠損する。墓室内は全て石灰岩盤を掘り込んで造られる。羨道からシルヒランへ下りる階段有り。						



18号墓	形式	掘込墓	方向	MN-130				
調査年月日	2014.10.10		大字	安仁屋				
位置	座標	旧測定法	T S					
	X = 32015.6875m		Y = 27092.7565m				H = 54.7145m	
外観	石材等	石灰岩盤・野面積						
	墓庭	無	幅	-cm	奥行	-cm		
	眉の形	-	眉のはね		-			
	屋根平面形	自然のまま						
墓室内	墓口	開	奥行	70cm	幅	150cm	高	74cm
	平面形状	半円形	奥行	156cm	幅	137cm	高	56cm
	棚	無	奥	一段	左	一段	右	一段
	イケ	無	一箇所					
	蔵骨器考	無	状況	-				
墓室外	備	17号墓の屋根の左隣に位置する古墓である。墓室内は土砂がかなり堆積する。墓口前面には人頭大以上の石灰岩礫を野面積する。						



第IV章 分布調査の成果

19号墓	形式	平葺墓	方向	MN-22
調査年月日	2014.10.10		大字	安仁屋
位置	座標	旧測定法	T S	
	X = 32009.0205m		Y = 27038.9745m	H = 43.7610m
外観	石材等	石灰岩盤・野面積・切石積		
	墓庭	有	幅	488cm 奥行 600cm
	眉の形	直線	眉のはね	—
	屋根平面形	方形		
墓室内	墓口	開	奥行 82cm 幅 65cm	高 92cm
	平面形状	隅丸方形	奥行 296cm 幅 277cm	高 140cm
	棚	有	奥 3段 左 2段	右 2段
	イケ	無	—箇所	
墓室外	蔵骨器	無	状況	—
	備考	左袖は岩盤を利用、右袖は岩盤の上に石灰岩小礫を積むが、一部は崩れ落ちている。屋根の縁石は人頭大ほどの石灰岩礫を並べる。墓口付近は石灰岩切石を積む。墓口の外にはウコール石が散乱する。墓室は岩盤を掘り込んで造られる。側棚左の2段目は側棚右2段目と比べて低い。		



20号墓	形式	掘込墓	方向	MN-300
調査年月日	2014.10.08		大字	安仁屋
位置	座標	旧測定法	T S	
	X = 32007.6950m		Y = 27036.5625m	H = 43.6735m
外観	石材等	石灰岩盤		
	墓庭	無	幅	—cm 奥行 —cm
	眉の形	—	眉のはね	—
	屋根平面形	自然のまま		
墓室内	墓口	開	奥行 12cm 幅 51cm	高 46cm
	平面形状	隅丸方形	奥行 52cm 幅 61cm	高 41cm
	棚	無	奥 —段 左 —段	右 —段
	イケ	無	—箇所	
	天井断面形	曲線	奥壁方向に低くなる	
墓室外	蔵骨器	無	状況	—
	備考	19号墓の左袖の岩盤に造られる。		



21号墓	形式	掘込墓	方向	MN-30
調査年月日	2014.10.08		大字	安仁屋
位置	座標	旧測定法	T S	
	X = 32008.2560m		Y = 27034.6755m	H = 44.1120m
外観	石材等	石灰岩盤・野面積		
	墓庭	有	幅	210cm
	眉の形	—	奥行	310cm
	屋根平面形	自然のまま	眉のはね	—
墓室内	墓口	開	奥行	25cm
	平面形状	橢円形	幅	45cm
		奥行	131cm	幅
		奥	一段	128cm
	棚	無	左	高
	イ	ケ	一段	83cm
	蔵	骨	右	一段
	備	考	—	一段
墓室外	蔵骨器考	有	状況	散乱
		墓口には数個の石灰岩礫を確認できる。墓口前方は周囲よりも一段高くなり、拳大の石灰岩小礫が散乱する。		マンガン釉蓋・身片、身は2基以上有り



22号墓	形式	平葺墓	方向	MN-22
調査年月日	2014.10.10		大字	安仁屋
位置	座標	旧測定法	T S	
	X = 32010.0765m		Y = 27046.2325m	H = 45.5495m
外観	石材等	石灰岩盤・野面積・切石積・コンクリート部材積		
	墓庭	有	幅	475cm
	眉の形	直線	奥行	597cm
	屋根平面形	方形	眉のはね	—
墓室内	墓口	開	奥行	73cm
	平面形状	橢円形	幅	65cm
		奥行	256cm	高
		奥	一段	140cm
	棚	無	左	高
	イ	ケ	一段	146cm
	蔵	骨	右	一段
	備	考	—	一段
墓室外	蔵骨器考	無	状況	—
		左右の袖は岩盤上に石灰岩小礫を積むが、一部は崩れて落ちている。墓口の外に蓋石有り。墓門は残っているが、前垣は無い。墓室の墓口側半分は粗整形の石灰岩を積む。天井は4本の鉄骨付きのコンクリート製部材にて造られる。		



第IV章 分布調査の成果

23号墓	形式	平葺墓	方向	MN-156				
調査年月日	2014.10.10	大字 安仁屋						
位置	座標	旧測定法	T S					
	X = 31965.0340m			Y = 27075.9539m			H = 53.6890m	
外観	石材等	石灰岩盤・野面積						
	墓庭	有	幅	280cm	奥行	290cm		
	眉の形	不明	眉のはね	不明				
墓室内	屋根平面形	方形						
	墓口	開	奥行	25cm	幅	58cm	高	48cm
	平面形状	不定形	奥行	137cm	幅	152cm	高	55cm
墓室外	棚	不明	奥	一段	左	一段	右	一段
	イケ	不明	一箇所					
	備考	左右の袖は、石灰岩小礫のまとまりを確認できる。屋根の縁石の右側は石灰岩礫を並べるが、左側は岩盤をそのまま利用する。墓口上方の崩落により墓室内に土砂が流入する。						



24号墓	形式	平葺墓	方向	MN-162				
調査年月日	2014.10.03	大字 安仁屋						
位置	座標	旧測定法	T S					
	X = 31962.3460m			Y = 27061.4610m			H = 51.8720m	
外観	石材等	石灰岩盤・切石積・漆喰仕上げ						
	墓庭	有	幅	327cm	奥行	460cm		
	眉の形	直線	眉のはね	-				
墓室内	屋根平面形	方形とみられる						
	墓口	開	奥行	63cm	幅	64cm	高	99cm
	平面形状	不定形	奥行	150cm	幅	175cm	高	112cm
墓室外	棚	無	奥	一段	左	一段	右	一段
	イケ	無	一箇所					
	備考	蔵骨器	無	状況	-			
	備考	左右の袖石と袖垣は石灰岩盤から削り出される。右袖垣は岩盤の上に石灰岩小礫を積む。屋根は土砂と樹根により詳細は不明である。墓口は石灰岩切石を積み、墓室は石灰岩盤を掘り込んで造られる。墓庭の前面には墓道有り。						



25号墓	形式	掘込墓	方向	MN-150
調査年月日	2014.10.10		大字	安仁屋
位置	座標	旧測定法	T S	
	X = 31964.6090m		Y = 27064.9730m	H = 53.1065m
外観	石材等	石灰岩盤・野面積		
	墓庭	有とみられる	幅	370cm
	眉の形	—	奥行	246cm
	屋根平面形	自然のまま	眉のはね	—
墓室内	墓口	開	奥行	30cm
	平面形状	不定形	幅	46cm
		奥行	51cm	高
	棚	不明	幅	72cm
	イケ	不明	奥	一段
	天井断面形	不明	一段	左
墓室外	蔵骨器	不明	一段	右
	備考	不明	一段	右
		状況	—	一段
		状況	—	一段

墓口と墓室内はかなり土砂が堆積する。墓口には野面積の一部とみられる石灰岩小礫有り。墓口の前方には平坦な面があり、墓庭に相当すると考えられる。平坦面の左側には石灰岩小礫のまとまりを確認できる。



26号墓	形式	平尊墓	方向	MN-200
調査年月日	2014.10.10		大字	安仁屋
位置	座標	旧測定法	T S	
	X = 31975.8195m		Y = 27061.0015m	H = 41.8217m
外観	石材等	石灰岩盤・野面積		
	墓庭	不明	幅	計測不可
	眉の形	直線	奥行	計測不可
	屋根平面形	方形	眉のはね	—
墓室内	墓口	開	奥行	計測不可
	平面形状	不明	幅	計測不可
		奥行	計測不可	高
	棚	不明	幅	計測不可
	イケ	不明	奥	計測不可
	天井断面形	不明	一段	左
墓室外	蔵骨器	不明	一段	右
	備考	不明	一段	右
		状況	確認不可	計測不可
		状況	確認不可	計測不可

墓口外から墓庭にかけて、多量の石灰岩礫や土砂に埋没する。屋根は27号墓の上に重なり、縁は丁寧に丁寧に野面積を施す。墓口は視認できるが、大きな石灰岩礫に阻まれて内部に入ることは困難である。



第IV章 分布調査の成果

27号墓	形式	平葺墓	方向	MN-156				
調査年月日	2014.10.10		大字	安仁屋				
位置	座標	旧測定法	T S					
	X = 31975.3845m		Y = 27057.5085m	H = 46.5105m				
外観	石材等	石灰岩盤・野面積・切石積・漆喰仕上げ						
	墓庭	有	幅	445cm以上	奥行	153cm		
	眉の形	直線	眉のはね	—				
	屋根平面形	不明						
墓室内	墓口	開	奥行	79cm	幅	64cm	高	103cm
	平面形状	方形						
		奥行	406cm	幅	286cm	高	154cm	
	棚	有	奥	5段	左	1段	右	1段
	イ	—箇所						
墓室外	蔵骨器	無	状況	—				
備考		墓口外から墓庭にかけて、多量の石灰岩礫や土砂に埋没する。屋根は26号墓と重なり合うが、土砂のために平眉以外は詳細不明である。右袖石や墓口は大きな石灰岩切石を使用する。右袖垣は岩盤を利用、先端部には石灰岩小礫のまとまりを確認できる。墓室は岩盤を掘り込んで造られる。						



28号墓	形式	掘込墓	方向	MN-146				
調査年月日	2014.10.10		大字	安仁屋				
位置	座標	旧測定法	T S					
	X = 31974.1505m		Y = 27053.1010m	H = 47.6475m				
外観	石材等	石灰岩盤・野面積						
	墓庭	有	幅	366cm	奥行	570cm		
	眉の形	—	眉のはね	—				
	屋根平面形	自然のまま						
墓室内	墓口	開	奥行	75cm	幅	62cm	高	39cm
	平面形状	隅丸方形とみられる						
		奥行	156cm	幅	137cm	高	56cm	
	棚	不明	奥	一段	左	一段	右	一段
	イ	—箇所						
墓室外	蔵骨器	無	状況	—				
備考		無	状況	—				
		墓口と墓室内には土砂がかなり堆積する。墓口の付近は石灰岩礫が散乱する。墓庭は隣接する29号墓との間に仕切りが認められないため共用とみられる。左袖は27号墓の右袖垣にあたる。墓庭の前方にある斜面は野面積が認められる。						



29号墓	形式	掘込墓	方向	MN-156					
調査年月日	2014.10.10	大字 安仁屋							
位置	座標 旧	測定法	T S						
	X = 31972.3540m			Y = 27051.0495m	H = 47.7195m				
外観	石材等	石灰岩盤・野面積		幅	366cm	奥行	570cm		
	墓庭	有		眉のはね	-				
	屋根平面形	自然のまま							
墓室内	墓口	開	奥行	63cm	幅	67cm	高	72cm	
	平面形状	隅丸方形		奥行	205cm	幅	153cm	高	103cm
	棚	有	奥	1段	左	一段	右	一段	
	イケ	無		一箇所					
	蔵骨器	有		状況	散乱	マンガン釉蓋片・身片			
	人骨	無		状況	-				
墓室外	備考	墓口には土砂がかなり堆積する。墓口の上方は岩盤の上に石灰岩礫を並べる。墓口の左側は段差をつけ、袖を意識して削られているように見える。右袖垣は石灰岩礫が雑に並べられ、30号墓と仕切られる。墓室内は丁寧に掘り込まれる。							



30号墓	形式	掘込墓	方向	MN-160					
調査年月日	2014.10.10	大字 安仁屋							
位置	座標 旧	測定法	T S						
	X = 31971.8045m			Y = 27048.8300m	H = 48.4685m				
外観	石材等	石灰岩盤・野面積		幅	258cm	奥行	405cm		
	墓庭	有		眉のはね	-				
	屋根平面形	自然のまま							
墓室内	墓口	開	奥行	28cm	幅	77cm	高	63cm	
	平面形状	不定形		奥行	102cm	幅	165cm	高	103cm
	棚	無	奥	一段	左	一段	右	一段	
	イケ	無		一箇所					
	蔵骨器	有		状況	散乱	マンガン釉身片			
	人骨	有		状況	散乱	四肢骨の一部とみられる破片ほか小片			
墓室外	備考	墓口には土砂がかなり堆積する。墓口周辺は、29号墓と同様に墓口の上方の岩盤上に積まれていたとみられる石灰岩礫が散乱する。左袖は29号墓の右袖に当たり、右袖垣は岩盤を利用する。墓室は丁寧に掘り込まれる。							



33号墓	形式	掘込墓	方向	MN-188
調査年月日	2014.10.09		大字	安仁屋
位置	座標	旧測定法	T S	
	X = 31966.3870m		Y = 27037.3255m	H = 47.0525m
外観	石材等	石灰岩盤・野面積		
	墓庭	無	幅	—cm 奥行 —cm
	眉の形	—	眉のはね	—
	屋根平面形	自然のまま		
墓室内	墓口	開	奥行	—cm 幅 180cm 高 28cm
	平面形状	不明	奥行	80cm 幅 103cm 高 64cm
	棚	不明	奥	一段 左 一段 右 一段
	イケ	不明	—箇所	
	天井断面形	曲線		
	蔵骨器	無	状況	—
	人骨	無	状況	—
墓室外	備考	墓口は上部が崩落して埋没し、詳細は不明である。隙間からは丁寧に掘り込まれた墓室を一部見ることができる。古墓は32号墓の左袖に位置する。		



34号墓	形式	掘込墓	方向	MN-106
調査年月日	2014.10.09		大字	安仁屋
位置	座標	旧測定法	T S	
	X = 31954.4865m		Y = 27030.6630m	H = 48.6435m
外観	石材等	石灰岩盤・野面積		
	墓庭	有	幅	114cm 奥行 382cm
	眉の形	—	眉のはね	—
	屋根平面形	自然のまま		
墓室内	墓口	開	奥行	53cm 幅 82cm 高 46cm
	平面形状	不定形	奥行	93cm 幅 158cm 高 30cm
	棚	不明	奥	一段 左 一段 右 一段
	イケ	不明	—箇所	
	蔵骨器	無	状況	—
	人骨	無	状況	—
墓室外	備考	墓口と墓室内にはかなり土砂が堆積する。左右の袖は岩盤を利用する。墓口前面には拳大から人頭大の石灰岩礫を雑に並べる。		



第IV章 分布調査の成果

35号墓	形式	掘込墓	方向	MN-62
調査年月日	2014.10.09		大字	安仁屋
位置	座標	旧測定法	T S	
	X = 31951.0525m		Y = 27018.3365m	H = 42.9035m
外観	石材等	石灰岩盤・野面積		
	墓庭	無	幅	—cm 奥行 —cm
	眉の形	—	眉のはね	—
	屋根平面形	自然のまま		
墓室内	墓口	開	奥行	73cm 幅 63cm 高 50cm
	平面形状	不定形		
	棚	不明	奥行	約246cm 幅 約258cm 高 約106cm
	イケ	不明	奥	一段 左 一段 右 一段
	蔵骨器	有	状況	散乱 サング製石厨子蓋3基・身3基
	人骨	有	状況	散乱 四肢骨など比較的大きな形で残存する
墓室外	備考	鍾乳洞をそのまま古墓として利用する。洞穴の入口部分に野面積を施す。墓室内はかなり土砂が堆積する。蔵骨器は墓室内の左側にまとまっている。		



36号墓	形式	掘込墓	方向	MN-42
調査年月日	2014.10.09		大字	安仁屋
位置	座標	旧測定法	T S	
	X = 31942.1590m		Y = 27028.6740m	H = 45.9480m
外観	石材等	石灰岩盤・切石積		
	墓庭	無	幅	—cm 奥行 —cm
	眉の形	—	眉のはね	—
	屋根平面形	自然のまま		
墓室内	墓口	開	奥行	—cm 幅 128cm 高 229cm
	平面形状	不定形		
	棚	無	奥行	285cm 幅 340cm 高 162cm
	イケ	無	奥	一段 左 一段 右 一段
	蔵骨器	有	状況	散乱 マンガン釉蓋片
	人骨	有	状況	散乱 頸椎ほか小片
	その他遺物	有	状況	散乱 沖縄産施釉陶器
墓室外	備考	洞穴をそのまま古墓として利用する。床面は奥壁に向かって4段の階段状を呈する。遺物や人骨は1・2段目に散乱する。		



37号墓	形式	岩陰墓	方向	MN-56				
調査年月日	2014.10.09		大字	安仁屋				
位置	座標	旧測定法	T S					
	X = 31936.6610m		Y = 27029.4390m				H = 42.6495m	
外観	石材等	石灰岩盤・野面積						
	墓庭	無	幅	—cm	奥行	—cm		
	眉の形	—	眉のはね		—			
	屋根平面形	自然のまま						
墓室内	墓口	開	奥行	—cm	幅	—cm	高	—cm
	平面形状	楕円形	奥行	40cm	幅	116cm	高	67cm(岩盤までの高さ)
	棚	無	奥	一段	左	一段	右	一段
	イケ	無	一箇所					
	蔵骨器	有	状況	散乱				サンゴ製石厨子片・マンガン釉身片・赤焼片
	人骨	無	状況	—				
墓室外	備考	石灰岩盤の岩陰に拳大から人頭大の石灰岩礫を長さ1.82m、高さ0.22mほど弧を描くように積む。石積から岩盤までの高さは0.72mを測る。						



38号墓	形式	掘込墓	方向	MN-108				
調査年月日	2014.10.09		大字	安仁屋				
位置	座標	旧測定法	T S					
	X = 31933.3300m		Y = 27034.5455m				H = 43.7185m	
外観	石材等	石灰岩盤						
	墓庭	無	幅	—cm	奥行	—cm		
	眉の形	—	眉のはね		—			
	屋根平面形	自然のまま						
墓室内	墓口	開	奥行	60cm	幅	70cm	高	270cm
	平面形状	不定形	奥行	118cm	幅	136cm	高	209cm
	棚	無	奥	一段	左	一段	右	一段
	イケ	有?	1箇所					
	蔵骨器	無	状況	—				
	人骨	無	状況	—				
墓室外	備考	洞穴を加工して古墓を構築する。墓口とみられる部分まで6段の階段が設けれ、3段目で左に大きく折れ曲がる。奥壁にはイケとみられる窪み(幅0.46m、奥行き0.32m)有り。窪みの手前側は拳大の石灰岩礫を並べる。						

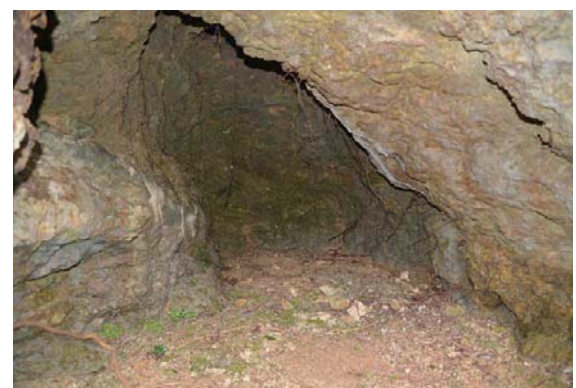


第IV章 分布調査の成果

39号墓	形式	掘込墓	方向	MN-100					
調査年月日	2014.10.10		大字	安仁屋					
位置	座標	旧測定法	T S						
	X = 31929.5075m			Y = 27034.8650m				H = 42.5135m	
外観	石材等	石灰岩盤							
	墓庭	無	幅	—cm	奥行	—cm			
	眉の形	—	眉のはね		—				
	屋根平面形	自然のまま							
墓室内	墓口	開	奥行	—cm	幅	116cm	高	112cm	
	平面形状	方形	奥行	約184cm	幅	約80cm	高	約64cm	
	棚	無	奥	一段	左	一段	右	一段	
	イケ	無	一箇所						
	蔵骨	有	状況	散乱				マンガン釉身片1点	
	人骨	有	状況	散乱				四肢骨の一部とみられる破片ほか小片	
墓室外	備考	墓口には拳大ほどの石灰岩礫を配する。縦長の墓室内には区画のためとみられる石灰岩礫が並べられる。墓口の前方には、石灰岩礫のまとまりが有り、厨子甕片や土器片を多数確認する。							



40号墓	形式	掘込墓	方向	MN-40					
調査年月日	2014.10.09		大字	安仁屋					
位置	座標	旧測定法	T S						
	X = 31927.1680m			Y = 27038.4725m				H = 44.2905m	
外観	石材等	石灰岩盤							
	墓庭	有	幅	354cm	奥行	330cm			
	眉の形	—	眉のはね		—				
	屋根平面形	自然のまま							
墓室内	墓口	開	奥行	—cm	幅	186cm	高	189cm	
	平面形状	隅丸方形	奥行	220cm	幅	190cm	高	233cm	
	棚	無	奥	一段	左	一段	右	一段	
	イケ	無	一箇所						
	蔵骨	無	状況	—					
	人骨	無	状況	—					
墓室外	備考	洞穴を加工して古墓を構築しているとみられる。墓室にあたる奥側の窄まった部分の手前には、床面に拳大の石灰岩礫を並べる。その外側は墓庭のような平坦面があり、左の岩盤際には骨片が散乱する。平坦面の外側には石灰岩礫のまとまりも認められる。							



41号墓	形式	掘込墓	方向	MN-70
調査年月日	2014.10.09	大字	安仁屋	
位置	座標 旧	測定法	T S	
	X = 31922.7725m		Y = 27042.6230m	H = 45.0950m
外観	石材等	石灰岩盤・野面積		
	墓庭	有	幅	66cm 奥行 84cm
	眉の形	—	眉のはね	—
	屋根平面形	自然のまま		
墓室内	墓口	開	奥行	—cm 幅 52cm 高 60cm
	平面形状	不定形		
	棚	無	奥行	80cm 幅 105cm 高 61cm
	イケ	無	奥	一段 左 一段 右 一段
	蔵骨器	無	—箇所	
	人骨	無	状況	—
墓室外	備考	墓口の前面には拳大から人頭大の石灰岩礫を雑に積むが、大きく崩れている。墓室内の天井は自然岩とみられることから、小さな岩穴を利用した古墓の可能性も考えられる。		



42号墓	形式	掘込墓	方向	MN-46
調査年月日	2014.10.18	大字	安仁屋	
位置	座標 旧	測定法	T S	
	X = 31907.7540m		Y = 27052.1175m	H = 43.2375m
外観	石材等	石灰岩盤		
	墓庭	無	幅	—cm 奥行 —cm
	眉の形	—	眉のはね	—
	屋根平面形	自然のまま		
墓室内	墓口	開	奥行	—cm 幅 115cm 高 180cm
	平面形状	不定形		
	棚	無	奥行	480cm 幅 354cm 高 160cm
	イケ	無	奥	一段 左 一段 右 一段
	蔵骨器	有	—箇所	
	人骨	有	状況	散乱
	其他遺物	有	状況	散乱
墓室外	備考	洞穴をそのまま古墓として利用する。遺物は左側の岩盤の窪みや左右の壁際に散布する。奥壁付近は棚状に一段高くなる。遺物のほかに絨毯や箒を確認できる。		



第IV章 分布調査の成果

43号墓	形式	掘込墓	方向	MN-62
調査年月日	2014.10.20		大字	安仁屋
位置	座標	旧測定法	T S	
	X = 31902.4565m		Y = 27067.4300m	H = 48.9890m
外観	石材等	石灰岩盤・野面積		
	墓庭	無	幅	-cm 奥行 -cm
	眉の形	-	眉のはね	-
	屋根平面形	自然のまま		
墓室内	墓口	開	奥行	68cm 幅 51cm 高 116cm
	平面形状	不定形	奥行	243cm 幅 298cm 高 147cm
	棚	無	奥	一段 左 一段 右 一段
	イケ	無	一箇所	
	蔵骨器	無	状況	-
	人骨	有	状況	散乱 四肢骨の一部とみられる破片ほか小片
墓室外	備考	洞穴の前面に人頭大からそれ以上の石灰岩礫を高さ0.8mほど野面積する。石積の一部は崩落して墓室の右側に散乱する。人骨は左側にまとまって確認できる。		



44号墓	形式	岩陰墓	方向	MN-130
調査年月日	2014.10.09		大字	安仁屋
位置	座標	旧測定法	T S	
	X = 31898.2850m		Y = 27067.9960m	H = 48.0180m
外観	石材等	石灰岩盤・野面積		
	墓庭	無	幅	-cm 奥行 -cm
	眉の形	-	眉のはね	-
	屋根平面形	自然のまま		
墓室内	墓口	開	奥行	-cm 幅 -cm 高 -cm
	平面形状	不定形	岩盤のカーブに沿って細長い弧を描く	
		奥行	70cm	幅 184cm 高 53cm (岩盤までの高さ)
	棚	無	奥	一段 左 一段 右 一段
	イケ	無	一箇所	
	蔵骨器	無	状況	-
	人骨	無	状況	-
墓室外	備考	石灰岩盤の岩陰に拳大から人頭大の石灰岩礫を長さ2.05m、高さ0.24mほど弧を描くように積む。石積から岩盤までの高さは1.02mを測る。37号墓と類似した形態である。		



45号墓	形式	掘込墓	方向	MN-66
調査年月日	2014.10.18		大字	安仁屋
位置	座標	旧測定法	T S	
	X = 31885.1725m		Y = 27073.6680m	H = 44.0140m
外観	石材等	石灰岩盤		
	墓庭	無	幅	-cm 奥行 -cm
	眉の形	-	眉のはね	-
	屋根平面形	自然のまま		
墓室内	墓口	開	奥行	-cm 幅 210cm 高 294cm
	平面形状	不定形		
	棚	無	奥行	約190cm 幅 約232cm 高 100cm
	イケ	無	奥	一段 左 一段 右 一段
	蔵骨器	無	一箇所	
	人骨	無	状況	-
墓室外	備考	墓口は大きく開く。墓室は石灰岩盤を丁寧に掘り込む。前面の斜面には石灰岩礫が多数散乱する。	状況	-



46号墓	形式	掘込墓	方向	MN-6
調査年月日	2014.10.09		大字	安仁屋
位置	座標	旧測定法	T S	
	X = 31879.0765m		Y = 27077.3165m	H = 42.3085m
外観	石材等	石灰岩盤		
	墓庭	無	幅	-cm 奥行 -cm
	眉の形	-	眉のはね	-
	屋根平面形	自然のまま		
墓室内	墓口	開	奥行	-cm 幅 140cm 高 92cm
	平面形状	不定形		
	棚	無	奥行	115cm 幅 123cm 高 87cm
	イケ	無	奥	一段 左 一段 右 一段
	天井断面形	自然岩		
	蔵骨器	無	状況	-
	人骨	有	状況	散乱 頰椎・四肢骨の一部とみられる破片ほか小片
墓室外	備考	岩盤の窪みを利用しているとみられ、墓室の床面は狭い。墓口は大きく開いているため、範囲の特定は難しい。		



第IV章 分布調査の成果

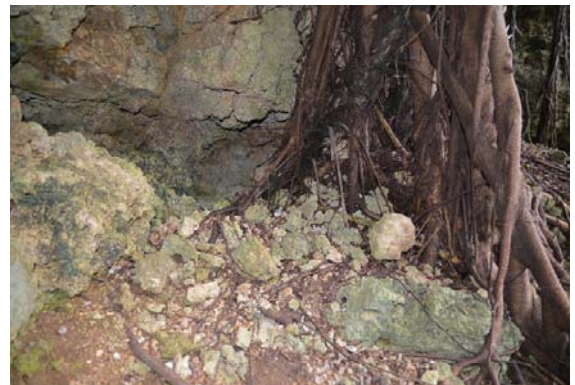
51号墓	形式	岩陰墓	方向	MN-154
調査年月日	2014.10.23		大字	安仁屋
位置	座標	旧測定法	T S	
	X = 31795.9215m		Y = 27162.2145m	H = 53.4930m
外観	石材等	石灰岩盤		
	墓庭	無	幅	— cm
	眉の形	—	奥行	— cm
	屋根平面形	自然のまま	眉のはね	—
墓室内	墓口	開	奥行	— cm
	平面形状	不定形	幅	69cm
		奥行	90cm	高
	棚	無	幅	70cm
	イケ	無	奥	— 一段
	蔵骨器	無	一段	左
	人骨	有	一段	右
墓室外	備考	石灰岩盤の岩陰に人骨を確認できることから古墓として記録する。明確な墓口は認められない。イシジャー側の崖錘斜面には大量の石灰岩礫が散乱する。		



52号墓	形式	掘込墓	方向	MN-6
調査年月日	2014.10.22		大字	安仁屋
位置	座標	旧測定法	T S	
	X = 31793.6660m		Y = 27164.1070m	H = 57.8020m
外観	石材等	石灰岩盤		
	墓庭	無	幅	— cm
	眉の形	—	奥行	— cm
	屋根平面形	自然のまま	眉のはね	—
墓室内	墓口	開	奥行	— cm
	平面形状	不定形	幅	160cm
		奥行	160cm	高
	棚	無	幅	194cm
	イケ	有	奥	— 一段
	蔵骨器	無	一段	左
	人骨	有	一段	右
墓室外	備考	洞穴を加工して古墓を構築する。墓口は大きく開いているため、範囲の特定は難しい。イケは右奥壁に幅0.45m、奥行0.4m、高さ0.25mを測る。人骨は墓室内ほか前面の岩盤上にも散乱する。		



53号墓	形式	岩陰墓	方向	MN-120					
調査年月日	2014.10.22		大字	安仁屋					
位置	座標	旧測定法	T S						
	X = 31788.3350m		Y = 27170.3615m					H = 61.7560m	
外観	石材等	石灰岩盤・野面積?							
	墓庭	無	幅	—cm	奥行	—cm			
	眉の形	—	眉のはね	—					
	屋根平面形	自然のまま							
墓室内	墓口	開	奥行	—cm	幅	52cm	高	47cm	
	平面形状	不定形	奥行	94cm	幅	45cm	高	34cm	
	棚	無	奥	一段	左	一段	右	一段	
	イケ	無	一箇所						
	蔵骨器	無		状況	—				
	人骨	有		状況	散乱				四肢骨の一部とみられる破片ほか小片
墓室外	備考	石灰岩盤の岩陰に人骨を確認できることから古墓として記録する。明確な墓口は認められない。インジャー側の崖錘斜面には大量の石灰岩礫が散乱する。古墓の形態は51号墓と同じである。							



54号墓	形式	掘込墓	方向	MN-94					
調査年月日	2014.10.23		大字	安仁屋					
位置	座標	旧測定法	T S						
	X = 31782.3090m		Y = 27174.7530m					H = 61.6660m	
外観	石材等	石灰岩盤・野面積							
	墓庭	無	幅	—cm	奥行	—cm			
	眉の形	—	眉のはね	—					
	屋根平面形	自然のまま							
墓室内	墓口	開	奥行	90cm	幅	87cm	高	163cm	
	平面形状	不定形	奥行	510cm	幅	263cm	高	126cm	
	棚	無	奥	一段	左	一段	右	一段	
	イケ	無	一箇所						
	蔵骨器	有		状況	散乱				ボージャー蓋・身片
	人骨	有		状況	散乱				四肢骨ほか様々な部位が含まれ、複数個体分有り
墓室外	備考	洞穴をそのまま古墓として利用する。墓口には高さ0.33mほど石灰岩礫を野面積する。墓室内は現況で3ヶ所の小区画のような配石が有り、区画内には人骨や厨子甕片が確認できる。遺物のほかビニール製品のゴミも床面にみられる。墓口の右隣には55号墓が位置する。							



第IV章 分布調査の成果

55号墓	形式	掘込墓	方向	MN-114					
調査年月日	2014.10.22		大字	安仁屋					
位置	座標	旧測定法	T S						
	X = 31780.1245m		Y = 27174.0765m					H = 61.2735m	
外観	石材等	石灰岩盤・野面積							
	墓庭	無	幅	—cm	奥行	—cm			
	眉の形	—	眉のはね	—					
	屋根平面形	自然のまま							
墓室内	墓口	開	奥行	66cm	幅	42cm	高	61cm	
	平面形状	不定形							
	棚	無	奥行	136cm	幅	187cm	高	134cm	
	イケ	無	奥	一段	左	一段	右	一段	
	蔵骨	無	一箇所						
	人骨	有	状況	散乱					ボージャー身片
	備考	有	状況	散乱					四肢骨の一部とみられる破片ほか小片
墓室外	備考	石灰岩盤の岩陰の前面に拳大から人頭大以上の石灰岩礫を野面積して古墓を構築する。石積は高い所で0.7m積む。古墓の形態は43号墓に類似する。							



56号墓	形式	掘込墓	方向	MN-68					
調査年月日	2014.10.22		大字	安仁屋					
位置	座標	旧測定法	T S						
	X = 31755.3485m		Y = 27180.2330m					H = 55.4390m	
外観	石材等	石灰岩盤							
	墓庭	不明	幅	—cm	奥行	—cm			
	眉の形	不明	眉のはね	—					
	屋根平面形	不明							
墓室内	墓口	開	奥行	—cm	幅	124cm	高	85cm	
	平面形状	半円形							
	棚	無	奥行	111cm	幅	128cm	高	75cm	
	イケ	無	奥	一段	左	一段	右	一段	
	蔵骨	無	一箇所						
	人骨	無	状況	—					
	備考	無	状況	—					
墓室外	備考	墓口・墓室内にはかなり土砂が堆積する。墓口は大きく開いているため、範囲を特定することは難しい。墓口の前方には緩やかな斜面があるため、墓庭が埋没している可能性も考えられる。古墓は右隣の57号墓に接するように築かれる。右袖は57号墓の墓室の右側面に当たるかもしれない。							



57号墓	形式	掘込墓	方向	MN-64
調査年月日	2014.10.22		大字	安仁屋
位置	座標	旧測定法	T S	
	X = 31752.8525m		Y = 27180.1845m	H = 55.3505m
外観	石材等	石灰岩盤・野面積・切石積・ブロック積・漆喰仕上げ		
	墓庭	有	幅	310cm 奥行 330cm
	眉の形	不明	眉のはね	不明
	屋根平面形	自然のまま		
墓室内	墓口	開	奥行	46cm 幅 62cm 高 70cm
	平面形状	隅丸方形	奥行	186cm 幅 200cm 高 175cm
	棚	有	奥	1段 左 確認不可 右 一段
	イケ	無	一箇所	
	蔵骨器	無	状況	—
	人骨	無	状況	—
墓室外	備考	切石をはじめ様々な材料を用いて古墓を構築する。墓口前面に墓庭のような平坦面は有るが、左右に袖は認められない。平坦面は周囲よりも一段高くなっている。墓室の前面と左側はかなり崩壊して、墓口前面と墓室内にこれらの石材等が転がり落ちている。		



58号墓	形式	掘込墓	方向	MN-152
調査年月日	2014.10.22		大字	安仁屋
位置	座標	旧測定法	T S	
	X = 31737.9570m		Y = 27156.5455m	H = 63.0900m
外観	石材等	石灰岩盤・野面積		
	墓庭	有	幅	119cm 奥行 278cm
	眉の形	—	眉のはね	—
	屋根平面形	自然のまま平坦		
墓室内	墓口	開	奥行	68cm 幅 100cm 高 65cm
	平面形状	楕円形	奥行	125cm 幅 205cm 高 72cm
	棚	無	奥	一段 左 一段 右 一段
	イケ	無	一箇所	
	蔵骨器	無	状況	—
	人骨	無	状況	—
墓室外	備考	墓口と墓室はやや土砂が堆積する。左袖は岩盤を利用、右袖は人頭大の石灰岩礫を野面積していたとみられるが、崩れ落ちている。墓口の前面はいくつかの石灰岩礫を確認することができる。墓室内は丁寧に掘り込まれている。すぐ隣右に59号墓が位置する。		



第IV章 分布調査の成果

59号墓	形式	掘込墓	方向	MN-228					
調査年月日	2014.10.22		大字	安仁屋					
位置	座標	旧測定法	T S						
	X = 31740.3850m		Y = 27155.8045m	H = 62.9750m					
外観	石材等	石灰岩盤・野面積		幅	103cm	奥行	186cm		
	墓庭	有		眉のはね	-				
	屋根平面形	自然のまま平坦							
墓室内	墓口	開	奥行	36cm	幅	110cm	高	45cm	
	平面形状	半円形		奥行	80cm	幅	132cm	高	48cm
	棚	無		奥	一段	左	一段	右	一段
	イケ	無		一箇所					
	蔵骨器	無		状況 -					
	人骨	無		状況 -					
墓室外	備考	墓口と墓室はかなり土砂が堆積する。左右の袖には人頭大の石灰岩礫がいくつか認められる。墓庭の前面には人頭大の石灰岩礫を長さ1.98mほど並べる。墓室内は丁寧に掘り込まれている。							



60号墓	形式	掘込墓	方向	MN-248					
調査年月日	2014.10.22		大字	安仁屋					
位置	座標	旧測定法	T S						
	X = 31834.1970m		Y = 27107.5425m	H = 48.2370m					
外観	石材等	石灰岩盤・野面積		幅	-cm	奥行	-cm		
	墓庭	無		眉のはね	-				
	屋根平面形	自然のまま							
墓室内	墓口	開	奥行	94cm	幅	111cm	高	83cm	
	平面形状	不定形		奥行	172cm	幅	270cm	高	117cm
	棚	無		奥	一段	左	一段	右	一段
	イケ	無		一箇所					
	蔵骨器	無		状況 -					
	人骨	有		状況 散乱					
墓室外	備考	洞穴の前面に石を積み古墓を構築する。前面の野面積は高さ約1.0、左側面から中央にかけては岩盤まで積上げる。右側は墓口のように開口しているが、前面や墓室内に石灰岩礫が散乱することから本来は岩盤まで積上げられていた可能性も考えられる。墓室内の床には石灰岩礫がL字状に配しているようにみられる。古墓の形態は43号墓や54号墓に類似する。							



61号墓	形式	掘込墓	方向	MN-172
調査年月日	2014.10.20	大字	安仁屋	
位置	座標	旧測定法	T S	
	X = 31843.8375m		Y = 27087.9465m	H = 52.4280m
外観	石材等	石灰岩盤		
	墓庭	無	幅	—cm 奥行 —cm
	眉の形	—	眉のはね	—
	屋根平面形	自然のまま		
墓室内	墓口	開	奥行	—cm 幅 110cm以上 高 97cm
	平面形状	不明	200cm以上	幅 80cm以上 高 130cm
	棚	不明	奥	確認不可 左 確認不可 右 確認不可
	イケ	不明	確認不可	
	天井断面形	不明		
	蔵骨器	不明	状況	確認不可
	人骨	不明	状況	確認不可
墓室外	備考	天井部分の岩盤が崩落して内部に多量の土砂が堆積する。墓口・墓室ともに詳細は不明である。		



62号墓	形式	掘込墓	方向	MN-170
調査年月日	2014.10.20	大字	安仁屋	
位置	座標	旧測定法	T S	
	X = 31845.5825m		Y = 27089.0505m	H = 50.8380m
外観	石材等	石灰岩盤		
	墓庭	無	幅	—cm 奥行 —cm
	眉の形	—	眉のはね	—
	屋根平面形	自然のまま		
墓室内	墓口	開	奥行	—cm 幅 100cm以上 高 144cm
	平面形状	不定形	奥行	190cm 幅 190cm 高 131cm
	棚	無	奥	一段 左 一段 右 一段
	イケ	無	一箇所	
	天井断面形	不定形	平坦ぎみ	
	蔵骨器	無	状況	—
	人骨	有	状況	— 尺骨ほか小片
墓室外	備考	61号墓から流れ込んだ土砂が墓室の右半分を埋める。左壁際の床面に人骨をいくつか確認できる。墓口は大きく開いているため、範囲を特定することは難しい。		



第IV章 分布調査の成果

63号墓	形式	掘込墓	方向	MN-242
調査年月日	2014.10.20		大字	安仁屋
位置	座標	旧測定法	T S	
	X = 31873.1720m		Y = 27055.4260m	H = 47.2600m
外観	石材等	石灰岩盤・野面積		
	墓庭	無	幅	—cm 奥行 —cm
	眉の形	—	眉のはね	—
	屋根平面形	自然のまま		
墓室内	墓口	開	奥行	32cm 幅 126cm 高 85cm
	平面形状	不定形		
	棚	無	奥行	112cm 幅 174cm 高 113cm
	イケ	無	奥	一段 左 一段 右 一段
	蔵骨器	無	—箇所	
	人骨	無	状況	—
	備考	有	状況	散乱 頭蓋骨・四肢骨・肩甲骨ほか小片多数
墓室外	備考	岩盤の窪みを古墓として利用する。墓口は大きく開き、拳大から人頭大以上の石灰岩礫を雑に積む。石積の一部は崩れて、墓室内や前方の斜面上に散乱する。外面の右側には石柱がみられる。墓室の右壁際には頭蓋骨を確認できる。		



64号墓	形式	掘込墓?	方向	MN-200
調査年月日	2014.10.22		大字	安仁屋
位置	座標	旧測定法	T S	
	X = 31891.2775m		Y = 27041.1515m	H = 41.8605m
外観	石材等	石灰岩盤		
	墓庭	無	幅	—cm 奥行 —cm
	眉の形	—	眉のはね	—
	屋根平面形	自然のまま		
墓室内	墓口	開	奥行	—cm 幅 117cm 高 102cm
	平面形状	方形		
	棚	無	奥行	126cm 幅 100cm 高 74cm
	イケ	無	奥	一段 左 一段 右 一段
	蔵骨器	無	—箇所	
	人骨	無	状況	—
	備考	無	状況	—
墓室外	備考	洞穴内に小部屋状の穴を穿孔する。穴の前面には幅3.83m、奥行4.47mの平坦な空間がある。入口は大きく開き、床面にはビール瓶の破片が多数散乱する。イシジャーからの斜面には4段の階段状のステップを確認できるが、構築時期は不明である。		



65号墓	形式	掘込墓?	方向	MN-248
調査年月日	2014.10.22		大字	安仁屋
位置	座標	旧測定法	T S	
	X = 31893.3465m		Y = 27038.6075m	H = 42.1570m
外観	石材等	石灰岩盤		
	墓庭	無	幅	—cm 奥行 —cm
	眉の形	—	眉のはね	—
	屋根平面形	自然のまま		
墓室内	墓口	開	奥行	—cm 幅 93cm 高 113cm
	平面形状	隅丸方形	奥行	170cm 幅 134cm 高 101cm
	棚	無	奥	一段 左 一段 右 一段
	イケ	無	—箇所	
	蔵骨器	無	状況	—
	人骨	無	状況	—
墓室外	備考	洞穴内に小部屋状の穴を穿孔する。穴の前面には幅3.83m、奥行4.47mの平坦な空間がある。入口は大きく開き、床面にはビール瓶の破片が多数散乱する。右隣は岩盤がノッチ状に窪んでいる。古墓とは断定できないが、明らかに人為的に掘り込まれているために記録することとした。		



66号墓	形式	掘込墓	方向	MN-218
調査年月日	2014.10.18		大字	安仁屋
位置	座標	旧測定法	T S	
	X = 31905.7135m		Y = 27029.7240m	H = 40.4475m
外観	石材等	石灰岩盤・野面積		
	墓庭	無	幅	—cm 奥行 —cm
	眉の形	—	眉のはね	—
	屋根平面形	自然のまま		
墓室内	墓口	開	奥行	40cm 幅 147cm 高 162cm
	平面形状	不定形	奥行	380cm 幅 220cm 高 135cm
	棚	無	奥	一段 左 一段 右 一段
	イケ	無	—箇所	
	蔵骨器	無	状況	—
	人骨	有	状況	散乱 様々な部位からなる多数の小片有り
墓室外	備考	洞穴をそのまま古墓として利用する。墓口は大きく開き、前面には石灰岩礫が散乱する。墓室は左に緩やかに曲がる。床面には墓口から奥壁まで多くの土器片が散乱する。特に墓口付近では大きめの底部片や口縁部片を確認することができる。		



第IV章 分布調査の成果

67号墓	形式	掘込墓	方向	MN-242					
調査年月日	2014.10.18		大字	安仁屋					
位置	座標	旧測定法	T S						
	X = 31912.9540m		Y = 27021.4040m					H = 40.7090m	
外観	石材等	石灰岩盤・野面積							
	墓庭	無	幅	—cm	奥行	—cm			
	眉の形	—	眉のはね		—				
	屋根平面形	自然のまま							
墓室内	墓口	開	奥行	70cm	幅	140cm	高	65cm	
	平面形状	方形							
	棚	無	奥行	147cm	幅	158cm	高	84cm	
	イケ	無	奥	一段	左	一段	右	一段	
	蔵骨器	無	—箇所						
	人骨	無	状況	—					
墓室外	備考	無	状況	—					
		墓口の前面には拳大から人頭大以上の石灰岩礫を0.6mほど積む。石積の一部は崩れて、墓室内や前方に散乱する。							



68号墓	形式	掘込墓	方向	MN-212					
調査年月日	2014.10.18		大字	安仁屋					
位置	座標	旧測定法	T S						
	X = 31914.1185m		Y = 27015.5680m					H = 42.0600m	
外観	石材等	石灰岩盤							
	墓庭	無	幅	—cm	奥行	—cm			
	眉の形	—	眉のはね		—				
	屋根平面形	自然のまま							
墓室内	墓口	開	奥行	—cm	幅	96cm	高	34cm	
	平面形状	不定形							
	棚	不明	奥行	110cm	幅	114cm	高	45cm	
	イケ	不明	奥	一段	左	一段	右	一段	
	天井断面形	不明	—箇所						
	蔵骨器	無	状況	—					
	人骨	無	状況	—					
墓室外	備考	墓口は斜面上部にて崩落した土砂で埋没し、詳細は不明である。隙間からは墓室とみられる空間を確認することができる。							



69号墓	形式	掘込墓	方向	MN-158					
調査年月日	2014.10.10		大字	安仁屋					
位置	座標	旧測定法	T S						
	X = 31900.1225m			Y = 26970.5920m				H = 42.1825m	
外観	石材等	石灰岩盤							
	墓庭	有	幅	430cm	奥行	420cm			
	眉の形	—	眉のはね	—					
	屋根平面形	自然のまま							
墓室内	墓口	開	奥行	40cm	幅	300cm	高	77cm	
	平面形状	方形							
	柵	無	奥行	160cm	幅	237cm	高	108cm	
	イケ	無	奥	一段	左	一段	右	一段	
	天井断面形	無	一箇所						
	蔵骨器	無	奥壁方向に低くなる						
	人骨	無	状況	—					
墓室外	備考	無	状況	—					
									墓口と墓庭はかなり土砂が堆積する。左右の袖は岩盤をそのまま利用、墓口は大きく開く。墓庭の前方約0.6m下に墓道が設けられる。



70号墓	形式	亀甲墓	方向	MN-176					
調査年月日	2014.10.18		大字	安仁屋					
位置	座標	旧測定法	T S						
	X = 31893.2925m			Y = 26958.1705m				H = 42.5985m	
外観	石材等	石灰岩盤・野面積み・モルタル仕上げ							
	墓庭	有	幅	635cm	奥行	520cm			
	眉の形	不明	眉のはね	不明					
	屋根平面形	不明							
墓室内	墓口	不明	奥行	計測不可	幅	計測不可	高	計測不可	
	平面形状	不明							
	柵	不明	奥行	計測不可	幅	計測不可	高	計測不可	
	イケ	不明	奥	確認不可	左	確認不可	右	確認不可	
	蔵骨器	不明	確認不可						
	人骨	不明	状況	確認不可					
墓室外	備考	不明	状況	確認不可					
									左右の袖石と袖垣は岩盤を加工もしくはそのまま利用する。墓門の位置に幅1.26mの石列を確認する。墓庭の前方には幅約1.5mの墓道があり、両隣の69号墓・71号墓に延びる。



第IV章 分布調査の成果

71号墓	形式	亀甲墓	方向	MN-218					
調査年月日	2014.10.18		大字	安仁屋					
位置	座標	旧	測定法	T S					
	X = 31892.8870m		Y = 26940.5800m					H = 42.7825m	
外観	石材等	石灰岩盤・野面積・モルタル仕上げ							
	墓庭	有	幅	不明	奥行	不明			
	眉の形	曲線	眉のはね		はねる				
	屋根平面形	不明							
墓室内	墓口	不明	奥行	計測不可	幅	計測不可	高	計測不可	
	平面形状	不定形	計測不可	幅	計測不可	高	計測不可		
	柵	不明	奥	確認不可	左	確認不可	右	確認不可	
	イケ	不明	確認不可						
	蔵骨器	不明	状況	確認不可					
	人骨	不明	状況	確認不可					
墓室外	備考	多量の石灰岩礫と土砂により屋根・墓庭・墓口は埋没する。マユの幅は約2.8m、左ワラビヌティー付近は岩盤から削り出される。							



72号墓	形式	掘込墓?	方向	MN-102					
調査年月日	2014.10.10		大字	安仁屋					
位置	座標	旧	測定法	T S					
	X = 31980.6095m		Y = 27058.8335m					H = 48.5145m	
外観	石材等	石灰岩盤							
	墓庭	不明	幅	—cm	奥行	—cm			
	眉の形	不明	眉のはね		不明				
	屋根平面形	不明							
墓室内	墓口	開	奥行	計測不可	幅	計測不可	高	計測不可	
	平面形状	不明	計測不可	幅	計測不可	高	計測不可		
	柵	不明	奥	確認不可	左	確認不可	右	確認不可	
	イケ	不明	確認不可						
	蔵骨器	不明	状況	確認不可					
	人骨	不明	状況	確認不可					
墓室外	備考	全体が大量の石灰岩塊と土砂に埋没する。隙間から墓口らしき空間を認められるが、詳細は不明である。							



73号墓	形式	袖墓	方向	MN-154
調査年月日	2014.10.09		大字	安仁屋
位置	座標	旧測定法	T S	
	X = 31971.7345m		Y = 27041.9165m	H = 46.8635m
外観	石材等	石灰岩盤・ブロック積		
	墓庭	無	幅	— cm
	眉の形	—	眉のはね	—
	屋根平面形	自然のまま		
墓室内	墓口	開	奥行	25cm
	平面形状	不定形	幅	34cm
		奥行	31cm	高
		奥	— 一段	13cm
	柵	無	左	— 一段
	イケ	無	右	— 一段
	蔵骨器	無	— 箇所	
	人骨	無	状況	—
	その他遺物	無	状況	—
墓室外	備考	古墓は31号墓の左袖に位置し、小規模であるため袖墓と考えられる。墓口のほか外側に縦0.2m、横0.28m、厚み0.1mのコンクリートブロック3個が散乱する。		



74号墓	形式	掘込墓	方向	MN-6
調査年月日	2014.10.18		大字	安仁屋
位置	座標	旧測定法	T S	
	X = 31909.3895m		Y = 27050.6065m	H = 43.7690m
外観	石材等	石灰岩盤		
	墓庭	無	幅	— cm
	眉の形	—	眉のはね	—
	屋根平面形	自然のまま		
墓室内	墓口	開	奥行	— cm
	平面形状	不定形	幅	54cm
		奥行	60cm	高
		奥	— 一段	86cm
	柵	無	左	— 一段
	イケ	無	右	— 一段
	蔵骨器	無	— 箇所	
	人骨	有	状況	—
	その他遺物	有	状況	散乱
墓室外	備考	42号墓の左隣に位置し、岩盤の窪みを利用した小さな古墓である。散乱する人骨は形状をしっかりと留めている。		



第IV章 分布調査の成果

75号墓	形式	岩陰墓	方向	MN-42					
調査年月日	2014.10.27		大字	安仁屋					
位置	座標	旧測定法	T S						
	X = 31876.4495m		Y = 27082.9230m					H = 44.5205m	
外観	石材等	石灰岩盤							
	墓庭	無	幅	—cm	奥行	—cm			
	眉の形	—	眉のはね	—					
	屋根平面形	自然のまま							
墓室内	墓口	開	奥行	—cm	幅	146cm	高	190cm	
	平面形状	不定形							
	柵	無	奥行	165cm	幅	110cm	高	124cm	
	イケ	無	奥	—段	左	—段	右	—段	
	蔵骨器	無	—箇所						
	人骨	有	状況	—					
墓室外	備考	地表面から約190cmの高さにある岩穴に設けられる。床面には拳大から人頭大の石灰岩礫が散乱する。墓口と登り口は判然としない。四肢骨の関節部ほか小片							



76号墓	形式	掘込墓	方向	MN-106					
調査年月日	2014.10.24		大字	安仁屋					
位置	座標	旧測定法	T S						
	X = 31826.5620m		Y = 27146.9210m					H = 59.9955m	
外観	石材等	石灰岩盤							
	墓庭	可能性有り	幅	—cm	奥行	—cm			
	眉の形	—	眉のはね	—					
	屋根平面形	自然のまま							
墓室内	墓口	開	奥行	—cm	幅	60cm	高	25cm	
	平面形状	不定形							
	柵	不明	奥行	150cm	幅	130cm	高	50cm	
	イケ	不明	奥	確認不可	左	確認不可	右	確認不可	
	蔵骨器	不明	—箇所						
	人骨	不明	状況	確認不可					
墓室外	備考	墓口をはじめ大部分は土砂で埋没する。隙間から丁寧に掘り込まれた墓室を確認することができる。古墓の前方は緩い傾斜面であるため墓庭が埋没している可能性も考えられる。							



77号墓	形式	岩陰墓	方向	MN-62
調査年月日	2014.10.23		大字	安仁屋
位置	座標	旧測定法	T S	
	X = 31855.5135m		Y = 27117.1735m	H = 47.4175m
外観	石材等	石灰岩盤・野面積		
	墓庭	無	幅	—cm 奥行 —cm
	眉の形	—	眉のはね	—
	屋根平面形	自然のまま		
墓室内	墓口	開	奥行	—cm 幅 —cm 高 —cm
	平面形状	不定形		
	棚	無	奥行	79cm 幅 90cm 高 82cm (岩盤までの高さ)
	イケ	無	奥	一段 左 一段 右 一段
	蔵骨器	無	—箇所	
墓室外	人骨	無	状況	—
	備考	有	状況	散乱 小片のみ
		47号墓の左横にあるノッチ状の岩盤際に作られた古墓とみられる。拳大から人頭大の石灰岩礫を長さ1.18m、2段ほど弧を描くように雑に積む。石積から岩盤までの高さは約1.07mを測る。37号墓・44号墓と類似した形態である。		



78号墓	形式	掘込墓?	方向	MN-210
調査年月日	2014.10.07		大字	安仁屋
位置	座標	旧測定法	T S	
	X = 32050.6000m		Y = 27077.7745m	H = 53.3850m
外観	石材等	石灰岩盤		
	墓庭	可能性有り	幅	—cm 奥行 —cm
	眉の形	—	眉のはね	—
	屋根平面形	自然のまま		
墓室内	墓口	開	奥行	23cm 幅 58cm 高 29cm
	平面形状	不定形		
	棚	無	奥行	55cm 幅 54cm 高 18cm
	イケ	無	奥	一段 左 一段 右 一段
	蔵骨器	無	—箇所	
墓室外	人骨	無	状況	—
	備考	無	状況	—
		コンクリートガラを含んだ土砂で大部分は埋没する。墓口らしき岩穴は認められるが、古墓と断定はできない。前面に散乱する遺物を考慮のうえ古墓として記録する。古墓の場合、墓口前方に墓庭が埋没している可能性も考えられる。		



12号墓

厨子甕（身・蓋）観察表

1号	ボージャー厨子	完形 口縁玉縁。頸部に凹線数本。肩部に凹線2本。庇付。方窓3。無釉。銘書無し。底上部に窯印有り。屋門左隣に蓮華文線刻。内側約8割の高さまで納骨。蓋無し。
2号	ボージャー厨子	完形 口縁玉縁。頸部に凹線数本。肩部に凹線2本。庇付。方窓3。無釉。銘書無し。底左部に窯印有り。内側約8割の高さまで納骨。蓋有り。
	つまみ付き笠形蓋	完形 つまみ饅頭形。つまみ台1段。内側縁に水平調整の漆喰付着。無釉。内面に銘書有り。「乾隆拾四年[死か]□□□□[己八か]月十三日」
3号	ボージャー厨子	完形 口縁玉縁。頸部に凹線数本。肩部に凹線2本。庇付。方窓1。無釉。銘書無し。底上部に窯印有り。内側約5割の高さまで納骨。蓋有り。
	つまみ付き笠形蓋	完形 つまみ饅頭形。つまみ台無し。無釉。内面に銘書有り。「乾隆拾四年□[己八か]月[十か]□□」
4号	ボージャー厨子	完形 口縁玉縁。頸部に凹線数本。肩部に凹線2本。庇付。方窓3。銘書無し。底左部と右部に蓮華文線刻。内側約3割の高さまで納骨。蓋無し。喜名焼のような印象。
蓋1号	無釉笠形蓋	完形 つまみ無し。内面に銘書有り。「・・・田戸山城女子かま戸[母か]骨洗」配置状況から4号ボージャー厨子の蓋の可能性有り。
5号	ボージャー厨子	完形 口縁玉縁。頸部に凹線数本。肩部に凹線2本。庇付。方窓1、円窓4。銘書無し。底貼付後線刻。内側約3割の高さまで納骨。蓋無し。
蓋2号	つまみ付き笠形蓋	完形 つまみ宝珠形。つまみ台2段。外面に三叉工具による線刻。銘書無し。配置状況から5号ボージャー厨子の蓋の可能性有り。
6号	ボージャー厨子	完形 口縁玉縁。頸部に凹線数本。肩部に凹線2本。庇付。方窓3。無釉。銘書無し。底左部と右部に蓮華文線刻。内側約4割の高さまで納骨。蓋有り。
	つまみ付き笠形蓋	完形 つまみ宝珠形。つまみ台1段。外面に蓮華文線刻。無釉。銘書無し。
7号	ボージャー厨子	完形 口縁玉縁。頸部に凹線数本。肩部に凹線2本。庇付。方窓1、円窓2。無釉。銘書無し。底左上部に窯印有り。人骨有り。内側約2割の高さまで納骨。蓋有り。
	つまみ付き笠形蓋	完形 つまみ宝珠形。つまみ台1段。外面に蓮華文線刻。無釉。内面に銘書有り。「安仁屋村 うし山城 同人女房 兩人」
8号	ボージャー厨子	完形 口縁玉縁。頸部に凹線数本。肩部に凹線2本。庇付。方窓1、円窓2。無釉。銘書無し。底右部に窯印有り。人骨有り。内側約2割の高さまで納骨。蓋有り。



厨子甕配置状況 (数字は厨子甕番号)



厨子甕配置状況 (数字は厨子甕番号)



1号 ボージャーク厨子 正面



1号 ボージャーク厨子 蓮華文線刻



2号 ボージャーク厨子 正面



2号 ボージャーク厨子 蓋内面銘書



3号 ボージャーク厨子 正面



3号 ボージャーク厨子 蓋内面銘書

図版IV - 9 12号墓 厨子甕 (身・蓋) 1



4号 ポージャー厨子 正面



4号 ポージャー厨子 蓮華文線刻



蓋 1号 外面



蓋 1号 内面銘書



5号 ポージャー厨子 正面



5号 ポージャー厨子 内部



蓋 2号 外面



蓋 2号 内面

図版IV-10 12号墓 厨子甕(身・蓋)2



6号 ボージャー厨子 外面



6号 ボージャー厨子 正面



7号 ボージャー厨子 正面



7号 ボージャー厨子 蓋内面銘書



8号 ボージャー厨子 正面



8号 ボージャー厨子 蓋内面銘書



2号 ボージャー厨子 窯印



7号 ボージャー厨子 窯印

第V章 自然科学分析

第1節 はじめに

西普天間住宅地区は、沖縄県中頭郡北谷町および宜野湾市にまたがるキャンプ瑞慶覧内に所在する。西普天間が所在する市域では、島尻層群の上位に琉球石灰岩が覆い、比較的平坦な段丘が形成されている。キャンプ瑞慶覧でも、この平坦面を中心に米国海兵隊の施設が増設されている。これまで、宜野湾市域の基地内においては、普天間基地を中心に多くの調査および自然科学分析を実施しており、データを蓄積してきた(パリノ・サーヴェイ株式会社,2005,2006a,2006b,2007など)。付近には、新城下原第2遺跡が知られており、無文土器、爪形文土器、人骨、獣骨、貝殻、材、種子などの遺物が多数出土している(沖縄県埋蔵文化財センター,2006)。本調査区の一部も、新城下原第2遺跡の包蔵地内にかかっている。

本報告では、堆積層や遺構の年代、周辺の古植生や植物利用状況、および土壌特性に関する情報を得ることを目的として、放射性炭素年代測定、花粉分析・微粒炭分析、植物珪酸体分析、微細物分析、土壌理化学分析・粒度分析を実施する。

第2節 層序と試料

調査対象のキャンプ瑞慶覧(西普天間住宅地区)一帯は、琉球層群からなる更新世の段丘面上に位置する。宜野湾市域では、更新世の段丘面が中位段丘上位面(標高90m以上)・下位面(50～90m)と低位段丘上位面(30～40m)・下位面(10～30m)の4面に区分されている(上原,2000)。今回対象とした試掘坑は、低位段丘上位面(ズケ17-J8-ノ、ズケ17-J9-オ、ズケ25-E3-テ、ズケ25-F1-キ)、および低位段丘下位面(ズケ19-H2-ネ)に位置する。以下、試掘坑ごとの層序を述べる。

1. ズケ17-J8-ノ(新城大道原第一遺跡)

上位から、I a層、I b-1層～I b-3層、I e-1層、II a-1層～II a-4層に分層される。I a層は黒褐色の砂混じりシルトからなる表土である。I b-1層～I b-3層はにぶい黄褐～暗褐色の砂質シルトからなり、島尻マーヅを母材とした整地土である。I b-1層は腐植化が進んでいる。I e-1層はにぶい黄褐色の砂質シルトからなり、旧耕作土を母材とした攪乱層とされている。II a-1層、II a-2層は褐～灰黄褐色の砂質シルトからなる旧耕作土で、塊状をなし、II a-1層の上部は造成の影響で削平を受ける。II a-3層、II a-4層はにぶい黄褐色の粘土質シルトからなる旧耕作土で、II a-4層のほうが泥質になる。また、西壁の床面にはピット状遺構も確認されている。

分析試料は、北壁断面より8点(試料番号1～8)、西壁床面より2点(試料番号9,10)を採取している。

2. ズケ17-J9-オ(新城大道原第一遺跡)

上位から、I a層、I b-2層、I b-3層、VIII層に分層される。I a層は黒褐色の砂混じりシルトからなる表土である。I b-2層、I b-3層は褐～暗褐色の砂質シルトからなり、島尻マーヅを母材とした整地土である。VIII層は石灰岩からなる基盤層で、上部は造成の影響で削平を受ける。また、試掘坑底面の石灰岩にドリネ状の洞穴洞口と思われる亀裂があり、洞穴内に土砂の堆積が認められた。上部は造成

の影響を受けている可能性があるが、下部は自然堆積と想定された。堆積物は暗灰褐色の砂質シルトからなり、炭化物などが含まれる。

分析試料は、洞穴内堆積層より3点(上位から試料番号1～3)を採取している。

3. ズケ 25-E3-テ (喜友名山川原第八遺跡)

本地点からは、埋没した墓が確認された。土層は、上位からI a層、I b-1層、I b-2層、I d-1層、Ⅷ層に分層される。I a層は黒褐色の砂混じりシルトからなる表土である。I b-1層、I b-2層はにぶい黄褐～暗褐色の砂質シルトからなり、島尻マーヅを母材とした整地土である。I b-1層は腐植化が進んでいる。I d-1層は浅黄色の砂質シルトからなる整地土で、造成に伴い破壊された石灰岩を母材とする。Ⅷ層は石灰岩からなる基盤層である。墓は、Ⅷ層を削って作られており、墓の床面には、暗灰褐色の砂質シルトの堆積が認められ、墓が利用されていた当時の表土の可能性はある。

分析試料は、墓の床面より2点(試料番号1,2)を採取している。

4. ズケ 25-F1-キ (喜友名山川原第八遺跡)

上位から、I a層、I b-1層、I b-2層、Ⅱ a-1層～Ⅱ a-4層、Ⅱ b層、Ⅱ c層、マーヅ?層に分層される。I a層は黒褐色の砂混じりシルトからなる表土である。I b-1層、I b-2層は灰黄褐～暗褐色の砂質シルトからなり、島尻マーヅを母材とした整地土である。I b-1層は腐植化が進んでいる。Ⅱ a-1層、Ⅱ a-2層はにぶい黄褐～褐色の砂質シルトかなり、塊状をなす旧耕作土である。Ⅱ a-1層上部は造成の影響で削平を受ける。Ⅱ a-3層、Ⅱ a-4層は褐色の粘土質シルトからなり、上位の耕作土に比べて泥質になる。Ⅱ b層、Ⅱ c層はにぶい黄褐色のシルト質粘土からなる旧耕作土で、Ⅱ c層のほうが泥質になる。マーヅ?層は黄褐色のシルト質粘土からなる。

分析試料は、南壁断面より13点(試料番号1～13)を採取している。

5. ズケ 19-H2-ネ (新城下原第二遺跡近接地)

本地点は低地部にあたる。土層は、上位からI a層、I c層、Ⅱ a層、Ⅱ b-1層、Ⅱ b-2層、Ⅱ c層、Ⅱ d層、Ⅱ e層に分層される。I a層は黒褐色の砂混じりシルトからなる表土、I c層は橙色の砂混じり粘土質シルトからなる整地土である。Ⅱ a層は黒色のシルトからなる耕作土で、未分解の植物遺体を多く含む。Ⅱ b-1層、Ⅱ b-2層はオリーブ黄～灰オリーブ色の砂混じり粘土質シルト～シルトからなり、新しい時期の水田層と想定される。Ⅱ b-2層からは、近世の遺物も出土している。Ⅱ c層はオリーブ黄色のシルト質砂で、本試掘坑にのみ確認された間層である。下部水田と上部水田の境界となっている。Ⅱ d層は黄褐色の砂混じり粘土質シルトからなり、点状および線状の酸化鉄が認められる。グスク時代の水田層と想定される。Ⅱ e層は黒褐色の粘土質シルトからなり、耕作の痕跡などが確認できないことから、湿地堆積物(自然堆積物)と想定される。なお、Ⅱ e層以深の状況確認のため、深掘りを実施したところ、深度4m付近(試掘坑底面より2m付近)まで粘土質シルトが続くが、4m付近で円礫を含む砂層となる。この砂層には木片が多量に混在し、大きなものは30cmを超える。なお、いずれも加工の痕跡は認められなかった。

分析試料は、北壁断面より11点(試料番号1～11)、および深掘り内より3点(3.4m、4m付近上部、4m付近下部)を採取している。

第3節 分析方法

1. 放射性炭素年代測定

分析試料は AMS 法で実施する。試料表面の汚れや付着物をピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。次に塩酸や水酸化ナトリウムを用いて、試料内部の汚染物質を化学的に除去する(酸—アルカリ—酸処理:AAA)。その後超純水で中性になるまで洗浄し、乾燥させる。なお、アルカリ処理は、0.001M ~ 1M まで濃度を上げ、試料の様子をみながら処理を進める。1M の水酸化ナトリウムで処理が可能であった場合は AAA と記す。一方、試料が脆弱で 1M の水酸化ナトリウムでは試料が損耗し、十分な炭素が得られないと判断された場合は、薄い濃度の水酸化ナトリウムの状態で処理を終える。その場合は AaA と記す。

精製された試料を燃焼して CO₂ 発生させ、真空ラインで精製する。鉄を触媒とし、水素で還元してグラファイトを生成する。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径 1mm の孔にプレスし、測定試料とする。

測定はタンデム加速器をベースとした 14C-AMS 専用装置を用いて、14C の計数、13C 濃度 (13C/12C)、14C 濃度 (14C/12C) を測定する。AMS 測定時に、標準試料とバックグラウンド試料の測定も行う。

δ 13C は試料炭素の 13C 濃度 (13C/12C) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (‰) で表したものである。

放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5,568 年を使用する。また、測定年代は 1950 年を基点とした年代 (BP) であり、誤差は標準偏差 (One Sigma;68%) に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う (Stuiver and Polach,1977)。また、暦年較正用に一桁目まで表した値も記す。

暦年較正に用いるソフトウェアは、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.1.0、較正曲線は Intcal13(Reimer et al.,2013) である。

暦年較正とは、大気中の 14C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の 14C 濃度の変動、及び半減期の違い (14C の半減期 5730 ± 40 年) を較正することによって、暦年代に近づける手法である。較正のもとになる直線は暦時代がわかっている遺物や年輪 (年輪は細胞壁のみなので、形成当時の 14C 年代を反映している) 等を用いて作られており、最新のものは 2013 年に発表された Intcal13(Reimer et al.,2013) である。また、較正年代を求めるソフトウェアはいくつか公開されているが、今回は CALIB を用いる。なお、年代測定値に関しては、国際的な取り決めにより、測定誤差の大きさによって値を丸めるのが普通であるが (Stuiver and Polach,1977)、将来的な較正曲線ならびにソフトウェアの更新に伴う再計算ができるようにするため、表には丸めない値 (1 年単位) を記す。また、中央値は、確率分布の面積が二分される値を年代値に換算したものである。

2. 花粉分析・微粒炭分析

試料 10cc を正確に秤り取り、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液 (臭化亜鉛, 比重 2.3) による有機物の分離、フッ化水素酸による鉍物質の除去、アセトリシス (無水酢酸 9, 濃硫酸 1 の混合液) 処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。処理後の

残渣を定容してから一部をとり、グリセリンで封入してプレパラートを作製し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査して、出現する全ての種類を対象に200個以上同定・計数する(化石の少ない試料ではこの限りではない)。同定は、当社保有の現生標本や島倉(1973)、中村(1980a)、藤木・小澤(2007)、三好ほか(2011)等を参考にする。

結果は同定・計数結果の一覧表、および花粉化石群集の分布図として表示する。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。なお、基数が100個未満のものは、統計的に扱うと結果が歪曲する恐れがあるので、出現した種類を+で表示するにとどめておく。

また、花粉プレパラート中に含まれる微粒炭(微細な炭化植物片)の含量が、自然植生に対する人類干渉の指標として有効であるとされていることから(安田,1987など)、試料中に含まれる微粒炭の含量も求める。微粒炭は花粉プレパラート内に残存するものを対象とし、同定基準は山野井(1996)、井上ほか(2002)等を参考にする。計数は、山野井(1996)などを参考にし、長径が約20 μ m以上の微粒炭を対象とし、それ以下のものは除外する。微粒炭数および花粉・胞子数は、山野井(1996)などを参考とし、分析土壌量(cc)、分析残渣量(ml)、プレパラート作成量(μ l)を測定し、堆積物1ccあたりに含まれる個数を一覧表に併せて示す。この際、有効数字を考慮し、10の位を四捨五入して100単位に丸め、100個未満は「<100」で表示する。

3. 植物珪酸体分析

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法(ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5)の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に由来した植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体と呼ぶ)および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)を、近藤(2010)の分類を参考に同定し、計数する。

分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量を正確に計量し、乾土1gあたりの植物珪酸体含量(同定した数を乾土1gあたりの個数に換算)を求める。

結果は、植物珪酸体含量の一覧表で示す。その際、100個/g未満は「<100」で表示する。各分類群の含量は10の位で丸め(100単位にする)、合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に丸めている。

4. 微細物分析

試料の質および分析目的に応じて、以下の方法を実施する。結果は一覧表で示し、確認された遺物類の定性的な量比を「+」で示す。

・ズケ17-J19-オ、ズケ25-F1-キ

試料から炭化物等の微細遺物を可能な限り壊さず回収するために、試料の重量を量り、肉眼観察で確認された炭化物等の遺物を抽出後、常温乾燥させる。水を満たした容器内に乾燥後の試料を投入し、容器を傾けて浮いた炭化物を粒径0.5mmの篩に回収する。容器内の残土に水を入れて軽く攪拌し、容器を傾けて炭化物を回収する作業を炭化物が浮かなくなるまで繰り返す(約20回)。残土を粒径0.5mm

の篩を通して水洗する。水洗後、水に浮いた試料(炭化物主体)と水に沈んだ試料(砂礫主体)を、それぞれ粒径4mm、2mm、1mm、0.5mmの篩に通してシャーレに移し、常温乾燥させる。

・19-H2-ネ

試料から種実遺体を分離・抽出するために、試料を水に浸して容積と重量を量り、粒径0.5mmの篩を通して水洗する。水洗後、水に浮いた試料(植物片主体)と水に沈んだ試料(砂礫主体)を、それぞれ粒径4mm、2mm、1mm、0.5mmの篩に通し、粒径別にシャーレに移す。

5. 土壤理化学分析・粒度分析

土壤理化学分析は、pH(H₂O)、有機炭素、全窒素、全鉄・全マンガン、ジチオナイト可溶鉄・マンガン、酸性シュウ酸塩可溶鉄、MI(Melanic index)、粒径組成はピペット法を行う。pH(H₂O)はガラス電極法、有機炭素量はチューリン法、全窒素量は硫酸分解—水蒸気蒸留法、全鉄および全マンガンはフッ化水素酸分解—原子吸光法(土壤標準分析・測定法委員会,1986)、MIは腐植簡易分析法(本名・山本,1992)に従う。また、酸性シュウ酸塩可溶鉄、ジチオナイト可溶鉄およびマンガンについてAcid-oxalate法、Holmgren法(Reeuwijk,1986)に従い抽出し、原子吸光法により定量した後、永塚(1973)の方法により遊離酸化鉄の活性度・結晶化指数を算出する。以下に各項目の操作工程を示す。

試料調製は、試料を風乾後、土塊を軽く崩して2mmの篩で篩い分ける。この篩通過試料を風乾細土試料とし、分析に供する。また、風乾細土試料の一部を振動ミル(平工製作所製TI100;10ml容タングステンカーバイト容器)で微粉碎し、微粉碎試料を作成する。風乾細土試料については、105℃で4時間乾燥し、分析試料水分を求める。

pH(H₂O)は、風乾細土10.0gをはかりとり、25mlの蒸留水を加えてガラス棒で攪拌する。30分間放置後、再びガラス棒で懸濁状態とし、pHメーター(ガラス電極法)でpH(H₂O)を測定する。

有機炭素(腐植)は、粉碎土試料0.010~2.000gを100ml三角フラスコに正確に秤とり、0.4Nクロム酸・硫酸混液10mlを正確に加え、約200℃の砂浴上で正確に5分間煮沸する。冷却後、0.2%フェニルアントラニル酸液を指示薬に0.2N硫酸第一鉄アンモニウム液で滴定する。滴定値および加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの有機炭素量(Org-C乾土%)を求める。これに1.724を乗じて腐植含量(%)を算出する。

全窒素は、粉碎土試料1.000~2.000gをケルダール分解フラスコに秤とり、分解剤約3.0gと硫酸10mlを加え加熱分解する。分解後、蒸留水約30mlを加え放冷した後、分解液全量を供試し水蒸気蒸留法によって窒素を定量する。この定量値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの全窒素量(T-N%)を求める。また、有機炭素量を全窒素量で除し、C/N(炭素率)を算出する。

全鉄、全マンガンは、微粉碎試料約0.50gをテフロンピーカーに精秤し、硝酸(HNO₃)5mlおよび過塩素酸(HClO₄)5mlを加え、時計皿で覆い、サンドバス上で有機物を分解する。過塩素酸の白煙が激しく出てきた後、過塩素酸5mlとフッ化水素酸(HF)10mlを加え、内容物を蒸発乾固させる。放冷後、6N塩酸(HCl)5ml、硝酸1mlを加え加熱し、内容物を軽く溶解させた後、蒸留水30mlを加え、内容物を完全に溶解させる。放冷後、100mlに定容する。この定容液を適宜希釈し、原子吸光光度計により鉄(Fe)およびマンガン(Mn)の濃度を測定する。測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの鉄(Fe%)およびマンガン(Mn%)の含量を求める。

ジチオナイト可溶鉄・マンガン(Holmgren法)は、微粉碎試料500mgにDCB抽出液30mlを添加

して16時間振とうする。振とう後、0.4%高分子凝集剤を2滴加えて軽く振とうした後、遠心分離する。上澄み液の一定量を蒸留水で希釈し、干渉抑制剤を加えた後、原子吸光度計により鉄(Fe)およびマンガン(Mn)の濃度を測定する。測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの鉄(Fe%)およびマンガン(Mn%)の含量を求める。

酸性シュウ酸塩可溶鉄(Acid-oxalate法)は、微粉碎試料300mgに0.2M酸性シュウ酸塩溶液(pH3)を30ml加え、暗所で4時間振とうする。振とう後、0.4%高分子凝集剤を2滴加えて軽く振とうした後、3000rpmで15分間遠心分離する。上澄み液の一定量を蒸留水で希釈し、干渉抑制剤を加えた後、原子吸光度計により鉄(Fe)の濃度を測定する。測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの鉄(Fe%)の含量を求める。

MI(Melanic Index)による腐植簡易分析は、炭素50mgに相当する微粉碎試料(但し、5.0gを上限とする)を50ml容遠心管に入れ、分注器で0.5%NaOH溶液約25mlを加える。遠心管に蓋をしてテープで密封し、室温で1時間振とうした後、0.1%高分子凝集剤溶液1~2滴を加え、よく振り混ぜた後、4,000rpm、15minの遠心分離で抽出腐植溶液を得る。吸光度の測定は、得られた抽出腐植溶液約1mlを試験管にとり、0.1%NaOH溶液20mlを分注器で加え(NaOHの濃度は約0.1%となる)、分光光度計により450、520nmの吸光度を測定する(450nmの吸光度が1を越えた試料は、さらに0.1%NaOH溶液で希釈して測定)。測定は抽出後、3時間以内に行い、結果の表示を $MI=(K450/K520)$ で示す。

粒径組成(ピペット法)は、風乾細土試料10.00gに30%過酸化水素水を加え、熱板上で有機物を分解する。分解終了後、遠心洗浄を行い、脱塩した後、蒸留水約400mlと分散剤(8%ヘキサメタリン酸ナトリウム)10mlを加え、攪拌しながら20分間音波処理を行う。この懸濁液を500ml沈底瓶に移し、蒸留水で500mlに定容する。

沈底瓶を1分間激しく振り、直ちに静置して所定の時間に5cmの深さから懸濁液10mlを採取する。採取懸濁液は蒸発乾固させ、秤量する(シルト・粘土の含量)。さらに、所定の時間が経過した後、沈底瓶から懸濁液を5cmの深さから10ml採取し、蒸発乾固させ、秤量する(粘土含量)。沈底瓶に残ったシルト・粘土はサイフォンを使ってすべて洗い流し、その残査を乾燥・秤量する(砂含量)。これを0.2mmφの篩で篩い分け、篩上の残留物を秤量する(粗砂含量)。これら測定値をもとに粗砂(2.0-0.2mm)・細砂(0.2-0.02mm)・シルト(0.02-0.002mm)・粘土(0.002mm以下)4成分の合計を100とする各成分の重量%を求め、国際法によって土性区分を行う。

第4節 結果

1. 放射性炭素年代測定

同位体効果による補正を行った測定結果を第V-1表に、暦年較正結果を第V-2表に示す。試料の測定年代(補正年代)は、ズケ17-J8-ノの試料番号7が $970 \pm 20BP$ 、試料番号9が $650 \pm 20BP$ 、ズケ17-J9-オの試料番号3が $1,460 \pm 30BP$ 、ズケ25-E3-テの試料番号2が $110 \pm 20BP$ 、ズケ25-F1-キの試料番号3が $500 \pm 20BP$ 、試料番号6が $990 \pm 20BP$ 、試料番号11が $1,080 \pm 20BP$ 、ズケ19-H2-ネの試料番号3が $220 \pm 20BP$ 、試料番号11が $330 \pm 20BP$ 、4m付近下部が $1,970 \pm 20BP$ の値を示す。

第V - 1表 放射性炭素年代測定結果

試掘坑	層名	試料番号 試料名	種類	処理	補正年代 BP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	測定年代 BP	Code No.
ズケ17-J8-ノ	II a-3	7	炭化物	AAA	970±20	-28.39±0.23	1,030±20	IAAA-153666
ズケ17-J8-ノ	西壁床面	9	炭化物	AAA	650±20	-13.16±0.22	460±20	IAAA-153667
ズケ17-J9-オ	洞穴内 堆積物	3	炭化物	AaA	1,460±30	-18.88±0.36	1,360±20	IAAA-153668
ズケ25-E3-テ	墓床面	2	炭化材	AAA	110±20	-28.22±0.23	170±20	IAAA-153669
ズケ25-F1-キ	II a-3	3	炭化物	AaA	500±20	-27.39±0.23	540±20	IAAA-153670
ズケ25-F1-キ	II a-4	6	炭化物	AAA	990±20	-14.57±0.28	810±20	IAAA-153671
ズケ25-F1-キ	II c	11	炭化物	AAA	1,080±20	-18.39±0.24	970±20	IAAA-153672
ズケ19-H2-ネ	II b-1	3	炭化物	AAA	220±20	-29.28±0.28	290±20	IAAA-153673
ズケ19-H2-ネ	II e	11	炭化物	AAA	330±20	-28.12±0.22	380±20	IAAA-153674
ズケ19-H2-ネ	—	4m付近 下部	植物片	AAA	1,970±20	-31.39±0.23	2,080±20	IAAA-153675

1)年代値の算出には、Libbyの半減期5,568年を使用。

2)BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。

3)付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

4)AAAは酸-アルカリ-酸処理、AaAはアルカリの濃度を薄くした処理を示す。

測定誤差を 2σ として計算させた結果、ズケ17-J8-ノの試料番号7はcalAD 1,018～1,152、試料番号9はcalAD 1,283～1,390、ズケ17-J9-オの試料番号3はcalAD 561～646、ズケ25-E3-テの試料番号2はcalAD 1,683～1,929、ズケ25-F1-キの試料番号3はcalAD 1,409～1,442、試料番号6はcalAD 996～1,150、試料番号11はcalAD 898～1,016、ズケ19-H2-ネの試料番号3はcalAD 1,646～1,950(以降)、試料番号11はcalAD 1,488～1,640、4m付近下部はcalBC 37～calAD 72である。

暦年校正の中央値は、ズケ17-J8-ノの試料番号7がcalAD 1,089、試料番号9がcalAD 1,357、ズケ17-J9-オの試料番号3がcalAD 605、ズケ25-E3-テの試料番号2がcalAD 1,838、ズケ25-F1-キの試料番号3がcalAD 1,425、試料番号6がcalAD 1,033、試料番号11がcalAD 973、ズケ19-H2-ネの試料番号3がcalAD 1,778、試料番号11がcalAD 1,565、4m付近下部がcalAD 29である。

2. 花粉分析・微粒炭分析

結果を第V-3表、第V-1図に示す。花粉化石の産出状況は、地点や試料により大きく異なる。

ズケ17-J9-オの試料番号3は花粉化石がほとんど検出されず、検出される花粉化石の保存状態も悪い。堆積物1ccあたりの花粉・孢子数は100個未満であり、木本花粉のマツ属、草本花粉のイネ科が、わずかに認められる程度である。

微粒炭数も、堆積物1ccあたり100個未満である。微粒炭の形態は、いずれも母材の推定が難しい不明型であった。

ズケ25-F1-キの試料番号1～13も、花粉化石がほとんど、あるいは全く検出されず、花粉・孢子数は試料番号10で約100個/cc、それ以外はいずれも100個未満である。検出された花粉化石は、試料番号10でイネ科、タンポポ科が確認されたのみである。

微粒炭数は、試料番号10で約1,400個/ccと最も多く、次いで試料番号1で約400個/cc、試料番号3,6で約200個/cc、試料番号8,13は100個未満である。微粒炭の形態は、いずれも母材の推定が難しい不明型であった。

ズケ19-H2-ネでは、花粉化石が多く検出され、堆積物1ccあたりの花粉・孢子数は約500～4,400個/ccであった。花粉化石は、4m付近下部以外の6試料から豊富に検出され、保存状態も普通～やや

第V-2表 暦年較正結果

試料名	補正年代 (BP)	暦年較正年代					Code No.
		年代値			相対比	中央値	
ズケ17-J8-ノ 7	971±22	σ	cal AD 1,022 - cal AD 1,045	cal BP 928 - 905	0.525	calAD 1,089	IAAA- 153666
			cal AD 1,095 - cal AD 1,120	cal BP 855 - 830	0.406		
		cal AD 1,142 - cal AD 1,146	cal BP 808 - 804	0.069			
		2σ	cal AD 1,018 - cal AD 1,053	cal BP 932 - 897	0.433		
			cal AD 1,079 - cal AD 1,152	cal BP 871 - 798	0.567		
ズケ17-J8-ノ 9	652±22	σ	cal AD 1,289 - cal AD 1,306	cal BP 661 - 644	0.431	calAD 1,357	IAAA- 153667
			cal AD 1,363 - cal AD 1,385	cal BP 587 - 565	0.569		
		cal AD 1,283 - cal AD 1,318	cal BP 667 - 632	0.453			
		2σ	cal AD 1,352 - cal AD 1,390	cal BP 598 - 560	0.547		
ズケ17-J9-オ 3	1,459±25	σ	cal AD 586 - cal AD 636	cal BP 1,364 - 1,314	1.000	calAD 605	IAAA- 153668
		2σ	cal AD 561 - cal AD 646	cal BP 1,389 - 1,304	1.000		
ズケ25-E3-テ 2	111±22	σ	cal AD 1,693 - cal AD 1,709	cal BP 257 - 241	0.144	calAD 1,838	IAAA- 153669
			cal AD 1,717 - cal AD 1,727	cal BP 233 - 223	0.096		
			cal AD 1,812 - cal AD 1,827	cal BP 138 - 123	0.141		
		2σ	cal AD 1,831 - cal AD 1,889	cal BP 119 - 61	0.536		
		cal AD 1,910 - cal AD 1,919	cal BP 40 - 31	0.083			
		cal AD 1,683 - cal AD 1,734	cal BP 267 - 216	0.289			
			cal AD 1,806 - cal AD 1,929	cal BP 144 - 21	0.711		
ズケ25-F1-キ 3	498±22	σ	cal AD 1,418 - cal AD 1,435	cal BP 532 - 515	1.000	calAD 1,425	IAAA- 153670
		2σ	cal AD 1,409 - cal AD 1,442	cal BP 541 - 508	1.000		
ズケ25-F1-キ 6	985±21	σ	cal AD 1,017 - cal AD 1,042	cal BP 933 - 908	0.816	calAD 1,033	IAAA- 153671
			cal AD 1,105 - cal AD 1,117	cal BP 845 - 833	0.184		
		2σ	cal AD 996 - cal AD 1,008	cal BP 954 - 942	0.023		
		cal AD 1,010 - cal AD 1,050	cal BP 940 - 900	0.638			
		cal AD 1,084 - cal AD 1,125	cal BP 866 - 825	0.276			
		cal AD 1,136 - cal AD 1,150	cal BP 814 - 800	0.063			
ズケ25-F1-キ 11	1,078±21	σ	cal AD 902 - cal AD 919	cal BP 1,048 - 1,031	0.254	calAD 973	IAAA- 153672
			cal AD 964 - cal AD 996	cal BP 986 - 954	0.713		
		cal AD 1,007 - cal AD 1,011	cal BP 943 - 939	0.032			
		2σ	cal AD 898 - cal AD 925	cal BP 1,052 - 1,025	0.235		
			cal AD 943 - cal AD 1,016	cal BP 1,007 - 934	0.765		
ズケ19-2H-ネ 3	216±23	σ	cal AD 1,653 - cal AD 1,669	cal BP 297 - 281	0.400	calAD 1,778	IAAA- 153673
			cal AD 1,780 - cal AD 1,798	cal BP 170 - 152	0.488		
			cal AD 1,945 - cal AD 1950+	cal BP 5 - 0	0.113		
		2σ	cal AD 1,646 - cal AD 1,681	cal BP 304 - 269	0.399		
		cal AD 1,739 - cal AD 1,745	cal BP 211 - 205	0.014			
		cal AD 1,762 - cal AD 1,802	cal BP 188 - 148	0.473			
cal AD 1,937 - cal AD 1950+	cal BP 13 - 0	0.114					
ズケ19-H2-ネ 11	329±20	σ	cal AD 1,513 - cal AD 1,528	cal BP 437 - 422	0.165	calAD 1,565	IAAA- 153674
			cal AD 1,544 - cal AD 1,600	cal BP 406 - 350	0.622		
		cal AD 1,617 - cal AD 1,634	cal BP 333 - 316	0.213			
		2σ	cal AD 1,488 - cal AD 1,603	cal BP 462 - 347	0.795		
			cal AD 1,609 - cal AD 1,640	cal BP 341 - 310	0.205		
ズケ19-H2-ネ 4m付近	1,973±22	σ	cal AD 5 - cal AD 57	cal BP 1,945 - 1,893	1.000	calAD 29	IAAA- 153675
		2σ	cal BC 37 - cal BC 9	cal BP 1,986 - 1,958	0.118		
			cal BC 3 - cal AD 72	cal BP 1,952 - 1,878	0.882		

1)計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.1.0を使用。

2)計算には表に示した丸める前の値を使用している。

3)1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。

4)統計的に真の値が入る確率は σ は68%、 2σ は95%である。

5)相対比は、 σ 、 2σ のそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

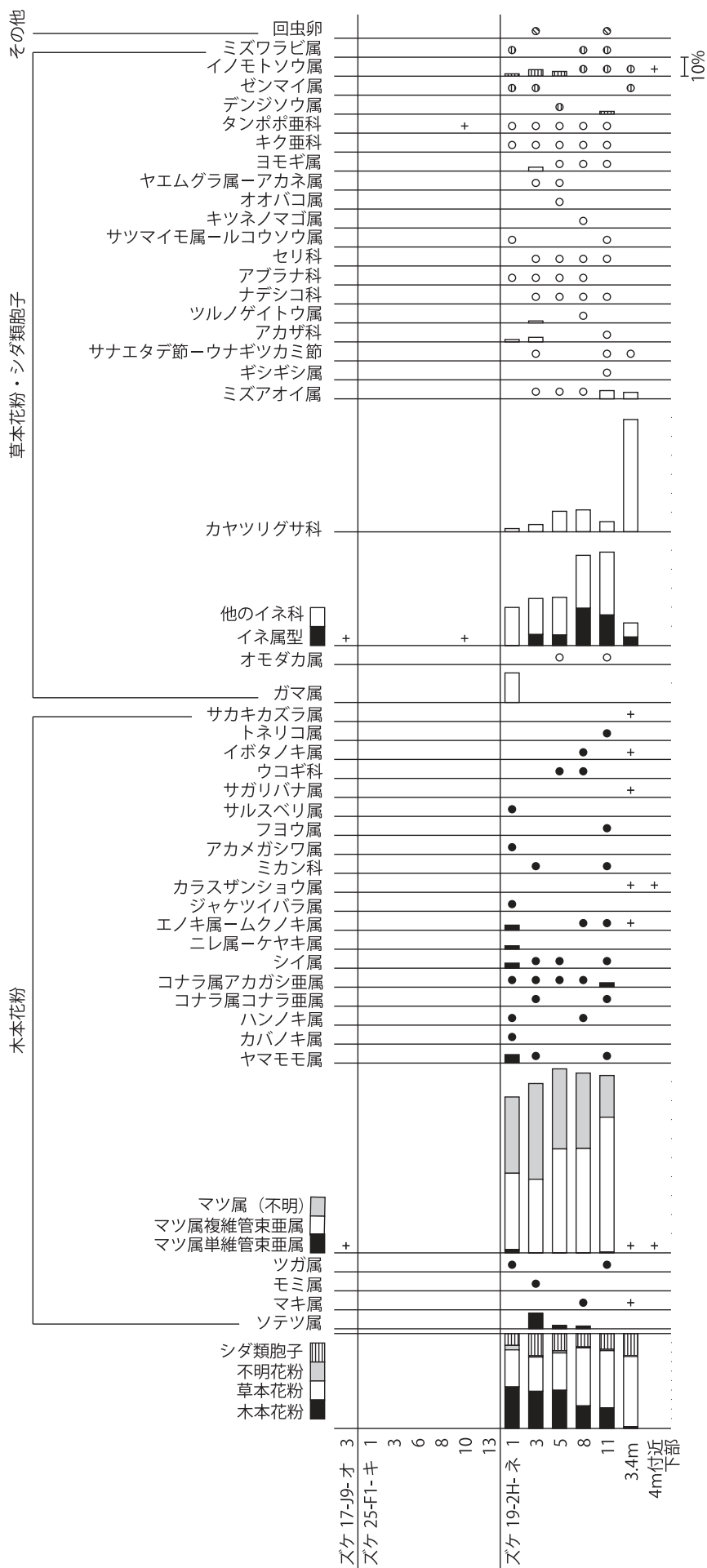
6)中央値は、確率分布図の面積が二分される値を年代値に換算したものの。

第V-3表 花粉分析・微粒炭分析結果

種 類	ズケ17- J9-オ 3	ズケ25-F1-キ						ズケ19-H2-ネ						4m付近 下部
		1	3	6	8	10	13	1	3	5	8	11	3.4m	
木本花粉														
ソテツ属	-	-	-	-	-	-	-	-	19	4	3	-	-	-
マキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-
モミ属	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
ツガ属	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1	-	-
マツ属単維管束亜属	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	1	-	-
マツ属複維管束亜属	-	-	-	-	-	-	-	45	90	126	115	152	1	1
マツ属(不明)	1	-	-	-	-	-	-	45	117	97	83	47	4	-
ヤマモモ属	-	-	-	-	-	-	-	5	1	-	-	1	-	-
カバノキ属	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
ハンノキ属	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1	-	-	-
コナラ属コナラ亜属	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1	-	-
コナラ属アカガシ亜属	-	-	-	-	-	-	-	1	1	1	2	5	-	-
シイ属	-	-	-	-	-	-	-	3	1	1	-	1	-	-
ニレ属-ケヤキ属	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-
エノキ属-ムクノキ属	-	-	-	-	-	-	-	3	-	-	1	2	1	-
ジャケツイバラ属	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
カラスザンショウ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	1
ミカン科	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1	-	-
アカメガシワ属	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
フヨウ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
サルスベリ属	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
サガリバナ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-
ウコギ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-
イボタノキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	2	-
トネリコ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
サカキカズラ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
草本花粉														
ガマ属	-	-	-	-	-	-	-	38	-	-	-	-	-	-
オモダカ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	2	-	-
イネ属型	-	-	-	-	-	-	-	-	34	31	171	156	38	-
他のイネ科	1	-	-	-	-	2	-	49	111	111	243	321	63	-
カヤツリグサ科	-	-	-	-	-	-	-	4	22	60	100	51	501	-
ミズアオイ属	-	-	-	-	-	-	-	-	2	4	5	42	29	-
ギシギシ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
サナエタデ節-ウナギツカミ節	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1	3	-
アカザ科	-	-	-	-	-	-	-	3	14	-	-	3	-	-
ツルノゲイトウ属	-	-	-	-	-	-	-	-	6	-	1	-	-	-
ナデシコ科	-	-	-	-	-	-	-	-	3	2	2	1	-	-
アブラナ科	-	-	-	-	-	-	-	1	1	1	1	-	-	-
セリ科	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	1	1	-	-
サツマイモ属-ルコウソウ属	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	1	-	-
キツネノマゴ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-
オオバコ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
ヤエムグラ属-アカネ属	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-
ヨモギ属	-	-	-	-	-	-	-	-	12	3	5	8	-	-
キク亜科	-	-	-	-	-	-	-	2	2	4	2	3	-	-
タンポポ亜科	-	-	-	-	-	1	-	1	4	4	5	1	-	-
不明花粉														
不明花粉	-	-	1	-	-	-	-	12	8	13	9	14	8	3
シダ類孢子														
デンジソウ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-	14	-	-
ゼンマイ属	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	1	-
イノモトソウ属	-	-	-	-	-	-	-	3	20	14	7	8	4	4
ミズワラビ属	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1	4	-	-
他のシダ類孢子	11	10	3	3	1	26	1	27	118	87	116	137	194	73
合 計														
木本花粉	1	0	0	0	0	0	0	112	232	230	209	214	15	2
草本花粉	1	0	0	0	0	3	0	100	214	225	538	592	634	0
不明花粉	0	0	1	0	0	0	0	12	8	13	9	14	8	3
シダ類孢子	11	10	3	3	1	26	1	32	139	104	124	163	199	77
合計(不明を除く)	13	10	3	3	1	29	1	244	585	559	871	969	848	79
その他														
回虫卵	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1	-	-
微粒炭数(個/cc)	<100	400	200	200	<100	1400	<100	300	7000	1700	4500	2300	2200	2000
花粉・孢子数(個/cc)	<100	<100	<100	<100	<100	100	<100	500	1500	3300	4400	1600	5100	800

1)微粒炭数、花粉・孢子数については、10の位を四捨五入して100単位に丸めている。

2)<100:100個未満。



木本花粉は木本花粉総数、草本花粉・シダ類孢子は総数から不明花粉を除いた数を基数として百分率で表した。
○●は1%未満、+は基数が100個未満の試料において検出された種類を示す。

第V-1図 花粉化石群集

良好である。群集組成をみると、木本花粉は試料番号 1～11 で類似しており、マツ属が優占する。それ以外ではソテツ属、ヤマモモ属、コナラ属アカガシ亜属、シイ属、エノキ属—ムクノキ属等を伴う。3.4m では木本花粉は少ないものの、マツ属、カラスザンショウ属、サガリバナ属、イボタノキ属などが認められる。4m 付近下部ではマツ属、カラスザンショウ属が、わずかに検出される程度である。

草本花粉やシダ類胞子をみると、試料番号 1 ではガマ属、イネ科が多く産出し、カヤツリグサ科、アカザ科等を伴う。試料番号 3～11 ではイネ科が多産し、カヤツリグサ科、ミズアオイ属、サナエタデ節—ウナギツカミ節、アカザ科、ナデシコ科、ヨモギ属、キク亜科、タンポポ科等を伴う。ミズアオイ属以外にも、オモダカ属、デンジソウ属、ミズワラビ属などの水湿地生植物が確認された。3.4m ではカヤツリグサ科が顕著に多産し、イネ科、ミズアオイ属、サナエタデ節—ウナギツカミ節などが認められる。4m 付近下部からは、草本花粉は 1 個体も産出しなかった。なお、試料番号 3～3.4m で多産するイネ科には、栽培種であるイネ属に形態の類する個体(以下、イネ属型とする)も比較的多く含まれている。イネ科全体に占めるイネ属型の割合は、試料番号 3 で約 23.5%、試料番号 5 で約 21.8%、試料番号 8 で約 41.3%、試料番号 11 で約 32.7%、3.4m で約 37.6%であった。

花粉化石・シダ類胞子以外では、試料番号 3,11 から、寄生虫の卵である回虫卵が認められた。

微粒炭数は、試料番号 3 で約 7,000 個/cc と最も多く、試料番号 1 で約 300 個/cc と最も少ない。微粒炭の形態は、ほとんどが母材の推定が難しい不明型であったが、試料番号 3 から分野壁孔などの木材組織を持つタイプとイネ科由来とされる波状構造を持つタイプが、試料番号 8 と 3.4m からイネ科由来とされる波状構造を持つタイプが、わずかに確認された。

3. 植物珪酸体分析

結果を第V-4表に示す。多くの試料から植物珪酸体が検出されるものの、概して検出個数が少ない。また保存状態も悪く、表面に多数の小孔(溶食痕)が認められる。

ズケ 17-J9-オの試料番号 3 では、植物珪酸体が全く検出されない。検鏡したプレパラート内には、鋳物粒子の散在がみられるだけである。

第V-4表 植物珪酸体含量

分類群	ズケ17-J9-オ 3	ズケ25-F1-キ						ズケ19-H2-ネ						4m付近 下部
		1	3	6	8	10	13	1	3	5	8	11	3.4m	
イネ科葉部短細胞珪酸体														
イネ属	-	-	<100	-	-	-	-	<100	-	-	-	-	-	-
タケ亜科	-	<100	-	-	-	-	-	<100	<100	-	-	-	-	-
ススキ属	-	<100	100	<100	<100	-	-	<100	<100	<100	-	-	-	-
コムギ連	-	100	<100	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イチゴツナギ亜科	-	<100	300	100	<100	100	-	100	-	<100	-	-	-	-
不明	-	400	1,100	1,100	200	400	<100	900	<100	400	100	<100	<100	
イネ科葉身機動細胞珪酸体														
イネ属	-	<100	<100	-	-	-	-	<100	-	-	-	-	-	
タケ亜科	-	<100	100	-	-	-	-	<100	-	-	-	-	-	
ススキ属	-	<100	200	<100	-	-	-	<100	-	-	-	-	-	
不明	-	100	700	800	400	300	<100	300	200	100	100	<100	<100	
合計														
イネ科葉部短細胞珪酸体	0	500	1,600	1,500	300	600	<100	0	1,200	100	600	100	<100	<100
イネ科葉身機動細胞珪酸体	0	100	800	1,100	500	300	<100	0	400	200	100	100	<100	<100
植物珪酸体含量	0	600	2,400	2,600	800	900	<100	0	1,600	300	700	200	100	200
珪化組織片														
イネ属類珪酸体	-	-	*	*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イネ属短細胞列	-	-	*	*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
樹木起源														
クスノキ科	-	-	-	*	*	-	-	-	-	-	-	-	-	-

1)含量は、10の位で丸めている(100単位にする)。

2)合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に丸めている。

3)<100:100個/g未満。

4)-:未検出、*:含有。

ズケ 25-F1- キの試料番号 1～13 では、植物珪酸体含量にばらつきがみられる。すなわち、試料番号 13 が 100 個 /g 未満、試料番号 1,8,10 で 1,000 個 /g 未満、試料番号 3,6 で最も多くて約 2,400 個 /g と約 2,600 個 /g である。検出される分類群は、試料番号 1,13 で少なく、分類群を特定できない不明などがみられるに過ぎない。他の試料では、タケ亜科やススキ属、イチゴツナギ亜科もみられる。また試料番号 3,6 では栽培植物であるイネ属や栽培種を含む分類群であるコムギ連も産出する。イネ属には珪化組織片として穎珪酸体や短細胞列も検出される。また、試料番号 6,8 ではイネ科起源と共に樹木起源(クスノキ科)もみられる。

ズケ 19-H2- ネでは、試料番号 1 で植物珪酸体が全く検出されず、他の試料も試料番号 3 を除いて植物珪酸体含量が少ない。すなわち、試料番号 3 で約 1,600 個 /g であるが、他の試料では 100～700 個 /g 程度である。検出される分類群も試料番号 3 を除いて少なく、分類群を特定できない不明やタケ亜科、ススキ属、イチゴツナギ亜科がわずかにあるいは稀にみられるに過ぎない。試料番号 3 ではタケ亜科、ススキ属、イチゴツナギ亜科がとともにイネ属も産出する。

4. 微細物分析

結果を第V-5表に示す。分析に供された 14 試料 7,308g の微細物洗い出しより、植物遺体(種実、炭化種実、針葉、木材、炭化材、蘚苔類、植物片)、動物遺体(虫類、二枚貝類、巻貝類、貝類、骨片)、砂礫類などが確認され、ズケ 17-J19- オ、ズケ 25-F1- キと 19-H2- ネとで組成が大きく異なる。

ズケ 17-J19- オおよびズケ 25-F1- キでは、砂礫類を主体とし、炭化材、炭化種実、骨片が確認される。ズケ 25-F1- キの試料番号 3 では焼土?を含む。その他に、炭化していない植物片や虫類が確認されたが、これらは後代の混入と判断される。炭化材は、7 試料より確認され、ズケ 25-F1- キの試料番号 10 でやや多い。炭化種実は、ズケ 25-F1- キの 3 試料(試料番号 1,3,6)より確認され、栽培種のイネ(試料番号 6)やコムギ(試料番号 1,3)を含む。骨片は、2 試料(ズケ 17-J19- オの試料番号 3、ズケ 25-F1- キの試料番号 1)より微量確認される。

19-H2- ネでは、種実、炭化種実、針葉、木材、炭化材、蘚苔類、植物片、虫類、二枚貝類、巻貝類、貝類、砂礫類が確認され、種実や植物片、巻貝類を主体とする。種実類は、試料番号 5～4m 下部付近で多く、特に試料番号 8,11 および 3.4m で極めて多い。多量の水湿地生植物から成り、栽培種のイネが確認される。

第V-5表 微細物洗い出し結果

種類	ズケ17-J19-オ	ズケ25-F1-キ						ズケ19-H2-ネ						4m付近下部	備考
	3	1	3	6	8	10	13	1	3	5	8	11	3.4m		
植物遺体															
種実	+	-	+	+	-	-	-	+	+	++	+++	+++	+++	++	19-H2-ネ 8,3.4m:イネ類確認 25-F1-キ 6,19-2H-ネ 8:イネ類確認 25-F1-キ 1,3:コムギ確認
炭化種実	-	+	+	+	-	-	-	-	-	-	+	-	-	-	
針葉	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+	+	-	-	
木材	-	-	-	-	-	-	-	+	+	-	+	+	+	+	
炭化材	++	+	++	++	++	+++	+	-	+	+	+	+	+	-	
蘚苔類	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+	+	-	-	
植物片	+	+	+	+	+	+	+	+++	++	++	+++	+++	+++	+++	
動物遺体															
虫類	-	++	-	-	-	-	-	+	+	-	+	+	+	-	
二枚貝類	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+	
巻貝類	-	-	-	-	-	-	-	+++	+	++	+	+	++	+	
貝類	-	-	-	-	-	-	-	++	+	++	++	++	+++	-	
骨片	+	+	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+	
砂礫類	+++	+++	+++	+++	+++	+++	++	+	++	++	+	+	+	+	
焼土?	-	-	+	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
分析量								200	200	200	200	200	200	200	200 容積(cc)
前処理	1000	800	700	600	700	600	800	242	312	320	343	300	294	297 重量(g)	
	乾燥	乾燥	乾燥	乾燥	乾燥	乾燥	乾燥	水浸	水浸	水浸	水浸	水浸	水浸	水浸	

1)[+]:少量、「++」:中量、「+++」:多量。

第V-6表 土壌理化学分析・粒度分析結果

試料名	土色	pH(H ₂ O)	有機炭素 (%)	腐植 (%)	全窒素 (%)	C/N	腐植形態(簡易法)		鉄の形態				マンガン形態				粒符組成(ピペット法)				土性
							Melanin [MI]	腐植酸型	Fe _t (%)	Fe _d (%)	Fe _o (%)	活性度 Fe _o /Fe _d	結晶化指数 (Fed-Feo)/Fet	Mn _t (%)	Mn _d (%)	粗砂 (%)	細砂 (%)	シルト (%)	粘土 (%)		
ズケ17-J19-オ	7.5YR4/6 褐	8.2	0.47	0.81	0.10	5	n.d.	n.d.	7.43	4.46	0.22	0.05	0.11	0.03	5.2	23.1	13.5	58.2	HC		
ズケ25-F1-キ	10YR3/4 暗褐	7.8	0.78	1.34	0.11	7	n.d.	n.d.	5.98	3.60	0.36	0.10	0.22	0.05	5.6	26.4	26.5	41.5	LiC		
	3 10YR3/3 暗褐	7.5	0.75	1.29	0.10	8	n.d.	n.d.	5.53	3.34	0.40	0.12	0.25	0.06	5.6	28.5	26.6	39.3	LiC		
	6 10YR3/4 暗褐	7.5	0.70	1.21	0.09	8	n.d.	n.d.	5.56	3.32	0.46	0.14	0.28	0.13	4.9	27.1	28.3	39.7	LiC		
	8 10YR3/4 暗褐	7.5	0.58	1.00	0.10	6	n.d.	n.d.	5.96	3.57	0.43	0.12	0.31	0.14	4.5	24.7	28.3	42.5	LiC		
ズケ19-H2-ネ	10 10YR4/3 にぶい黄褐	7.4	0.59	1.02	0.09	7	n.d.	n.d.	5.41	3.25	0.42	0.13	0.32	0.15	7.4	29.1	25.5	38.0	LiC		
	13 10YR4/6 褐	7.5	0.33	0.57	0.09	4	n.d.	n.d.	7.08	4.25	0.31	0.07	0.14	0.03	7.2	26.5	13.6	52.7	HC		
	1 10YR3/1 黒褐	7.3	14.0	24.1	1.18	12	2.38	Rp	5.65	3.39	1.78	0.53	0.12	0.03	0.0	4.9	35.1	60.0	HC		
	3 2.5Y4/4 オリーブ褐	7.8	1.19	2.05	0.17	7	n.d.	n.d.	6.88	4.14	1.30	0.31	0.10	0.02	1.1	18.2	32.9	47.8	HC		
ズケ19-H2-ネ	5 2.5Y4/4 オリーブ褐	8.0	1.01	1.74	0.14	7	n.d.	n.d.	3.75	2.26	0.56	0.25	0.05	0.01	10.5	37.5	22.9	29.1	LiC		
	8 2.5Y4/3 オリーブ褐	8.1	1.03	1.78	0.14	7	n.d.	n.d.	4.19	2.52	0.79	0.31	0.07	0.02	9.2	39.7	21.4	29.7	LiC		
	11 2.5Y3/3 暗オリーブ褐	7.9	1.96	3.38	0.21	9	n.d.	n.d.	4.99	3.01	1.47	0.49	0.10	0.02	4.5	34.2	23.8	37.5	LiC		
	3.4m 2.5Y4/1 灰	7.7	3.25	5.60	0.27	12	n.d.	n.d.	3.80	1.14	0.90	0.79	0.06	0.01	2.3	30.1	30.6	37.0	LiC		
4m付近下部	5Y5/2 灰オリーブ	7.8	1.66	2.86	0.16	10	n.d.	n.d.	4.34	1.30	1.11	0.85	0.21	0.05	1.2	33.2	28.3	37.3	LiC		

1) 土色:マンセル表色系に準じた新版標準土色帖(農林省農林水産技術会議監修,1967)による。

2) 土性:土壌調査ハンドブック改訂版(ベドロジー学会編,1997)の野外土性による。

LiC...:軽植土(粘土25~45%、シルト0~45%、砂10~55%)

HC...:重植土(粘土45~100%、シルト0~55%、砂0~55%)

3) 腐植:有機炭素×1.724。

4) C/N:有機炭素/全窒素。

5) Fet:全鉄(フッ化水素酸分解による)。

6) Fed:ジチオナイト可溶鉄。

7) Feo:酸性シユウ酸塩可溶鉄。

8) 活性度:Feo/Fed。

9) 結晶化指数:(Fed-Feo)/Fet。

10) Mnt:全マンガン(フッ化水素酸分解による)。

11) Mnd:ジチオナイト可溶マンガン。

12) n.d.:検出限界以下。

5. 土壤理化学分析・粒度分析

結果を第V-6表に示す。ズケ 17-J19- オの試料番号 3 をみると、土色は 7.5YR4/6 褐と黒色味に欠ける。pH (H₂O) は 8.2 と強アルカリ性を示す。腐植含量は 0.81% と少なく、全窒素は 0.10% であり、C/N 比は 5 と窒素の割合が多い。MI は検出されなかった。また、鉄の形態分析からは、活性度が低く、結晶化指数がやや高いことが示された。マンガンは 0.11% 含まれる。粒径組成から得られる土性は HC (重埴土) と粘質な土壌であり、シルト含量が少ない。

ズケ 25-F1- キの試料をみると、土色は試料番号 13 を除いて 10YR3/3 暗褐～ 10YR4/3 にぶい黄褐を呈し、やや暗色を呈するが、試料番号 13 では 10YR4/6 褐と黒色味に欠ける。pH (H₂O) は 7.4 ～ 7.8 と微アルカリ性から弱アルカリ性を示し、全試料で大きな差異はない。腐植含量は試料番号 13 で 0.57% と少なく、他の試料では 1.00 ～ 1.34% と同様である。全窒素は 0.09 ～ 0.11% とほぼ同様であり、C/N 比は試料番号 13 で 4 と小さく、他の試料では 6 ～ 8 である。MI は全試料で検出されなかった。

また、鉄の形態分析からは全鉄量が試料番号 13 で 7.08% と多く、他の試料は 5.41 ～ 5.98% と一定である。また活性度は 0.07 ～ 0.14 と小さく、結晶化指数は 0.5 以上で一定してやや高い。マンガンは試料番号 13 では 0.14%、他の試料では 0.22 ～ 0.32% と多く含まれる。粒径組成から得られる土性は試料番号 13 で HC と粘質な土壌であり、シルト含量は少ない。他の試料は LiC (軽埴土) と粘質な土壌であるが、細砂画分やシルト画分も多く含まれる。

19-H2- ネの試料をみると、土色は試料番号 1 で 10YR3/1 黒褐と暗色であり、他の試料は 2.5Y4/1 灰～ 5Y5/2 灰オリーブと灰色味がかかった土色である。pH (H₂O) は試料番号 1 で 7.3 と微アルカリ性を呈し、他の試料では 7.7 ～ 8.1 と弱アルカリ性から強アルカリ性を示す。腐植含量は試料番号 1 で 24.1% と特徴的に多く、他の試料においても 1.74 ～ 5.6% と比較的多い。全窒素量は試料番号 1 で 1.18% と多く、他の試料でも 0.14 ～ 0.27% と腐植含量に相応し、C/N 比は 7 ～ 12 を示す。MI は試料番号 1 でのみ僅かに認められ、Rp 型を示す。鉄の形態分析からは、試料番号 1,11,3.4m,4m 付近下部で活性度が 0.4 を超え、中でも 3.4m と 4m 付近下部で 0.8 と高い。他の試料は 0.25 ～ 0.31 と低い。結晶化指数は、活性度が 0.4 に届かない試料番号 3,5,8 及び、わずかに活性度が 0.4 を超えた試料番号 1,11 で 0.28 ～ 0.45 とやや高い試料である。他の特徴的に活性度の高い 3.4m と 4m 付近下部では 0.1 以下と低い。マンガンは 4m 付近下部で 0.21% と保持するが、他の試料では 0.05 ～ 0.12% とバラつきがある。粒径組成から得られる土性は試料番号 1,3 で HC と粘質な土壌であり、シルト画分も多い。他の試料は LiC である。試料番号 5,8 では同様の組成を示し、粘土画分がやや少ない。試料番号 11,3.4 m,4m 付近下部では同様の組成を示す。

第5節 考察

1. ズケ 17-J8- ノ

放射性炭素年代測定結果をみると、II a-3 層 (試料番号 7) は補正年代で 970±20BP、暦年代で 11 世紀前半～ 12 世紀中頃 (calAD 1,018 ～ calAD 1,152、中央値 calAD 1,089)、西壁床面のピット状遺構より抽出された炭化物 (試料番号 9) は補正年代で 650±20BP、暦年代で 13 世紀末～ 14 世紀末 (calAD 1,283 ～ calAD 1,390、中央値 calAD 1,357) の値を示した。よって、II a-3 層はグスク時代以前 (原グスク時代) の堆積層であり、西壁床面のピット状遺構はグスク時代以降の可能性が指摘される。

2. ズケ 17-J9- オ

試掘坑底面に認められた洞口内の堆積物 (試料番号 3) の放射性炭素年代は、補正年代で $1,460 \pm 30$ BP、暦年代で 6 世紀後半～7 世紀中頃 (calAD 561 ～ calAD 646、中央値 calAD 605) の値を示した。このことから、洞穴内堆積物は、貝塚時代後期頃のものとして推定される。

植物化石についてみると、木本類のマツ属、草本類のイネ科の花粉がわずかに認められる程度で、植物珪酸体は全く検出されていない。微細物分析でも少量の種実と植物片、骨片、中量の炭化材が認められる程度である。これらは土壌とともに洞穴内に流入したと考えられるが、元々取り込まれにくい環境であった可能性が高い。少なくとも当時の周辺に、マツ属などの木本類、イネ科などの草本類の生育が窺える。

一方、土壌特性のうち、遊離鉄の存在形態は、自然環境条件の違いにより種々さまざまな化合物を形成する。土壌中で二次的に生成した非ケイ酸塩態の鉄化合物を遊離鉄という。遊離鉄化合物は、非晶質・結晶質の 2 つの異なった形態で存在し、酸性シュウ酸塩可溶鉄は主に非晶質を、ジチオナイト可溶鉄は非晶質の鉄に加えて、ゲータイト・ヘマトイトを溶解するため、差し引きにより結晶質鉄の尺度とみなすことができる。また、鉄の活性度は、酸性シュウ酸塩可溶鉄とジチオナイト可溶鉄の比から表し、主要な土壌生成過程の一つである遊離酸化鉄の結晶化の尺度として用いる。結晶化指数とは、ジチオナイト可溶鉄から酸性シュウ酸塩可溶鉄を差し引き、全鉄との比により表す。遊離鉄の結晶化を伴った風化あるいは土壌生成の発達程度を表す尺度として用いる。遊離鉄の活性度と結晶化指数を用いて、褐色森林土と黄褐色森林土、赤色土を判別することができる。洞穴内の堆積物は、鉄の形態より赤色土に分類される。遊離酸化鉄のうちに結晶質部分の占める割合が特に大きく、非晶質鉄の存在が少ないことがあげられ、結晶化が進んでいる。また、炭酸塩の反応を見るテストにより強い発泡を確認したため、アルカリ化の原因が石灰であることが示される。粒径組成が HC と粘土質であるが、一般的な島尻マーグよりシルト分が少なく、細砂分が含まれることから、風化作用等の土壌生成作用がやや進んでいない土壌であると考えられる。

3. ズケ 25-E3- テ

埋積されていた墓が利用されていた当時の表土と推測される床面土壌 (試料番号 2) の放射性炭素年代測定結果は、補正年代で 110 ± 20 BP、暦年代で 17 世紀後半～20 世紀前半 (calAD 1,683 ～ calAD 1,929、中央値 calAD 1,838) の値を示した。よって、この墓は、近世～近代のものとして推定される。

4. ズケ 25-F1- キ

放射性炭素年代測定結果をみると、II c 層 (試料番号 11) は補正年代で $1,080 \pm 20$ BP、暦年代で 9 世紀末～11 世紀前半 (calAD 898 ～ calAD 1,016、中央値 calAD 973)、II a-4 層 (試料番号 6) は補正年代で 990 ± 20 BP、暦年代で 10 世紀末～11 世紀前半 (calAD 996 ～ calAD 1,150、中央値 calAD 1,033)、II a-3 層 (試料番号 3) は補正年代で 500 ± 20 BP、暦年代で 15 世紀初頭～15 世紀中頃 (calAD 1,409 ～ calAD 1,442、中央値 calAD 1,425) の値を示した。よって、II c 層～II a-3 層は、9 世紀末～15 世紀中頃の堆積物として推定される。

植物化石についてみると、花粉化石は II c 層 (試料番号 10) から、草本類のイネ科、タンポポ亜科がわずかに認められる程度であり、種実遺体も II a-4 層 (試料番号 6) ～II a-1 層 (試料番号 1) で少量認

められる程度である。植物珪酸体も、各試料で概して検出された分類群や個数が少なかった。亜熱帯湿润気候のもとでは、堆積物中で珪酸分を含む無機成分の溶脱作用が起こる(松井,1988)。また、植物珪酸体は、湿润な土壌や土壌温度が高い堆積物の方が植物珪酸体の風化の度合いが高いとされている(近藤,1988)。これらの点を考慮すれば、埋積後の植物珪酸体が溶解しやすく、多くが消失した可能性がある。検出された植物珪酸体は埋積した量が多く、残留しやすかったと考えられる。ズケ 25-F1-キで検出された植物珪酸体の分類群からは、マージ?層(試料番号 13)やⅡ a-1 層を除いた各土層が形成された頃に、少なくともタケ亜科やススキ属、イチゴツナギ亜科などのイネ科が生育していたと考えられる。Ⅱ b 層(試料番号 8)やⅡ a-4 層ではイネ科起源と共に樹木起源(クスノキ科)も検出され、樹木の生育も窺える。

なお、Ⅱ a-4 層やⅡ a-3 層(試料番号 3)からは、栽培植物であるイネ属の植物珪酸体・珪化組織片などが検出されており、Ⅱ a-4 層からは炭化したイネの穎も検出されている。よって、当該期の調査区内や周辺で栽培されていた可能性が考えられる。また、Ⅱ a-4 層やⅡ a-3 層からは、コムギ連の短細胞珪酸体が検出されており、Ⅱ a-3 層やⅡ a-1 層からはコムギも確認されている。よって、稲作だけでなく、ムギ栽培も想定される。

微粒炭はあまり含まれないが、Ⅱ c 層で約 1,400 個/cc とやや多い。土壌中に含まれる微粒炭は、人間活動と密接に関係していることが知られており、その変化は人為活動の変化を反映している場合が多く認められる(例えば安田,1987;山野井,1996;井上ほか,2002)。このことを踏まえると、Ⅱ c 層堆積時の周辺で、人為活動が活発化した可能性がある。

一方、土壌特性をみると、Ⅱ c 層～Ⅱ a-1 層のいずれも赤色土に分類される。遊離酸化鉄のうちに結晶質部分の占める割合が特に大きく、非晶質鉄の存在が少ないことがあげられ、結晶化が進んでいる。他の分析結果と合わせてみると、Ⅱ c 層～Ⅱ a-1 層では同様の土壌であり、生成環境や堆積様相は大きくみると同様であることが示される。ただし、腐植含量や鉄の形態の結果から、Ⅱ c 層～Ⅱ b 層とⅡ a-4 層～Ⅱ a-1 層の間で若干の相違があり、環境変化に相違がある可能性が示唆される。前述のようにⅡ a-4 層～Ⅱ a-1 層でイネやコムギなどの栽培種が認められることから、この差は耕作などの人為的な影響を反映している可能性がある。また、マージ?層ではⅡ c 層～Ⅱ a-1 層とはやや異なる土壌であることを示し、ズケ 17-J19-オの洞穴内堆積物と同様の粒径組成や鉄・マンガンの結果を示したことから、両試料共に同様の島尻マージを母材とした堆積土であると考えられる。

5. ズケ 19-H2-ネ

放射性炭素年代測定結果をみると、4m 付近下部は補正年代で $1,970 \pm 20\text{BP}$ 、暦年代で calBC 37 ～ calAD 72(中央値 calAD 29)、Ⅱ e 層(試料番号 11)は補正年代で $330 \pm 20\text{BP}$ 、暦年代で 15 世紀後半～17 世紀中頃(calAD 1,488 ～ calAD 1,640、中央値 calAD 1,565)、Ⅱ b-1(試料番号 3)は補正年代で $220 \pm 20\text{BP}$ 、暦年代で 17 世紀中頃～現代(calAD 1,646 ～ calAD 1,950(以降)、中央値 calAD 1,778)の値を示した。Ⅱ b-2 層から近世の遺物が出土している事とも矛盾しない。よって、4m 付近下部～Ⅱ b-1 層は、約 2,000 年前～近代の堆積物と推測される。

植物化石についてみると、最下位の 4m 付近下部では、花粉化石、植物珪酸体はほとんど検出されず、わずかにマツ属、カラスザンショウ属などの木本類が確認されたことから、約 2,000 年前の周辺に、これらの木本類の生育が窺える。

3.4mになると、花粉化石では圧倒的に草本類の割合が高く、カヤツリグサ科の多産が顕著である。その他ではイネ科、ミズアオイ属、アカザ科などが認められる。ミズアオイ属は水湿地生草本であり、多産するカヤツリグサ科やイネ科にも水湿地に生育する種が含まれる。微細物分析でも種実遺体が多量に検出され、水湿地生植物が多く認められている。わずかに認められる木本類にも、マングローブ上流域の湿地環境に生育するサガリバナ属が検出されている。よって、3.4mの堆積時には、カヤツリグサ科を主体とした水湿地生草本が生育する湿地環境が広がっていたと推測され、海岸林や二次林などのしてのマツ属やマキ属が分布し、それらの林縁にはカラスザンショウ属やイボタノキ属なども生育していたと思われる。なお、多産するイネ科には、栽培種の可能性があるイネ属型が確認され、イネ科全体に占めるイネ属型の割合は約38%を示した。既存の調査事例によると、イネ科花粉に占めるイネ属の割合が30%以上を示すと、現在のような集約的稲作が近傍で行われていたとされている(中村,1980b)。微細物分析からも、イネの穎が確認されたことから、当該期での稲作の可能性が指摘される。ただし、カヤツリグサ科が優占する群集組成を考慮すると、稲作は近傍の別の場所で行われていた可能性が高い。

湿地堆積物とされるⅡe層、グスク時代水田とされるⅡd層(試料番号8)、および近代の水田とされるⅡb-2層(試料番号5)～Ⅱb-1層では、花粉群集組成が類似しており、草本類ではイネ科が最も多く産出する。植物珪酸体の産状を考慮すると、これらのイネ科にはタケ亜科やススキ属、イチゴツナギ亜科などが含まれていると思われる。その他ではカヤツリグサ科、サナエタデ節ーウナギツカミ節、アカザ科、ナデシコ科、ヨモギ属、キク亜科、タンポポ亜科などが認められる。これらは開けた明るい場所に生育する種が含まれることから、調査地周辺の草地植生を反映していると推測される。また、ミズアオイ属やオモダカ属、デンジソウ属、ミズワラビ属などの水湿地生草本・シダ類も確認された。前述のようにイネ科やカヤツリグサ科のほか、セリ科などにも水湿地に生育する種が含まれる。対象層が湿地や水田の可能性が指摘されている。イネ科花粉中のイネ属型の割合は、Ⅱe層で約33%、Ⅱd層で約41%、Ⅱb-2層で約22%、Ⅱb-1層で約24%であり、前述の中村(1980b)の事例に基づくと、Ⅱe層およびⅡd層で同等以上、Ⅱb-2層およびⅡb-1層でやや少ない程度である。また、Ⅱd層からはイネの穎が、Ⅱb-1層からイネ属の短細胞珪酸体がそれぞれ検出されたことも踏まえると、当該期の調査地点あるいはその極近傍で稲作が行われており、検出された水湿地生草本・シダ類は、水田内に生育していた可能性もある。

木本類ではマツ属が優占し、亜属まで同定できたものの殆どがマツ属複維管束亜属であった。沖縄県で自生するマツ属複維管束亜属はリュウキュウマツ1種であることから、検出されたマツ属の多くもリュウキュウマツに由来すると思われる。リュウキュウマツは、海岸沿いから山地部まで、広く分布することから、調査地周辺に生育していたことが窺える。また、海岸沿いにはソテツ属などが、周囲の森林にはコナラ属アカガシ亜属やシイ属、ヤマモモ属などからなる常緑広葉樹林が分布していたと推測され、ミカン科、フヨウ属、ウコギ科、イボタノキ属など、豊富な樹種から構成されていたと考えられる。

未分解の植物遺体を多く含む耕作土とされるⅡa層(試料番号1)では、木本類に大きな変化はないことから、周辺には引き続き同様の森林植生が分布していたと推測される。草本類では同様にイネ科が多産するが、下位層で多く認められたイネ属型は全く認められず、水湿地生のガマ属も顕著に多産する。このことから、Ⅱa層では水田が放棄され、ガマ属などの湿生植物が生育する環境になった可

能性がある。

微粒炭数についてみると、その増減は、基本的に花粉・孢子数を同様の傾向を示すことから、微粒炭数の変化は堆積環境の変化を反映している可能性が高い。ただし、II b-1 層では花粉・孢子数に比べ微粒炭数が増加することから、人為活動の変化を反映している可能性がある。

一方、土壌特性をみると、II d 層～II b-1 層の 3 試料は黄褐色森林土、4m 付近下部～II e 層、II a 層の 4 試料は褐色森林土に分類される。中でも 4m 付近下部と 3.4 m では、特徴的に活性度が高く、結晶化指数は低い。このことから遊離酸化鉄中に含まれる非晶質成分が多いことがわかる。よって、4 m 付近下部及び 3.4m では還元状態を呈しており、地下水等による湛水の影響が考えられ、その結果 4 m 付近下部ではマンガンの溶脱集積が起きたものと捉えられる。また、3.4m 層位で腐植含量が増加していることから、植物遺体等の混入が示唆される。

粒径組成からは、4m 付近下部～II e 層が同様の組成を示す。また、黄褐色森林土に分類された 3 試料では、II d 層と II b-2 層が同様の組成を示すが、II b-1 層はこれらと組成が異なり、II b-1 層の方が細粒分が多く各鉄量も多い。このことから、II d 層および II b-2 層と II b-1 層で生成・堆積環境が異なると考えられる。II b-2 層および II b-1 層では、試料確認時に糸根状の斑紋が観察されたことから、水田等による湛水環境などの水による影響があった可能性が考えられる。これは調査所見と植物化石分析結果とも矛盾しない。ただし、上述した要因より II b-1 層生成期では、粘土化や結晶化などの土壌生成作用が進む環境であったと推測される。

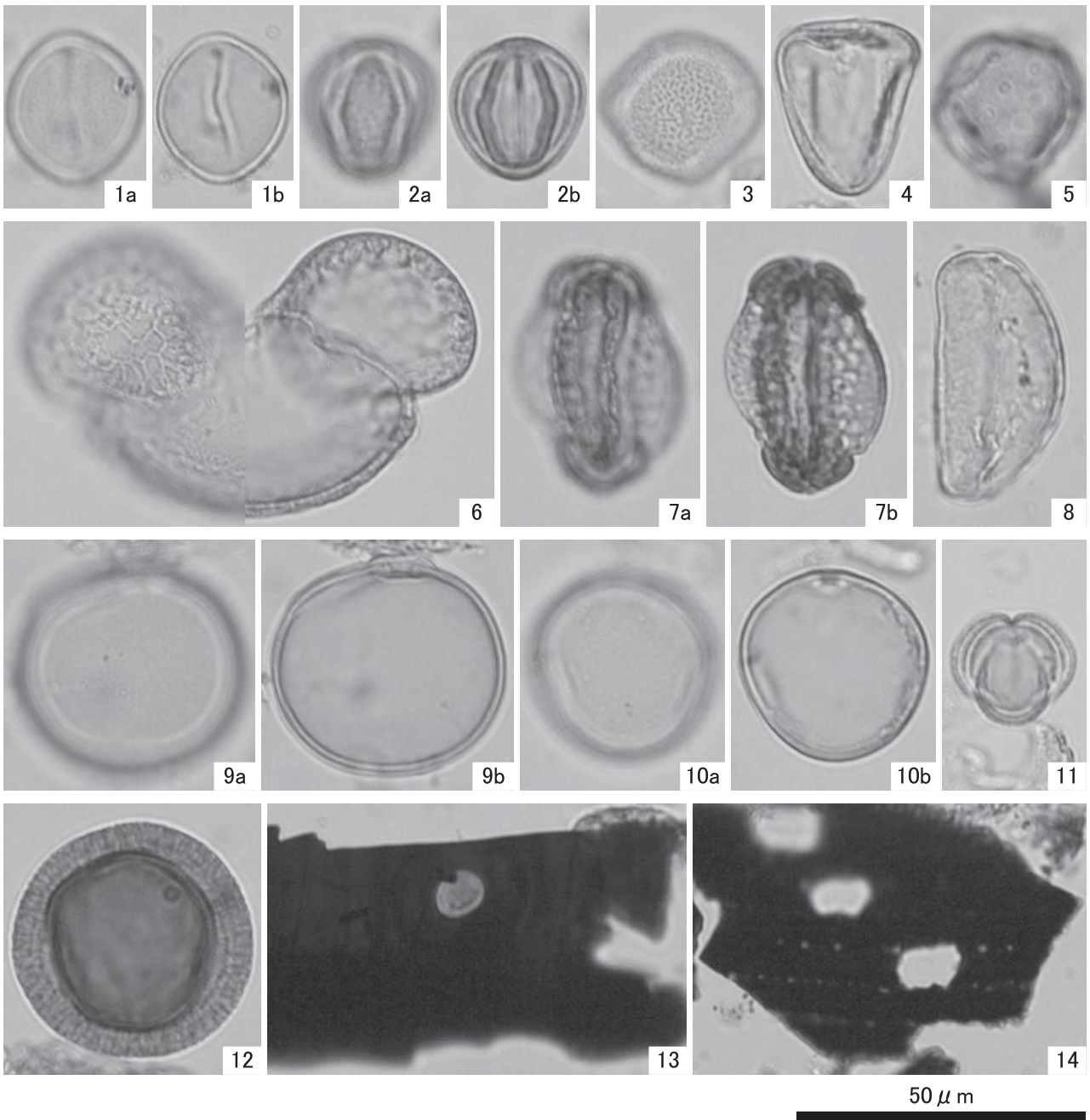
II a 層では、腐植含量が特徴的に多いが、窒素の割合も多く、C/N が 12 と一般的な値であり、粘土含量も多く、未分解有機物が少ないことが示される。また、MI が唯一検出されたが、腐植の発達程度は弱い。

以上のことから、本地点の土壌特性を見る限り、4 m 付近下部～II e 層、II d 層～II b-2 層、II b-1 層、II a 層の 4 段階で、土壌生成環境の変化が起きたと考えられる。

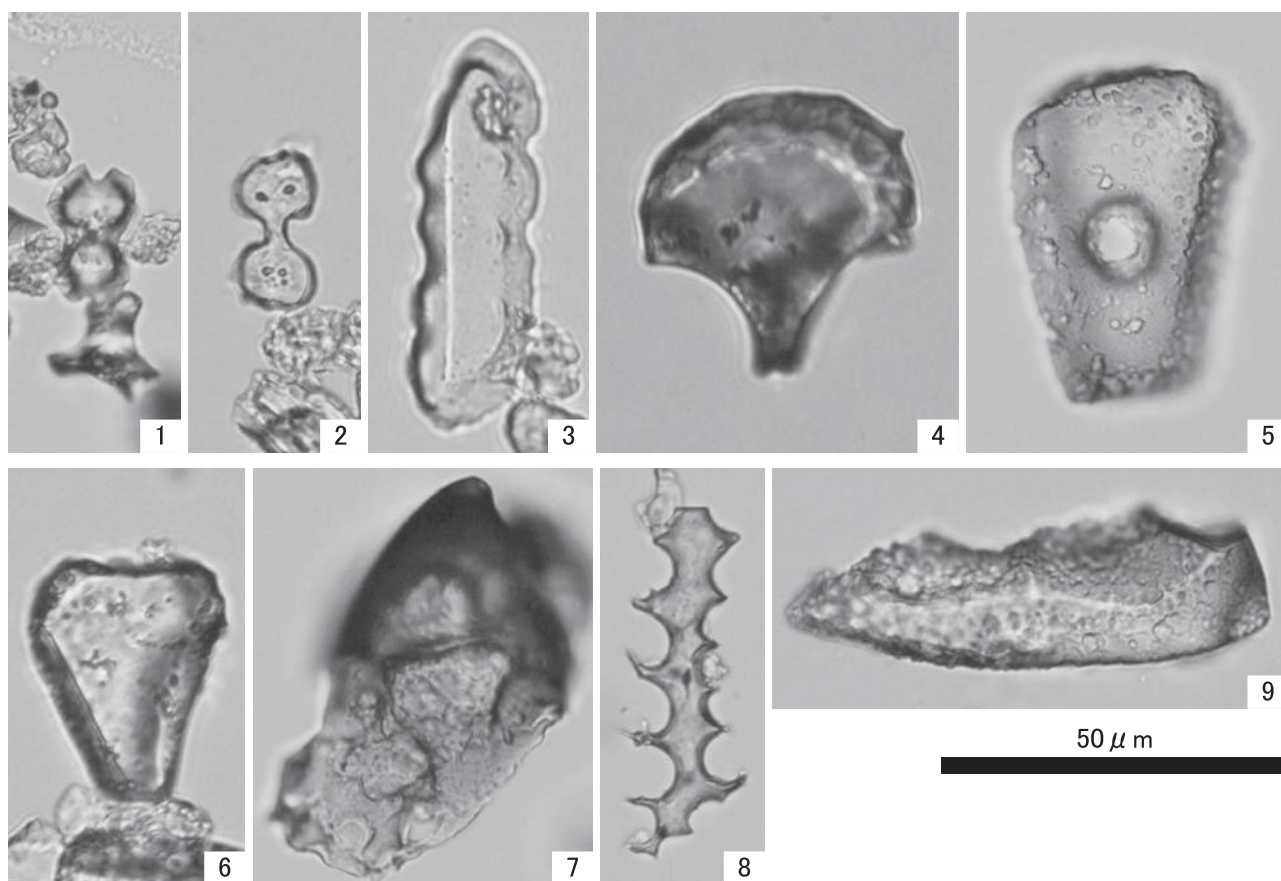
引用文献

- 土壌標準分析・測定法委員会編,1986,土壌標準分析・測定法. 博友社,354p.
- 藤木利之・小澤智生,2007,琉球列島産植物花粉図鑑. アクアコーラル企画,155p.
- 本名俊正・山本定博,1992,腐植の簡易分析法. 土壌構成成分解析法. 博友社,7-35.
- 井上 淳・吉川周作・千々和一豊,2002,琵琶湖周辺域に分布する黒ボク土中の黒色木片について. 日本第四紀学会講演要旨集,32,74-75.
- 近藤鍊三,1988,植物珪酸体 (Opal Phytolith) からみた土壌と年代. ペドロジスト,32,189-203.
- 近藤鍊三,2010,プラント・オパール図譜. 北海道大学出版会,387p.
- 松井 健,1988,土壌地理学序説,築地書館株式会社,316p.
- 三好教夫・藤木利之・木村裕子,2011,日本産花粉図鑑. 北海道大学出版会,824p.
- 永塚鎮男,1973,褐色森林土・黄褐色森林土・赤色土における遊離酸化鉄の存在形態について. ペドロジスト,17,70-83.
- 中村 純,1980a,日本産花粉の標徴 I II (図版). 大阪市立自然史博物館収蔵資料目録 第 12,13 集,91p.
- 中村 純,1980b,花粉分析による稲作史の研究. 自然科学の手法による遺跡・古文化財等の研究

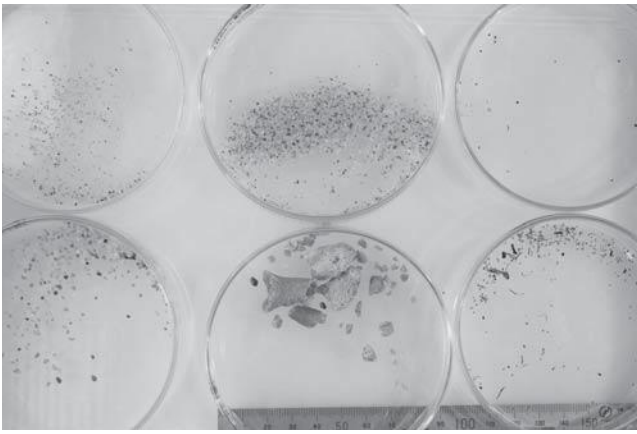
- 総括報告書—, 文部省科研費特定研究「古文化財」総括班, 187-204.
- 農林省農林水産技術会議事務局監修, 1967, 新版標準土色帖.
- 沖縄県立埋蔵文化財センター, 2006, 新城下原第二遺跡 キャンプ瑞慶覧内整備工場建設に係る緊急発掘調査報告. 沖縄県立埋蔵文化財センター, 335p.
- パリノ・サーヴェイ株式会社, 2005, 自然科学分析調査成果. 宜野湾市文化財調査報告書第 36 集 基地内埋蔵文化財調査報告書 I 基地内遺跡発掘事前総合調査事業 - 普天間飛行場基地内 - 遺跡発掘事前総合調査報告. 沖縄県宜野湾市教育委員会, 81-101.
- パリノ・サーヴェイ株式会社, 2006a, 自然科学分析調査の成果. 宜野湾市文化財調査報告書第 38 集, 基地内埋蔵文化財調査報告書 II, 沖縄県宜野湾市教育委員会, 82-90.
- パリノ・サーヴェイ株式会社, 2006b, 喜友名前原第二遺跡検出柱穴内覆土の自然科学分析. 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第 38 集 基地内文化財 IV - 基地内埋蔵文化財分布調査概要 (平成 15・16 年度) -, 沖縄県立埋蔵文化財センター, 85-100.
- パリノ・サーヴェイ株式会社, 2007, 野嵩タマタ原遺跡西側平坦地 自然科学分析調査の成果. 宜野湾市文化財調査報告書第 39 集 基地内埋蔵文化財調査報告書 III 平成 15 ~ 18 年度基地内遺跡ほか発掘調査事業 - 普天間飛行場基地内 - 赤道渡呂寒原屋取古集落遺跡範囲確認調査 赤道渡呂寒原洞穴遺跡範囲確認調査 宜野湾・神山シリガーラ流域古墓群分布調査 野嵩タマタ原遺跡西側平坦地範囲確認調査. 沖縄県宜野湾市教育委員会, 149-154.
- ペドロジー学会編, 1997, 土壌調査ハンドブック改訂版, 博友社.
- Reeuwijk, L. P. van, 1986, PROCEDURES FOR SOIL ANALYSIS. International Soil Reference and Information Centre. 106p.
- Reimer, P. J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J. W., Blackwell, P. G., Bronk Ramsey, C., Grootes, P. M., Guilderson, T. P., Hafliðason, H., Hajdas, I., Hatté, C., Heaton, T. J., Hoffmann, D. L., Hogg, A. G., Hughen, K. A., Kaiser, K. F., Kromer, B., Manning, S. W., Niu, M., Reimer, R. W., Richards, D. A., Scott, E. M., Southon, J. R., Staff, R. A., Turney, C. S. M., and van der Plicht, J., 2013, IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55, 1869-1887.
- 島倉巳三郎, 1973, 日本植物の花粉形態. 大阪市立自然科学博物館収蔵目録 第 5 集, 60p.
- Stuiver, M., and Polach, H. A., 1977, Discussion Reporting of ^{14}C Data. Radiocarbon, 19, 355-363.
- 上原富士男, 2000, 宜野湾市の地形・地質・水. 宜野湾市史 第 9 巻 資料編 8 自然. 55-124.
- 山野井 徹, 1996, 黒土の成因に関する地質学的検討. 地質学雑誌, 102, 526-544.
- 安田喜憲, 1987, 文明は緑を食べる, 読売新聞社, 227p.



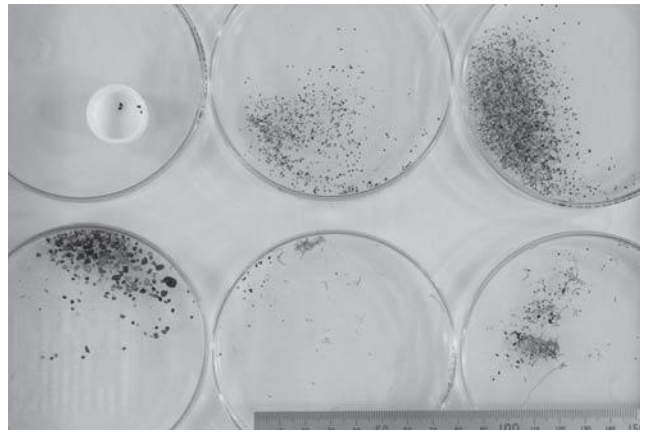
- | | |
|----------------------------|-----------------------------|
| 1. ソテツ属(ズケ19-2H-ネ;3) | 2. コナラ属アカガシ亜属(ズケ19-2H-ネ;11) |
| 3. ガマ属(ズケ19-2H-ネ;1) | 4. カヤツリグサ科(ズケ19-2H-ネ;8) |
| 5. アカザ科(ズケ19-2H-ネ;3) | 6. マツ属(ズケ19-2H-ネ;8) |
| 7. サガリバナ属(ズケ19-2H-ネ;3.4m) | 8. ミズアオイ属(ズケ19-2H-ネ;8) |
| 9. イネ科(イネ属型)(ズケ19-2H-ネ;8) | 10. イネ科(ズケ19-2H-ネ;8) |
| 11. ヨモギ属(ズケ19-2H-ネ;8) | 12. デンジソウ属(ズケ19-2H-ネ;11) |
| 13. 微粒炭(木本由来)(ズケ19-2H-ネ;3) | 14. 微粒炭(草本由来)(ズケ19-2H-ネ;3) |



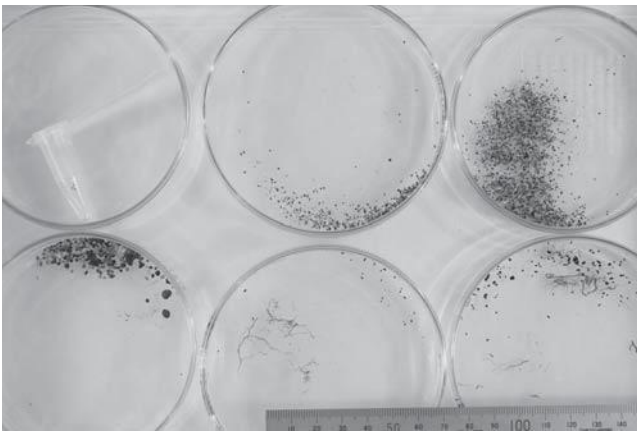
- | | |
|-----------------------------|-----------------------------|
| 1. イネ属短細胞珪酸体(ズケ19-2H-ネ;3) | 2. ススキ属短細胞珪酸体(ズケ19-2H-ネ;3) |
| 3. コムギ連短細胞珪酸体(ズケ25-F1-キ;3) | 4. イネ属機動細胞珪酸体(ズケ25-F1-キ;3) |
| 5. タケ亜科機動細胞珪酸体(ズケ25-F1-キ;6) | 6. ススキ属機動細胞珪酸体(ズケ25-F1-キ;3) |
| 7. イネ属穎珪酸体(ズケ25-F1-キ;3) | 8. コムギ連穎珪酸体(ズケ25-F1-キ;3) |
| 9. 樹木起源(クスノキ科)(ズケ25-F1-キ;6) | |



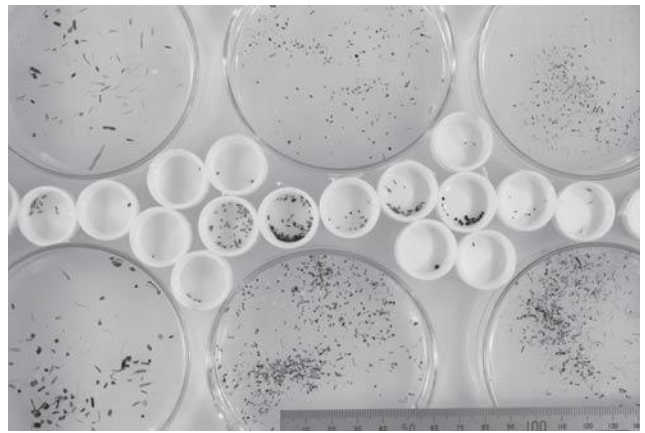
1. 状況写真(ズケ17-J19-オ;3)



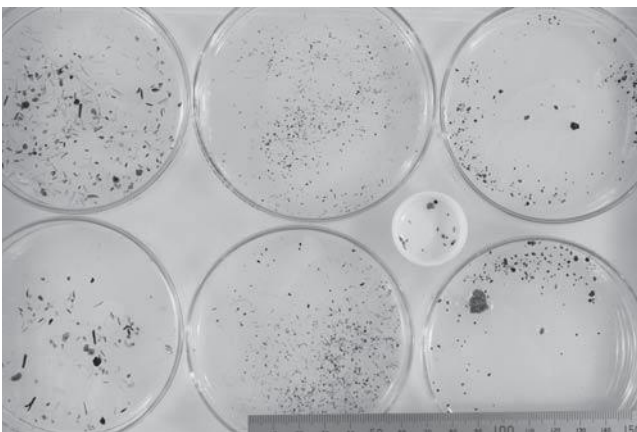
2. 状況写真(ズケ25-F1-キ;3)



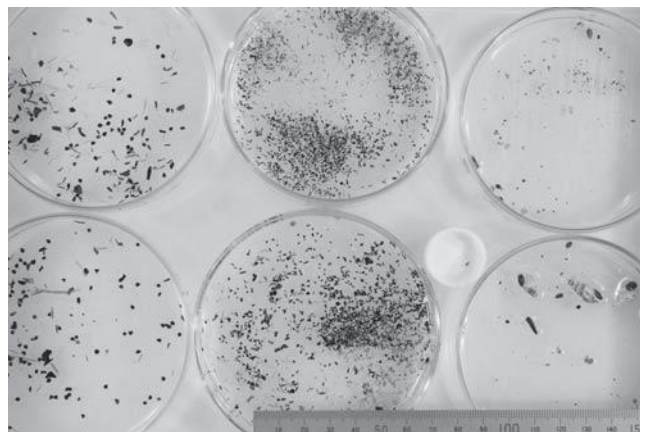
3. 状況写真(ズケ25-F1-キ;6)



4. 状況写真(ズケ19-2H-ネ;8)



5. 状況写真(ズケ19-2H-ネ;11)



6. 状況写真(ズケ19-2H-ネ;3.4m)

第Ⅵ章 総括

第1節 はじめに

今回の報告は、平成26年度から平成27年度にかけて宜野湾市教育委員会（以下、市教委）が西普天間住宅地区跡地内で実施した予備調査（分布調査、試掘・確認調査）の成果報告である。西普天間住宅地区跡地は、「沖縄に関する特別行動委員会（SACO）」によって平成8年に返還が合意されたキャンプ瑞慶覧の一部であり、当時から文化財調査が未調査であったハウジングエリアの試掘調査の必要性が指摘されてきた。平成25年4月に日米両政府が共同発表した「沖縄における在日米軍施設・区域に関する統合計画」により、当該地区が速やかに返還される区域となり、同年6月には日米合同委員会によって返還の合意がなされ、平成27年3月末に返還されることとなった。返還後は地権者への引き渡し前に沖縄防衛局（以下、局）による支障除去措置（土壌汚染除去や不発弾探査など）が実施されることが「沖縄県における駐留軍用地跡地の有効かつ適切な利用の推進に関する特別措置法」（補足1）に明記され、当該地区跡地において実施される不発弾経層探査が埋蔵文化財に影響を及ぼすことから事前に文化財の有無を把握するための試掘調査が急務とされた。試掘調査の実施及びその成果については前章までに報告したとおりである。

本章では、調査成果について遺跡ごとにとりまとめ、分布調査については地区別で報告する。また、当該地区の文化財の取扱い協議や今後の課題についても触れて総括とする。

第2節 試掘調査の成果について

1. 新城上殿遺跡

新城上殿遺跡（旧称新城下殿遺跡）は、当該地区の北端にある標高約30mの石灰岩丘陵縁辺に所在する。平成26年度に試掘調査を行い、5箇所でグスク時代相当のピット（柱穴含む）や溝、土坑を検出した。遺跡の南側は米軍基地造成により地山面まで削平されていることが判明。遺構は地山である島尻マーヅ（赤土）層の上面で検出されている。遺物は主に中国産陶磁器が多く出土している。遺跡北側については、基地造成工事から免れて旧地形が残存しており、包含層及び遺構についても良好に残って居る可能性が高い。遺跡一部は返還地外（フェンス外）にまで延びている。今回の調査結果により、遺跡の範囲を南側へ大きく拡張している。本遺跡は、新城の発祥と古集落移動に関連する遺跡として、新城出身の民俗学者である佐喜真興英著書の『シマの話』（1925年）に記述されている。調査区域より北側には、現在も屋敷囲いの石垣や道らしき地形がみられる。ただし、かつての拝所であるウィーヌトゥンやシチャヌトゥンについては、今回の予備調査では確認できず、米軍による造成工事等により消失したと思われる。

2. 新城大道原第一遺跡

新城大道原第一遺跡は、今回の試掘調査によって新規で発見された遺跡である。遺跡は小字大道原北側の標高約40mの丘陵縁辺に位置する。平成26年度と平成27年度に試掘調査を実施。先史時代からグスク時代、近世・近代相当の遺構（ピット群や溝、土坑、集石遺構など）を検出した。遺構の多くは島尻マーヅ層の上面で確認されており、戦後米軍によるハウジング建設に伴う造成工事等により、本

来の地形が大きく改変されていることが判明している。遺跡の種別については、掘立柱建物と思われる柱穴などのピットが多く検出されていることから、集落跡と推定される。

3. 新城大道原第二遺跡

新城大道原第二遺跡は今回試掘調査で新規発見された。遺跡は小字大道原の南側、県道 81 号線から北側 50m 程に位置する。県道との高低差が大きく、想定されたとおり、調査では岩盤が削平されている状況が確認されている。主に近世～近代相当の遺構（ピットなど）が確認されており、戦前の航空写真では畑地となっている。遺跡の北側端でグスク時代相当の遺構（ピット 1 基）が検出されているが、米軍ハウジング建設に伴う段状の地形造成によって岩盤まで削平されており、包含層を含む旧地形は消失している。碁盤型集落が形成される以前に散在していた住居跡が想定される。

4. 喜友名山川原第八遺跡

今回の試掘調査で発見された新規の遺跡である。遺跡は小字山川原の東側、ヤファレーグーフと称される石灰岩丘陵から東に約 100m の平坦地に所在する。標高は、東側が約 45m、西側が約 42m と西側へ緩やかに傾斜する地形となっている。平成 27 年度の試掘調査では、グスク～近世、近代相当の遺構（ピットや溝、土坑など）を検出した。ピットの多くは柱穴と思われるもので、遺跡の種別は集落跡と推定される。また、遺跡西側には南東～北西方向に延びる迫地が確認された。類似の堆積状況としては、野嵩タマタ原遺跡がある。

5. 喜友名山川原第九遺跡

平成 27 年度の試掘調査で新規に発見された。遺跡はヤファレーグーフの小丘陵にある喜友名山川原第五遺跡の南側に隣接し、標高約 50m の石灰岩丘陵縁辺に所在する。試掘調査は、既存建物によって場場所が制限され、遺跡の西側でのみ調査を実施した。時期不明の複数のピットや土器を含む包含層を確認しているが、遺跡の詳細は不明である。遺跡の範囲については、試掘調査の結果を踏まえ、戦前の航空写真や大正時代作成の地形測量図を参考にした。遺跡東側について現在は米住宅によって平坦地となっているが、本来は岩盤が露出するような小丘陵であったと推定される。

6. 喜友名山川原第十遺跡

平成 27 年度の試掘調査で新規に発見された。標高は約 55m を測る。遺跡は小字山川原の南側、県道 81 号線から北に約 50m の位置に所在する。2 箇所の試掘坑で石積みと石組の暗渠を検出した。周辺の試掘坑からは遺構が確認できていないため、遺跡の範囲については遺構が確認された場所を中心に設定した。県道との高低差が 8m 程あり、遺跡の南側は岩盤まで削平されていることが判明している。

7. 新城下原第二遺跡

遺跡は標高 7m 前後の低地部に位置し、当該地区の北側に遺跡範囲の一部が含まれている。平成 27 年度に試掘調査を実施。結果として、明確な遺構や包含層は確認できなかったが、水田利用時の堆積層と思われる粘土層が確認された。調査時において、地表面から約 50 cm 掘削したところで壁面から水が

染み出し、時間経過とともに調査に影響を及ぼすほど水が溜まる状態となった。そのため、試掘坑の壁際を深掘りして集水し、壁面観察を行った。本遺跡は、1999～2004年に県教育委員会によって緊急発掘調査が行われている。調査場所は、当該地区の北側約150mに位置し、グスク時代相当の水田跡を示す木杭や貝塚後期の貝集積遺構、縄文早期の爪型文土器など貴重な資料が発見されている。

8. 普天間石川原第二遺跡

普天間石川原第二遺跡は、平成26年度に試掘調査を実施。2箇所で遺構が確認された。いずれも近世～近代が想定される遺構で、沖縄産陶磁器が出土している。第Ⅰ章でも述べたように、試掘調査中に異常物（ドラム缶）が確認されたことから、調査が中断され、平成27年度に市が調査支援を依頼した県によって試掘調査が再開された。

9. 喜友名山川原丘陵古墓群

本古墓群は、当該地区の西側石灰岩丘陵（標高38～55m）に分布する古墓群の総称であり、掘込墓や亀甲墓など多様な墓が存在する。平成27年度に実施した調査において遺跡南側に隣接するハウジングエリアに設定した試掘坑から埋没した古墓が確認された。これらは、米軍による土地造成によって破壊、埋められたものと思われ、本来の古墓群の範囲が南側にまで広がることが確認された。戦前の航空写真を見ると試掘坑を設定した場所以外でも墓と思われる箇所がいくつか見られることから、今後も発見される可能性がある。

第3節 分布調査の成果について

分布調査は主に2箇所の範囲で実施している。安仁屋・新城イシジャー流域古墓群の所在する安仁屋区内と新城上殿遺跡や喜友名山川原丘陵古墓群の東端に位置する、新城区、喜友名区である。後者は調査範囲がほぼ新城区になることから、新城区として報告している。

まず、安仁屋区では、イシジャー古墓群として78基の古墓が確認された。亀甲墓や掘込墓、岩陰墓など多様な古墓が確認されたが、内部に蔵骨器が確認できたものは12号墓の1基だけである。そのほかはほとんどが空墓となっており、内部が確認できなかったものは入口部分が土砂や樹木によって埋没しているものであった。遺跡は急峻な谷地形となっている両側崖面に多く分布しており、中部では珍しい石灰岩提やかたつて洞穴であったことを窺わせる鍾乳石などがみられるほか、希少な動植物が生息するなど戦前来の自然が残る数少ない貴重な場所である。

新城区では、新城発祥の地とされる新城上殿遺跡周辺の表面踏査を実施した。その結果、屋敷囲いの石垣や石切り場、湧水や道跡などが地形として良好に残されていることが判明した。調査した一帯は、新城上殿遺跡の節でも述べたように、新城集落が現普天間飛行場に所在する新城古集落に移動する以前にあったとされる新城発祥に関わる場所である。残念ながら、今回の調査では、拝所については消失していることが判明し、新城区のかたつてのウブガーとされるシンバルガー（アラグスクフルガー）については、確認することができなかった。

両区域は共に米軍による造成工事を免れ、戦前来の旧地形を残す貴重な場所であり、今後も地域の歴史や文化、市の地形地質を学ぶ学習の場として保存・活用することが必要と思われる。

第4節 調査成果による文化財の取扱協議について

平成27年度までに実施した試掘調査結果を踏まえ、当該地区跡地で支障除去措置を予定している沖縄防衛局（以下、「局」）に対して計画の変更について協議を行った。具体的には、遺跡範囲内での不発弾経層探査（※土壌汚染調査と水平探査は実施する）を実施せず地権者へ引き渡しを行い、住宅建築など個々の土地利用状況に合わせた開発時に不発弾探査及び事前の文化財調査を実施することができないかというものと、局が作成した当該地区跡地全域の不発弾経層探査に伴う想定掘削深度を市教委が実施した試掘調査成果に基づいて見直しできないかというものである。前者については、このまま局の計画通り上記探査が行われた場合、当該地区（ハウジングエリア）内に所在するすべての文化財が記録保存調査によって現地から消失することになるためである。ちなみに個々の土地開発状況に合わせた調査なら消失範囲は限られる。これは民間地における文化財調査と同様の措置であり、当該地区で適用されても問題ないものと思われた。また、後者については、局による岩盤までの想定掘削深度が十数本のボーリングデータのみで計画されており、不発弾を確認するためとはいえ、不要な掘削が発生することが想定された。

しかし、局からは、掘削深度については、不発弾貫入深度を計算して設計しているため、文化財調査結果による想定掘削深度の計画変更はできないとの回答があった。また、市の開発部署からも当該地区は跡地利用計画に基づいて土地区画整理事業を実施する予定があり、ゾーニングで予定される開発範囲（都市公園以外の場所）については地権者へ引き渡しを行う前にすべての支障除去を実施することを局に求めるという意見が出された。これは、不発弾が残存する可能性を残したまま地権者へ土地の引き渡しを行うことができず、土地区画整理法上、「換地」ができなくなるとの理由からである（補足2）。これには斜面緑地やインジヤードなどの公園予定地等は含まれていないが、少なくとも開発予定地であるハウジングエリアについてはすべて支障除去措置を実施すること、措置前には記録保存調査を実施することが大筋で合意された。

県の協力もあり平成27年度にハウジングエリアの試掘調査は終了した。しかし、局による支障除去（経層探査）が平成28年度から行われること、平成29年度末には地権者へ引き渡しを行う必要があること、そのため支障除去措置の期間が2年しかなく、さらに当該エリアの記録保存調査もこの期間内で実施しなければならないなど、時間的な制約があったため、ほとんどの遺跡で確認調査をすることが出来なかった。市教委としては止むを得ず記録保存調査の実施について局と協定書を締結し、平成28年度から記録保存調査を実施した。

第5節 現時点の文化財状況について

試掘調査は文化財の所在を確認するために必要な手段であるが、遺跡の広がりや時代、集落跡か生産遺跡かなどの遺跡の種類、文化層の数やどんな遺構や遺物が出るのかなどの遺跡の詳細を把握するためには、確認調査が必要とされている（補足3）。今回は上記の理由により確認調査をせずに試掘調査の成果で遺跡の状況を「想定」することとなった。新規に発見された遺跡については、試掘調査で遺構が確認された箇所に比較的まとまりがあったことから、旧地形の状況を含めて検討し、遺跡の範囲（想定される周知の埋蔵文化財包蔵地）を設定した。ただし、本来の遺跡の範囲は今回調査で遺構が確認されなかった場所においても広がっていた可能性があることは留意しておく必要がある。

現在（平成30年度時点）、ハウジングエリアに所在していた遺跡はほぼすべて記録保存調査が行われ、

局による支障除去措置も終了し、地権者への引き渡しが行われている。今後、跡地利用計画（補足4）に基づき区画整理事業が行われる予定となっている。しかし、当該地区の西側に所在する斜面緑地エリアについては、現在も支障除去の不発弾経層探査は実施されていない。これは、市が跡地利用計画のコンセプトとして掲げる「水・みどり・文化の調和した住環境がつながるまち」における重要項目の一つである湧泉群が所在するためである。斜面緑地は、湧泉が所在するだけでなく、湧泉の涵養地（補足5）としての役割があり、ハウジングエリアと同じような方法で不発弾探査（経層探査）を行った場合、岩盤を傷つけ、水脈を切って水が枯れるなどの影響が懸念されている。このエリアについても跡地利用計画では一部が道路や住宅地として計画されており、今後、水脈を切らずに探査が行えるか検討するという事で保留されている。

なお、斜面緑地エリアの試掘調査について、市より県へ引き続き調査支援の依頼を行っており、平成28年度において県が試掘・確認調査を実施している。その成果については平成29年度に報告書が刊行されている（注1）。また、市教委としては、当該エリアについて引き続き試掘・確認調査を行い、遺跡の内容を把握することで跡地利用計画を担当する各開発部署と文化財保護及び活用等について適宜調整していく必要があるとの認識から、平成28年度以降も分布調査や試掘調査を行っている。その調査成果については、次年度以降に改めて報告したい。

引用・参考文献

註1：沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第94集『基地内文化財8－平成27・28年度キャンプ瑞慶覧西普天間住宅地区試掘・確認調査－』沖縄県立埋蔵文化財センター 平成30（2018）年3月

【補足説明】

補足1：「沖縄における駐留軍用地跡地の有効かつ適切な利用の推進に関する特別措置法」の中で、国は返還が合意された駐留軍用地の区域の全部について、返還実施計画を定め、当該計画に基づき所有者等に土地を引き渡す前に、駐留軍の行為に起因するものに限らず、土壌汚染・不発弾の除去等の支障除去措置を講ずると明記されている。

補足2：土地区画整理法第89条に掲げる照応の原則や換地の平等による。「換地計画において換地を定める場合においては、換地及び従前の宅地の位置、地積、土質、水利、利用状況、環境等が照応するように定めなければならない。」

補足3：試掘調査は、文化財の有無確認が主たる目的の調査である。一定間隔で設定し、1箇所あたり2m~4m四方を標準とする。確認調査は、試掘等によって確認された遺跡の範囲、内容をより詳細に把握するための調査。遺跡の種別、規模、立地条件等に応じて掘削する範囲や本数などを決定する。1遺跡の確認調査が複数年にまたがる場合もある。

補足4：現跡地利用計画は、平成25年度から実施している地権者意向確認のアンケートや地権者説明会での意見等を基に平成26年度に検討委員会を2回開催し、平成27年度に策定委員会及び専門部会を開催して議論を重ねた上で、「跡地利用計画（案）」及び「付帯事項」を取りまとめ、同年7月21日に市長宛に答申し、庁議決定なされたものである。

補足5：涵養地（かんようち）…ここでの「涵養地」は、雨などが地表面から染み込み、地下水となって発達する場所の意味であり、湧水の根源としての認識である。この涵養地の状態が湧水にとって非常に重要であり、直接的に影響するものと思われる。

報告書抄録

ふりがな	きちないまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょなな							
書名	基地内埋蔵文化財調査報告書7							
副書名	平成26・27年度 基地内遺跡ほか発掘調査事業 ―キャンプ瑞慶覧西普天間住宅地区 予備調査―							
巻次	―							
シリーズ名	宜野湾市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第56集							
編著者名	仲村 毅 杉村千重美 パリノ・サーヴェイ(株)沖縄支店							
編集機関	宜野湾市教育委員会							
所在地	沖縄県宜野湾市野嵩1丁目1番2号							
発行年月日	平成31(2019)年2月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° / ' / "	東経 ° / ' / "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
基地内埋蔵文化財 (平成26年度)	沖縄県宜野湾市字普 天間、安仁屋、新城、 喜友名	472051	—	26° 17' 28"	127° 46' 07"	2014. 8. 15～ 2015. 3. 20	分：約10万㎡ 試：1,120㎡	分布調査・試 掘・確認調査
基地内埋蔵文化財 (平成27年度)	沖縄県宜野湾市字安 仁屋、新城、喜友名	472051	—	26° 17' 24"	127° 46' 02"	2015. 7. 15～ 2016. 2. 18	試：3,168㎡	試掘・確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
新城上殿遺跡	集落跡	グスク時代、近世～ 近代		ピット、土坑、溝状 遺構		グスク土器、石器、中国産陶磁器、 沖縄産陶器、本土産陶磁器		グスク時代相当の 遺構が多く検出。
新城大道原第一遺跡	集落跡	先史時代、グスク時 代、近世～近代		ピット、土坑、溝状 遺構		縄文土器、中国産陶磁器、沖縄産 陶器、本土産陶磁器、青銅製品		
新城大道原第二遺跡	集落跡	グスク時代、近世～ 近代		ピット、土坑		グスク土器、沖縄産陶器、本土産 陶磁器		
喜友名山川原第八遺跡	集落跡	グスク時代、近世～ 近代		ピット、土坑、溝状 遺構		グスク土器、石器、カムイヤキ、 中国産陶磁器、沖縄産陶器、本土 産陶磁器、黒曜石		グスク時代相当の 遺構が多く検出。
喜友名山川原第九遺跡	集落跡	先史時代、グスク時 代、近世～近代		ピット		縄文土器、石器、中国産陶磁器、 沖縄産陶器、本土産陶磁器		
喜友名山川原第十遺跡	不明	近世～近代		石積、暗渠		沖縄産陶器、本土産陶磁器		近世～近代相当の 石積遺構を検出。
新城下原第二遺跡	生産遺跡	先史時代、グスク時 代、近世～近代						
普天間石川原第二遺跡	耕作地	近世～近代		ピット、石列遺構、 溝状遺構		沖縄産陶器、本土産陶磁器		
喜友名山川原丘陵古墓群	古墓	近世～近代		古墓		沖縄産陶器、本土産陶磁器		米軍造成により埋 没。
安仁屋・新城イシジャー流域 古墓群	古墓	近世～近代		古墓				表面踏査により、 古墓78基を確認。
要約	平成27年3月31日に在沖米軍基地であるキャンプ瑞慶覧から返還された西普天間住宅地区において、返還前の平成26年度から返還後の平成27年度にかけて遺跡の有無（分布状況）を把握するための予備調査を実施した。平成26年度は安仁屋と新城において約10万㎡を踏査し、古墓78基を確認したほか、新城では、石切場や屋敷跡、湧水などを確認した。試掘調査は70箇所を調査し、新城上殿遺跡の範囲が南側に広がる事が判明した。平成27年度は試掘調査を195箇所実施し、新城大道原第一遺跡、新城大道原第二遺跡、喜友名山川原第八遺跡、喜友名山川原第九遺跡、喜友名山川原第十遺跡が新規の遺跡として発見された。							

宜野湾市文化財調査報告書 第56集

基地内埋蔵文化財調査報告書 7

平成 26・27 年度 基地内遺跡ほか発掘調査事業

— キャンプ瑞慶覧西普天間住宅地区 予備調査 —

発行年 2019(平成 31)年 2 月 28 日

編 集 沖縄県宜野湾市教育委員会
発 行

住 所 〒901-2203
沖縄県宜野湾市野嵩 1 丁目 1 番 2 号
TEL 098-893-4430

印 刷 有限会社 金城印刷
TEL 098-995-0001